
小・中・高等学校の一貫による社会科関連科目の 連携に基づくフレームワークの研究

研究課題番号 09680248

平成9～10年度科学研究費補助金 基盤研究(C)(1)

研究成果報告書

平成11(1999)年3月

横浜国立大学附属図書館



10733961

研究代表者 市川 博
(横浜国立大学教育人間科学部教授)

目 次

はしがき	i
〈第1部〉	
Ⅰ. 社会科関連カリキュラムフレームワークの考察 (市川 博)	1
— 文部省研究開発指定校等における実践報告の検討 —	
Ⅱ. 社会科関連カリキュラムと社会科 (森分 孝治)	6
— 平成10年版小学校学習指導要領の場合 —	
Ⅲ. 「総合的学習」と社会科カリキュラム (臼井 嘉一)	11
— コア・カリキュラム論議と社会科教育との関わりの検討を踏まえて —	
Ⅳ. 生活科と社会科 (片上 宗二)	16
Ⅴ. 社会科カリキュラムと国際理解教育 (西脇 保幸)	23
〈第2部〉	
Ⅵ. アメリカ・ナショナルスタンダード・地理フレームワーク (草原 和博)	29
Ⅶ. 全米歴史スタンダード：歴史フレームワークの研究 (田中 史郎)	59
— 構成原理と方法の分析・考察，資料 —	
Ⅷ. アメリカの公民関連のナショナルスタンダードにみる (江口 勇治)	86
カリキュラムの一貫性	
Ⅸ. ナショナル・スタンダードとしての法教育カリキュラムの構成 (磯山 恭子)	95
— “I’m the People” の分析を通じて —	
X. イギリス，ナショナル・カリキュラム，地理フレームワーク (岩田 一彦)	105
XI. イギリス，ナショナル・カリキュラム，歴史フレームワーク (平子 晶規)	114
〈第3部〉	
資料編 文部省研究開発指定校等におけるカリキュラム研究 (市川 博，栗原 幸正)	129

横浜国立大学附属図書館



10733961

はしがき

今日、教育課程の編成に関して根本的な再検討が行なわれつつあります。その中で、特に社会科は、平成元年の学習指導要領の改訂に際して、低学年のそれは廃止となり、高等学校は地理歴史科、公民科に再編され、その存続の意義が厳しく問われています。

昨年11月には、新学習指導要領が発表され、『総合的な学習の時間』が新設されることになりました。その教育内容として例示されているものの中には、国際理解教育・環境・福祉など社会科の教育内容としても重要な構成要素となると考えられるものが多数含まれ、社会科及びその関連科目の固有の目標・領域の存在意義と、及び他の教科・科目（総合的な学習の時間・道徳なども含む）との関連を再検討することが緊急に課題となっています。

本研究は、小・中・高等学校の一貫による社会科関連科目の連携に基づくフレームワークを研究課題とするものですが、上記の如き今日の状況を踏まえて、単にその領域におけるフレームワークを作成することをめざすだけでなく、教育課程全体の中で児童生徒の社会認識の形成に当たるべき教科・科目の在り方も含め、かつその国内外における動向の分析を踏まえて、視野を広げて基礎的研究を進め、その成果を報告書としてまとめました。社会科関連科目の教育課程改革を検討する際の一助となれば幸甚です。なお、本報告書に関し、忌憚のないご意見等をお寄せ下さいますようお願い申し上げます。

平成9年度は、上記研究の基礎作業として、平成8年11月に教育課程審議会が発表した『中間まとめ』の分析・検討を、日本社会科教育学会の下記会員の協力を得て行い、昨年3月に中間研究成果報告書として、『社会科カリキュラムの改善に関する研究』を発行しました。本報告書には、重複を避けてそれに関連するものを掲載しませんでした。本研究はその成果に立脚して進められたものです。ご協力頂いた方の氏名を記して謝意を表します。

また、本報告書に論文執筆、資料収集にご助力頂いた研究協力者、及び授業研究などでご協力いただきました関係各位に深く感謝申し上げます。

平成11(1999)年3月

研究代表者 市川 博

〈『中間報告書』作成協力者〉

相沢善雄（都立国立高教諭）、桑原正子（横浜市立川和東小校長）、小山茂喜（長野市若穂中教諭）、高野尚好（筑波大学教授）、小林宏己（前東京学芸大学附属世田谷小学校教諭・現同大学助教授）、近藤由紀彦（慶応大学附属幼稚舎教諭）、坂井俊樹（東京学芸大学教授）、杉山哲也（秦野市堀川小教諭）、竹内裕一（千葉大学助教授）、戸田善治（前国立教育研究所研究員・現千葉大学助教授）、二川正浩（東京学芸大学附属世田谷中教諭）、谷田部怜生（前お茶の水女子大学附属高等学校教諭・現国立教育研究所研究員）

1. 研究課題 小・中・高等学校の一貫による社会科関連科目の連携に基づくフレームワークの研究

2. 課題番号 09680248

3. 研究組織

研究代表者 市川 博 (横浜国立大学教育人間科学部教授)

研究分担者 岩田 一彦 (兵庫教育大学教育学部教授)

臼井 嘉一 (福島大学教育学部教授)

江口 勇治 (筑波大学教育学系助教授)

片上 宗二 (広島大学教育学部教授)

田中 史郎 (岡山大学教育学部教授)

西脇 保幸 (横浜国立大学教育人間科学部教授)

森分 孝治 (広島大学教育学部教授)

研究協力者 草原 和博 (兵庫教育大学学校教育学部助手)

栗原 幸正 (横浜国立大学大学院院生・茅ヶ崎市茅ヶ崎小学校教諭)

磯山 恭子 (筑波大学大学院博士課程)

平子 昌規 (筑波大学大学院修士課程)

4. 研究費 平成9年度 1,900千円
平成10年度 1,500千円
計 3,400千円

5. 研究発表

市川 博 (研究代表者)

『社会科カリキュラムの改善に関する研究』

(平成9-10年度科学研究費補助金基盤研究(C)(1) 中間研究成果報告書) 1998年3月

市川 博

「子どもに即した教育課程編成の視点」, 中野光他編『教育課程改革への理論と実践』(日本学会議教科教育学研究連絡委員会編) 東洋館出版, 1998年4月

市川 博

「総合学習が好きな教師の条件」 『生活科と共に総合学習を創る』 明治図書出版 1998年4月号~99年3月号 (12回連載)

市川 博

「総合的な学びの可能性と基礎・基本」 『学校教育』997号 広島大学附属小学校 学校教育研究会 1998年12月号

岩田 一彦

「社会科地理50年の変遷とその背景」 『社会科研究』48号 全国社会科教育学会 1998年3月

臼井 嘉一

「戦後歴史教育を捉える視座」 『社会科研究』48号 全国社会科教育学会 1998年3月

江口 勇治

「社会科50年とこれからの教育改革」 『社会科教育研究』79号 日本社会科教育学会 1998年3月

江口 勇治

「教科・科目間関連を生かした法教育カリキュラムの研究」 平成8-9年度科学研究費補助金基盤研究(C)(2)報告書 1998年3月

江口 勇治

「これからの社会で求められる社会科像についての一試論-『社会認識』と『公民的資質』の関係の考察」 『社会系教科教育学研究』10号 1998年10月

片上 宗二

「社会科50年とその展望」 『社会科研究』48号 全国社会科教育学会 1998年3月

田中 史郎

「中学校教科課程の実践的研究の課題と方法-岡山大学附属中学校『教科課程の研究』の研究推進に寄せて」 『岡山大学教育学部研究集録』110号 1999年

西脇 保幸

「地理教育における技能の育成」 『地理学評論』71-2号 日本地理学会 1998年

森分 孝治

「問題解決学習の成立-『郷土の輸送』〈「補説」〉から『福岡駅』〈谷川実践〉へ」 『社会科教育研究』79号 日本社会科教育学会 1998年3月

〈第1部〉

I. 社会科関連カリキュラムフレームワークの考察

－文部省研究開発指定校等における実践報告の検討－

市川 博（横浜国立大学教育人間科学部）

1. 文部省研究開発指定校等における教科再編の試み

文部省は、昭和40年代までは、教育課程の研究開発指定校に対して、教科の枠組みを崩さない範囲で教育課程の開発・研究を許可してきた。昭和50年代に入り、低学年社会科などを廃止し、新たな教科の設置を検討する必要から、新教科の設置を含む研究開発を許可するようになった。かくて、平成元年に、戦後初期の改革以来はじめて新教科・生活科の誕生となったが、それ以降、従来の教育課程を大胆に再構成する試みが文部省研究開発指定校を中心に試みられてきている。

本稿の課題は、社会科関係のカリキュラムフレームワークの研究・開発の動向を明らかにするものであるが、その前提として、教育課程全体の枠組みを検討する必要があると考え、これまでの試みを類型化して概観して置きたい。（*印は、本書『資料編』に枠組みの一部を掲載）

(1) 小学校における試み

1) 教科の統合による新教科の設置

- a. 記号科－小学校1, 2年の国語と算数を統合。（兵庫教育大附小）
- b. 環境関係の教科の新設
 - 環境科－理科中心に改編（東京・錦華小）
 - 地球科－同上（福島大附小）
 - 地域・環境科－3, 4年は社会科を廃止、理科の一部と統合して新設。理科は時間数を削減して存続。5, 6年は社会科・家庭科、及び理科の一部を統合して新設。理科・社会科も時間を削減して存続。（大阪・滝川小）
- c. 人間科－社会科と家庭科を統合。外国人、障害者、地域の人々との関わりや人間の営みについての理解と態度の形成を図る。（東京・錦華小、福島大附小*）
- d. 表現科－音楽・図工の統合だけではなく、討論・文章表現・舞踊・演劇・パフォーマンスも含む。（東京・錦華小、福島大附小）

2) 教科の新設

- a. 生活体験科－全学年で実施。生活体験を重視。国際文化、産業技術、福祉交流、情報活用を盛り込んだ総合的内容。（滋賀・治田東小）
- b. 英語科（国際科など）－平成6年度4校、7年度12校、8年度より各県に1校を指定。
- c. 情報科－情報をつくる喜びを味わう。（鹿児島大附小）

3) 既成の教科を変えずに教育内容を改革

- a. 教科名を変更－「体育」を「運動遊戯科」へ改称。（兵庫教育大附小）
- b. 既設の教科構造を動かさずに教育内容を改革（横浜国立大附属横浜小*）

4) 特別教育活動の時間を廃止－特別教育活動の内容を各教科の中に組み入れる。（福島大附小*）

5) 教科の体系を崩して総合化

- a. 学力を内容知・方法知・自分知に構成し、各教科学習、総合学習、心の教育活動、集団活

動・児童会活動・クラブ活動・学校行事の4領域に統合。(東京学芸大学附属大泉小*)

b. 教科の学習と総合単元との連携

- 1年－教科活動(国語・算数・音楽・体育), 総合単元活動
- 2, 3年－教科活動(上記の教科に理科・社会の一部), 総合単元活動, 集団活動
- 4～6年－全教科の活動, 総合教科活動, 心の活動, 集団活動(上越教育大附属小*)

c. “しごと”, “けいこ”, “なかよし”の3学習活動に統合(奈良女子大附属小*)

d. 生活・環境, 言語, 数量・図形, 総合科学, 創造表現, 身体・健康, 自分・集団の7単元群に統合。(新潟県大手前小*)

e. 学校の教育課程全体を総合学習として位置付け, 子ども・学級ごとの学びの跡を「足跡カリキュラム」として作成し, それを基にカリキュラムを学級ごとに編成(横浜国立大附属鎌倉小*)

f. 既設の教科を完全に撤廃・再構成－9つの活動単元(探検, 調べ, 育て, 創造, 習い, 運動, 交流, 働く)の8つの学習の時間と, みんなの時間)に改編。(愛媛大附属小)

(2) 中学・高等学校における試み

中学・高等学校は, 教科担任制と上級学校への入試の制約が厳しく, カリキュラム編成は, 学習指導要領に規定されている教科構成・内容を前提として, 総合学習, 選択の時間及び教科外活動の時間を新設・活用する工夫に止どまっているのが現状である。

- 1) 音楽・美術を統合して芸術科。技術・家庭科, 保健体育科の保健分野, 社会科と理科の一部を統合して生活文化科を新設。各教科間のカリキュラムを連携。(宮城教育大附中*)
- 2) 総合学習(生き方学習・WORLD TIME・卒業研究)を設置。(福岡教育大福岡附中*)
- 3) 未来総合科(基礎学習・領域別学習・領域総合学習)を設置。(鳴門教育大附中*)
- 4) 社会人交流・生き方学習・選択方式学習。(千葉県館山市立館山第二中*)
- 5) 既成の教科の中に「総合的な学びの場」を挿入。(岩手大学附中*)
- 6) 合科型自由学習(ディスカバーふるさと・讃岐〈国・社〉, 瀬戸内歴史絵巻〈社・美〉, 数学で検証・瀬戸大橋効果〈社・数〉, 香川の未来学－21世紀の香川の進むべき道は－〈社・数〉など無学年制・TTで)。(香川大坂出附中)
- 7) びわ湖学習(郷土の自然・歴史・文化・産業など無学年制・小集団学習で)。(滋賀大附中)
- 8) 探求科(1年生対象, 環境学, 福祉と共生, 海外事情, やまと学から1科目選択)(奈良県立高田高)
- 9) ○○学(長崎学, 五島学, 対馬学など郷土の歴史・文化の研究)。(長崎県研究指定高校)

(3) 幼稚園～高等学校の一貫性を図る試み

1) 神戸大学明石附属*

幼稚園－総合的な遊び

小学－身体健康, 心の表現, 環境探求, 数理表現の4領域に統合

中学－生活実践学習(儀式的活動・自治的活動・健康安全活動)・探求学習(環境・国際理解・人間学習)・選択総合学習, 教科学習

2) 名古屋大附属*

中・高校－教科の他に, 総合人間科(国際理解・平和・環境・人権・生命・性・共生・進

路・生き方)を設置。

3) お茶の水女子大附属

小学—既設の教科の外に子どもの関心を追究する学習を設定—自主学習(個々人の関心に基づいた活動)・課題学習(テーマを教師が設定,または児童の話し合いで決定し,共同で活動)・共同学習(学級・学年を超えた活動)

中学—探求科(自主研究)・総合カリキュラムの時間。前者は,生徒がテーマを設定。異学年でグループを組んで実施(3年後期はなし)。後者は,道徳・学級活動・生徒会活動を統括。生徒会・学校行事の他に,情報・人権・環境・国際教育など。

高校—国際理解・情報科学(1年生対象,各1単位必須),特設講座(選択,2単位。写真,フランス語,ジェンダーフリーを学ぶ,日本文学と女性,折り紙など)

2. 社会科関連カリキュラム改革の試み

文部省の研究開発指定校におけるカリキュラム開発は,21世紀を展望して激動する社会の課題に応える人間の育成を志向して,従来の教科の枠に囚われず,新たなカリキュラム編成を生み出すものとするものであるが,社会科関連のカリキュラムは,総合的な学習の時間の教育内容として例示されている国際理解・環境・福祉・情報などを新たに編入させたものに止どまっており,学習指導要領に示されている既成の教育内容の再編の域を出ていない。これは,各研究開発指定校自身が文部省の意向を先取りして大胆な発想を自制することもあるが,文部省自身も学習指導要領の内容を逸脱することを抑制する指導が直接・間接的になされていることにも起因していると考えられる。

各校のカリキュラム改革の特色については,各校の紹介の冒頭に記載したが,その中で社会科関連のカリキュラム編成で特にユニークな工夫が行なわれている事例を類型化し,紹介したい。

(1) 社会科関連カリキュラムの類型

1) 既成の社会科の教科の枠を動かさず,新たな社会的課題を編入(横浜国立大附属横浜小*)

- あくまでも地域に立脚し,地域社会への行動・参加・実践を軸にして,「共に生き抜く力」を育成することをめざすことに力点を置き,思い切った視点で内容を厳選し,編成している。
- 3年は,“特別教育活動と結合し,目の不自由な訓盲学院の子どもたちとの交流を深めながら,福祉”を中心にした活動などで教育内容を編成。
- 4年も「OOJA パトロール」と称して町巡りして自分の目で“勉強”の材料を探し地域を学習。その後,「他地域調査隊」へと入る。
- 5年は,まちで生産されるものの調査活動をした上で,自然との関わる生産活動,原料を加工して製品を作る工業の生産活動の,二つの生産活動を運輸・通信などの問題も組み込んで学習。最後に森林ボランティアで活躍している人々と交流して環境問題に取り組む。
- 6年は,まず,政治の学習から入る。歴史は“戦争と横浜”というテーマで現代史を学習し,“開港と横浜”“吉田新田”(江戸時代),“鎌倉みち”“緑が丘貝塚”と地域に素材を求め得るものに限定して展開。最後に,横浜にある様々な外国の人々が通う学校と交流したりして,諸外国の人々の理解と共に生きることの意義と課題を内容としている。

2) 教科内及び他教科との関連(宮城教育大附中*)

- 1,2年社会科はπ型で連携。他教科との関連については生活文化科しか掲載できなかったが,例えば,英語科では「異文化理解」の単元を各学年3,4つ設定して,1年社会科で

「様々な地域」の単元で中国を取り上げ、英語でも「アジアについて知る」と連携、3年6～8月に社会科で「人間の尊重と日本国憲法」、8月に英語で「ヒロシマ」、8,9月に国語で「ヒロシマ神話」を取り上げるなど、横並びの連携を考慮したカリキュラム構成となっている。

- 3) 社会科の中に「総合的な学びの場」を各学年18, 9時間設定（岩手大附中*）
 - 1学期のはじめにその活動を設定し、共同で調べ発表することによって、その学年で学習に取り組む問題意識を高め、広げる学びの場として設定されている。昨年の6月のあるクラスでは、楔形文字、黄河文明、中国のうどんなどのテーマに取り組んでいた。
- 4) 家庭科・社会科・特別教育活動との統合による人間科の新設（福島大学附属小*）
 - スコープとして、家庭生活・学校生活、生産・消費・環境、文化・伝統、公共・福祉、国際理解の5領域を設定し、人間科という新たな教科の視点から、各学年の内容の系統性を考慮してカリキュラムを作成している。
- 5) 教科の再構成による社会認識教育の領域の設定（奈良女子大附小など*）
 - 奈良女子大附小は、戦後初期から“しごと”“けいこ”“なかよし”で領域を設定して、社会的な学習は“しごと”で実施してきたが、神戸大明石附小をはじめ教科の枠を崩し、柔軟に授業を展開しようとした試みが他校でも行なわれはじめています。
- 6) “総合的な学習”の設置と社会科との連携・住み分け（東京学芸大附属大泉小など*）
 - 既設の教科の他に“総合的な学習”を設定している学校はIに上記したように多い。各学校の特色については資料編に記載したので割愛するが、“総合的な学習”の教育内容には、社会科で重視したい内容がかなり多く含まれている。
- 7) 幼稚園～高校までの一貫したカリキュラムの編成（神戸大学附属明石小*など）
 - 神戸大学明石附属では、研究推進委員長を全体で一名にして幼稚園・小学・中学のカリキュラムを統括して研究を進める体制を組んでいる。
- 8) 学級ごとに異なるカリキュラム（横浜国立大鎌倉附小など*）
 - 上越教育大附小も学級ごとに異なるカリキュラム編成をしているが、子どもに即してカリキュラムを編成していくことを徹底していくならば、教科の枠をあらかじめ設定するのではなく、教育課程全体を総合学習として捉え、子ども・学級の学びの跡を記録し、「足跡カリキュラム」を作成し、子ども・学級の実態に即したカリキュラムを編成していく必要がある。
 - もちろん、必要に応じて教科の枠を設けて学習を進めていく場合もある。しかし、その場合も、子どもの学習の必要に応じて教科の枠を柔軟に展開していく。例えば、5年社会科で、自動車産業の発展によって、排気ガス汚染・地球の温暖化が学習の問題になった場合、それを解明するためにいわゆる理科の領域の学習が必要となってくる。それは、子ども自身の切実な問題の解決を保障するために、また、その問題に対する自分の考え、態度などをとらえ直し、新たな関わりを図っていくために不可欠な学びである判断するからである。

(2) カリキュラム開発の今後の課題

- 1) 前述の如く、学習指導要領の枠を出ないカリキュラム開発に止どまっている。今後、学習指導要領の枠から大胆に踏み出したカリキュラム開発が期待される。
- 2) カリキュラムをいくら精緻に編成しても意義がない。授業実践との綿密な連携の下でのカリキュラム研究を進めていくことが肝要であり、まだプランづくりの段階に止どまっている。

- 3) 幼・小・中・高の一貫したカリキュラムの編成を検討していく研究体制の在り方をどう構築していくかも研究課題の一つである。
- 4) あらゆる教科とも授業として成立していくためには、教科の枠を越えた内容を取り込んでいくことによって学習対象を認識し、問題の解決を図っていくことが可能となる。特に、社会科はそうした総合的な性格を持つ教科として発足し実践を重ねてきた。そもそも教育とは、人間としてのトータルな発展を図ることをめざすものであり、各教科が孤立して教育されるべきものではない。ここで紹介したカリキュラムも、社会科という教科の中だけで完結させるとは考えず、社会科関係の他領域の内容、及び他教科の内容とも関連させて教科の学習を進める視点を堅持していくことが重要であり、各教科の教師との緊密な連携も重視したい。
- 5) 総合的な学習の教育内容として例示されている内容は、本来、社会科で取り扱うべきものが多い。特に、中学において社会科との関連が見えにくく、社会科が知識注入の教科に陥る危険がある。
- 6) 社会科以外の教科を新設することを否定しないが、公民的資質の的確な育成に支障を来さないか検討する必要がある。例えば、人間科は公民的資質の育成にとって重要な政治学習の比重が軽くなっていないか。楽しい学校という単元が各学期に設定されているが公民的資質の系統的な育成にとって支障となっていないだろうか。
- 7) 横浜附小のように、教科の枠を動かさず、かなり思い切った再編は興味深い。例えば、6年の歴史学習において地域教材に立脚する学習はよしとした場合、北海道など地域の歴史教材を探しにくい場合も、手持ちの資料に立脚して展開していくのか検討課題であろう。
- 8) 岩手大附中の場合、文字の発明・活用の研究は文明の源泉として意義がある。19世紀前半のイギリスのローリンソンなどの楔型文字の解読によってオリエント研究が発展した。歴史が解明されていく事例の学習として生かすことができよう。また、この文字の研究は、国語・外国語と連携して発展させる可能性を持っている。なお、この時間ですぐに取り上げなくともよい。生徒が取り組んでいる問題の中に、そうした発展を図る可能性を含んでいることを教師が感得し、個別指導で、或いは別の機会に生かしていこうとする目配りが指導に当たる者の力量として重要である。
- 9) 各教科の横並びの連携はもとより重視すべきであるが、学期・学年、教科・科目を越えて、時間差のある縦系列の、或いは他教科との斜めの連携への目配りも重要である。
- 10) 個々の子どもに即してカリキュラムは編成されるべきであり、作成されたカリキュラムも子どもの実態に即して柔軟に再編されていくべきものである。そのためには、子どもについての奥深い把握、教材研究に基づく、木目の細かい柔軟な指導計画と指導の技術が必要とされることを特に強調して置きたい。

Ⅱ．社会科関連カリキュラムと社会科

－平成10年版小学校学習指導要領の場合－

森 分 孝 治 (広島大学教育学部)

1. 問題の所在

社会科は、社会認識形成を通して市民的資質を育成する教科である。しかし、学校教育において、社会認識形成、市民的資質育成は、他教科、他領域でもなされている。ここでいう社会科関連カリキュラムとは、教育課程のなかで社会認識形成、市民的資質育成にかかわる部分の総体である。すなわち、社会科と他教科、他領域における、これらの形成・育成にかかわる、教育内容の系統と組織のことである。ここでの問題は、学校教育における社会認識形成・市民的資質育成における社会科の意義は何かである。社会科関連カリキュラムのなかにおける社会科の独自性、固有の価値と他教科・他領域との関係のあり方の問題である。

ここでは、これからの教育実践への一つの指針となることを願い、平成10年版小学校学習指導要領の批判的検討を通して、これらの問題を考察してゆきたい。新学習指導要領において社会認識形成・市民的資質育成にかかわる教科、領域は国語、社会、生活、家庭、道徳、特別活動、総合的な学習の時間の7つの教科、領域である。上述の問題から、これら7つの教科、領域における社会認識形成と市民的資質形成の特質と関係が問われよう。

2. 他教科、領域における社会認識形成、市民的資質育成

(1) 国語科

国語は、話すこと・聞くこと、書くこと、読むことを「内容」とし、それぞれの能力を育成することを目的としている。これらの言語活動は、必ず、なにかについてなされる。その話し、聞き、書き、読む内容は、一定の教育力をもっている。そこで、教材の選定にあたっては、国語科の本来の目的である言語能力の育成とともに、内容のもつ教育力を観点とすることを求めている。教材選定の内容的観点として掲げられている10項目の内、社会認識形成・市民的資質育成にかかわるものは、ウ、エ、ク、ケ、コの5項目である。国語科においても、科学的に認識する態度を育て、世界における日本の国家・社会の一員としての理解や態度を育成することをねらいとしている。社会科の目標と大きく重なっているのである。

国語科における社会認識形成、市民的資質育成は、各項目の「に役立つこと」にみられるように直接的ではない。選定される文芸作品や説明文、論説・評論文などを教材とする指導は話す、聞く、書く、読むという言語能力の育成をねらいとしてなされ、その結果として認識・資質の形成・育成に資することを求めているだけである。認識・資質の形成・育成は、内容の面からみると、部分的・断片的であり、組織的でない。取り上げられる古典教材が「我が国の文化と伝統に対する理解と愛情を育てる」のに役立つことがあっても、理解と愛情を育てるように教材を系統的に選定・組織して指導することはなされない。方法の面からみると、共感的理解を主体とし、正確な理解も「伝聞」のそれに留まり、形成・育成される認識・資質の科学性に問題がある。聞き読む内容の理解は、登場人物や筆者に同化した、あるいは、反発した立場からの理解であり、感情の教育には直接的であっても、人間や社会の客観的な認識とはならない。また、説明文、論

説・評論文の学習の場合も話され書かれている内容の正確な把握がねらいとされ、話され書かれている事象や解釈を事実に当たって調べ、その真偽を検討することはなされない。話し書く内容づくりのために調べることがあっても、調べる指導は目的とされない。国語科における社会認識形成、市民的資質育成は、原理的に価値注入となる。

(2) 生活科

生活科は、第1・2学年の社会科と理科の内容を新たな理念のもとに統合したものであり、社会認識形成・市民的資質育成を目標の中に含んでいる。第3学年以後の社会科における、所謂同心円拡大的内容編成による認識・資質の系統的な形成・育成の前段階に位置づけ、家庭と学校と学区レベルの地域とについての認識とそれらの構成員としての資質の形成と育成をねらいとしている。しかし、理科と統合することによって、さらに、平成10年版で総合的な学習の時間が第1・2学年に設けられていないことにみられるように、生活科における社会認識・市民的資質の性質と形成・育成の方法は、社会科におけるそれらとは異なっている。

第一に、認識形成よりも資質の育成を重要視し、行動習得を直接的な目標としている。「楽しく安心して遊びや生活ができるようにする」(内容(1))「自分の役割を積極的に果たすとともに、規則正しく健康に気を付けて生活することができるようにする」(内容(2))と述べられる。家庭や学校、地域の社会の一員として適切に行動できるようにすることが、指導の直接的な目標とされているわけである。

第二に、認識形成は、行動習得によって限定され方向づけられている。対象は自分とかかわりのある人々や場所、公共物に限られ、自分や自分たちの生活がそれらによって支えられていることとそれらに対する自分の役割ととるべき態度とを分からせることがねらいとされる。「学校の施設の様子及び先生など学校生活を支えている人々や友達」(内容(1))「家庭生活を支えている家族」(内容(2))が内容とされる。家庭、学校、地域で「適切な行動」ができるようになるうえで必要な認識の指導を求めているわけである。

第三に、社会認識形成、市民的資質形成は、直接、学校や地域における物、施設、場所、人とかかわる活動を通してなされることである。指導計画の作成に当たっては、「地域の人々、社会及び自然を生かす」活動、「校外での活動」、「必要に応じて手紙や電話などを用い伝えあう活動」「多様な人々と触れ合う」活動などを積極的に取り入れることを求めている。

教室での、特定の教材を媒介とした知識・理解の指導を通して、家庭、学校、地域の一員としての資質を育成するのではなく、市民的な活動の場における直接的活動を通して、知識・理解、態度、能力の総合的な育成を行なうわけである。

(3) 家庭科

家庭科は、社会の最も基本的な集団である家族とその生活の場である家庭の成員としての資質の育成を目的としているが、第5・6学年では、広く社会の中で家庭を捉える視点はなく、目標とされる認識は家庭に限定され、資質は衣食住にかかわる技能を中心としている。社会認識、市民的資質にかかわる内容を強いて挙げれば、内容(1)ア、(7)イ、(8)があるが、それらは社会科における認識指導を基盤とするものとなっている。

(4) 道徳

領域道徳の内容は、「自分自身」「他の人とかかわり」「自然や崇高なものとかかわり」「集団や社会とかかわり」の4つの柱建てから構成されている。これらの内、「自分自身」と「他の人とかかわり」の指導と学習は、社会認識を一つの基盤とするが、社会認識形成、市民的資質

育成にかかわっているのは、第4の「主として集団や社会とのかかわりに関すること」である。この項目の指導における認識、資質とそれらの形成、育成の特質をみるために、各学年段階の認識対象を、内容の対応する項目ごとに示すと、次の通りである。

第1・2学年	第3・4学年	第5・6学年
みんなが使う物、約束、きまり	約束 社会のきまり	身近な集団、自分の役割、協力、責任、法、きまり、自他の権利、義務、差別、偏見、正義
	働くことの大切さ	働くことの意義、社会奉仕
父母、祖父母、家の手伝い、家族	父母、祖父母、家族の協力 楽しい家庭	父母、祖父母、家族
先生、学校の人々、学級の生活、学校の生活	先生、学校の人々、みんなの協力、楽しい学級	先生、学校、協力
郷土の文化・生活	郷土の伝統	郷土の文化、伝統
	我が国の文化・伝統 外国の人々・文化	我が国の文化・伝統、先人の努力、外国の人々・伝統、日本人、世界の人々

生活科、社会科の内容編成にはほぼ対応して、入れ子型の同心円の拡大となっているが、これにかかわる指導にあてられる時間は、道徳の年間34時間の内、おおよそ4分の1にすぎない。この内容項目の場合も、基本的には、社会科や日常生活で形成される認識を基盤とし、事象に対するとるべき態度、身の処し方の指導を行うことを原則とする編成となっている。取り上げられている社会的事象にかんする指導も、可能で必要のかぎりで行なわれようが、それは、「大切にし」「敬愛し」「愛着をもつ」などの態度や「義務を果たし」「責任を果たす」などの身の処し方を形成し習得するように、内容は自分との「かかわり」に限定され、方法は感情教育をふくむ共感的な理解を原理としている。人間性の陶冶をねらいとする領域道徳における市民的資質育成は態度形成を直接的なねらいとし、そのため子どもの認識を閉ざし、価値注入を行なうことになる仕組みとなっている。

(5) 特別活動

特別活動では、学級活動、児童会活動、クラブ活動、学校行事に参加し、活動するなかで、学級やクラブ、学校について様々な認識を獲得し、それらに参加し活動する能力と意志を形成してゆこう。いづれの活動についても、児童が自主的民主的に運営すれば、資質の育成は一層促されよう。それぞれの集団の一員としての資質を実践的活動を通して直接的に育成するわけである。

(6) 総合的な学習の時間

諸教科・領域を横断的にまたがってなされる「総合的な学習の時間」には、当然、社会に関わる内容が含まれ、その認識やそれにたいする態度の指導もなされる。学習指導要領では、各学校の主体的な取り組みを求めて、その内容を規定せず、学習課題の種類として、国際理解、情報、環境、福祉・健康などの横断的・総合的な課題、児童の興味・関心に基づく課題、地域や学校の特色に応じた課題を例示するに留めている。これらの課題の解決には、いずれも多かれ少なかれ社会認識を必要とし、解決過程で認識が促進され、広く深く正確な認識が解決を容易にする。学習方法としては、ボランティア活動などの社会的体験、見学・調査、発表や討論、生産活動などの体験的活動、問題解決的な学習を積極的に取り入れることを要請している。課題はいずれも、

児童の生活に直接かかわるものであり、それへの体験的・問題解決的取り組みは、学校や地域、国の一員としての資質を直接的に育成することになる。

3. 社会科における社会認識形成、市民的資質育成

教育課程において社会認識形成・市民的資質形成を直接教科の目標として掲げ、教科存立の根拠としているのは、社会科だけである。

社会科における社会認識形成・市民的資質育成の特色は、第一に、市民的資質の育成をねらいとしているが、それはあくまで社会認識形成を通して図っていくにある。平成10年版でも、社会生活、我が国の国土と歴史についての理解をより直接的な目標とし、その達成を通して市民的資質の基礎を培うことを目的としている。生活科や道徳、特別活動のように集団の一員として行動することや行動できるようになることを目標とはしていない。社会生活や国土、歴史についての理解が、市民的資質の重要かつ中心的な構成要素であり、理解の獲得が資質の育成であり、その理解内容が基礎的であるということである。

第二に、社会認識形成を系統的に行なうようになってきているということである。生活科における家庭、学校、学区を受けて、市町村、都道府県、国と空間的に、そして、自分が生まれてから今まで、過去百年、江戸時代から今まで約四百年、原始時代から現代までと時間的に、同軸円筒拡大的に広がってゆく社会について、地理、歴史、政治、経済（消費、商業、農業、漁業、工業）、文化と領域を網羅して知り理解できるように内容が組織されている。子どもの社会的意識の空間的・時間的に拡大する発達に応じて、各段階の社会について可能なかぎり広く深く正確に理解させようとするものになっているのである。

第三に、社会を対象化し、社会的事象それ自体の認識を目的としていることである。同じく認識を通して資質を育成する学習を含む生活科や道徳においては、地域の物や人々や場所といった事象それ自体ではなく、事象に対する望ましき態度や行動を習得できるようにそれらとの「かかわり」が分かる対象となっていた。これに対し社会科では、事象の特色、起因、結果、影響、意味、意義、構造、変動など、自分の生き方とは直接には関係しない、事象自体の諸特性の解明・理解をめざしている。

第四に、社会の科学的認識をめざすとともに、認識能力の育成を図ろうとしている。平成10年版指導要領の特徴は、「内容」の示し方にある。内容の大項目が、すべて、「～して調べ、～を考えるようにする」となっていることにある。「地域の人々の生産や販売について、次のことを見学したり調査したりして調べ、それらの仕事に携わっている人々の工夫を考えるようにする」（第3・4学年内容(2)）「我が国の国土の自然などの様子について、次のことを地図その他の資料を活用して調べ、国土の環境が人々の生活や産業と密接な関連をもっていることを考える」（第5学年内容(4)）といわれる。「地域の生産や販売」、「国土の自然」といった事象について主体的に調べ、「仕事の特色」、「産業との関連」など事象の諸特性をより広く深く正確に解明させるとともに、解明できる力を習得させようとしているわけである。

第五に、社会科で育成される市民的資質は、社会的事象について、自己の感情をまじえないで、合理的に判断し意思決定し行動できる力である。生活科や道徳では、環境としての社会によりよく適応できるように自己を変え形成していくのに対し、社会科ではよりよき社会生活ができるように、社会を変え形成していく「市民」としての資質を育成しようとするわけであり、その資質の中核となるのが科学的社会認識である。「社会的事象を公正に判断できるようにするとともに、個々の児童

に社会的なものの見方や考え方が養われるようにすること」がもとめられる所以である。

4. 結 語

社会科関連カリキュラムの基盤には、児童の、空間的・時間的に段階を追って拡大する社会的経験とそれをもとに形成される社会意識がある。それはいわば同軸円筒拡大的に発達すると考えられている。日常生活のなかで、意識を形成してきている社会、それを構成する諸事象について、形成しているその期をとらえて、可能なかぎりより広く深く正確に知り理解させ、それに対してとるべき態度と能力を習得させ、適切に行動できるようにさせようとするのが、社会科関連カリキュラムである。その中核をなすのが、社会科であり、その教科としての独自性は科学的認識の系統的形成にある。他教科、他領域における社会科関連の指導は、社会科で形成される認識を基盤とし、それを補強し、態度や行動に結びつける働きをし、社会科指導に対しては学習の意義を知らしめ、理解のための一つの基礎を培う立場にある。

平成10年版指導要領社会科は、「地域社会に対する誇りと愛情」「国土に対する愛情」「国を愛する心情」という感情教育も目的とすることによって、道徳と性格が重なり、教科としての独自性が曖昧になり、社会科関連カリキュラムにおける本来の役割を果たせないものとなっている。

参考文献

- ① 拙稿「社会科の本質－市民的資質教育における科学性－」日本社会科教育学会『社会科教育研究』No74 1996年 60～70頁
- ② 拙稿「社会科における社会認識の論理－現行学習指導要領の分析から－」『広島大学教育学部紀要』第一部 23号 257～267頁

Ⅲ. 「総合的学習」と社会科カリキュラム

ーコア・カリキュラム論議と社会科教育との関わりの検討を踏まえてー

白 井 嘉 一 (福島大学教育学部)

1. はじめにーコア・カリキュラム論議検討の意義と課題

1998 (平成10) 年12月14日告示の小学校および中学校の学習指導要領は、今回初めて提示された「総合的な学習の時間の取扱い」について、それぞれ次のように述べている。

「1 総合的な学習の時間においては、各学校は、地域や学校、児童 (小学校、中学校は「生徒」－引用者注) の実態等に応じて、横断的・総合的な学習や児童 (小学校、中学校は「生徒」－引用者注) の興味・関心等に基づく学習など創意工夫を生かした教育活動を行うものとする。」(小・中)

「2 総合的な学習の時間においては、次のようなねらいをもって指導を行うものとする。

(1) 自ら課題を見付け、自ら学び、自ら考え、主体的に判断し、よりよく問題を解決する資質や能力を育てること。

(2) 学び方やものの考え方を身に付け、問題の解決や探究活動に主体的、創造的に取り組む態度を育て、自己の生き方を考えることができるようにすること。」(小・中)

「3 各学校においては、2に示すねらいを踏まえ、例えば国際理解、情報、環境、福祉・健康などの横断的・総合的な課題、児童 (小学校、中学校は「生徒」－引用者注) の興味・関心に基づく課題、地域や学校の特色に応じた課題などについて、学校の実態に応じた学習活動を行うものとする。」(小・中)

「4 各学校における総合的な学習の時間の名称については、各学校において適切に定めるものとする。」(小・中)

「5 総合的な学習の時間の学習活動を行うに当たっては、次の事項に配慮するものとする。

(1) 自然体験やボランティア活動などの社会体験、観察・実験、見学や調査、発表や討論、ものづくりや生産活動など体験的な学習、問題解決的な学習を積極的に取り入れること。

(2) グループ学習や異年齢集団による学習などの多様な学習形態、地域の人々の協力も得つつ全教師が一体となって指導に当たるなどの指導体制、地域の教材や学習環境の積極的な活用などについて工夫すること。

(3) 国際理解に関する学習の一環としての外国語会話等を行うときは、学校の実態等に応じ児童が外国語に触れたり、外国の生活や文化などに慣れ親しんだりするなど小学校段階にふさわしい体験的な学習が行われるようにすること。(この3の項目は「小学校」のみ。－引用者注)

(1・2の項目－小・中、3の項目－小)

以上の、小・中学校双方に新設された「総合的な学習の時間」(以下「総合的学習」とする)は一方で「横断的・総合的な学習」というカリキュラム全体に関わる側面を持つとともに、他方で「総合的な学習の時間」という文字通り、独自に設定されたカリキュラムの一領域の時間という側面を持っている。この前者の側面は、カリキュラムのすべての領域・部分に関わる場所であるが、後者の側面は、カリキュラムの一領域として、その領域の時間において、文字通り総合的な学習が展開される場所である。

併せて、この二つの側面の問題とともに、この「総合的学習」の時間の内容的側面として「例えば国際理解、情報、環境、福祉・健康など」という、いわゆる社会的課題が位置づけられていることにも着目する必要がある。そしてこの内容的側面は、上記のようにカリキュラムのすべての領域・部分に関わるという横断的・総合的な学習の中核的テーマになっていることにも注意する必要があるが、この点とともに、この社会的課題に関わるテーマは、社会科カリキュラムの内においても位置づけられるべきものでもあることに注意する必要がある。

すなわち、今回の「総合的学習」の提起は、内容的には社会科内容とも重なる社会的課題の学習論を提起しつつ、そのような学習のカリキュラムのあり方として、横断的・総合的ないわばクロス学習論と、総合学習の時間設定をする「総合的学習」領域論が提起されたわけである。

これらの「総合的学習」の提起は、ややもすると、その時間を形式的に設定することが先行したり、クロス学習ということで教科連携が機械的に実施されたりすることが危惧される。もちろんそのような試みも全く無意味であるとはいえないし、そのような試みも一定程度積み重ねることによって、真の「総合的学習」が創造されていくともいえないことはない。しかしながら少なくともこのような貴重な試みを意味あるものとして位置づけていくためにも、「総合的学習」の理論的な位置づけ・検討は不可欠の課題といえる。

その点で今回、小論で検討する戦後初期のコア・カリキュラム論議は、以上に述べた三つの方法論的視角（①社会科内容とも重なる社会的課題の学習論、②横断的・総合的ないわばクロス学習論、③総合学習の時間設定をする「総合的学習」領域論）を、ある意味で含みこんでいる論議でもあり、その論議の結果、日本生活教育連盟の「日本社会の基本問題」という社会科カリキュラム論をも生み出したものである。

コア・カリキュラム論議を、この三つの方法論的視角を踏まえて吟味・検討することを通して、今日の「総合的学習」のあり方と、それとの関わりで社会科カリキュラムをどうとらえ位置づけるかという問題の基礎的考察を試みたい。

2. 戦後初期のコア・カリキュラム論議と三つの方法論的視角

戦後初期のコア・カリキュラム論議とは、1948（昭和23）年10月30日に結成された民間教育研究団体である「コア・カリキュラム連盟」（略称コア連）におけるカリキュラム編成に関わる理論的・実践的な論議のことを指しているが、この論議は単にコア連内部の論議にとどまらないで、外部からの批判やそれに関わる論争なども含みこむような戦後初期日本（1948年～1955年頃）における注目すべき論議である。このような論議について磯田一雄は「学校教育の機能を、とくに生活と教育との関連の視点から、総体的に認識しようとするならば、コア・カリキュラムの構造論の提起した問題そのものは、やはり戦後教育改革の一つの遺産であったといえる」としつつ、「その遺産が、その後の運動の展開のなかで必ずしも有効にひきつがれているとはいえない」とも述べている。（注1）

（注1）磯田一雄「コア・カリキュラム運動におけるカリキュラム構造理論の展開」（肥田・稲垣編『教育課程総論』東京大学出版会1971年）542頁

コア・カリキュラムという用語は、歴史的にはヘルバルト派の中心統合法における「中心教科」、中等教育の大衆化にともなう選択科目の増大に対応して社会的連帯の態度を養うために生じた「必修学習」、すべての学習を総合する「中心学習」という三つの類型があると整理されているが、この三つの類型はすべて「コアとしての」カリキュラムとなっていることである。

それに対して、戦後初期のコア・カリキュラム論議においてはコア連独自の規定がなされており、それは「コアを有するカリキュラム」という、いわば構造的なカリキュラム論であったといえる。それゆえに、このコア・カリキュラム論議は「カリキュラムの全体構造論とつねにかかわること」になったと思われる。(注2)

(注2) 磯田一雄『同書』543頁

さて、先述の三つの方法論的視角からみると、戦後初期のコア・カリキュラム論議はどうかとらえられるのであろうか。

(1) 社会的課題の学習論という視角からみる

まず社会的課題の学習論という視角からみると、このコア・カリキュラム論議はカリキュラムの全体構造としての「コア」(中心課程)と「周辺課程」における「コア」をどうかとらえ、その中に社会的課題を正面から位置づけるか否かという問題の論議となる。

コア連においては、当初のいわゆる「作業単元」「経験単元」重視の時期においては、この社会的課題は必ずしも正面から位置づいておらず、したがってその批判者から「牧歌的カリキュラム」論として厳しい批判が展開された。しかし、その批判に対してコア連内部からその自己批判がなされ(注3)、カリキュラムにおいて現代日本の課題を正面から位置づけるべきことが論議されていくようになる。

(注3) 広岡亮蔵「牧歌的カリキュラムの自己批判」(『カリキュラム15号』1950年3月)

そして、新たな「三層四領域論」というカリキュラム構造論において、三つの「層」の一つとして「問題単元課程」を位置づけることになる。なお他の二つは「生活単元課程」「系統単元課程」となっている。(注4)

(注4) この「問題単元課程」を、梅根悟は「教科以前の、超教科的な課程」である、と勝田守一との論争で主張し、なおかつ、この課程を「社会科」と名付けている。そのような、いわば「領域としての社会科」観に対して、勝田は「教科としての社会科」観を対置している(「梅根・勝田論争」)。

しかしその後、以上のようなコア・カリキュラム論議を一步進めた日本生活教育連盟(略称・日生連、1953年改称)のカリキュラム構想では「日本社会の基本問題」を正面から位置づけつつも、なおかつ地理・歴史・公民(政治・経済・社会分野)の系統的学習も組み合わせて、「教科としての社会科」観に立つ社会科カリキュラム構想が位置づけられるようになる。(注5)

(注5) 1953年9月14日本部常任委員研究会「社会科改善についての提案」(『カリキュラム59号』1953年11月)。なお以上の提案を発展させてまとめられたのが『生活教育の前進Ⅵ社会科指導計画〈総説編〉』(1955年5月)及び『生活教育の前進Ⅶ社会科指導実践編』(1956年6月)においてである。

(2) 横断的・総合的なクロス学習論という視角からみる

次に横断的・総合的なクロス学習論という視角からみると、コア・カリキュラム論議はカリキュラムにおける「コア」と「周辺課程」との関連づけというとらえ方において、その横断的・総合的なクロス学習という観点が位置づいているともいえる。そして、次の「三層四領域論」においてもその「問題単元課程」「生活単元課程」「系統単元課程」との関連づけが中心課題となっており、とりわけ「系統単元課程」は他の二つの課程との相互関連性が重視されていたといえる。以上のコア・カリキュラム論議におけるクロス学習という観点は、その後の諸教科学習における横断的・総合的学習という観点とは決して同等の観点とは言い難いが、それにも通じるような問

題が提起されていたととらえる。

(3) 「総合的学習」領域論という視角からみる

最後に「総合的学習」領域論という視角からみると、コア・カリキュラム論議はそもそもカリキュラム領域論をその内に含めているといえるが、具体的には「コア」も「周辺課程」もそれぞれ領域といえるし、次の「三層四領域論」における三つの「層」（「問題単元課程」「生活単元課程」「系統単元課程」）はそれぞれ領域ととらえる。なお、「四つの領域論」の提起は、四つの目標論に対応するもので（「生産の高度化と経済の自立」→「経済（自然）」領域、「前近代の払拭による民主主義の確立」→「社会」領域、「平和愛好と国際協調」→「表現」領域、「窮乏よりの解放と生活水準の向上」→「健康」領域）、先に整理した三つの「層」の領域論とはレベルの異なるものである。

さて、以上に述べた三つの「層」と「教科」との関わりであるが、「生活単元課程」はいわゆる「教科外」領域（特別活動・自治的活動領域）、「系統単元課程」はいわゆる「教科」領域に、それぞれほぼ対応するのに対し、「問題単元課程」は、ややそれらとレベルを異とする領域であり、これこそがコア連における、まさに中心課程としての領域であったといえる。

先に梅根悟が勝田守一との論争において、「問題単元課程」のことを、「領域」としての社会科と名付けていたと述べたが、まさにこのような「問題単元課程」をいわば「総合的学習」領域として位置づけていたことがうかがえる。（この領域としての「総合的学習」論を、「教科としての社会科」と混同しかねない、梅根の主張は再整理する課題が残されていたが。）

ところが、この領域としての「総合的学習」論は、コア・カリキュラム論時代の産物であって、コア・カリキュラム論から一步前進した「日本社会の基本問題」社会科論においては、既に領域としての「総合的学習」論から、社会科カリキュラムにおける「総合的学習」論へと移行していったととらえる。したがって、後に日本教職員組合（日教組）の教育課程改革案で提起されるような、教科領域・自治活動領域（教科外領域）と並立して、「総合学習」領域が構想されるのはその後の新しい試みであると位置づけうる。（注6）

（注6）日教組中央教育課程検討委員会『教育課程改革試案』一ツ橋書房1976年12月

以上の整理からでもうかがえるように、この整理の作業は、今日の「総合的学習」論をとらえる視角及びそれらと社会科カリキュラムとの関わりについて検討する上での、基本的論点を析出することにそのねらいがあった。

その基本的論点とは、今後の「総合的学習」において社会的課題の学習はいかなるものとしてイメージするかということであり、具体的にはこの社会的課題の学習は「教科」領域・「教科外」（道徳も含む）領域においてはどう関わり、併せて以上の二大領域に加えて新たに「総合的学習」領域を設定する意義はどこにあるのか、という点である。以下において、この基本的論点を踏まえて、戦後初期コア・カリキュラム論議から何を学ぶべきかについての基礎的考察を試みたい。

3. 社会的課題学習における「総合的学習」論と社会科カリキュラム論

(1) 〈梅根・勝田論争〉の意義と課題

〈梅根・勝田論争〉の詳細な検討はここでは省略するが、この論争は一方の梅根悟はコア連の立場を代表して「問題単元課程」領域（「領域としての『社会科?』」）の意義を主張し、他方の勝田守一は教育科学研究会全国連絡協議会（教科研）の立場を代表して「教科としての社会科」の意義及び系統的な地理・歴史教育の意義を主張しているものであり、そのことを通して互いに「生

活指導と教科課程」の統一の意義及び「生活課程と教科課程」の統一の意義を確認しあったことに意義があったといわれている。(注7)

(注7) たとえば今野喜清「解説」(『日本教育論争史録第四巻現代編(下)』第一法規出版株式会社1980年7月)など参照

このような意義に加えて、確認しておきたいことは第一に本論争においてはコア連の「問題単元課程」領域の設定の意味が両者において一定程度理解しあえたこと、第二にコア連の名称改称後の日生連において「教科としての社会科」という立場から「日本社会の基本問題」という社会科カリキュラム構想が提起されるきっかけをつくった論争であったということである。

もっとも、以上の社会的課題の学習の二通りのカリキュラム的対応は、二律背反的にとらえがちではあるが、今日的視点から、これらを統一的にとらえることに意義を見いだせないかということである。そのような統一的なとらえ方は今回の「総合的学習」論を豊かにとらえ直す上で重要な意味づけをしてくれるように思える。その点について以下に述べてみる。

(2) 社会的課題学習における「総合的学習」論と社会科カリキュラム論

社会的課題学習はコア連の研究史及び日生連の「教科としての社会科」構想の研究成果を踏まえば次のような学習類型として整理できる。

- ①カリキュラム全体におけるコアとしての「問題単元課程」の学習類型－「総合的学習」領域としての「総合的な学習の時間」
- ②「教科としての社会科」の日本社会の基本問題の学習類型－「教科としての社会科」における社会的課題学習領域の設定(筆者が従来から提起している「融合社会科」領域で、戦後初期社会科における「一般社会科」領域とほぼ重なるもの)
- ③コアとしての「問題単元課程」の学習は、まさにコアとしての役割を果たしながら「生活単元課程」(いわば教科外領域・自治的活動領域。)や「系統単元課程」(いわば教科領域。ただしコア連段階では教科領域は原則的には認めていない。)の諸領域との相互関連的学習を全体として保障する学習類型－横断的・総合的ないわばクロスの学習

以上において整理したように、社会的課題の学習は、①「総合的学習」領域として、②「教科としての社会科」として、③「総合的学習」領域がコアとなってカリキュラム全体の横断的総合的学習・クロス学習を保障するものとして、それぞれ展開されているととらえうる。

IV. 生活科と社会科

片 上 宗 二 (広島大学教育学部)

1. はじめに

生活科と社会科の関係をどう考えるか。これが、本稿の課題である。

ところで、「生活科と社会科の関連」という課題は、次のような問いに分節されよう。

- ① 生活科と社会科の教科としての違いは何か。
- ② 生活科と社会科の間に、どのような社会認識形成上の（方法や内容の）違いがあるか。
- ③ 生活科と社会科の間に、どのような接続性をもたせるべきか。

以下、これらの問いに答えていこう。

2. 生活科と社会科の相違点

(1) 生活科の受け止め方の変容

生活科は、周知のように、低学年社会科と理科にかわって設けられた教科である。しかし、生活科は、「社会科と理科の合科」ではない。賛成するにせよ反対するにせよ、生活科は、全く新しい教科なのである。

だが、生活科発足当初には、生活科新設への反対という異議申し立ても込めて、例えば歴史教育者協議会（歴教協）などでは、低学年社会科で行われてきたすぐれた実践のエッセンスや内容構成の観点などを取り出し、それを生活科の中に内容的に盛り込む形で実践するといった動きも見られた。また、社会認識の基礎の保障という観点から、生活科を自主編成し、つくりかえて実践するといった動きも見られた²⁾。しかし今日では、そのような動きは影をひそめ、「生活科は全く新しい教科だ」という立場からの実践となっている。

(2) 生活科と社会科の違い

では、生活科と社会科の違いは何か。次のようになろう。

- 生活科は、「自立への基礎」を養う教科である。
- 社会科は、「社会認識の育成（社会生活の理解）」を通して「市民的（公民的）資質」を養う教科である。

問題は、「自立への基礎」とは何かである。その捉え方は、学習指導要領に示されたものから各論者によるものまで多様であるが、一般的には、次のようであると思われる。

- ①有能感や自信
- ②ものごとの基礎的な学び方
- ③人やものごとへの接し方
- ④基本的な生活習慣・技能や実践的態度

もう一点見落としてならないことがある。「具体的な活動や体験」の位置づけられ方の違いである。

低学年社会科……もちろん重視されてきたが、社会（生活）の理解を促すための方法、手段としてであった。

生活科……目的でもあり方法でもある。内容として位置づけられている場合も多い。

以上の2点をふまえると、どうなるか。生活科では、社会科と違って、理解させるべき特定の内容や内容領域を求めてない、ということになる。したがって生活科では、実に多様な実践が展開されることになる。それゆえ、生活科の実践を捉え分析する場合、主な活動（体験）によって、次のようにくるやり方が一般的なのである。

・遊び ・探検 ・飼育 ・栽培 ・製作

表1 「遊び」単元の類型化²⁾

	遊び（活動する）	方法（分かる）	工夫（できる）
遊び体験	遊び体験型 →	遊び方法体験型 →	遊び工夫体験型 →
遊び創造	遊び創造型 →	遊び方法創造型 →	遊び工夫創造型 →

(3) 「社会的」単元

しかし本稿では、あえて、「社会的」単元を抽出し、検討することにしよう。主なものを挙げると次のようである。

学校 公園 家族 町 乗り物 郵便 自分の成長（1年） 自分の成長（2年）

3. 社会認識形成上の相違点

(1) 「社会認識」と「社会への気づき」

社会科では、子どもに育てるべき知的側面を「社会認識」と表現できても、生活科では無理であろう。「社会認識の基礎」といった表現も見られないわけではないが、子どもに育てている内容からみて、「社会への気づき」とでも表現した方が望ましいと考えられる。

ところで、「気づき」とは、次のように定義される³⁾。

気づきとは知識・理解と同様の認識的な成果を示すものだが、萌芽的なものである。
気づきは、特定のことを理解しようとして成り立つのではなく、むしろ活動の結果として生まれるものである。

以下生活科では、社会科と異なった表現である「社会への気づき」を用い、「社会への気づき」がどのような方法で育てられているのか、またその中身はどのようなものであるのかを明らかにしたい。

(2) 社会的自己認識としての「社会への気づき」

① 自己認識の中に芽ばえる「社会への気づき」

生活科で求められる「社会への気づき」のひとつは、子どもに自己認識を培う中で育てられる

それである。そのことが最もよく表れているのが、1年生の単元「自分の成長」の場合である。例えば、渡辺克之氏の実践は次のようである⁴⁾。

単元構成は、第1次「小さいころに戻ろう」、第2次「小さいころのわたし あなた」、第3次「わたしからわたしへの手紙」。

第1次では、小さいころから見たテレビ番組を見て、小さいころの遊びを思い出し、遊びの変化に気付かせる。また実際にその遊びをして当時の状況を思い出させ家族とのつながりを想起させる。この活動から児童は「小さいころ」に関心を持つ。

第2次では、小さいころの自分について書いたカードを用いて、「わたしはだれ」ゲームをする。これによって、自分自身と他人（友達）の違いに気付く。また、友達のカードをきっかけに自分自身の忘れていたことも思い出す。この活動をもとに、「小さいころの私」のまとめとして「私から私への記録」をつくる。この時、「小さいころの私は…だったの」という具合に書きしるしていく。

そして、第3次では、その記録を友達に紹介し、最後に「小さいころの私」に手紙を書く活動となるのである。

この単元名が、「わたしからわたしへ」となっていることに注目してほしい。

子どもたちは、自分の成長を実感し、そのことを通して家族や社会の動き（遊び）とのかかわりに気づくとともに、自己と他者との違いにも気づくことになっている。

しかし、最終的には自己認識を深めるところへ帰る構成になっていることが知られよう。「自分→他者（社会）→自分」という展開なのである。

② 方法的個人主義のよる社会的自己認識の育成

もちろんこのような実践だけではない。むしろ、反対側に位置する、『1年生の思い出を振り返ろう（第1次）』、『お世話になった人たちを紹介しよう（第2次）』、『2年生に進級する準備をしよう（第3次）』からなる井上尚武実践『もうすぐ2年生⁵⁾』のようなものもなされている。

井上実践では、自分の成長が「他者との関係の深まり」として捉えられるようになっているとも考えられる。それが第2次に端的に表れているが、第3次も、自分たちだけの進級の準備でなく、新1年生のためのプレゼント作り等々となっているのである。したがって、この実践では、社会的自己認識ではなく、社会的自己認識の育成が目ざされているといえよう。

そのことを押さえた上で、ここで指摘したいのは、それらの社会的自己認識の育成方法の共通性についてである。渡辺実践はもとよりその対極に位置する井上実践でも、その育成方法は、いわば方法的個人主義となっているからである。例えば、第1次では、「私が1番思い出に残っているものを自分なりの表現方法で表していく」というようにである。

③ 「わかる」ことではなく「できる」ことによる方法

ところで、子ども1人1人による社会的自己認識の形成という方法は、具体的には、「わかる」というアプローチではなく「できる」というアプローチをその内容とする。

『1年間を思い出そう（第1次）』、『できるようになったことをさがそう（第2次）』、『1年生をむかえよう（第3次）』からなる宮真由美実践⁶⁾や『今の自分をみつめる活動（第1次）』、『自分の小さな頃を調べる活動（第2次）』、『絵本を作る活動（第3次）』からなる堀田吉宏実践⁷⁾などがその典型であるが、そこでは、「できるようになったこと」や「自慢できること」を中心に、それがいつ頃からか、が追求され、自身豆記者となって活動が展開され、その過程で

いろいろな人の支えがあったことに気がつくことになっているのである。

(3) 社会と自然の未分化的な「気づき」

生活科で求められる「気づき」の第二の特質は、「社会への気づき」と「自然への気づき」が区別されず、いわば一体的なものとして捉えられている点である。

その点がよく表れているのが、「学校単元」や「公園単元」や「町単元」である。ここでは、「学校単元」の場合を取り上げてみよう。事例にするのは、棚橋尚子氏の実践『がっこうたんけん⁹⁾』である。その概略は、次のようである。

次	学習活動	学 習 活 動
第1次 (6時間) こうしゃないたんけん		①校舎内の部屋の探検をし、地図作りをする。 ②教室や部屋の道具の違いや学校で働く人の仕事やその役割を知る。 (自分たちの書いた道具類を整理し、 <u>大きな地図</u> に貼っていく。)
第2次 (3時間) あそびどうぐたんけん		①校庭の道具を実際に使って遊ぶ。 ②校庭にある遊具の地図作りをする。(第一次でつくった <u>大地図</u> に書きこむ。)
第3次 (2時間) いきものさがしたんけん		①校庭にいる生き物を探す。 ②うさぎと遊ぶ。 ③校庭にいる生き物の地図作りをする。(第一次で作った <u>大地図</u> に書き込む。)
第4次 (2時間) くさばなたんけん		①草花や木の様子を探検する。 ②草花で遊ぶ。 ③校庭にある草花や木の地図作りをする。(第一次で作った <u>大地図</u> に書き込む。)

「学校」単元の実践は、他の単元の場合と同様に多様であるが、この棚橋実践はそれらの中では特殊な位置を占めている。というのも棚橋氏は、「方法的能力⁹⁾」の育成に焦点化して、実践を展開しているからである。そのことが、地図づくりを3度繰り返させることにもなっている。

一般的な実践は、次の大手町小学校のように、探検活動と遊びにひたらせるタイプが多いが、どの実践にも共通するのは、「社会への気づき」と「自然への気づき」を一体的に育てようとしている点である。

「学校って楽しいな」(大手町小学校)¹⁰⁾

第1次「友達をつくろう(3)」	第2次『学校探検しよう(4)』	第3次「1日探検をしよう(5)」
-----------------	-----------------	------------------

棚橋実践では、地図作りを通して、校内の様子を一体的に捉えさせようとしているし、大手町小学校の場合は、自由探検や「それぞれの場所で、人やものにかかわりながら、自分で1日を過ごす」というやり方で未分化的に捉えさせようとしているといえよう。つまり生活科では、「学校」を身近で共通の一つの環境として、一体的(未分化的)に捉えさせていることが知られるのである。

(4) 構成主義的手法による「社会への気づき」

① 「条件制約」と子どもの自由な活動展開による「社会への気づき」

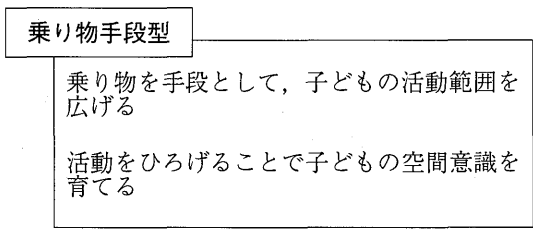
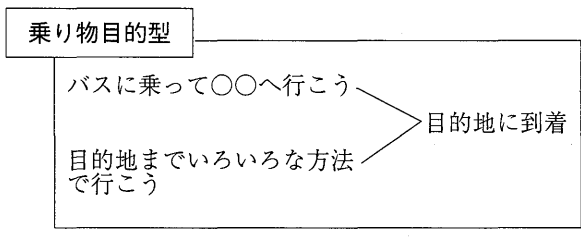
生活科の実践は多様であるが、中でも注目したいのは、「社会への気づき」を、かかわる対象を子どもが自ら構成する形で深めさせようとする実践である。そのひとつの類型が、杉山幸子氏の「乗り物」単元の実践『100円玉の小さな絵¹¹⁾』である。その単元構成は、次のようである。

第1次「小さな旅の始まり（4時間）」	第2次「100円玉の旅をしよう（4時間）」
第3次「小さな旅のお話（4時間）」	第4次「思い出をありがとう（2時間）」

この実践は、広島市の中で「片道100円で行ける場所」という条件制約を加えた上で、子どもの自由な目的活動（どこでも、バスでも電車でも自由に計画を立てて行ってくる）を保障し、100円で行ってきた所をクイズ等々を使って発表し合い、今度行ってみたい所を見つけ合いながら、100円で行ってきた空間を広島市の中に合成・構成することで彼らの空間意識を育てることが目指されている。

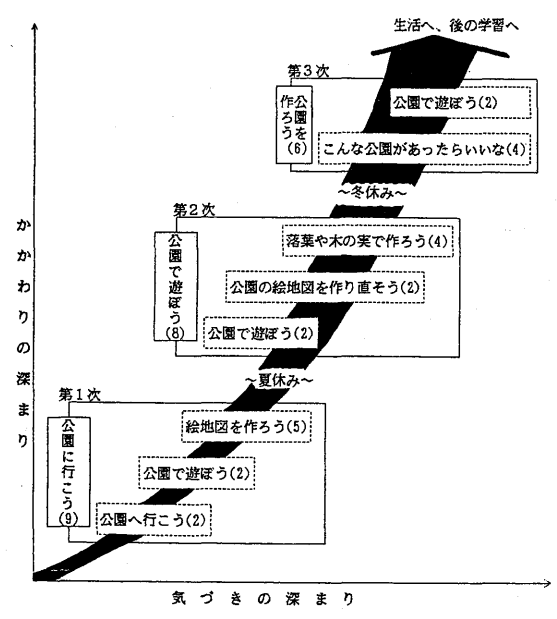
さらに第4次では、楽しかった旅の思い出を、100円で行けない所に住んでいる親類の方などへ手紙を書いたり、電話をしたりすることでさらに距離認識を広げ続けられることにもなっているのである。

この生活科の実践では、「条件制約」つまりは「限定を加えること」が、かえって子どもの活動意欲を高めることにもつながったことが報告されている。そしてこの実践は、一般的になされがちな「乗り物によって目的地に行ける」ことをねらいとする「乗り物目的型」ではなく、乗り物を使って子どもが空間を自由に作れる「乗り物手段型」となっているのである。

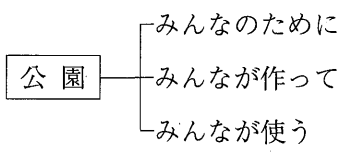


② 場の内部構造分析と場の自由な構成による「社会への気づき」

もう1つの類型を紹介しよう。加藤寿朗氏の「公園」単元『夢の公園を作ろう¹²⁾』である。単元構成を図化すると次のようである。



この実践のポイントは、「公園」を身近な環境というように漠然と捉えるのではなく、1年生にもわかる「公共物」として、つまりは次のような「公共性」をもつものとして捉えられるようになっている点である。



つまり、このような公共性を捉えられるような活動が子どもに展開できてはじめて、授業自体も、発展的に展開できると考えられているのである。

子どもたちは、第1次から第3次まで、目的意識を変えながら公園で遊ぶことになる。そして、その遊びを通して公園への「かかわり」を強めながら、公園にある施設とその配置や公園で出会う人々（お年寄りなどの利用する人々や掃除に来る人等々）の存在を知ることになる。

その一方で、第3次では、学習対象の公園（附属小学校のすぐ近くの）と近所で遊ぶ公園（自宅近くの）とを比べ、さらにはそれらの公園と家族につれて行ってもらった「遊園地」との比較を行う。

公園だからこそ必要な施設があること等々をふまえ、「こんなこうえんがあったらいいな」の設計を行っていく。そして最後は、「出来あがった公園はみんなが楽しめる公園になったかどうか」話し合い、もしそうっていない場合は「どうしたら作れるか」を考えながら、公園で遊んで終わることになるのである。

4. 生活科から社会科への接続・発展

(1) 従来の研究・実践

以上のように生活科で育つ「社会の気づき」の中身と方法を捉える時、生活科から社会科への接続・発展は、どのように考えられてくるであろうか。

この点についての従来の研究・実践の整理を行った伊藤裕康氏によると、両者の接続・発展関係は、主として方法的側面において、しかも、社会科は生活科の成果を生かしたりそれを発展させたりすべきだという考え方に立って、捉えられている¹⁹⁾。

いうまでもなく、生活科でなされている具体的な活動や体験等、身体全体を使っての学びを社会科でもより一層重視する必要がある。あるいは、生活科の自己目的達成型の学習をどう取りこむかが社会科の課題になる、等々といった形である。

(2) 究明すべき課題

だが、両者の間の接続・発展問題は、上のように大まかな方法的側面でのみ論じられるべきであろうか。

今回のきわめて不十分な考察からでも、生活科での「社会への気づき」の方法は、方法的個人主義を主軸にしながらか構成主義的な手法も見られること。さらにその中身は、社会的自己認識から社会的自己認識へそしてさらに「社会への気づき」そのものを含むこと、が見えてきた。

つまり社会科で育てる「社会認識」とは、その方法及び内容の両側面において、大きく異なることが明らかになった。その意味でも両者は、全く別の教科だと考えるべきなのである。

とすれば、両者の接続・発展は、簡単に考えるべきではないであろう。また、認識形成（わかる）と資質育成（できる）の関係も、生活科では、「できる」→「わかる」へ、社会科では「わかる」→「できる」へと、正反対なのである。

接続・発展問題の検討はこれからだ、と言えよう。

注

1) 例えば和歌山歴教協和歌山市支部「わたしたちの考える生活科カリキュラム試案 生活科の自主編成をすすめよう」『歴史地理教育』No454, 1990年。

2) 平賀修一「生活科授業モデルの開発」第44回全国社会科教育学会発表レジメ, 1994年。

- 3) 中野重人他編『生活科事典』東京書籍, 1996年, 62頁。
- 4) 渡辺克之「わたしからわたしへ」『生活科の構想と実践』第一法規, 1989年。
- 5) 井上尚武「もうすぐ二年生」今谷順重『子どもが生きる生活科の授業設計』ミネルヴァ書房, 1994年。
- 6) 宮真由美「もうすぐ二年生」中野重人編『小学校生活科指導案 第1学年』明治図書, 1993年。
- 7) 堀田吉宏「私の記録を作ろう」中野重人編『生活科授業づくりのヒント』明治図書, 1990年。
- 8) 棚橋尚子「がっこうたんけん」広島大学附属小学校『方法的能力を培う生活科の授業』学校教育研究会, 1992年。
- 9) 「方法的能力」については, 同上書8頁-12頁。
- 10) 大手町小学校『さあ生活科をはじめましょう』日本教育新聞社, 1998年。
- 11) 杉山幸子「100円玉の小さな旅」片上宗二編著『オープンエンド化による生活科授業の創造』明治図書, 1995年。
- 12) 加藤寿朗「夢の公園をつくろう」同上書。
- 13) 伊藤裕康「社会認識教育の体系化に関する基礎的研究」『社会科研究』第44号, 1996年。

V. 社会科カリキュラムと国際理解教育

西 脇 保 幸 (横浜国立大学教育人間科学部)

1. 国際理解教育の動向

国際理解教育を視野に置いたり、目標としたりする社会科のカリキュラムを検討するためには、国際理解教育がどんなものであるのかを、まず確認しておかなければならない。従来広く国際理解教育と呼ばれてきた教育動向を、まず概観しておきたい。

戦後の日本における国際理解教育をリードしてきたのが、ユネスコであった。ユネスコ憲章の前文に「相互の風習と生活を知らないことは、人類の歴史を通じて世界の諸民族の間に疑惑と不信をおこした共通の原因であり、この疑惑と不信のために、諸民族の不一致があまりにもしばしば戦争となった」と記されているように、風習と生活を理解させる異文化理解が、ユネスコ国際理解教育の中心的役割を負った。しかし、1974年の第18回ユネスコ総会で、国際理解・国際協力・国際平和の3つの概念と人権や基本的自由の尊重が本来不可分のものであることを明らかにした勧告が採択されるようになり、単に理解だけでなく、実践や行動も重視されるようになった。

ユネスコの国際理解教育に変化が見え始めた頃、ヨーロッパなどでは海外協力活動に参加した青年たちが、南側諸国に目を向け、その貧困を取り除くよう援助することを訴えていた。これが契機となって、開発教育が始められたのである。当初、子どもたちに第三世界の現状や、途上国と先進国との政治経済の関係を理解させることに主眼が置かれたが、途上国の貧困が世界経済の仕組みが原因であることが明らかになるにつれて、先進国の人々の生活意識や生活様式を変えない限り、南北間の格差は埋まらないという認識が定着するようになった。知識の習得だけに終わらせず、学習者の態度変容に迫り、行動を起こすことを求める開発教育が前面に打ち出された。

日本で開発教育に関心が持たれ始めた1970年代末に、アメリカでは、運命共同体をなす人類という視点に重点化したグローバル教育が、急速に展開した。温暖化や砂漠化といった地球環境問題のほか、爆発する人口、エネルギー資源の枯渇など、閉じた地球としての課題が認識されるようになったからである。グローバル教育では、4つの目標を達成すべく4つの内容構成が考えられている。目標は、第1に社会諸科学から引き出された事実的な資料や法則・概念・理論を知識として習得すること、第2に科学的な探求の方法や技術を駆使しながら社会生活についての知識や理解を深め、発展させていくことのできる技能を習得すること、第3に自己や他者の持つ価値や願いを批判的に吟味検討しつつ、様々な人間的な価値を自己の行動の実践的な基準として身に付けていけるような価値を形成すること、そして第4が社会参加で、地域的・国家的問題や国際的・地球的問題に対して自発的で自治的な市民的行動力を獲得することである。学習内容は、人間的価値の普遍性と多様性、グローバル＝システム、地球的な論争や問題、地球全体の歴史の4つについてである。

このようにしてみると、広く国際理解教育と呼ばれている領域には、単に異文化を知識として理解させるだけではなく、国際的な視点からの経済・社会の構造や地球的な課題を理解させ、さらにそうした課題を解決していくために必要な能力を育成することも、含まれることになる。したがって、社会科カリキュラムを国際理解の観点から構想する場合も、国際教育ともいわれるこの広義の国際理解教育の目標を視野に入れて考えなければならない。

2. 国際理解教育を視野においた社会科カリキュラムと子どもの発達段階

山口（1982）によると、小学校高学年が、他国・他民族に対する友好的態度が最大となり、外国への知的関心が増大する時期であるとされる。子どもの興味・関心といった観点から、小学校高学年は異文化を理解させるという狭義の国際理解を推進する上で、重要な学齢かも知れない。しかし、子どもの興味や関心に即して異文化理解教育を実践すると、文化の違いのみが強調されかねない。極端な場合は、エキゾチズムの追求に終わることもあるであろう。もちろん、差異は差異として認めなければならないが、地球的な課題を同じ地球に住むものとして解決にあたらなければならないことを考慮すると、同じ人間としての同質性・共通性にも着目させる必要があることに留意できよう。つまり、異文化を単に差異だけでなく、同質性・共通性の視点からも理解させるべきであると考えられる。

人間としての同質性や共通性を視野においた国際理解教育は、具体的には衣食住などの日常生活を題材として実践される。場所や文化によって衣食住の素材や方法が異なっても、人間が生活していくためにそれらは欠かせないものであり、どのような文化にあらうとも衣食住が必要であることを、理解させることが肝要である。また、同じ子どもどうしという観点からは、学校や遊びも適切な教材となる。社会や文化の違いをこえて、子どもは学校で学び友達と遊ぶのであるから、そうした子どもの共通性を通じて人間としての同質性・共通性に気付かせたい。

衣食住や学校、遊びといった題材は、子どもにとって身近なものであり、同心円拡大方式をとってきた社会認識系教科のカリキュラムにおいては、小学校低学年で扱われている。これらの題材は、現行の学習指導要領でいえば生活科の領域で取り上げられているわけであるが、国際理解教育を視野においたものにするのであれば、日本の衣食住や学校、遊びだけでなく、若干の外国の事例を同時に扱う必要があるだろう。そうすることによって、子どもとして人間としての同質性・共通性を、発達段階の早期に気付かせることができ、現在考えられている国際理解教育を推進するうえで有意義なものとなる。この点では、空間的な意味で子どもの身近なところから社会認識を形成させていくという同心円拡大方式は、ここで考える国際理解教育を視野においた社会科カリキュラムには適応できないということになる。

このように小学校低学年で、文化の共通性に力点をおいた異文化理解が図られれば、前述のように、異文化に興味関心を示す高学年では、差異を中心にした異文化理解教育を実践することができる。山口（1982）の指摘を待つまでもなく、子どもは一般に異文化としての欧米への関心が強い。音楽をはじめ諸文化における欧米の影響力の強さや、入手できる欧米からの情報量の多さから、欧米に対して関心が高いのは当然なのかもしれない。しかし、こうした欧米指向の関心は、ややもすると脱亜入欧的な意識を生み出しかねないことにも留意すべきであろう。経済的にも進んでいる欧米は素晴らしいが、経済的に遅れている地域はだめだ、といった意識を助長しかねない。

日本をはじめ多くの国が、欧米の近代化をモデルに、すなわち西欧化＝近代化ととらえて経済発展を果たしてきた。しかし、環境問題に象徴されるように、欧米の近代化を支えてきたエネルギーを多量に消費し、大量生産・大量消費をする経済の仕組みが、閉じた地球、限りある資源にとって本当に有効なものなのかが、現在では問われている。換言すれば、欧米の思考・文化自体が問い直されているといっても、過言ではない。そうであれば、むしろ欧米の文化を相対的にとらえるためにも、文化相対主義の見方を育てることは必須と考えられる。したがって、アジア・アフリカ・ラテンアメリカ地域の文化についても関心が持てるように、高学年での異文化理解教育を編成しておくべきである。

この脈絡からすると、在日朝鮮・韓国人や華僑（華人）、さらにはウタリ（アイヌ）など、日本国内における少数派の文化を異文化理解教育の一環として、学習させることも有意義なことと言えよう。日本文化の形成に果たした彼らあるいは本国の文化の役割を認識することは、価値の多様化を図り、差別の解消にもつながると期待できる。

小学校が、異文化に対する知識・理解を主たる目標とするのに対して、中学・高校では、彼らの抽象的な思考の可能性をふまえて、社会現象の背後にある諸関係を構造的に理解させたり、社会を構造的に認識させたり、社会問題に着目させたりすることになる。中学生の段階では、小学校高学年で扱われる学習が継続することもあるだろうが、高校生では概念的知識を習得し、それを用いて社会問題・社会的論争を認識するまでに深めることが可能であろう。

開発教育やグローバル教育でグローバルな見方をするための概念として、参加行為者と構成要素とが統合化された機能的全体を形成するために相互に影響を及ぼしあい、システムとしての世界に我々が住んでいるという「相互依存性」の概念、ある状態から他の状態への存在の運動のプロセスは、生命や生活の不可避な一部分であるという「変化」の概念、相対的に制限されない欲求と有限な利用可能資源との間に不均衡が存在するという「希少性」の概念、人々や国家は異なる価値観や反対の目標を持つという「葛藤」の概念などが、取り上げられている（奥住，1987）。

これらの諸概念を小学校から、例えば「相互依存性」の概念を小学校で導入することはもちろん可能であるが、小学校では何がどこにつながっているかを、具体的な例から示すことによって、「相互依存性」があることを理解させられる程度である。いかにつながっているかとか、何故つながっているのかという観点は、高度で抽象的な思考を要するために難しいであろう。そうした思考力を必要とする部分は、中学校の公民分野や高校の公民科での学習に待たざるをえない。また、そのような観点からの「相互依存性」の概念把握は、世界経済の相互依存性を例に、途上国の経済と先進国の経済が貿易や金融関係を通じて深く関連することを理解させることや、世界経済を構造的に理解させることにつながるし、南北問題を「相互依存性」の側面から子ども自身の問題として把握させることにもなる。「変化」「希少性」「葛藤」といった他の諸概念も、歴史や地理、政治・経済といった抽象度の高い系統学習での成果に期待することになる。

こうして獲得された異文化の理解やグローバルな見方を、実際に応用させる機会が必要となる。それが、グローバルな論争問題や社会問題を取り上げる場面であろう。それをカリキュラムで置き換えるならば、実質的に高校全入の昨今においては、義務教育の最終段階とも受け止められる高校の高学年で、そうしたグローバルな時事問題を扱う科目を、地歴科・公民科の統合を図りながら設置すべきであると考えられる。

本論で考えている国際理解教育においては、知識の獲得だけでなく、解決するための能力も視野に入れていたわけであるから、上述の概念的知識の獲得を含めた議論においても、未だ十分ではない。すなわち、解決を図るための能力を、発達段階との関連で考察しなければならないのである。

国際理解教育が、地球や人類の抱える課題を自分の問題として解決しようとする市民、すなわち地球市民を育成することに目標がおかれているのであるから、その問題を解決するためには様々な価値の葛藤や摩擦があることに気付くこと、グローバルな見方を活用して解決のための自分自身の批判的な考え方がもてること、自分の考え方をもとに資料を活用して問題解決の過程を提示できること、そして自分自身の意思決定を確立してそれを他の人々に説明すること、他の人々と意志疎通を図りながら問題解決のために主体的に参加できることが必要であろう。つまり、価値の明確化、批判的思考、資料活用能力、意思決定能力、社会参加、コミュニケーション能力といった技能の育

成を考えておかなければならない。

これらの技能のうち、資料活用能力、意思決定能力、コミュニケーション能力は、小学校の段階から徐々に育成することが可能であろう。小学校においても調べ学習を通して資料活用能力が、グループ学習を通じて意思決定能力やコミュニケーション能力が、様々な形態の討論学習を通じてコミュニケーション能力が、それぞれ実際に育成されているとおりである。しかし、価値観の形成や思考能力の発達には、一般に中学や高校の段階で著しい。また、社会参加についても主体的に実行できるのは、中等教育期になってからであろう。このようにして考えると、解決に必要な能力の育成も、発達段階に応じてその領域を広げていくことが必要であろう。

3. 国際理解教育における社会科の独自性

上述のことから、国際理解教育が畢竟、地球市民的資質の育成であることは明らかである。社会科教育の目標が公民的資質の育成にあることは、学習指導要領にも明示されているとおりで、「国際社会に生きる民主的、平和的な国家・社会の形成者としての必要な公民的資質の基礎を養う」との文言からは、国民としてと同時に、地球市民としての公民を想定できる。この意味では、国際理解教育＝社会科教育といっても過言ではない。

社会科を核としたコア＝カリキュラムを構想できるものならば、カリキュラムの構成原理自体が社会科の役割となるので、標記にあるような国際理解教育における社会科の独自性を考える必要がない。しかし、社会認識系教科が他教科と併存している以上、総合的な領域としての国際理解教育の中での社会科の独自性を吟味しなければならない。

上述のような学習目標・内容をもつ国際理解教育は、実際には社会認識系教科以外の教科を通じても実践されている。国語科は、その学習目標でもある表現力やコミュニケーション能力を育成するので、国際理解教育の技能目標の一翼を担っている。算数・数学科では、数量を伴う統計処理の基本的操作を学ばせるので、資料活用能力の育成でその意義を発揮している。両教科は、いわゆる3R'sの教科であり、どのような領域の教育であれ、基礎教科として欠かせないことはいまでもない。また、扱われる題材によって、異文化理解を促進することにもなる。数学においても、民族によって数え方や計算の仕方が異なることを理解させることができるからである。

音楽・図工・美術といった芸術系の教科も、音楽や絵画を通じて表現したりコミュニケーションを図るという点を考慮すれば、国際理解の技能目標の一翼を担っていることは言うまでもない。しかしそれ以上に、様々な民族の音楽や創作活動を通じて、異文化を具体的に理解させることができることに着目できよう。とりわけ、従来の芸術系の教科ではヨーロッパの音楽や作品を扱うことが多かっただけに、アジア・アフリカなどにおける音楽や作品を扱った実践が、国際理解教育の事例として紹介されることが多い。衣食住に関わる領域を扱う家庭科も、芸術系の教科と同様、様々な民族の食事や衣服、住まいを通じて、異文化を具体的に理解させることができる。

英語科は、英語が実質的に世界共通語となっている状況を考慮すると、異文化間のコミュニケーション能力を育てるという、国際理解教育における実践的な技能を育成する教科となっている。近年では、アメリカやイギリスだけでなく、アジアなどの地域を題材に英語の学習が行われるようになっており、その意味では英語を通じて様々な異文化理解の推進が図られるようになったと考えられる。もっとも、英語自体が基本的には英米の文化を背景にした言語であるだけに、英語を学ばせることは英米文化の推進であることに、留意しておく必要がある。

これらのほかに、特別活動として国際交流を実施する実践も少なくない。国際交流を通じて、異

文化理解や異文化間のコミュニケーション能力の育成を図っているのである。

このように、社会認識系教科以外の教科における国際理解教育の実践を概観してみると、主として異文化理解とコミュニケーション能力の育成に特化していると考えられる。それらについては、社会科でなくとも具体的に実践的に学習させることができるのである。したがって、社会科ではこれら以外の目標や内容に重点を置いて、国際理解教育に対応することになるであろう。つまり、地理学習や歴史学習を含めて、社会現象の背後にある諸関係を構造的に理解させたり、社会を構造的に認識させたり、社会問題に着目させたりすることや、価値の明確化、批判的思考、資料活用能力、意思決定能力、社会参加といった技能の育成を図ることで、国際理解教育における社会科の独自性を主張することができるのである。

教科間における学習領域の分担の視点からすれば、社会科の独自性は確かにその通りである。しかし他方で、前述のように、社会科の目標自体が国際理解教育の目標をカバーしている状況を想起すると、国際理解教育全体の体系やあり方を示唆することも、社会科の役割となってこよう。つまり、社会科を通じて国際理解教育の枠組みが決められるということである。その点で、社会認識系教科以外の教科における国際理解教育の実践に、どのような意味を持たせるのかを明確にすることも、社会科の役割ないし独自性と考えられる。

引用文献

- 奥住忠久（1988）：『グローバル教育の理論と展開 ―21世紀をひらく社会科教育―』、黎明書房、227ページ
- 山口幸男（1982）：児童・生徒の外国に対する興味関心の発達傾向。新地理第30巻第1号、17-24ページ。

〈第2部〉

Ⅵ. アメリカ・ナショナルスタンダード・地理フレームワーク

草原和博（兵庫教育大学学校教育学部）

1. ナショナルスタンダード

1994年10月、アメリカ地理学協会、アメリカ地理学会、全米地理教育協議会、全米地理学協会の4団体は、『ナショナルスタンダード地理：生活のための地理』（Geography Education Standards Project (ed.); The National Geography Standards: Geography for Life)を制定した（以下「スタンダード」と略記）。本スタンダードが提起されるまでの歴史的経緯や政治的背景については、既に優れた研究成果が発表されている¹⁾。そこで本稿では、カリキュラムの全体構成の解明に論点を絞りたい。まず前半では、カリキュラム編成の理論的枠組みに関して簡単な解題を試み、後半では、カリキュラム編成の実際を筆者なりに整理した形で提示してみよう²⁾。

2. ナショナルスタンダードの人間像—教育目標—

本スタンダードでは、育成しようとする人間を「地理的教養人」（Geographically informed person）と表現する。具体的には、次の4つの資質を地理的教養人が備えるべき要件として提示しており（p.34）、これらはカリキュラムを通じて育成が求められている地理教育の目標に相当する。

- ① 空間的事象の配置の意味を理解する。
- ② 人間、場所、環境の相互関係を理解する。
- ③ 地理的技能を使いこなせる。
- ④ 空間的見方、生態的見方を、生活状況に応用できる。

3. ナショナルスタンダードの構成原理—スコープ—

(1) 地理技能の構造化

地理的教養人の4つの要件のうち、③の要件を重点的に育成するために設定されているのが、次の5つの「地理的技能」（Geographic Skills）である（pp.41-45）。

- 技能1：地理的問いを提示する（Ask Geographic Questions）
- 技能2：地理情報を収集する（Acquire Geographic Information）
- 技能3：地理情報を組織する（Organize Geographic Information）
- 技能4：地理情報を分析する（Analyze Geographic Information）
- 技能5：地理的問いに答える（Answer Geographic Questions）

これら5つの技能には、空間と環境という2つの「地理的見方」（Geographic Perspectives）から事象を捉えてゆく際の研究技法・テクニックが網羅されている（pp.57-58）。技能1→5の順序は、地理的探求の基本プロセスを提示していると解される。

(2) 地理知識の構造化

地理的教養人の4つの要件のうち、①②④の要件を育成するために設定されているのが、次の6つの「内容領域」（Elements）である（pp.32-33）。

- A：空間的世界（The World in Spatial Terms）

- B：場所と地域 (Places and Regions)
- C：自然システム (Physical Systems)
- D：人文システム (Human Systems)
- E：環境と社会 (Environments and Society)
- F：地理の効用 (The Use of Geography)

6つの内容領域のうちA・Bは目標の①を、C・D・Eは目標の②を、Fは目標の④を、それぞれ受けて設定されたものである。A～Fは、子どもに捉えさせたい地理知識の大枠を示したにすぎないので、各内容領域はさらに2～5つの方法知と理論知に具体化されている。これがいわゆる地理教育の「スタンダード」(standards)と呼ばれるもので、全部で18の命題が提案されている(pp. 34-35)。

4. ナショナルスタンダードの構成原理—シーケンス—

地理技能と地理知識は、「X学年までに」達成されるべきこととして、きわめて緩やかに、学年に幅をもたせて提示されている。本スタンダードでは、①幼稚園～第4学年、②第5学年～第8学年、③第9学年～第12学年の3段階区分を採用し、各学年段階までに子どもが習得すべき技能と知識を詳述している。

5. ナショナルスタンダードの全体構成

以上のような考え方にに基づき、本スタンダードでは、地理技能に関わるカリキュラム(5技能×3段階)と、地理知識に関わるカリキュラム(18スタンダード×3段階)の2つが提案されている。

技能カリキュラムでは、各学年段階までに「生徒が知り、理解すべき方法」(the student knows and understands how to)を系統的かつ段階的に提示している。5つの地理技能は、それぞれ1～4つの下位技能に体系化され、それらをゴチック字で表現している。下位の地理技能については、各項目を習得する上で不可欠な学習活動や教材・メディア等を詳細にわたって例示し、授業を実際に組織、運営してゆく教師に実践的アイデアを提供している(pp.46-56)。

一方、知識カリキュラムでは、各学年段階までに「生徒が知り、理解すべき内容」(the student knows and understands)を提示しようとする。18の地理知識は、それぞれ2～4つの下位知識に具体化され、それらを別枠冒頭にゴチック字で表現している。下位の地理知識については、各項目の理解を促し深める資料操作や野外調査、表現活動等を列挙し、教師が一方向的に知識を注入するのではなく、子どもが主体的に知識を獲得してゆくことを求めている(pp. 105-222)。

次頁以降には、これら2つの地理カリキュラムの日本語訳を掲載した。なお、技能カリキュラムは原典の第3章を、知識カリキュラムは第5章～第7章の記述を訳出、再構成したもので、地理技能および地理知識の系統性を読み取りやすいようにレイアウトには若干の修正が施してある。

註

- 1) 中山修一・和田文雄「海外における地理教育改革の諸動向とその事例」『地理学評論』第71A巻第2号、1998年。
- 2) 『新地理』第45巻第3号～第46巻第1号には、ナショナルスタンダードの「全訳」が掲載されている。ただし、1)カリキュラム編成の論理の究明が不十分であること、2)地理技能の全体構成が訳出されていないこと、などの限界を指摘できる。

技能 1 : 地理的問いを発する

第4学年までに、生徒は次の方法を知り、理解する。	第8学年までに、生徒は次の方法を知り、理解する。	第12学年までに、生徒は次の方法を知り、理解する。
<p>1. 地理的問い — それがどこに位置するのか、その位置の何が重要なのか、その位置は他所の人々や場所、環境とどのような関係にあるか — を発することができる。例えば、次のことができる。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・本のなかに描かれた場所について、地理的問いを発する。 ・最新のニュースの地理的側面を認識する。 ・生徒の居住するコミュニティの特徴について、例えば、クラスメイトはどこに住んでいるか、学校や家の周りの土地はどのように利用されているか、クラスメイトはどのくらいの距離を通学しているか、それにはどのくらいの時間がかかるか、多くのクラスメイトが使っている通学手段は何か、どのようなルートを通ってくるか、などの地理的問いを提示する。 <p>2. 地理的問いと非地理的問いを区別できる。例えば、次のことができる。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・問いのリストを、地理的なものと非地理的なものに分類する。 ・ある論争点について、コミュニティの様々なメンバーの視点からみたときの地理的問いを提示する。また、それらの問いのうち、どれが地理的問いで、どれがそうではないかを識別する。 	<p>1. 地理的論争を識別し、地理的問題を定義し、地理的問いを提示できる。例えば、次のことができる。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・新聞および雑誌の記事を分析し、記事に示された地理的論争や問題の痕跡を識別する。 ・地理以外の教科目(文学や歴史、自然科学、数学など)の内容について、地理的問いをつくる。 ・交通や環境、土地利用など地元に論争となっている地理的問題に対して問いを発する。また、口頭や文書、地図やグラフを用いて、これらの問題のまとめをする。 <p>2. 地理的問いへの答え方を立案する。例えば、次のことができる。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ある場所について情報収集するための問いを作り、それを情報提供者に投げ掛ける。そこでの問答を、簡単な文章にまとめる。 ・地理的問題に取り扱う場合に考慮すべき論点を判別し、それを組織化する(校庭の位置や区画を規定している諸要因を識別する)。 	<p>1. 地理的研究プロジェクトを企画し、それを組織する(問題を明らかにし、研究課題または仮説を提起し、情報源を把握する)。例えば、次のことができる。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ある地域の地図を検討し、その地図から引き出される地理的問いをリストにする(土地区画のシステムが、道路のパターンや家の分布にどのような影響を及ぼしているか、都市サービスの効率性にどのような影響を及ぼしているか)。 ・複数の図解資料と文書資料(データベース、グラフ、写真、一次資料)を研究し、地理的問いをリストにする。またこれらの問いに答えるための手続きを整える)。

技能 2 : 地理情報を入手する

第4学年までに、生徒は次の方法を知り、理解する。	第8学年までに、生徒は次の方法を知り、理解する。	第12学年までに、生徒は次の方法を知り、理解する。
<p>1. 地図を含む多様な1次資料、2次資料のなかから地理情報の所在をつきとめ、それを収集し、処理する。例えば、次のことができる。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・計量的な技能を応用する(地形や都市、湖の数、人口に関わる諸特徴を計算する。距離を測定する)。 ・地図を解釈し、場所の特徴(気候や標高、人口密度など)について情報を入手する。 ・地図上の2地点間の距離を測定し、方位の関係を読み取る。 <p>2. 場所の自然的、人文的特徴を観察し、その結果を記録する。例えば、次のことができる。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・フィールドワークを想像し、情報を収集する。 ・場所と時間の視点から、観察した結果を系統的に記録する。 ・航空写真や衛星画像、地形図を基に、自然環境と人文環境の諸要素を識別する。 	<p>1. 多様な技能を駆使して、地理的データの所在をつきとめ、それを収集する。例えば、次のことができる。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・データベースや計算用紙、その他の資料を使って、コンピュータに蓄積された情報を検索したり、入力したりする。 ・適切な情報源を選択する。またそれを見付け出すための方法を知る(定期刊行物、人口統計局、データベース、検索調査、インタビュー、マルチメディアなど)。 ・生徒の居住するコミュニティのフィールド調査やインタビューを企画し、地理情報を収集する。 <p>2. 地図を使って、地理情報を収集、または編集する。例えば、次のことができる。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・例えば石油生産国を示したカルトグラムを基に、主要生産国のリストを作成する。 ・航空写真を読み、上空からみて顕著にみい出されるパターンを認識する。またそのパターンを、同じ範囲の地形図を用いて判別する。 ・地図に描かれた情報を記述する(ドットマップをみて、1910年、1950年、1990年の人口密度をことばで表現する)。 ・フィールドワークを通じて、場所の自然的特徴と人文的特徴を系統的に観察する。例えば、次のことができる(フィールド調査を企画し、土地利用に関する情報を地図化できる)。 ・景観の人文的特徴(建築物や都市環境)および自然的特徴(地形や植生)を写真に撮ったり、ビデオに撮影する、あるいはスケッチに収める。 ・ある場所の写真や映像をみて、地理情報を収集する(スライドやビデオクリップ、その他の視覚資料を使って、気候と植生の関係を観察する)。 	<p>1. 多様な1次資料、2次資料のなかから地理情報の所在をつきとめ、それを系統的に収集する。例えば、次のことができる。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・複数の研究方法を、例えば、観察や識別、ネーミング、記述、加工、スケッチ、インタビュー、記録、測定などの手法を組み合わせ、フィールドのデータを収集する。 ・地図や写真、ビデオ、その他のメディア(CDROM)、図表、航空写真、非文書資料を基に、データを収集する。これらのデータのなかから、地理的関心の対象となる項目について記述、加工、スケッチ、測定し、そして評価する。 ・空間的サンプリングの手法を用いて、2次資料と現地調査の双方から情報を収集する(地図に正方形のグリッドを被せて、2つの事象の特徴 — とうもろこしの生産と豚の飼育 — を読み取る。これらの情報を基に、各グリッドの空間的相関関係について仮説を立てることができる)。 ・数量の測定基準(平均値、メジアン、モード)に基づきデータを記述する(社会的経済的指標となる世界各国のデータを収集し、簡単な統計分析を行なう。各国を平均値よりも上か下かで分類する)。 <p>2. 地理情報の価値や用途を、系統的に評価する。例えば、次のことができる。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・現地(観察など)で収集した移民の資料と、2次資料(センサスなど)から収集した移民の資料について、それぞれの妥当性と有効性を対比する。 ・データに求められる諸要件、および等値線図と色塗り地図の適切な使い方を区別する。

技能 3 : 地理情報を加工する

第4学年までに、生徒は次の方法を知り、理解する。

1. 地図に地理情報を表現する。例えば、次のことができる。
 - ・適切な記号を用いて、様々な縮尺の白地図に、ある場所の位置を表す(州内の村や町、都市の位置を、大きさの異なる点記号を用いて表示する)。
 - ・スケッチマップに地理情報を表す(生徒の居住するコミュニティー内外の各地点について、その位置を確認する。店に関する地理情報を地図に表す。店の分布を示す)。
 - ・グラフから得られる情報を空間的に表現しなおした地図を作成する(合衆国から諸外国への輸出を表した棒グラフを解釈する、同じ情報を幅の異なる矢印を使って地図に表す)。
 - ・適切に表現された地図を作成する(次の9項目について— 題目、方位、作成日、作成者名、凡例、縮尺、文字、グリッド、情報源—自己点検する)。
2. グラフ、表、またはダイアグラムを作成して、地理情報を表現する。例えば、次のことができる。
 - ・数量的な地理情報を、棒グラフ、円グラフ、または折れ線グラフに加工する。
 - ・毎日の気温や降水量、曇量、その他の天候データを図解を用いて、または絵を使って記録する。
 - ・ダイアグラムを使って、文字で表現された地理的過程(水循環、雨の形成、集落の成長)を図に表現しなおす。

第8学年までに、生徒は次の方法を知り、理解する。

1. 地理情報を加工した表現手段として、多様な形式の地図を活用する。例えば、次のことができる。
 - ・地域情報に基づき、色分け地図を作成する(世界銀行または人口調査局のデータに基づき、食糧の余剰地域と不足地域を示した地図、人口1人当たりのカロリー消費量を示した地図を作成する。州単位の投票データに基づき、1860年の大統領選挙におけるリンカーンの得票を地図に表現する)。
 - ・グラフから得られた情報を地図にプロットする(1980年と1990年の国民1人当たりのエネルギー消費量を示したグラフを作成する。等級分けした円グラフを使って、データを効果的に地図に表現する)。
 - ・等値線を使って情報を地図に表現する(標高や降水量などの自然データ、都市の殺人者数を示した人口データ、北アメリカの各時期ごとのヨーロッパ移民の広がり性を示した歴史データを地図に表現する)。
2. 様々な形式のグラフを使って、地理情報を表現する。例えば、次のことができる。
 - ・天候データに基づき、クライモグラフを作成する。
 - ・人口データに基づき、各国の人口ピラミッドを作成する。
 - ・コンピュータープログラムに駆使して、地理データベースの情報をグラフ化する。
3. 様々な形式のダイアグラム、図表を使って、地理情報を加工し、それを表現する。例えば、次のことができる。
 - ・表を作成し、ある特定の主題に関わる地域データを比較検討する(アジア諸国の出生率と死亡率)。
 - ・フローチャートやダイアグラムを使って、自然システムと人文システムを構成する諸要素、システムのインプットとアウトプット、フィードバック、その他の諸側面を図解する。
 - ・表やダイアグラムのデータを加工して、何らかの意思決定を行なう、または結論を引き出す(選好分類ダイアグラムを使って、人々が好んで居住する場所についてのデータを整理する。地図から得られたデータを表にまとめる。聞き取りや現地調査から得られた情報を視覚化する)。
4. 様々な形式の資料を総合して、地理情報を別の表現に加工する。例えば、次のことができる。
 - ・様々な形式の地理情報を相互に重ね合わせて、地理情報システムを作成する(ある地域の基盤図と植生図、等高線図、土地利用図を重ね合わせる)。
 - ・幾つかの資料を加工して、地理的課題を取り上げたマルチメディアレポート(地図やグラフ、ダイアグラム、絵画)を作成する。

第12学年までに、生徒は次の方法を知り、理解する。

1. 適切な形式の地図を選択、構想し、地理情報をそれに加工する。例えば、次のことができる。
 - ・様々な地図記号を、特定の目的のために使用する(ドットや点の割合で、数量的データを表示する)。
 - ・データの測定基準(名目的把握、段階的把握、連続的把握)と空間現象のタイプ(点、線、面)に考慮して、ドットマップ、等値線図、または色塗り地図を作成する。
 - ・コンパス、分度器、水平器、メジャーを使って、狭い範囲の正確なフィールド地図を作成する。
 - ・現地調査で得られたデータに基づき、また土地利用や建築様式、民族構成のパターンなど、地理的関心を抱く対象に注目して、スケッチマップを作成する(街を歩いたり、車窓からの眺めから得られた地理情報を地図化する)。
2. 適切な形式のグラフやダイアグラム、図表を選択、構想し、地理情報をそれに加工する。例えば、次のことができる。
 - ・分散グラフ—ある値に対応するもう1つの値をプロットしたもの—を使って、2つの項目間の関係を表現する(中心業務地区からの距離と地価との関係、気温と降水量の関係)。
 - ・地理情報を図解したダイアグラムを作成する(地形図から読み取れる自然的特徴、現地調査での景観のスケッチ、地形図から読み取れる地形横断面、とうもろこしの消費カロリーを図解したポスター)。
 - ・パターンの時間的変化を、折れ線グラフに表現する(1890年から1990年までの合衆国の農村人口、1950年から現在を10年刻みでみた世界各地のエネルギー消費量、1890年から1990年までの合衆国の電話通話回数)。
3. 様々なメディアを活用して、地理情報を総合的に概括し、それを別の表現に加工する。
 - ・書籍や文書、視聴覚資料、地図などで特集されている地理的論争問題を総合的に概括し、それを表やグラフ、ダイアグラムの形式で提示する。
 - ・聞き取りや現地調査で得られた情報を概括し、それを調査内容に応じて分類する。

技能 4 : 地理情報を分析する

第4学年までに、生徒は次の方法を知り、理解する。

1. 地図を使って、地理的關係を觀察し、解釈できる。例えば、次のことができる。
 - ・地図を使って、原因を推論する(各時代の移民ルートを示した地図を基に、移住とルート選択の理由を説明する)。
 - ・地図を解釈して、意思決定する(等高線や道路、土地利用を示した地図を基に、公園や消防署、スキー場、廃棄物処理場を新しく建設するのに最適な場所を選定する)。
 - ・様々な場所の大縮尺図を比較して、空間的パターンを關係を記述する(地図を基に、地域の自然的特徴と人工的特徴を比較する)。
2. 表やグラフを使って、地理的傾向性や關係性を觀察し、解釈する。例えば、次のことができる。
 - ・表やグラフから得られる情報について説明する(クライモグラフを読み取り、その場所の気候と、それが農業や衣服、その他の人間生活の諸局面に及ぼす影響を、口頭または文書で記述する)。
 - ・グラフを基に、国家間または地域間の關係を認識する(グラフから得られるデータを基に、世界諸地域の社会的経済的指標を比較する)。
 - ・グラフのデータを基に、傾向性を予測する(非再生資源のこれまでの世界的な消費傾向を示したグラフを基に、これからの消費量の変化を予測する)。
3. 書籍や写真、文書を使って、地理的傾向性や關係性を觀察し、解釈する。例えば、次のことができる。
 - ・1次資料、2次資料から得られた情報を要約する(生徒との問答を分析する)。
 - ・写真や地図、航空写真、野外スケッチなどの多様なメディアを比較して、結論を引き出す(野外スケッチや航空写真、地図を比較して、景観の変遷についての結論を導く)。
 - ・視覚情報を分析する(写真や漫画、ビデオ、CDROMの映像を基に、ある場所の本質について地理的に推論する)。
4. 簡単な数式を使って、地理的データを分析する。例えば、次のことができる。
 - ・数的情報に基づき場所を比較し、場所の特徴を記述する(一定期間における晴天と雨天の日数をカウントし、それぞれのカテゴリーの平均値を求める)。
 - ・数的情報に基づき場所を比較し、パターンを差異を比較する(地域内部の幾つかの場所について、年間平均降水量をプロットする)。

第8学年までに、生徒は次の方法を知り、理解する。

1. 地図、航空写真、衛星画像、地理情報システムから得られた情報を解釈する。例えば、次のことができる。
 - ・地図に示された情報を基に、原因を推論する(地図やその他の情報源に基づき、木材の伐採が自然システムに及ぼす影響を説明する)。
 - ・地図を使って、場所相互の空間的結合や空間的關係を認識する(同じ緯度にある世界各地の気候の類似性と差異性、北アメリカとアフリカの都市地域の類似性と差異性)。
 - ・地図を重ね合わせで得られた情報を解釈して、その場所、その地域の地理を記述する。
 - ・地理情報を解釈して、バイアスの可能性を認識する(地図投影法を評価し、1つの見方だけを示すことによって生ずる歪みを理解する)。
2. 統計やその他の計量的技術を駆使して、地理情報を評価する。例えば、次のことができる。
 - ・計量的な分析方法で得られた情報に基づき、データから読み取れる傾向性とパターンを識別する(分散ダイアグラムを使って、地理情報相互の關係性を、例えば、合衆国のコミュニティーにおけるアジア系レストランの数とアジア系移民の割合の關係を觀察する)。
 - ・地理情報の要約を作成する(平均値やメジアン、モード、偏差などの統計的手法を駆使して、国民1人当たりの所得や各国の降雪量の特徴を確定する)。
 - ・地理的変数の相關を分析し、空間的な共変關係を発見する(綿花生産と生育期間の長さに関するデータを基に、それぞれの変数の相互關係を示す)。
3. 様々な情報源 — グラフ、図表、ダイアグラム、書籍、写真、文書、インタビュー — から得られた情報を解釈し、それらを総合する。例えば、次のことができる。
 - ・書籍や文書に示された地理的テーマを分析し、それを説明する(複数の新聞やニュース雑誌に掲載された地理的事件 — ハリケーン、火山の噴火、資源の発見 — を比較分析する)。
 - ・情報を分析、総合して、地理的關係を口頭または文書で説明する(地図、または世界各地の芸術作品や建築物の写真、その他の資料を基に、イスラム教の地理的拡散についてまとめる)。
 - ・投票パターン、民族構成、下院選挙区の地図を比較検討して、合衆国の州や地域における、各時期ごと(南部再建期、第二次大戦後、1990年代)の政治勢力分布を推論する。

第12学年までに、生徒は次の方法を知り、理解する。

1. 計量的な分析方法を駆使して、地理情報を解釈する。例えば、次のことができる。
 - ・記述的、分析的な統計資料を作成し、地理的一般原理を定立する(物質的な生活の質を捉える指標を抽出し、生活水準の各カテゴリーごとに世界各国を分類してゆくシステムを構成する)。
 - ・地理現象の國家單位の平均値と地方單位の基準値の割合を計算する。
2. 地図やその他の地理的表現を基に推論して、結論を引き出す。例えば、次のことができる。
 - ・各時期の地理情報が示された地図を比較し、各時期の關係を確定する(各時期の都市地域図に基づき、位置の変化を比較する。またその都市の主産業と輸送技術、都市の成長を説明する)。
 - ・同時期の複数の地図から得られる情報を解釈する(家族の所得、交通ネットワーク、資源の存在、その他のデータが示された地図に基づき、ある地域が繁栄して、別の地域が繁栄しない理由についての説明概念を定立する)。
 - ・地理情報を相互に關係づけることで、因果關係を推論する(土壤の肥沃度と作物の収量に関するデータを比較して、相互の關係を引き出す)。
3. 分析、総合、評価、説明の過程を通じて、様々な情報源から得られる地理情報の解釈を試みる。例えば、次のことができる。
 - ・バランスシートを使って、地理的論争問題に対して幾つかの意思決定をとった場合の、それぞれの損益を評価する(自動車専用道路の出口付近の土地に考えられる用途)。
 - ・地理的データを分析し、解釈して、相互關係(地理的關係、因果關係、時間的關係など)を説明する。
 - ・地理的推論を評価する(論旨、分析視点、想定されるバイアス、主張したい内容や見方の論理的な流れ、無根拠の言明、推論と結論を認識する)。

技能 5 : 地理的問いに答える

第4学年までに、生徒は次の方法を知り、理解する。

1. 口頭と文書それぞれのレポートにおいて、地図や図解的表現を用いて地理情報を提示する。例えば、次のことができる。
 - ・地理的な問いに対する答え、または地理的テーマを提起するものとして、地図やグラフ、表、脚注などを総合的に用いた壁展示を完成させる。
 - ・立地に関する研究調査を行ない、その成果を学級に向けて、または適切な公的機関に向けて口頭で説明する(ローラースケートやスケート、アイススケート、ピクニックに最適な場所、またはサイクリング場やハイキング場の建設に適した場所)。
2. 地理的探究方法を駆使して地理情報を獲得し、結論を推論し、また一般原理を定立する。例えば、次のことができる。
 - ・学習のまとめとして、鍵となる地理的概念を要約した文章を著す(世界の諸都市を撮影したスライドをみた後に、都市機能についてまとめた文章を作成する)。
 - ・幾つかの文章のなかから、地理的問いに対して最も論理的に答えている文章を判別する。
3. 一般原理を応用して、地理的問題を解決し、合理的な意思決定を行なう。例えば、次のことができる。
 - ・地図を基に、駐車場までの近道を、または宿題を一緒にする友人やベビーシッター仲間の家までの近道(学校から友達の家までの最善の[時間的、距離的に最短の]ルート)を見付ける。
 - ・行動範囲に関する一般原理(人は、ある商品やサービスを購入するのに、どの程度の距離まで自発的に移動しようとするか)を検証する(雑貨を買うために人々が車を運転してゆく、または歩いてゆく距離を調査し、新しく雑貨店が立地するのに最適な場所を提案する)。

第8学年までに、生徒は次の方法を知り、理解する。

1. 地理情報を組み合わせ、それを提示することで、地理的問いに答える。例えば、次のことができる。
 - ・地理データベースのデータに基づき、道路や公園、ゴミ廃棄場の建設に適した場所を幾つか提案する。
 - ・地図やグラフ、ダイアグラム、ビデオ、絵画を使って、地理的話題に関するマルチメディアレポートを作成し、それを提示する。
 - ・スケッチマップやグラフを作成し、地理情報の要約を、図解を用いて口頭または文書で説明する。
2. 一般原理を定立し、その妥当性を吟味する。例えば、次のことができる。
 - ・降水量や気温、土壌の質を示した地図を基に、ある作物の生育に必要とされる水分等の諸条件を比較検討する。またその作物の栽培に最適な場所を合理的に説明する。
 - ・人口分布や交通網、その他の諸条件を示した地図を基に、サービス産業の立地に最適な場所を選定する(レンタルビデオ店の立地の可能性がある場所を決定する)。
 - ・地形図と人口分布図を基に、ある自然災害の被害を受ける恐れのある住民(洪水の危険のある住宅)を特定する。

第12学年までに、生徒は次の方法を知り、理解する。

1. 多様な地理的探究の成果に基づき、説明力の高い一般原理を定立する。例えば、次のことができる。
 - ・複数の事例研究の成果に基づき、地理的変数の間に成立する一般的関係を推論する。
 - ・様々な地図を検討し、個々の立地現象の背後にある相関関係を認識する。
 - ・ある地域の自然災害、また自然災害に対する住民の態度に関する情報に基づき、災害と住民の態度の関係を一般化する。
2. 地理的問いに対する答えを吟味する。例えば、次のことができる。
 - ・様々な情報を総合して、口頭または文書のレポートに示された見方を擁護する(土地利用に関する、例えば、空港を再建または拡張するべきか否か、についての複数の見方を比較し、その中からあなたが1つの見方を選択した理由を説明する)。
 - ・ある問題に対する受け入れ可能な解決策を評価する(野生動物保護区に建設するための見学センターの候補地のなかから、最適な場所を評価する)。
3. 地理モデルや一般原理、理論を応用して、地理情報を解釈し、その結果を提示する。例えば、次のことができる。
 - ・地理モデルを駆使して、複数のデータが示唆していることの帰結を予測する(土壌や気候、斜面、土地利用の関係を説明する一般原理から、土壌侵食の速度を予測する)。
 - ・適切な地理モデルを選択して、合衆国の工業や余暇施設の立地、農業のパターンを説明する。
 - ・地方政治を取り上げた事例研究を分析し、地域の政治的安定性を規定する諸条件について一般化する。
 - ・地理的探究の成果を、口頭または文書で説明する(クラスの共同研究の一環として調査したりサイクル計画について研究成果をまとめ、地元の政治機関に提言を行なう)。
 - ・引き続き調査する必要がある地理的問いを峻別し、新たな探求過程の結論となるべき仮説を定立する。

スタンダード1：空間的視点に基づいて、情報を収集し、処理し、提示するために、地図、その他の地理的表現方法、道具、技術を駆使する

第4学年までに、生徒は、次のことを知り理解する。

- 1.地理的表現 — 地図、地球儀、グラフ、ダイアグラム、航空写真、衛星画像 — の目的と特質。
- 2.道具と技術 — 情報検索作業およびコンピューターを用いた地理情報システム — の目的と特質。
- 3.空間情報を地図に表現する方法、その他の地理的表現方法。
- 4.地理的道具と技術の使い方。

第8学年までに、生徒は次のことを知り、理解する。

- 1.地図、地球儀、航空写真、衛星画像、モデルの特質と機能、その応用例。
- 2.地図、地球儀、グラフ、図、モデル、データベースを利用し、作成することで、空間的分布とパターンを分析する方法。
- 3.地図、地球儀、航空写真、衛星画像から読み取ることのできる地理的情報の特質と限界。地理的問題を解決するためのモデル。

第12学年までに、生徒は次のことを知り、理解する。

- 1.地理的問題を提示するときの地図の使い方、地理的表現の使い方。
- 2.地球の自然・人文システムを提示し、解釈するときの、地理技術の使い方。
- 3.地理的問題を分析、説明し、それを解決するときの、地理的表現と道具の使い方。

したがって、生徒は次のことができる。

(a)地理的表現、道具や技術の目的と特質を認識し、それを記述する。

- ・様々な地図を調べて、地図の基本要素(図題、凡例、8方位、縮尺、グリッド、記号、経緯線)を認識し、それを記述する。
- ・航空写真または衛星画像を解釈し、自然的事象と人文的事象を識別する。またその位置を指し示す(山地と河川、植生地域、都市、ダム、貯水池など)。
- ・凡例と地図記号を用いて地図を作成し、それに生徒の選定した情報を表現する。

(b)空間情報を地理的表現として示す。

- ・物語を読んで、その内容をスケッチマップに描き出し、それを図解する("Make way for Duckling"に描かれたアヒルの家の移動ルート)を地図に表す。ローラ・インガル著"大草原の小さな家"シリーズを読み、インガル一家が住んでいた場所の地図を作成する)。
- ・地域情報を、二次元的表現(地図上に適切な記号を配置する)と三次的表現(地域に適切な数の等高線を引く)でレポートする。
- ・ダイアグラムまたは図表を作成し、空間情報を表現する(合衆国の上位5つの大都市人口を比較した棒グラフを作成する)。

(c)地理的表現、道具、または技術を駆使して、地理的問いに答える。

- ・教師と生徒である場所を選定し、その場所の位置を尋ねる問い — この位置はどこですか — を提起する。その問いに地図グリッド(経緯と緯線、あるいはアルファベットと数字を組み合わせた)を使って答える。
- ・主題図を使って、人間の分布に関わる問いに答える(なぜ人々は、地球上にそのように分布しているのか?)。
- ・縮尺の異なる地図を使って(縮尺は、実際の長さを示した定規や縮尺の割合を表す数値、または言葉で表現されている)、位置Aと位置Bの距離を測定し、距離に関わる問いに答える。

したがって、生徒は次のことができる。

(a)地図、地理的表現、道具や技術に固有の特質を記述する。

- ・各種地図投影法、地球儀、航空写真、衛星画像の目的と特質を記述する。
- ・地図に不可欠な要素を説明する(縮尺、方位磁針、記号など)。
- ・地理データベースの目的と特質を説明する(地理データベースには、センサスや土地利用のデータ、地誌的な情報が含まれる)。

(b)様々な種類の地図や地球儀、グラフ、図、データベース、モデルを開発し、それらを駆使する。

- ・記号や色彩表現を駆使して、生徒の居住するコミュニティや州、合衆国や世界を様々な側面から捉えた主題図またはグラフを作成する(人口や疾病、経済活動、降水量、植生など)。
- ・人間と商品(石油、小麦、カカオの国際貿易など)の移動パターンを示した地図またはフローチャートを作成する。
- ・地球と太陽の関係をモデルに表す。モデルを使って、地軸、季節、自転、公転、経緯線の諸概念を説明する。

(c)地理的問題の解決という視点から、地図やその他の地理的表現、道具や技術がもつ特質を評価する。

- ・地図帳から適切な地図と図解を選び出し、地理的論点に(地勢や輸送ルート)関わる問いに答える。
- ・地図や地図表現が有する特質と限界を評価し、それを具体的なデータに基づき説明する(人口の分布、使用言語のパターン、エネルギー消費量の年変化)。
- ・特定の目的のために開発された地図投影法の長所を評価する(航海時に使われるメルカトル図法、地誌的分布を表すロビンソン図法など)。

(d)地理的道具と技術を駆使して、地球上の空間的分布とパターンに関わる問いを提起し、それに答える。

- ・地域サービスの受益範囲を画定するための基準を設定する(この課題は、人口が急増している郊外地域から学校に通っている子どもにも課す)。
- ・地図を使って、空間軸と時間軸の2つの側面から移動のパターンを理解する(季節ごとのハリケーンの通り道、世界全体からみたインフラの拡張の経路を地図化する)。
- ・地図を使って、施設の最適立地点を決定し、その決定を正当化する(レストランの建設、リサイクルセンターの立地、工場の進出や開発に適した場所)。

したがって、生徒は次のことができる。

(a)地図、その他の地理的表現を作成し、それを解釈して、地理的問題を解決する。

- ・地図を作成し、人口密度と資源、人口密度と土地利用の関係を説明する(牛の放牧地域と野菜の栽培地域、住宅地域と都市外縁地域、不毛の砂漠と過剰リポート地による人口密度の差異)。
- ・様々なメディアを通じて情報を収集し、一次資料を地図やグラフ、図に加工する(アルゼンチンの過去5年の小麦生産を棒グラフに示す、最新のセンサスデータから得られた州単位の高校進学率を図表に表す、東南アジア各国の識字率を図表に表す、都市の人口からみたラテンアメリカ各国の相対的規模をカルトグラムに示す)。
- ・地図、グラフを作成し、地域間および地域内の空間的相互作用を表現する(ヨーロッパ北部と南部を結ぶ鉄道や航空線、高速道路のネットワーク、または合衆国北東部のメカトロポリスに設置された高速送電のネットワークを例示する)。

(b)地図、その他の地理的表現を駆使して、世界の出来事を分析し、問題の解決策を提起する。

- ・地図、表、グラフ、図、ダイアグラムを作成して、現代世界の出来事の地理的意味を表現する(政治的境界の変動を示す地図、自然災害の被災地域から逃れてきた避難民の分布図を作成する)。
- ・(人口や環境、政治、経済、文化の各側面での)地域の特徴を改善してゆくための長期計画を構想する。
- ・様々な種類の地図を使って、人間と環境の相互作用がもたらす帰結を説明する(台風が珊瑚礁の海岸に及ぼす影響、湿地への洪水が鳥や生物に及ぼす影響、砂漠化が人間の集落に及ぼす影響)。

(c)地理的道具と補助技術の応用例を評価し、それらを特定の目的に役立てる。

- ・地図が果たしてきた役割について述べた資料を提示し、地球の歴史を研究させる(古代の航海者が作成した地図、スコットやアラー、ヘンソンなどの探検隊が作成した地図の研究など)。
- ・ある現象を、様々な情報源を基に、多様な視点から表現しようとした地図を収集し、比較して、それらの地図が意味するものを説明する(マスコミ企業が開発した地図を提示する。これらの地図は最新の軍事技術を民生目的に転用することで作成されていることを説明する)。
- ・ある技術を応用して、地理的問題を分析することの合理的根拠を説明する(南アフリカの港湾地域における汚染の広がり、マダガスカルにおける森林伐採の広がりは、航空写真や衛星画像、地理情報システムを使うことで画定できる)。

スタンダード2：空間的文脈に基づいて、人間、場所、および環境に関する情報を組織するために、メンタルマップを利用する

第4学年までに、生徒は、次のことを知り理解する。

1. 地元のコミュニティーと近隣のコミュニティーにおける様々な場所の位置。
2. 大陸と海洋の相対的位置、またそれらの経緯線との関係における位置。
3. 合衆国全体と地球全体における自然的事象と人文的事象の位置。

第8学年までに、生徒は次のことを知り、理解する。

1. 様々なスケールでみた(ローカルからグローバルまでの)自然的事象と人文的事象の分布。
2. 地理情報を表現したり、地理的問いに答えるためにメンタルマップを適切な図解表現に交換する方法。
3. 認知が、人間のメンタルマップと場所に対する態度に及ぼす影響。

第12学年までに、生徒は次のことを知り、理解する。

1. 世界の自然的事象と人文的事象に対するメンタルマップを用いて、より高度な地理的問いへの答える方法。
2. 場所に対する人間の見方が、メンタルマップに及ぼす影響。
3. メンタルマップが、空間または環境に関する意思決定に及ぼす影響。

したがって、生徒は次のことができる。

(a) 地図、地球儀、その他の地理的情報源を使って、(ローカルからグローバルまでの)様々なスケールにおいて、自然的事象と人文的事象を認識する。

- ・ 記号を使って、地元コミュニティの施設を地図に表し、その位置を認識する(商店街、レストラン、消防署、学校、郵便局など)。
- ・ 文字と記号を使って、自然的事象と人文的事象を州または合衆国の地図に表し、その位置を認識する(大都市、州、リジョン地域、歴史的景観、地形、気候など)。
- ・ 地球儀や地図、その他の地理的情報源を使って、二地点間の大圏コース上にある自然的事象と人文的事象を認識する(ロサンゼルス-モスクワ間、シカゴ-メルボルン/アイルランド)。

(b) メンタルマップを用いて、場所の位置を認識する。

- ・ 地元コミュニティについての自分の記憶を頼りに、学校や店、リクリエーション施設との行き帰りのルートをスケッチマップに描く。
- ・ スケッチマップを用意し、新聞やテレビニュースで報道されている地元や世界の場所について、そのおおよその位置を示す。
- ・ 場所の位置関係に関する問いに答える(メンはフロリダよりも東にあるのか、それとも西にあるのか。シカゴはヨーロッパと北アメリカのどちらに近いのか。スエズ運河は紅海とどこを結んでいるか)。

(c) 正確な地図を作成し、自然的事象と人文的事象の位置に係る問いに答える。

- ・ ランドマーク(大きな河川や都市、地形など)との関係で、地元コミュニティの位置を示した地図を描く。
- ・ 世界の主要山脈のおおよその位置関係を示した地図を使って、地理的概念を説明する(山脈の雨影効果、交通路に影響を与える山脈)。
- ・ 歴史や文学、理科、その他の教科目で話題になった場所の位置と、その地名を確認する(昔ながらのスケッチマップを用意し、歴史的イベントが起きた空間的位置を認識する、文学作品に描かれた国や地域のイメージを飲み取る)。

(d) メンタルマップに基づき、地理的事象を記述する。

- ・ 自分の記憶を頼りに、ショッピングモールや近隣の諸都市、コミュニティの商店街、その他スケッチマップに描かれた地元地域の重要事象の位置を説明する。
- ・ 自分の記憶を頼りに、居住する州の自然的事象と人文的事象を記述する。また、記憶内容を表現したスケッチマップを作成する。
- ・ 自分の記憶を頼りに、合衆国と世界の諸地域の自然的事象と人文的事象について、その分布の概略(中緯度地域の人口分布など)を説明する。

したがって、生徒は次のことができる。

(a) 自然的事象と人文的事象、ならびに歴史的出来事的位置を地図と地球儀上で認識する。また、それらに関連する地理的問いに答える。

- ・ 文明の発祥地(メソポタミア、黄河流域、ユカタン半島、ナイル河谷)の位置を認識する。
- ・ 現在と過去の合衆国最大の大都市地域を認識する。
- ・ 主要な海流、風向パターン、地形、気候地域を、地図上で確認する。

(b) メンタルマップを使って、地理的問いに答える。

- ・ 自然地理的、人文地理的な関わりをもつ時事の出来事を記述する。
- ・ 様々な地域を対象にして、スケッチマップを描く。自分のスケッチマップと地図帳の地図を比較し、正しい位置関係と知識を確認する(カナダ気候、ヨーロッパの地形図を用いる)。
- ・ メンタルマップを基に、ある二地点間を旅行した場合に通過するであろう国をリストにする(NY-モスクワ間、カオナイロ間、リオン-シネイロリア間)。

(c) 記憶を頼りにスケッチマップを作成する。またそれを分析する。

- ・ メンタルマップをスケッチに描き起こし、二地点間の相対的な位置関係や面積、距離を説明する。
- ・ 生徒の住むコミュニティのスケッチマップを準備し、自分の知識を基にして、周辺のコミュニティーと地元のコミュニティとを結んでいる輸送施設(高速道路や河川、空港、鉄道などのおおよその位置)を表現する。
- ・ 自分の記憶を頼りに世界地図を描き、なぜ描かれて国もあれば描かれていない国もあるのか、なぜ大きく描かれた国もあれば小さく描かれた国もあるのか、その理由を説明する。

(d) メンタルマップに現われた、場所に対する個人の態度を分析する。

- ・ 場所の評価をするときに使われる様々な基準を比較し、認識する(環境や経済的機会、犯罪率)。
- ・ 様々な人が作成したスケッチマップを、それぞれの作者のメンタルマップという視点から分析する。またスケッチマップの表現を規定している諸要因を推論する(文化、教育、年齢、性別、職業、経験など)。
- ・ 小説の一節を比較し、場所に対して抱く人々の見方を引き出す(エキサイティングなラスベガス、ロマンティックなパリ、人口過密なカルカッタ)。

したがって、生徒は次のことができる。

(a) 記憶を頼りに描かれた地図を用いて地理的問いに答える。

- ・ 合衆国のおおよその政治風土を表したスケッチマップを作成し、選挙の投票パターンを予測する(サンベルトへの人口移動に伴う、1960年以降の大統領選挙における得票数の変化)。
- ・ スケッチマップを用意し、現代と過去の出来事の時空間的変動を表現する(チェルノブイリの原子力事故による放射線の拡散、14世紀のヨーロッパにおけるペストの拡散、自然的事象による移民や侵略の阻害)。
- ・ 世界の伝染病(エイズ、コレラ、麻疹)の拡散パターンを分析し、現代世界における空間的相互作用の媒体(貿易と移動)を推論する。

(b) メンタルマップが、位置や居住、政策に関わる意思決定に及ぼす影響を認識する。

- ・ 情報を収集し、意思決定者のメンタルを理解する(コミュニティの指導者にインタビューを積み、他のコミュニティの活動とその位置についての見方を探る)。
- ・ 価値や態度、見方が、過去ならびに現在の位置に関する決定に影響を及ぼした事実を認識する(郊外の新しいコミュニティの場合は、住宅は風光明媚な場所に建設され、礼拝所はドラマチックな自然環境の場所に建設されたりする)。
- ・ 移住先を選択する際に、情報源が果たしている役割を推論する(親戚、友人からの手紙、新聞や雑誌の広告、テレビ番組や映画)。

(c) 各個人のメンタルマップを比較して、空間的知識や選好の発達を促す共通の因子を認識する。

- ・ 人生経験の差異に由来するメンタルマップの違いを予測する(年齢と性別が、家の好みとか、公共交通機関の選択に与える影響)。
- ・ 個人の居住地の好みを規定する諸因子を分析する(国内またはコミュニティ内部の様々な場所から、友人がある特定の住宅地を選択した基準を調査する)。
- ・ 投影法や空間の見方に違いのある地図を比較し(大西洋を中心とした地図、オーストラリアを上にした地図)、それらの地図が人々のメンタルマップに及ぼすであろう影響を推論する。

スタンダード3：地表面における人間、場所、および環境の空間的組織を分析する

第4学年までに、生徒は、次のことを知り理解する。

- 1.点、線、面、体積などの空間的要素。
- 2.位置、距離、方位、スケール、移動、地域などの空間概念。
- 3.地表面に空間的な広がりをもって分布する場所と事象。
- 4.地表面に空間的相互作用を生起させる原因とその結果。

したがって、生徒は次のことができる。

(a)点、線、面、体積などの空間的要素の各視点から、地表面を分析する。

- ・簡単な地図を使って、自然的事象と人文的事象を上記の4つの視点から認識する(点：位置、線：交通網や通信回線、面：地域、体積：木を植えた跡)。
- ・様々な場所のダイアグラムを用意し、それを上記の4つの視点から認識する(点：学校と家の位置、線：学校と家をつなぐ道路、面：学校の範囲など)。
- ・コミュニティ間の交通網を表した地方図を使って、それぞれのコミュニティへ到達するのに最善のルートを選定する。また、最も行きやすいコミュニティと最も行きにくいコミュニティを判断する。

(b)位置、距離、方位、スケール、移動、地域などの空間概念を使って、場所の空間的構成を分析する。

- ・物語に描かれた場所の空間的構成を記述する(赤ずきんちゃんのような童話を使って、二つの家の相対的位置と距離、狼と赤ずきんちゃんの間隔と移動を調べる)。
- ・学校と友人宅の位置を地図で確認し、家と学校の距離を測定する。家と学校の位置関係を確定し、子どもの移動経路を把握する。友人宅の位置から判断して、地域の概略を地図に描く。
- ・二地点間を、マイルやキロメートル、時間や費用、個人の見方の各視点から測定し、それぞれの測定方法からみた距離の違いを推論する(二地点間を異なる交通手段で移動した場合の時間と費用を比較する)。

(c)地表面の場所のパターンと密度を観察し、比較する。

- ・地図または航空写真を使って、事象の分布を観察し、それらの空間的パターンと結合関係を認識する(ファーストフード店の位置と交通の利便性との関係)。
- ・地図上でグリッドを画定し、各区画における空間的事象の密度を計算する(生徒の家の位置を地図にプロットする。着色したグリッドごとに家の数をかぞえ、密度を求めらる)。

第8学年までに、生徒は次のことを知り、理解する。

- 1.空間的要素を利用して空間的パターンを記述する方法。
- 2.空間概念を利用した空間構造の説明の方法。
- 3.空間的プロセスが、空間的組織のパターンをいかに形成するか。
- 4.空間的組織のモデル化の方法。

したがって、生徒は次のことができる。

(a)空間的パターン、配置、結合に注目して、自然現象と人文現象の分布を分析し、説明する。

- ・様々な事象の分布図を分析し、人の分布を規定している諸現象を発見する(湖、地形、気候、水、文化中心)。
- ・ドット図を使って、合衆国国内と世界における(小麦、大豆、ジャガイロ、短毛の)農業生産のパターンを画定する。またそれらのパターンを規定している気候や地勢、土壌などの自然現象のパターンを画定する。
- ・都市の分布を分析し、都市の結合関係を都市の規模に着目して確定する(各都市と中心地、郊外、周辺町村との間にみられる通勤者の流れ)。

(b)距離や近接性、結節などの用語を用いて、都市、郊外、農村の土地利用パターンを分析し、説明する。

- ・都市の土地利用図を作成し、都心地域と周縁地域における支配的な土地利用を比較する(金銭と小売業、大企業と住宅など)。
- ・電話帳と地図を用いて、空間的に隣接する傾向にある土地利用(ホテルとレストラン)と空間的に分離する傾向にある土地利用(牧場と教会とバー)を認識する。
- ・生徒の居住する、または近隣のコミュニティでみられる都市的土地利用のパターンの空間的配置(商業、工業、住宅など)を記述し、分析する。

(c)場所相互の結節関係の違いと、結節関係が交通の利便性や相互依存に及ぼす影響を説明する。

- ・場所相互の結びつきを整理した表を作成し、2地点間の距離、交通の利便性、相互作用の頻度を推論する(友人の出生地と現在の居住地、スポーツチームの選定地の分析)。
- ・年表と地図、グラフを作成し、輸送技術と通信技術の発達が場所相互の関係に及ぼす影響を確定する。
- ・合衆国が工業資源や工業製品の輸入で依存している場所をリストにし、場所相互の依存関係を説明する(西アフリカからくる石油、南アメリカからくる銅、南アメリカからくる砂糖やコーヒー)。

(d)移住や拡散のパターンとプロセスを記述する。

- ・文化間での言語や宗教、習慣の拡散プロセスを読み取る(中華料理店のサンフランシスコへの進出、19世紀の中世におけるドイツ語の使用、20世紀のニューヨークにおけるイスラム教の広まり)。
- ・人間を媒介とした伝染病の空間的拡散を、ダイアグラムに表現する(19世紀中期のイギリスにおけるコレラ、1990年代のアジアにおけるエイズ)。
- ・出生地から移住地への文化の拡散を、あるいは世界的広がりでみた動植物の移動パターンを読み取る。文化、動植物の移動の方向と速さを概算する。

曲に、ベネズエラやコロンビア、イスラエルで栽培されている)。

- ・小売店は分散して立地するよりも、モールに集積して立地するほうが有利になる理由を説明する(モールには、大小様々な規模の店が集積しているために、駐車場の敷地や照明の電気代、その他の公共料金を共同で負担しあえるメリットがある。モールは消費者にとっても便利であり、時間を効率的に使うことができる)。

第12学年までに、生徒は次のことを知り、理解する。

- 1.空間的相互作用を記述し、説明する一般原理。
- 2.空間的組織のパターンを記述するモデル。
- 3.人間の空間的行動。
- 4.空間的組織に関わる概念とモデルを意思決定に応用する方法。

したがって、生徒は次のことができる。

(a)空間的相互作用の諸概念(例えば、相補性、接触機会、距離減衰、結節関係)を空間的な移動パターンの説明に応用する。

- ・距離摩擦の克服には時間と費用がかかるために、遠く離れた場所よりも、隣接する場所の方が、相互に接触する可能性が高いことを説明する。
- ・現行の商業地域や公園の構造およびパターンに基づき、コミュニティの交通網またはスクールのバスルートを変更した場合、買物やサービスを受ける機会が新たに創出されたり、地点間の結節ネットワークが新たに創出される可能性を予測する。
- ・合衆国と日本の貿易パターンを分析し、相補性の概念を説明する(合衆国から日本へは材木が送られ、日本から合衆国へは電気製品が送られているなど)。

(b)空間組織のモデルを使って、場所相互あるいは場所内部の関係を分析する。

- ・商業活動を維持するのに必要な最低人口と需要が、場所によって異なる理由を説明する。近隣のコンビニやスーパーマーケット、ショッピングモール、地域ガン治療センターを維持するのに必要な人口を見積もる。
- ・クリスタラーの中心地モデルを用いて、小さな中心地ほど数が多く、大きな中心地ほど数が少なくなる理由を説明する(小さなコミュニティは、それほど高価ではない一般的な商品やサービスを提供しているために、その商圏も大きい)。
- ・コミュニティの現地調査を行い、小売業の重力法則を検証する(競合するショッピングセンターを利用する住民の数は、居住地とショッピングセンターとの距離に反比例し、ショッピングセンターの規模に比例する)。

(c)人間が空間を認知し、それを利用する方法を説明する。

- ・年齢や性別、雇用や所得水準の違いによる人間の行動空間を記述する(学校と家を往復する就学年令の児童、公共交通機関を使って通勤する勤労者、長期休暇を使って遠くに出かける高齢者など)。
- ・人によって、居住地の好みやお気に入りの居住地を探す方法に違いが生ずる理由を説明する(郊外の住宅地を好む人もいれば、都市圏の住宅地を好む人もいる。また不動産業者と協力して家を探す人もいれば、自力で郊外を回って家を探し、意思決定する人もいる)。
- ・移住を判断する理由を評価する(人は、移住地の側のメリットと現住地の側のデメリットに影響を受ける。人は、現住地の場所を探している場合よりも、仕事を探しているときの方が、多様な性格の場所を選択しようとする)。

(d)空間的組織に関わる概念とモデルを意思決定に応用する。

- ・商業経済において工業が最適立地を求める場合、人件費や輸送費、市場の位置が考慮される理由を説明する(家具工場は最適立地を決定しようとするれば、熟練労働者の賃金水準、原料木材と製品の輸送費、競合企業の位置、卸売店や小売店の位置についての知識が必要とされる)。
- ・特殊な農業生産物の一部は、消費地から遠く離れた場所では栽培されている理由を説明する(切り花は、輸送費や人件費、気候などを理

スタンダード4：場所の自然的特徴と人文的特徴

第4学年までに、生徒は、次のことを知り理解する。

1. 場所の自然的特徴(地形、水系、土壌、植生、気候、気候など)。
2. 場所の人文的特徴(人口分布、集落パターン、言語、エスニシティ、国民性、宗教的信仰など)。
3. 自然的作用と人文的作用は、それぞれの場所独自の特徴をいかに作り出すか。

第8学年までに、生徒は次のことを知り、理解する。

1. 自然的作用の差異は、場所による状況の違いを、いかに作り出すか。
2. 人間集団の差異は、場所による改変のされ方の違いを、いかに作り出すか。
3. 場所の特徴の形成において科学技術が果たす役割。

第12学年までに、生徒は次のことを知り、理解する。

1. 場所のもつ意味と価値。
2. 場所の自然的、人文的特徴の変化。
3. 人間と自然環境の相互作用を通じて、場所が形成される過程、また自分自身やコミュニティに関する自己認識が形成される過程。

したがって、生徒は次のことができる。

(a) ローカルからグローバルまでの様々なスケールで、様々な場所の自然的特徴を記述し、それを比較する。

- ・ 地元のコミュニティを観察し、自然的特徴を言葉やスケッチで記述する(地形、水系、土壌、植生)。記述にあたっては、自然的特徴を体系的に把握する情報整理表を利用する。
- ・ 様々な視覚教材と情報源(写真、衛星画像、新聞記事)を利用して、地域の自然的特徴を記述する。記述にあたっては、分布にある程度まとまりがみられる諸要素に注目する(湖沼、森林、河川)。
- ・ ボール紙、木材、粘土、その他の材料を使って、地域の自然的特徴をあらわしたモデルを作成する(地形、水系、植生)。

(b) ローカルからグローバルまでの様々なスケールで、様々な場所の人文的特徴を記述し、それを比較する。

- ・ 地元のコミュニティを観察し、人文的特徴を言葉やスケッチで記述する(言語、文化、歴史、エスニシティ、宗教)。記述にあたっては、自然的特徴を体系的に把握する情報整理表を利用する。
- ・ 様々な視覚教材と情報源、資料(写真、写真、図表、新聞記事)を使って、地域の人文的特徴を記述する。記述にあたっては、次の問いに答える。人々はどこに住み、どのような仕事に携わっているか。余暇をどのように使っているか。
- ・ ボール紙、木材、粘土、その他の材料を使って、地域の人文的特徴をあらわしたモデルを作成する(土地利用のパターン、住宅地、公共サービス機関の位置)。

(c) ローカルからグローバルまでの様々なスケールで、様々な場所を記述し、それを比較する。

- ・ 地元のコミュニティを観察し、自然的、人文的特徴を記述する。またその特徴を、近隣のコミュニティまたは国内の他地域のコミュニティと比較する。
- ・ 様々な図解教材と情報源を使って、地域の自然的、人文的特徴を記述する。記述にあたっては、分布にある程度まとまりのある要素に注目する(幹線道路に隣接するコミュニティ)。
- ・ ボール紙、木材、粘土、その他の材料を使って、地域の自然的、人文的特徴(地形、水系、植生、土地利用のパターン、住宅地)をあらわしたモデルを作成する。

(d) 場所を特徴づける自然的、人文的作用を記述し、それを説明する。

- ・ 地図やその他の図解表現を使って、地形の形成に影響を及ぼしている自然的、人文的作用を記述する(侵食と堆積が地形

したがって、生徒は次のことができる。

(a) 場所の自然的特徴を分析する。

- ・ 現地調査をしたり、地図やその他の道具を用いて、それぞれの場所の自然的特徴(土壌、地形、植生、野生動物、気候、自然災害)を認識し、特徴を比較する。
- ・ 建築物の位置や建築様式、その他の特徴は、地震や台風などの自然災害に規定される、という仮説を定立し、それを正当化する(東京、ロサンゼルス、マニラにみられる建築様式と土地利用)。
- ・ 地図、地球儀、衛星画像、表を使って、自然景観の時間的変化に関わる原因と結果を推論する(森林の破壊、水の流れ、気候変動)。

(b) 場所の人文的特徴を分析する。

- ・ 野外調査をしたり、地図やその他の道具を用いて、それぞれの場所の人文的特徴を認識し、特徴を比較する(宗教、言語、文化、政治、科学技術の利用、人口構成、開発の水準)。
- ・ 写真を使って、文化景観の類似性と差異性に関する仮説を定立し、それを正当化する(マイアミとアムステルダム市の街路風景)。
- ・ 地図、地球儀、衛星画像、表を使って、人文景観の時間的変化に関わる原因と結果を推論する(都市の成長、森林の伐採、輸送システムの開発)。

(c) 場所の自然的、人文的特徴を形成する科学技術を認識し、それを分析する。

- ・ 場所に影響を及ぼしている科学技術の諸形態を分析する(合衆国北東部の回廊地帯に影響を与えた19世紀の鉄道と20世紀の航空機)。
- ・ 科学技術と人間の関心が景観の人為的改変と地域的差異に及ぼす影響を評価する(熱帯雨林の伐採、河川へのダム建設、野生生物の居住環境の破壊、湿地の農地化)。
- ・ 外部とは隔離したコミュニティが、科学技術の導入したことで次第に変化してゆく過程を説明する(高速道路の建設、パラボラアンテナとコンピュータの導入)。

与える諸影響、農業が土地利用および植生の改変に与える諸影響、集落が道路建設に与える諸影響)。

- ・ 集落パターンに影響を及ぼしていることが予想される地形や気候、植生、資源、歴史的事件などの自然的、人文的特徴に注目して、地域の人口分布を地図化する。
- ・ 日記に毎日の風向きや気温、降水量などの天候を記録する。また日々変わることのない地域の一般的条件を把握し、地元コミュニティの天候を規定している諸要因を説明する。

したがって、生徒は次のことができる。

(a) 場所を、様々な視点から説明する。

- ・ 同じ場所を、時代を変えて記述する(フリテン島におけるローマ人の居留地から、中世は交易の中心地へ、19世紀には世界帝国に君臨したロンドン、明治維新の前夜30年で急激な変化を遂げた東京)。
- ・ 世界の諸地域では、それぞれの場所に、その場所固有の自然的、人文的特徴がみ出される理由を説明する(気候や地殻変動の影響、居住や移住のパターン、その場所の立地と環境)。
- ・ 地理用語辞典に掲載できるような、場所の適切な定義を試みる。

(b) 場所を形成する自然的作用を記述し、解釈する。

- ・ 場所の特徴に影響を及ぼす地球内部の作用を記述する(火山活動や地震などの地殻運動)。
- ・ 場所の形成において気候が果たしている役割を分析する(気候、降水量、風の影響)。
- ・ 場所の形成における侵食作用の重要性を記述し、それを解釈する(コッド岬のマリアス断崖や砂丘)。

(c) 場所の特徴を形成する社会的、文化的、経済的作用を説明する。

- ・ 場所の特徴に影響を及ぼす文化を記述する(地名、食事の好み、性別の役割、資源利用、信仰体系、輸送通信手段)。
- ・ 科学技術の発達にともなう場所の変化を認識する(農業革命と産業革命をもたらした発展、自動車の発明、大規模農業に必要な農業機械の開発、コンピュータの発明)。
- ・ 経済的、政治的、人口的特徴に起因する場所の諸特徴を分析する(州立大学の立地が小さな村落に与えた影響、地域医療センターの立地が高齢者住民に与えた影響)。

(d) 人間と自然環境の相互作用が場所を形成するしくみを吟味する。

- ・ 自然的特徴を活かして、その場所を多様な用途に利用してゆくことの特長と限界を認識する(沼澤、森林、ツンドラ、地盤、河川の改修、高潮地帯)。
- ・ 自然的特徴を改変する人間の営為が(合衆国における州際道路網の建設、タイにおける米栽培のための灌漑)、その場所を周囲から際立たせ、場所の価値を高めてきた過程を説明する。
- ・ 場所の人口増加や都市化の影響を評価する(メキシコシティやロサンゼルス、ミラノの大気汚染、都市圏の急激な拡大ともなう農地の減少)。

空間的世界	場所と地域	自然システム	人文システム	環境と社会	地理の効用
-------	-------	--------	--------	-------	-------

スタンダード5：地球の複雑さを解釈するために、地域をみい出す

第4学年までに、生徒は、次のことを知り理解する。

- 1.地理的特徴が統合された地球表面の一片としての地域の概念。
- 2.地域間の類似性と差異性。
- 3.地域は、いかに変容するか。

第8学年までに、生徒は次のことを知り、理解する。

- 1.地域の要素と形態。
- 2.地域の変化とその要因。
- 3.地域間の結節。
- 4.地域の名称やイメージがもたらす影響と結果。

第12学年までに、生徒は次のことを知り、理解する。

- 1.地域を定義する複数の基準。
- 2.地域システムの構造。
- 3.自然地域システムと人文地域システムの相互結合。
- 4.地域の概念を応用して、地理問題を分析する方法。

したがって、生徒は次のことができる。

(a)自然的基準と人文的基準を適用して、地域を固定する。

- ・類似性と差異性がみい出される範囲に境界を引き、等質地域を抽出する(住宅地域、公園地域、工業地域、住宅の過密地域と希薄地域)。
- ・人間の営為または人文的特徴の空間的パターンに起因する地域の多様性を認識し、それを記述する(政治地域、人口地域、経済地域、言語地域)。
- ・様々なスケールで自然環境を研究したり、フィールドノートや地図、その他の情報源を活用して、自然地域を認識し、それを記述する(地形地域、土壌地域、植生地域、気候地域、河川流域)。

(b)地域を相互に比較し、違いを明確化する。

- ・2つの近隣地域を比較して、似ているところと異なるところを明らかにする(住居の規模、軒先の様式、歩道の有無、植生の形態、住民の年齢などの人文的特徴の1つ)。また、いずれの近隣も、同じように近隣「地域」として規定できる理由を説明する。
- ・生徒の居住している地域と、他の大陸の地域を比較し、それぞれの似ているところと異なるところを説明する。
- ・図解教材、一次資料、物語、資料集を使って、同じ緯度に沿った世界諸地域の地理的特徴を比較する(ニューオーリンズの海岸平野、カイロのナイル川流域、上海の黄河流域)。

(c)地域の自然的特徴と人文的特徴の歴史的变化を記述し、その変化がもたらした影響を認識する。

- ・同一地域の過去と現在を対照的に提示し、地域の変化を認識する(人口の規模、エスニック構成、言語等の文化的特徴、経済活動、輸送手段、料理法、余暇の過ごし方)。
- ・地域の内部構造あるいは地域の機能にみられる変化を認識する(ショッピングセンターや病院、工場の建設)。
- ・地域の高齢者への質問事項を作成し、これまで経験してきた地域の変化(輸送手段や買物、習慣、生業、周辺環境の変化など)について話を聞く。最後に聞き取りの内容をまとめる。

したがって、生徒は次のことができる。

(a)地域を定義する基準を認識する。

- ・空間的スケールの異なる地域の事例を、具体的に提示する(半球、大陸内部の乾燥地域、国家、都市)。
- ・地域の中心的特性を捉える基準を提示する(原産地域の本部としての町、商業部の交通の中心地としてのアトランタ、交通の中心地としてのアムステルダムなど)。
- ・地域の自然的特徴と人文的特徴の相互関係を記述する(サンベルトの温暖な気候と、引退者の人気との関係)。

(b)地域の類型を認識する。

- ・等質地域の設定基準とその事例を提示する(学区、巡回裁判地区、合衆国の州)。
- ・機能地域の設定基準とその事例を提示する(カリフォルニア南部の「ロサンゼルスタイムス」の読者圏、プロスポーツチームのファン圏)。
- ・認知地域の設定基準とその事例を提示する(合衆国の聖ペルト、フランス南部のリビエラ、アメリカ大砂漠など)。

(c)地域の時間的変化と空間的变化を説明する。

- ・地図やその他の図解表現を用いて、10年ごとの地域変容と、その変化が場所の特徴に与えた影響を表現する(1920年代と現在のピッツバーグ、1930年代と現在のカザフスタン、アラル海地域)。
- ・地域の交通が、人々の日常生活に及ぼす影響を評価する(高速道路の建設、鉄道の衰退、空港の建設)。
- ・地域的特徴の変化を促す諸要因を説明する(経済発展、交通の利便性、移住、メディアがつくもイメージ)。

(d)地域の結節を説明する。

- ・地図を用いて、地域間の人文的結節と自然的結節を表現する(河川の分水嶺、河川の流域システム、世界貿易の地域的つながり)。
- ・食事の好みや使用言語などの文化を手がかりにして、移民が地域間の文化的つながりを形成してきたことを説明する(合衆国の大都市では発行されているスペイン語新聞、大都市にあるエスニック食品の小売店)。
- ・地図や表、グラフを使って、合衆国と世界諸地域の貿易関係と、その他の結合関係がもつ重要性を説明する。

(e)地域の名称やイメージがもたらす影響、結果を吟味する。

- ・低開発国地域という表現よりも、発展途上国地域という

したがって、生徒は次のことができる。

(a)地域を定義するときの基準をリストにし、その基準の変化を説明する。

- ・地域を構成する自然的、人文的要因を認識する(ロシアの肥沃な三角地帯を構成する土壌、気候、植生。ポルトガルを地域として確立させている共通の言語、宗教、歴史)。
- ・条件が変化すると、地域に新しい構造が形成されることを説明する(カリブ海地域からお金と人口が新たに流入したことによるマイアミとフロリダの再構成。ヨーロッパの植民地支配が終結し、経済的政治的再統合が進んだことによる南アフリカの再構成)。
- ・かつては別の基準で固定された地域が、現在ではまた別の基準で固定されている理由を説明する(砂糖と麻の生産地から、観光の中心地へと移行したカリブ海地域。19世紀から20世紀の大半は製糖工場と製糖工場の町として知られていたが、1980年代から90年代にかけてハイテク産業の町に生まれ変わったニューイングランド)。

(b)地域システムの類型と組織を記述する。

- ・等質地域、機能地域、認知地域、それぞれの差異を認識する(等質地域：砂漠地域のように、ある一つの共通の特徴を備えた地域。機能地域：合衆国の連邦銀行システムのように、部分の相互依存関係で成り立つ地域。認知地域：南部地域を意味するデイクシーラステベルトのように、一般に受け入れられている概念構成物としての地域)。
- ・機能地域の結合関係を説明する(機能地域は、近隣のコーヒョップや市役所、郊外のショッピングモールを結節中心として成り立っている)。
- ・地域の概念は、地表面の複雑さを単純化するのに使われることを認識する(ある1つの地域を複数の地域に再構成することで、テーマや問題を理解しやすくなることもある)。

(c)地域の人文的変容、自然的変容を認識し、その変化の要因を説明する。

- ・地図を用いて、地域境界が変化する理由を説明する(人口移動や環境破壊、生産/市場/パターンの変動が、地域の境界を変化させる)。
- ・世界の政治的境界が変化する理由を認識する(隣接の国境に分離されたために、数世紀にわたって機度なく国境が変化してきたポーランド。天然資源への接近を阻止しようとする戦争と領土紛争のために、海への出口をもたない内陸国となったボリビア)。
- ・地域変容を促進させる諸要因を説明する(人々の移住や科学技術、教育などの人文的要素、気候の長期的変動や地震活動などの自然的要素)。

(d)地域システムの構成のされ方を説明する。

- ・都市が地域システムに組織されるしくみを記述する(大都市

表現が一般に使われている意味を説明する。

- ・ 地域名の由来とその影響を評価する(サンフランシスコのツインピークス、ワシントンのキャピトルヒル、南部のラストベルト)。
- ・ 地域イメージを植え付けている出来事を吟味する(マイアミの犯罪、カリフォルニアの自然災害、ベルリンの壁の崩壊)。

と大都市は、財とサービス、人間の流れで結合している)。

- ・ 政治機構と政府を地域システムとして吟味する(村、町、市、郡、州、国という行政単位のエエラルキー。選挙区、地区、郡、州、全米という政党構造のエエラルキー)。
- ・ 政府や企業体が形成する地域システムの構成を記述する(ハブ空港を中心にして各地に広がる航空機の航路、郵便配達の手引制度、地域単位に指定される社会保障番号)。

(f)地域の概念を応用して、地理的問題を分析したり、地理的問いに答える。

- ・ ある地域が、合衆国史上または世界史上、独自の存在価値をもちえた理由を認識し、それを説明する(南北戦争前の南部コットンベルト、ファラオ統治下のナイル川流域、モンゴル人統治下のインド、20世紀末の東太平洋地域)。
- ・ 過去および現在の地域同盟に加盟している場所を認識する。(第1次世界大戦時の中軸国、1990年代のヨーロッパ連合)加盟国の視点からこれらの地域同盟の特質と課題を評価する。
- ・ 世界各地で起こっている紛争の歴史的理由を検討する(東南アジア、アフリカの角、バルカン半島の諸国)。

(g)地域システム内部と外部の結合を解釈する。

- ・ 地域内部と地域相互の関係を具体的に記述する(都市における近隣の相互結合、大都市圏における自治体の結合、軍事・経済同盟における強国の対立)。
- ・ 地域システムの内的結合関係を具体的に記述する(姉妹都市を選定する際の概観となる、自然的・人文的特徴の類似性)。
- ・ 自然環境と人文環境が、地域内部と地域相互でシステムを形成していることを説明する(ダムおよび堤防を管理するために創設されたテネシー川流域開発機構)。

スタンダード6：文化と経験は、場所と地域に対する人間の見方いかに影響を及ぼすか

第4学年までに、生徒は、次のことを知り理解する。
 1.様々な見方を基に、自分たちの住むコミュニティと地域を記述する方法。
 2.人によって異なる、場所や地域に対する見方。

第8学年までに、生徒は次のことを知り、理解する。
 1.個人の性格が、場所と地域の見方に及ぼす影響。
 2.文化と科学技術が場所と地域の見方に及ぼす影響。
 3.文化的シンボルとしての場所と地域の意味。

第12学年までに、生徒は次のことを知り、理解する。
 1.場所や地域が、個人や社会の象徴として機能する理由。
 2.社会内部の人間集団ごとに、場所や地域の見方が異なる理由。
 3.場所や地域に対する人々の見方は、文化の変化とともにいかに変容してゆくか。

したがって、生徒は次のことができる。
 (a)多様な方法で、場所と地域を記述する。
 ・場所や地域(自分の住んでいる町、歴史的景勝地、リクリエーション地域など)に対する生徒の見方(メンタルマップ)が現れたポスター、カラージュ、その他の表現物を作成する。
 ・友人とスケッチマップや絵を交換し、お互いの表現を比較して、同じ場所に対する見方の違いを発見する(詳細に記述していること、表現の力点はどのように違うか、似ているか、表現は、肯定的か否定的か)
 ・子どもの関心や価値観の変化に注目して、地元コミュニティに対する生徒の見方の歴史的变化を説明する。
 (b)人によって異なる場所や地域に対する関心、捉え方を比較する。
 ・ロールプレイ、シミュレーション、その他の学習活動を通じて、人によって異なる場所や地域に対する見方を記述する(子ども、母親、ジョガー、公園作業員は、それぞれ公園をどのようにみているか)。
 ・インタビューを企画し、同一の場所や地域を、年齢、性別、エスニシティの異なる人々がどのようにみているかについて、情報を収集する。収集した情報は、内容ごと(医療施設など)、対象者の類型ごと(アフリカ系アメリカ人の10代男性、メキシコ系アメリカ人の壮年女性、白人アメリカ人の高齢者女性など)、反応ごと(好き/嫌い、重要/どうでもいいなど)に整理する。
 ・ある場所を詠んだ歌や詩、物語を分析し、その作品に特徴的な場所に対する作者の感情を推論する。

したがって、生徒は次のことができる。
 (a)様々な見方から捉えた場所と地域の特徴を評価する。
 ・生徒の住むコミュニティにおいて、ある利用方法が提案されている土地について、人々が抱えている多様な見方を情報収集する。またコミュニティにとっての最善の事例という視点から、人々の見方を分析する。
 ・様々な人々—ホームレス、ビジネスマン、タクシー運転手、警察官、観光客—の見方から、場所または地域を評価する。
 ・文化的出自の異なる人が、場所や地域をどのように定義し、抽出し、命名しているかを比較する(新しい分断地の名称に注目する。場所や地域の名称には、ある出来事や原理原則、英雄、理想が象徴的に表現されている)。
 (b)科学技術が、文化集団の場所または土地に対する見方に、あるいは土地利用の方法に及ぼした影響を説明する。
 ・科学技術が、乾燥地域の土地利用に及ぼした影響を説明する(エアコン、灌漑施設)。
 ・文化集団が自然環境に対する見方を変えるのに、科学技術が果たした役割を明らかにする(スイットの生活に影響を与えたスノーモービル、積雪地を旅行する観光客に影響を与えた雪地専用自動車)。
 ・地域、場所に対する人々の文化的態度に影響を及ぼすことを目的とした広告を具体的に指摘する(ミュージックビデオに使われている都市環境、自動車のコマーシャルに使われた山岳景観など)。
 (c)文化が、人間の場所または土地に対する見方に及ぼす影響を認識する。
 ・宗教や信仰システムが、土地利用に関する人々の伝統的価値観に影響を及ぼした事例を指摘する(イスラム教義とユダヤ教義の食習慣が、中東の土地利用に与えている影響)。
 ・他文化に属する若者が書いた物語を読み、国内のどのような景観に、美や価値をみい出しているかを確定する。
 ・母国の慣習をそのまま携えてきた合衆国への移住者について、彼らの変わらざる関心を説明する。
 (d)場所や地域が文化的象徴として機能している事例を取り上げ、それを説明する。
 ・都市を代表する、または都市を象徴するようになった建築や構造物、彫像の写真を、雑誌広告やその他の情報源から収集する(サンフランシスコのゴールデン・ゲート・ブリッジ、シドニーのオペラハウス、セントルイスのゲートウェイ・ブリッジ、ロンドンのタワー・ブリッジ)。
 ・生徒に地元コミュニティの地図を描かせ、文化的アイデンティティを表しているランドマークを読み取る。同じ分析を、州の州都や地域の大都市でも行なう。
 ・特定の地域を想起させる歌をリストにし、その歌が連想させるイメージを認識する(「ワルチング・マラルダ」とオーストラリア、「ボート・リング」とロア)。

したがって、生徒は次のことができる。
 (a)場所や地域は、個人のアイデンティティにとって、またバラバラに分解した社会を統合する象徴として重要な意味をもっている理由を説明する。
 ・人間が場所や地域への愛着を表現しようとするときの方法を解釈する(エッセイ、小説、詩、短編小説、映画、「ゴッド・プラス・アメリカ」や「美しきアメリカ」などの古典的音楽作品)。
 ・個人の場所の見方に影響を及ぼす視点を説明する(理想的な居住空間に関して見方を異にするエスニック集団、孤島の利用方法に関して見方を異にする環境保護主義者と不動産開発業者)。
 ・場所がもつ象徴的意味を認識する(イスラム教義とキリスト教義、ユダヤ教義にとって聖なる都市とみなされているエルサレム。合衆国の脱税者を誘える場所とみなされている国立アーリントン墓地と無名戦士の墓)。
 (b)個人によって場所や地域に対する見方が異なることを、年齢、性別、社会階層、エスニシティ、価値観、信仰システムの各視点から説明する。
 ・男性と女性でみられる地理感覚の個人的違いを推論する(距離の見方、場所の安全性に対する見方、空間の構成のされ方)。
 ・個人の社会的経済的背景が、場所と地域の見方に及ぼす影響を推論する(公営住宅や高級都市住宅、幹線道路沿いの商店街に飽く、各人の見方)。
 ・場所と地域に関するステレオタイプを説明する(「野性的」を想起させる西部、「貧困」を連想させるアパラチアの全境)。
 (c)文化の変容にともない変化してゆく、場所や地域に対する人々の見方を分析する。
 ・農村的社会から都市的社会への移行が、人々の環境の見方に及ぼす影響を説明する(人口過密な都市人口が増大するにつれて、またかつて鉱山だったゴーストタウンが遊びやキャンブルの中心地に変容するにつれて、農村のリクリエーション地域としての魅力が増大する)。
 ・所得の向上、寿命の延長、または老化に対する態度が、居住地の選択に及ぼす影響を説明する(ワリダグアリナにある、引退者を中心としたコミュニティ)。
 ・ある居住環境の占拠系列を吟味する(北極海沿岸の積雪の場合、それまで原住民が住んでいた土地に、19世紀中ごろから探検家や移住者がやってくる。後にそこには、狩猟や漁業、交易を目的とする居留民、捕鯨や漁業に携わる季節労働者、油田を採掘する学生者らも海外から訪れるようになる)。

スタンダード7：地表面にパターンを形成する自然的作用

第4学年までに、生徒は、次のことを知り理解する。

- 1.地球の自然システムを構成する要素：大気圏、岩石圏、水圏、生物圏。
- 2.自然的作用に起因して、地表面には、事象のパターンが(位置、分布、結合)いかにして形成されるか。
- 3.地球と太陽の関係が、地球の状態に及ぼす影響。

したがって、生徒は次のことができる。

(a)地球の大気圏、岩石圏、水圏、生物圏を構成する自然の諸要素を認識し、記述する

- ・授業用教材として開発された写真、または教師が自身で描いたスケッチを使って、地球の自然システムを構成している諸要素を区別する(岩石圏の具体事象として、山地、丘陵、台地、平原、河谷、半島など、水圏の具体事象として、海、池、河川)。
- ・世界の多様な気候について、降水量、気温、連想される動植物のタイプの3つの視点から記述する。記述に際しては、写真や地図、グラフを利用する。
- ・地表と地下における水の存在形態(河川、池、海、雨水、帯水層、地下水、地下水)に注目して、水循環のモデルを作成する。

(b)自然的作用によって、地表面に事象とそのパターンが形成される過程を説明する。

- ・生徒の住んでいる地域の自然環境と、その自然環境が地域に働き掛ける作用を記述する(天候、地熱運動、波浪、氷結と融解、重力、土壌形成のプロセス)。
- ・地図や写真を比較し、解釈して、自然的作用が地表面の事象に及ぼす影響を説明する(気候と天候の相互作用への影響、侵食と堆積の地形への影響、地滑りの丘陵への影響)。
- ・世界の様々な地域の気候条件を比較する。比較に際しては、赤道からの距離、起伏、暖流や寒流からの距離を考慮する。

(c)太陽との関係における地球の位置が、地球の出来事や状況に及ぼす影響を記述する。

- ・太陽との関係における地球の傾きを図解したモデルまたはデザインを用意し、地球の位置とその位置に対応する季節を説明する。
- ・昼間の長さから、世界の様々な地域の人間活動に及ぼしている影響を説明する(夏時間制度の採用、合衆国の学期制、北極海沿岸における夏期と冬期の活動)。
- ・種苗カタログに掲載された生育期についての説明書と、合衆国農務省が発行する農業生産困難地域を示した地図を、相互に関係づける。

第8学年までに、生徒は次のことを知り、理解する。

- 1.自然的作用に起因して、自然環境が形成されるしくみ。
- 2.地球と太陽の関係は、自然的作用やパターンに対していかに影響を及ぼすか。
- 3.自然的作用は、資源の形成と分布をいかに規定するか。
- 4.自然的作用が、地表面に及ぼす影響を予測する。

したがって、生徒は次のことができる。

(a)自然的作用の概念を用いて、自然環境のパターンを説明する。

- ・水や氷の侵食作用が、地形を形づくる過程を説明する(氷と荒地、氷と氷蝕、氷蝕と断崖)。
- ・地震帯または火山活動のように、ある事象のパターンが地殻プレートとの周縁部と対応している理由を説明する(環太平洋火山帯、カリフォルニア沿岸部のサンアンドレアス断層)。
- ・海流の循環システムと、それが気候に及ぼす影響を記述する(北大西洋海流と西ヨーロッパの温暖な気候)。

(b)自然的作用の概念を用いて、本作用の生成を説明する。

- ・いくつかの場所の気候グラフを作成、分析し、各地の気候に類似性と差異性がみられる理由を提案する。
- ・自然的事象が類似している世界の諸地域を比較する(ネパールと中国西部の砂漠地域、ロシアとカナダの亜北極圏地域)。
- ・適切な地図を使って、自然的作用の相互関係を一般化する(海流と乾風、虹)。

(c)地球と太陽との関係で、地球の自然的作用とそのパターンが形成される理由を説明する。

- ・ダイヤグラムと地図を使って、地球と太陽との位置関係が、地球のエネルギーの水平分布と垂直分布に影響を及ぼしていることを記述する。
- ・様々な天気事象の成因を、太陽と地球との関係の年変化という視点から説明する(秋に亜熱帯地域を襲うハリケーン、春と夏に中緯度地域を襲う竜巻と洪水)。
- ・季節風にもなう降水パターンを、太陽と地球の関係の年変化という視点から説明する。

(d)非再生資源と再生資源が生産される過程を記述する。

- ・化石燃料が生産される過程を記述し、その過程を具体的な場所を取り上げて説明する(アパッチ山脈やイギリス島の石炭は、もともと熱帯地域で形成された。これらの地域は、地殻運動の結果、現在では石炭が形成されることのない高緯度地域にまで移動してきている)。
- ・地勢図と気候データを基に、様々な地域の潜在的な水力発電能力を予測する(スウェーデン、デンマーク、ワシントン州、カナダの発電能力)。
- ・世界の農業パターンを、肥沃な土壌の分布と、その土壌を生成する自然的作用との関係において説明する(綿花栽培と、ミシシッピ川の肥沃な沖積土の関係)。

(e)ある自然的作用が、地表面に及ぼす諸影響を予測する。

- ・過激な天気現象が、自然環境に及ぼす影響を予測する(ハリケーンが沿岸の生態系に与える影響)。
- ・大雨が、丘陵斜面に及ぼす影響を推論する(山火のあと、または山羊の過剰放牧のあと)。
- ・地球の地殻プレートが継続的に移動し続けた結果、予想される事象を予測する(大陸の移動、地震、火山活動)。

第12学年までに、生徒は次のことを知り、理解する。

- 1.地球の自然システムを構成する4要素：大気圏、生物圏、岩石圏、水圏のダイナミクス。
- 2.地球の自然システムの相互作用。
- 3.地表面の自然的作用に起因する、またはその結果としての空間的多様性。

したがって、生徒は次のことができる。

(a)自然的作用が、合衆国と世界の諸地域に及ぼしている影響を記述する。

- ・過激な自然現象が、諸地域の集落に及ぼしてきた影響を説明する(合衆国東部とカリフォルニア沿岸に激しい打撃を与えたハリケーン、トルコや日本、ニカラガアを襲った地震)。
- ・洪水やハリケーンなどの自然災害が景観を大きく作りかえてきたことを、地図に表す(1993年夏のミシシッピ川の氾濫は、イリノイ州やアイオワ州、ミズーリ州の河川流域の構造物を破壊した、また、1992年のハリケーン:アンドリューは、フロリダの海岸線を改変した)。
- ・乾燥環境に生起している自然的作用を記述する(砂漠化、土壌の乾涸、鉄砲水、砂嵐、砂の移動、土壌侵食、嵐の準備など)。

(b)自然地理学の概念を使って、地球の自然的作用とそのパターン、および大気循環を説明する。

- ・大気循環や気温、湿度の相互作用で形成される気候タイプについて、その分布を説明する(海洋性気候と大陸性気候)。
- ・鋭角的な地形(ピュートやメサ、断崖山地または城壁、懸崖と谷のシステム)を作り出す自然的作用(侵食、褶曲と断層、火山活動)を記述する。
- ・自然循環が、地球の自然環境に及ぼす影響を説明する(世界の大気循環、海流)。

(c)地球と太陽の関係に起因する相互作用を説明する。

- ・地球の地軸の傾きが、北半球と南半球の季節変動に及ぼす影響を記述する。
- ・(冬夏)至点と(春秋)分点の差異と、それぞれの成立理由を説明する。
- ・温室効果がさらに高まった場合、未来の世界的気候環境に予想されるシナリオを描く。

(d)地球の自然的作用が、動的かつ相互依存的なものであることを記述する。

- ・海底には、大陸や海盆を形成する動態的作用がみられる理由を説明する。
- ・地形の変化と気候の影響の相互関係を説明する(降氷による丘陵斜面の侵食、氷碛による流出物の堆積、風による地表面の形成)。
- ・気候変動を引き起こす原因、ならびに気候変動が海面や農業生産、人口分布に及ぼす影響を認識する。

スタンダード8：地表面における生態系の特徴と空間的分布

<p>第4学年までに、生徒は、次のことを知り理解する。</p> <ol style="list-style-type: none"> 1.生態系の構成要素。 2.生態系の分布とパターン。 3.人間と生態系の相互関係。 	<p>第8学年までに、生徒は次のことを知り、理解する。</p> <ol style="list-style-type: none"> 1.生態系のローカルなパターンとグローバルなパターン。 2.生態系のはたらき。 3.自然的作用は、生態系をいかにして変化させるか。 4.人間の活動は、生態系をいかにして変化させるか。 	<p>第12学年までに、生徒は次のことを知り、理解する。</p> <ol style="list-style-type: none"> 1.生態系の分布と特質。 2.生態系の多様性と生産力。 3.環境問題を理解する上での生態系の概念の重要性。
<p>したがって、生徒は次のことができる。</p> <p>(a)様々なスケールで生態系の構成要素を記述し、それを図解する。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・地元の生態系を構成する諸要素を抽出し、それを生態系のジオラマモデルに配置してゆく。 ・様々な生物(菌類、昆虫、植物、動物)の写真や実物モデルを適切に並べ変えることで食物連鎖を説明する。 ・植動物の群落とそれらが実際に生存している自然環境を認識し、それらを比較する(海岸地帯に生息する魚類と海辺植物、草原地帯に生息する草木や鳥類、昆虫)。 <p>(b)生態系の分布とパターンを認識し、それを説明する。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・動植物の種と、それらの種が生育する植生や気候地域を結びつけた解説文を作成する。また、解説文の内容を、絵やその他の視覚イメージとして表現する(北アメリカの中緯度の森林地帯に生息する動植物、アフリカの熱帯雨林にみられる動植物の種)。 ・生徒の住む州や地域のスケッチマップを使って、動植物とその生育地を組み合わせる(森林に生息する動物、都市でも生育できる動物と樹木、海岸や湖沼、河川付近に生息する動植物)。 <p>(c)人間と生態系の相互関係を説明する。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・生徒が普段の生活で利用している資源をリストにまとめる。次に、その資源が生態系において元々占めている地位をたどってゆき、人間と生態系の相互作用と相互依存関係を理解する。 ・人間が生態系を改変する方法をリストにする(森林の伐採、水路の開削、湿地の排水、火災の発生と消火)。 ・植生と土壌が、人間の居住環境を規定している諸側面(建築や農耕に適した場所)と、逆に人間が、植物や土壌を規定している諸側面(人間が行なう植生の改変や土壌の保全)を記述する。 	<p>したがって、生徒は次のことができる。</p> <p>(a)ローカルなスケールからグローバルなスケールにおいて、生態系の分布を説明する。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・写真やイラストなどの媒体を使って、様々な生態系の存在とそれらの違いを記述する(動物相と植物相を描いたコラージュを作成する、地元の生態系をビデオテープに撮影する)。 ・土壌や気候の地域的差異、また人間と自然の相互干渉に起因する場所による生態系の差異と、そのような差異が生じる理由を説明する。 ・人間の干渉に起因するローカルな生態系の変化を認識する(北緯原における農業活動が拡大した結果、農業地帯になった河川流域の湿地)。 <p>(b)生態系の機能とダイナミクスを説明する。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・生態系の動物相と植物相を認識し、それらが相互に結合し、相互依存関係にあることを相手に伝達する。 ・生態系におけるエネルギーの流れと、物質の循環について説明する(食物連鎖や水循環)。 ・食物連鎖を構成する各要素の捕食関係とその位置について説明する(草食動物を食べる肉食動物)。 <p>(c)生態系に影響を及ぼす自然的作用を説明する。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・生態系のある固体群が、環境上の圧力に適応するために採っている方法を説明する。 ・富栄養化の過程を含めて、湖沼の生態系のライフサイクルを記述し、それを説明する。 ・生態系を、それ自体の特質と、自然界の出来事に起因する圧力への適応能力という視点から説明する。 ・Hydrillaのような外来種の広がりに適応しようとする河川の生態システム。森林火災の後にも新たな動物相と植物相をもって再生を遂げる森林。 <p>(d)人文的作用が生態系の変化を促進させることを説明する。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・人間が干渉した結果、コミュニティ内外の生態系に生ずる変化を認識する(農地となった北緯原の湿地帯、住宅地となった北緯原の農地)。 ・生態系の内部における人間活動が、炭素、窒素、酸素の循環に及ぼすであろう潜在的影響力を予測する(大気汚染が大気中の温室効果を増加させ、インドウなどのマメ類の栽培で、土壌に枯渇した窒素を供給する)。 ・世界の諸地域には、人間と生態系の多様な相互関係が成立していることをこれを説明する(ラテンアメリカやアフリカ、東南アジアの一部で行われている移動農業の多様なパターンと、その多様性の理由)。 	<p>したがって、生徒は次のことができる。</p> <p>(a)土壌と気候、動植物の生活にみい出される相互関係を解釈し、生態系の分布を分析する。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・太陽エネルギーと水供給の各視点から、一定範囲における植物群落の特質を分析する。 ・気候や土壌などの自然的特徴が、生態系における動植物の数や種類、分布を規定していることを記述する。 ・生態系にはその場所独自の土壌形成が促される理由と、その作用を記述する(気候型、基岩物質、土地傾面、人間活動の影響)。 <p>(b)多様性と生産力の各視点から、生態系を評価する。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・それぞれの生態系に備わる生産力についての知識を応用して、システムの性質に関して結論を引き出す。 ・多様性と生産力の水準に基づいて、生態系をカテゴリー化する(砂漠の低い生産力、中緯度の森林と熱帯雨林の高い生産力)。また様々な生物との関わりからみた生態系の潜在的価値を記述する(生体への養分の供給源として、原住民の食料源として、国際貿易の原料の供給源として)。 ・土地利用との関わりで、それぞれの生態系に備わる能力を評価する(牧草地1平方メートルあたり飼育可能な牛の頭数)。 <p>(c)生態系の概念を応用して、環境問題に係わる諸論点を理解し、それを解決する。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・生物数の増大が、生態系に及ぼす影響を記述する(食物連鎖の次の段階に残される汚染物質が増大し、さらに別の生命体に影響が広がる)。 ・自然と人間の変化が、生態系に及ぼす影響を記述する(エネルギーフローと物質循環が断絶する、生物の種類が減少する)。 ・人間の手による自然の改変が、生態系に及ぼす長期的な影響を評価する(大気汚染に起因する酸性雨が、水系と森林に及ぼす影響。科学物質の使用に起因するオゾン層の破壊が、人間の健康に及ぼす影響)。

スタンダード9：地表面における人口の特徴、分布、および移動

<p>第4学年までに、生徒は、次のことを知り理解する。</p> <ol style="list-style-type: none"> 1.人口の空間的分布。 2.(ローカルからグローバルまでの)様々なスケールでみた人口の特徴。 3.人口移動の原因と結果。 	<p>第8学年までに、生徒は次のことを知り、理解する。</p> <ol style="list-style-type: none"> 1.人口の人口学的構成。 2.人口分布の空間的差異性の理由。 3.人口移動のタイプと歴史的パターン。 4.移民の場所の特徴に対する影響。 	<p>第12学年までに、生徒は次のことを知り、理解する。</p> <ol style="list-style-type: none"> 1.世界人口の傾向とパターン。 2.人口移動が自然システムと人文システムに与える影響。
<p>したがって、生徒は次のことができる。</p> <p>(a)人口の空間的分布を記述する。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・生徒の住むコミュニティまたは州の地図を用いて人口の分布を研究し、観察されたパターンの成立理由を説明する(市街地から遠いところよりも近いところに居住する人が多いのは、職場に隣接して住みたいからだろう。州のある特定の場所により多くの人が居住しているのは、そこでは資源や就業の場が豊かに供給されるからだろう)。 ・人口密度を示した合衆国の地図を研究し、人口密度の違いと位置との関係を説明する(ミシシッピ川の西側よりも東側の方が、人口密度が高い。内陸の山岳地帯や砂漠よりも東海岸や西海岸の方が、人口密度が高い)。 ・人口分布を示した地図と、気温や降水量、生育期間の長さ、天然資源の存在、その他の自然的事象を示した地図を比較し、現在の人口分布の成立理由を説明する(湿度が乾燥したところ、湿度が高いところには、人々はあまり住んでいない)。 <p>(b)様々なスケールで、人口分布を記述し、比較する。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・地元コミュニティに居住する人口の特徴を示した地図とグラフを作成する(エスニティー、年齢構成、世帯数と単身者の数、雇用者と失業者の数、男性と女性の数)。 ・生徒が関心を抱いている人口の特徴を調べるための質問事項を用意し、2クラスの生徒から情報を収集する。また各クラスの人口を記述し、それを比較する(兄弟姉妹の数、学校への通学距離、出生地、誕生日、好きなスポーツ、飼っているペット、両親ならびに祖父祖母の年齢)。 ・人口の特徴を表した地図とグラフを使って、2つの場所の人口特徴(平均寿命、幼児死亡率、都市人口、一人当たりの国内総生産)を比較する(州と州、国と国、ラテンアメリカとアジアなどのような世界の地域と地域、東南アジアと東アジアのように単一地域を構成する2つの下位地域を相互に比較する)。 <p>(c)人口移動の原因と結果を比較する。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・世界諸地域の移民を描いた物語を読み、それぞれの作品における移住の理由を議論する(学校に近い大きなアパートへ引越す家族、グレートプレーンズのホームステッドに移り住む東部の土地なし住民の自発的移動、南北アメリカに連れて来られたアフリカ人の強制的移動、アイルランドを飢饉に陥れたジャガイモ飢饉から逃れたきた避難民)。 ・自発的または強制的に移住せざるをえなくなった人物、家族の顛末を描いた日記を、または物語をかく(1890年代にヨーロッパを離れてアメリカに移住することを決意した家族、1860年代に鉄道建設に従事するために合衆国へ渡ることを決意した中国人男性、1980年代に仕事を求めてドイツに行くことを決めたトルコ人)。 ・自然地理が移住のルートや流れ、移住先を規定した諸側面を、文章やスケッチマップにあらわす(川の存在は移民を谷間に誘導させた。山は移住の障壁となった。山越えのあと人々は漏斗状に移動した。距離の長さは移住先についての情報の流れを遮断した)。 	<p>したがって、生徒は次のことができる。</p> <p>(a)人口学のキー概念を用いて、多様な人口構成を記述する。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・自然増加、自然出生率、自然死亡率、幼児死亡率などの概念を使って、発展途上国と先進国による人口増加率の違いを記述する。 ・人口学的に次の段階に移行したときにみられる、人口構成上の変化を説明する(性と年齢)。 ・人口ピラミッドを用いて、各社会の人口構成を描く(人口構成が全体として若いニアとメキシコ、人口構成が全体として高齢なドイツとスウェーデン)。 <p>(b)場所の人口的特徴を分析し、人口のパターンを説明する。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・様々な国の人口ピラミッドを作成し、それらを年齢構成の類似性を基礎にしてグループ分けする。 ・人口学概念を理解し、それを、具体的な事例を用いて説明する。また各国の人口の特徴を説明する(出生率、死亡率、人口増加率、人口増加率、平均寿命、平均的な家族人員)。 ・人口統計を各国または各地域ごとに色分けして示した地図を作成し、この地図を基にして人口パターンの趨勢を推論する(マダガスカルの人ロ密度、南アフリカの人口成長率)。 <p>(c)各時期の移民の波を説明する。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・移民の波の原因と結果を認識する(13世紀には、モンゴル人がアジアからヨーロッパに移動した、19世紀の後半には、中国人が北アメリカの西部に移動した)。 ・自然的障壁ならびにその他の障壁が、人口の流れを遮ることがあることを認識し、それを説明する。また人間がこれらの障壁を克服することができた事例を指摘する(ベルリンの壁、アラバチア山脈とロッキー山地、南北朝鮮の開ざれた国境線)。 ・合衆国の都市-農村間の現在と過去の移住パターンを説明する。 <p>(d)場所の特徴に影響を与えた人口移動を記述する。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・各時代の様子がわかる地図と写真を使って、人口移動にともなう場所の変化を説明する(1940年代にインド亜大陸が分断され、ヒンズー教徒とイスラム教徒が再編成される前後のニューデリー、19世紀中期にアイルランド移民が大量流入する前後のボストン)。 ・人口移動の結果として生起する場所の特徴の変化を説明する(インド人が南アフリカに移住した影響、アルジェリア人がフランスに移住した影響、ベトナム人が合衆国に移住した影響)。 ・合衆国の場合、人口移動のパターンが都市部のサービス産業に顕著に反映していることを認識する(移民の間には、タクシー運転手、仕立屋、音楽教師、レストラン労働者から構成される階層構造が広く認められている)。 	<p>したがって、生徒は次のことができる。</p> <p>(a)地球人口の空間的分布の動向を予測する。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・環境の変化にともなう人口の空間的分布の変化について仮説を立て、それを検証する(地球の警告、砂漠化、海水面の変化、地殻運動)。 ・社会、文化の変化にともなう人口の空間的分布の変化について仮説を立て、それを検証する(科学技術の発達、政治的対立、エニツク居住地の拡大)。 ・社会、経済的状況の変化にともなう人口の空間的分布の変化について仮説を立て、それを検証する(水の利用しやすさ、住宅空間、輸送施設、教育と雇用の機会)。 <p>(b)人口問題を分析し、この問題に焦点を当てた政策を提言する。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・一国の人口の特徴を変化させることを意図した過去および現在の政策を評価する(人口増加を抑制する政策の執行、ロシア人の家族を増やせよと奨励した旧ソ連の政策)。 ・政府の人口政策が、経済的文化的な配慮の下で立案されていることを説明する(人々の信仰システムや食事に係わる伝統、労働力の増大あるいは削減などの国家の課題)。 ・政府の人口政策が、人々の反対を受けることがある理由を記述する(政策は、しばしば、人々の文化的価値観や、家族の規模、文化的伝統、信仰システムへの態度と対立することがある)。 <p>(c)人口移動を促す経済的、政治的、社会的要因を説明する。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・人口の流動性および都市-地域間の相互依存が高まった理由、輸送システムの改善で地域の統合が促進された理由を説明する(合衆国の全米的な州間道路、全世界的な航空網の整備)。 ・国際的な移民を促したプッシュ要因とプル要因を説明する(政治的状況、経済的助産、宗教的価値、家族のきずな)。 ・諸国が、移民政策と入国管理政策を確立してきた理由を説明する(人口規模や人口密度を統制する移民政策、熟練労働者ならびに非熟練労働者への需要に因る入国管理)。 <p>(d)人口移動が、自然システムと人文システムに及ぼした影響を評価する。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・大規模な移民が生態系に及ぼす影響を記述する(19世紀のヨーロッパ移民が、北アメリカの草原地帯に及ぼした影響)。 ・農村から都市に向かう大規模な移住が都市に及ぼす影響を記述する(郊外の発展、真正住宅の不足、インフラ整備への圧力、警察や消防等の都市サービスの供給不足)。 ・地域人口の増減を規定する地域内部の社会、経済的变化を記述する(1970年代から80年代にかけて合衆国農業帯で生じた人口と雇用機会の増大、合衆国北東部の諸地域における同時発生的な不況)。

スタンダード10：地球の文化モザイクの特徴、分布、および複雑さ

第4学年までに、生徒は、次のことを知り理解する。
 1.人々の生活様式に影響を及ぼしている文化的特徴。
 2.地表面における多様な文化パターン。
 3.文化は、いかに変化するか。

第8学年までに、生徒は次のことを知り、理解する。
 1.(ローカルからグローバルまでの)様々なスケールでみた文化の分布。
 2.景観の構成要素を文化の鏡として読み取る方法。
 3.文化は、いかに拡散するか。

第12学年までに、生徒は次のことを知り、理解する。
 1.文化が諸地域の生活様式に及ぼしている影響。
 2.文化は、地域の特徴をいかに形成するか。
 3.文化の近似化および多様化の過程の空間的特徴。

したがって、生徒は次のことができる。
(a)様々な地域の文化的特質を認識し、比較する。
 ・文化の構成要素を認識し、生徒自身が属する文化について概略する。記述に際しては、各要素に少なくとも1回は言及する(言語、社会組織、信仰、習慣、住居形態、経済活動、教育制度)。
 ・同一地域に住居する人々の、生活様式の違いを区別する(17世紀の東部海岸地域に住していたネイティブアメリカ人とヨーロッパ人の文化的差異、現在のインドに住居するシーク教徒、ヒンズー教徒、イスラム教徒)。
 ・文化の諸要素を用いて、各地域の子どもの生活を比較する(少年少女を取り巻く環境、資源、科学技術、食料、家庭、社会組織、信仰、習慣、教育)。
(b)地球全体の文化パターンを記述し、比較する。
 ・主題図を使って世界の文化地域について記述し、それを説明する(民族的起源、宗教、政治制度、食事の好みなど)。
 ・グラフや地図、写真等の視覚資料を準備して、世界の諸地域における生計維持の方法を比較する(メキシコにおける自給自足農業と賃金労働、合衆国と中央アメリカの放牧)。
 ・文化を相互に比較し、同じ環境や資源でも、その使われ方には文化によって違いがあることを理解する(アフリカとアジア、エジプトのナイル川の生活を比較する)。
(c)文化の変化を記述する。
 ・両親や祖父母にインタビューを試み、文化の変化を理解する(合衆国ならびに世界の他地域の社会における女性の地位の変化、ラジオとテレビの普及に伴う合衆国の余暇活動の変化など)。
 ・先進国と発展途上国における女性の仕事を今昔を描いた学習教材を用いて、仕事の変化の理由を推論する(合衆国とサハラ以南のアフリカでみられる、食事の準備に係わる女性の役割の変化)。
 ・一次資料と二次資料、イラスト、その他の情報源を基にして、文化的特徴の変化を記述する(子どもの役割、服飾様式、主たる輸送手段、食事の好み、住居形態、環境や資源に対する態度)。

したがって、生徒は次のことができる。
(a)コミュニティに反映した住民の文化的背景を認識する。
 ・生徒の住むコミュニティに、またはそれ以外のコミュニティに現われている文化の可視的諸要素を記述する(建築様式、スペイン語でかかれた標識、外国語でかかれた新聞の広告記事)。
 ・自発的または強制的な移住の結果、都市内部に形成されたエスニック集団の居住地の存在を説明する(クウェートのフィリピン労働者、ボストンのポルトガル人、バンクーバーのシーク教徒)。
 ・世界諸地域からの移住の痕跡を、生徒の住むコミュニティに、あるいは他のコミュニティに発見する(電話帳を用いて、移住の痕跡とみなせる人の姓、エスニックレストラン、店、ソーシャルクラブをリストにする)。
(b)移住人口を想起させる特異な文化景観を認識し、それを記述する。
 ・西洋世界に形成された中国人街について、景観上の特徴と文化的パターンを記述する。
 ・19世紀の日本と中国に形成されたヨーロッパ人居留地について、景観上の特徴と文化的パターンを記述する。
 ・19世紀初頭から今日にかけてアメリカ諸都市のイタリア人街に形成された景観と文化の特徴的要素を説明する。
(c)地球の文化的モザイク構造の形成において、文化の拡散パターンがもつ意味を記述し、説明する。
 ・20世紀における自動車の世界的な普及について調査し、それを報告する。また、自動車製造の技術がもっている文化的意味を指摘する。
 ・少なくとも4カ国の写真を組み合わせて、文化の拡散パターンを表現したコラージュを作成する(中国、日本、インドネシア、フィリピンに共通してみられる棚田の利用、合衆国、イギリス、カナダ、サウジアラビアに共通してみられる衛星放送を受信するためのパラボラアンテナ)。
 ・16世紀、18世紀、20世紀における英語の世界的利用状況を示した一連の地図を作成する。また、英語の拡散を、同じ時期の政治的、経済的変動に関係づけて説明する。

(e)文化の近似化と多様化の空間的プロセスを説明する。
 ・通信技術と輸送技術が、文化の近似化を促したことを記述する(電子媒体やコンピューター、ジェット飛行機は、文化を相互に親近させつ、遠く離れた場所との間に緊密なネットワークで形成してきた)。
 ・文化の近似化を促す通信輸送技術が、同時に文化の多様化も促していることを分析する(文化集団はこれらの科学技術を利用して、民族やエスニック集団のエリート意識を、あるいはまた文化的分離、独立意識を強化してきた)。
 ・文化の近似化を促す文化的特質の広がりも、事例に即して吟味する(ロシアと東ヨーロッパに輸出した合衆国資本のファーストフードのフランチャイズ店、世界各地で科学者とビジネスマンの主要なコミュニケーション手段となされている英語、多くの国で人気を得ている中華料理)。

したがって、生徒は次のことができる。
(a)現代世界の協力と対立に文化が果たしている役割を比較する。
 ・政治紛争を促進させる文化的要因を認識する(賭、エスニック、宗教の違いは、1960年代にはサハラ以南のアフリカに、1980年代と90年代には中央ヨーロッパに、また90年代には旧ソ連諸国に对立をもたらした)。
 ・諸地域を関連づけている文化的特質を認識する(スペインとラテンアメリカの一部の宗教的、言語的結合、イギリスとオーストラリアの言語的結合、イラン、イラク、トルコに居住しているクルド人のエスニック的結合)。
 ・合衆国の平和部隊のメンバーは、自分たちとは文化的伝統を異にする国々でどのように生活し、仕事をしてきたのか、その方法を説明する(平和部隊のメンバーは、アメリカとは異なる現地の食習慣や社会習慣、生活様式、家族やコミュニティの価値観に適合するための方法をどのように学習したか。またそのために、どのような教育を受けたか)。
(b)文化が地域の特徴に影響を与えるしくみを分析する。
 ・人口学的データ(出生率、余命、幼児死亡率)を分析し、地域の文化的特徴を記述する(科学技術の発展水準、文化的伝統、社会制度)。
 ・世界の各地域で、女性に保証されている経済的機会を比較する(イスラムの伝統社会におけるベドウィン女性の生活と、スカンジナビア諸国の女性の生活)。
 ・国境に隣接する大都市および工業都市の文化的な変化と移民の流入パターンとの関係を記述する(大都市の外国人労働者、非正規外国人の存在によって、都市中心部の文化的特徴に変化が生じるしくみ)。
(c)文化的特徴が、しばしば地域を固定することを説明する。
 ・世界のある地域を他の地域から際立たせている人文的特徴を認識する(古代スペイン人集落が合衆国南西部に残した影響、ルネサンス以後にヨーロッパに発達した商業主義と資本主義が、南北アメリカの経済活動に及ぼしている影響)。
 ・文化地域を認識するにあたっての宗教の重要性を説明する(仏教が東南アジアの社会的態度の形成に与えている影響、キリスト教が西ヨーロッパの教育、社会保障制度の確立に果たしてきた役割)。
 ・1つの国家内部に、明らかに差異のある複数の文化地域が存在している理由を説明する(過去4世紀にわたる移民と移住のパターンの結果成立した、カナダの文化地域の特異性)。
(d)地域を越えた同盟関係または多国籍組織が、文化の堅固性を揺るがしうることを調査する。
 ・非政府組織(NGO)が、様々な文化的文脈の場を受け入れられていることを説明する(赤十字社の管轄と赤新月社の管轄の関係)。
 ・国際的な協力、同盟関係に生じた変化を認識し、それを地図に表す(1)連綿と続くNATOとEUWTO諸国、1960年の創設以来のOPEC加盟国)。
 ・政治的経済的な同盟関係の今日的展開が、世界の文化地域の伝統的凝集性に及ぼすかもしれない影響を予測する(統合後のドイツとその経済がヨーロッパ連合に及ぼした影響、NAFTAの結成が合衆国とカナダ、メキシコ間の貿易関係に与えた影響)。

スタンダード11：地表面の経済的相互依存のパターンとネットワーク

<p>第4学年までに、生徒は、次のことを知り理解する。</p> <ol style="list-style-type: none"> 1.経済活動の位置と空間的分布。 2.経済活動の位置と空間的分布に影響する諸要因。 3.日常生活で利用されている輸送・通信網。 	<p>第8学年までに、生徒は次のことを知り、理解する。</p> <ol style="list-style-type: none"> 1.経済活動を分類する方法。 2.グローバルな相互依存の基礎。 3.経済活動の空間的パターンの成立理由。 4.科学技術、輸送通信の変化が、経済活動の位置に及ぼす影響。 	<p>第12学年までに、生徒は次のことを知り、理解する。</p> <ol style="list-style-type: none"> 1.経済システムの分類、特徴、空間的分布。 2.規模が異なれば、それぞれの場所は、経済活動の中心地としてどのように機能するか。 3.世界各国の経済的相互依存の強化。
<p>したがって、生徒は次のことができる。</p> <p>(a)世界の様々な地域に住む人々がとっている生計を営む方法を説明する。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・世界の様々な地域について、財やサービスの生産を通して基礎的な必要と欲求を満たすための方法を記述し、それを比較する(食料を自ら栽培する発展途上国と店で購入する先進国、同じ合衆国内における農村の経済活動と都市の経済活動)。 ・地図を使って、地域間の経済的結合を示す。また一般的に貿易が各地の生計維持の方法に及ぼしている影響を説明する(南アジアからエネルギー資源の乏しい工業国へ移動している石油の流れ、東太平洋諸国から合衆国へ移動している電気製品の流れ)。 ・様々な地域の生計活動を記述する。各地の人々の衣食住に関わる産品を生産している場所、またこれらの産品の原材料を供給している場所を、地図に表す。 <p>(b)経済活動の位置を確定し、それを分類する。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・経済活動のタイプに応じてコミュニティの土地を分類し、多様な土地利用を表した地図を作成する(工業、リクリエーション、商業、住宅などの土地利用)。 ・地図を使って、都市地域の経済活動のパターンを理解する。またそのようなパターンが形成される理由を推論する(中心業務地区、工業地区、ショッピングモール、娯楽余暇地区、行政サービスセンター)。 ・生徒の住む地域や州、国で産出する天然資源を利用した経済活動の位置を確定する。それぞれの地域における同経済活動の重要性を記述する(農業、鉱業、漁業、製材業)。 <p>(c)経済活動における位置の重要性を認識する。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・地元コミュニティの地図と電話帳を使って、関連産業または経済活動の集積状況を確認する。経済活動がどのように集積して立地している理由を推論する(病院に隣接する医薬品や製薬の取次店、研究所、医院。幹線輸送ルートに近い位置する倉庫や工場。幹線道路沿いに集積するカーディーラー。人の集まりやすい場所に隣接し、交通の便も極めてよいファーストフード・レストラン)。 ・消費者物資(清涼飲料水、パン、コンパクトディスク、ハットなど)のリストを作成し、それぞれの製品の原材料、ならびに製造、加工の工 	<p>したがって、生徒は次のことができる。</p> <p>(a)地理的文脈で経済活動を記述する時に用いる用語をリストにし、それを定義する。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・世界の第一次産業を3つ指摘し、それを地図に表す(石炭業、小麦栽培、サトウキビ)。 ・世界の第二次産業を3つ指摘し、それを地図に表す(鉄鋼の製造とそれに必要な資源の世界的移動、靴の製造とその原料の世界的取引)。 ・第三次産業を定義し、それがどのような規模の集落でも重要な役割を果たしていることを説明する(レストラン、映画館、ホテル、雑貨店、病院、医館)。 <p>(b)財やサービスの配達システムの空間的側面を説明する。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・製造者から使用者までの製品の移動過程を図解する(船舶、自動車、コンピューター)。 ・情報に基づき、ある年の合衆国の主要輸出品および輸入品をリストにする。これらの商品が取引されている諸外国の位置を地図に表し、貿易のパターンを認識する。また、そのようなパターンが成立する理由を推論する。 ・世界貿易を妨げている様々な障壁を提示し、その障壁が世界諸地域の人々に及ぼしている影響を推測する(戦争、天候による作物の不作、労働者のストライク)。 <p>(c)経済活動の空間的分布に関わる問題を分析し、評価する。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・地元または他のコミュニティで営まれている経済活動の位置を認識する。それぞれの経済活動が、周辺地域に及ぼしている影響を評価する。 ・小規模小売店が、距離とともに消滅してゆく現象の影響を記述する(街角の雑貨店、ガリンスタンド)。 ・大規模工場、またはそれに類する経済活動が他の場所へ移転したときにコミュニティが受ける経済的、社会的影響を分析する(ミシガン州からの自動車産業の流出、ノースカロライナ州からの農産物の流出、テキサスのオースチンへのコンピューター産業の遷出)。 <p>(d)世界貿易を規定している地理的原因を認識し、説明する。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・比較優位の理論を応用して、各国の貿易状況とその成立 	<p>したがって、生徒は次のことができる。</p> <p>(a)経済システムの空間的分布を分類し、それを記述する。それぞれの経済システムが備える相対的特長を、生産性や労働者の社会福祉の観点から評価する。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・伝統的経済、統制経済、市場経済の各システムに備わる特質を記述する。また各国において、これらのシステムが機能している状況を記述する(統制経済の事例として北朝鮮を、伝統経済の事例としてフィリピン・フィリピンを、また市場経済の事例としてシンガポールを記述する)。 ・複数の視点から、各経済システムの特長と限界を評価する(中国の経済学者による失業の考え方と、日本の経済学者による失業の考え方)。 ・ある経済システムから別の経済システムへの移行期にみられる地理問題を認識する(旧ソ連における統制経済から市場経済への移行)。 <p>(b)経済システムの空間的側面を認識し、それを評価する。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・消費者行動の調査を基礎にして、地元コミュニティに立地する主要産業の市場圏を認識する(スーパーマーケット、ショッピングモール、銀行、ディスカウントショップ、テーマパーク)。 ・機能地域の一事例として市場圏を説明する(新聞の購読範囲、テレビ・ラジオの視聴範囲)。 ・ある場所が、部品組立の工場として、または部品配送のセンターとして、立地上で優位とみなされる理由を説明する(ノースカロライナの家具製造工場と組立工場、北メキシコの電気製品組立工場、トラックセンターに隣接した自動車部品の卸売り配送会社)。 <p>(c)集落のパターンと経済活動、経済活動が立地している場所の地価、それぞれの相互関係を分析する。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・支配的な都市事象と地価との空間的関係を分析する(中心業務地区、公立公園に隣接したオープンスペース、支配的な自然事象:ウォーターフロント、標高、風向)。 ・帯状に広がる土地利用と地価との空間的関係を説明する(都市計画地域内にある大企業の工業団地、都市計画地域の外にある農産品産地の集落地)。 ・ある工業種またはビジネス種の立地傾向を、経済的要因で説明する(地価、輸送施設、集積地、公共サービスの各観点からみた最小費用地店)。 <p>(d)歴史的にみた人間やものの移動パターンと経済活動との関係を認識し、それを分析する。</p>

程を認識する。またこれらの製品は原料供給地に隣接する場所で製造されているか、または製品を購入する消費者に隣接する場所で製造されているか、判断する。

- ・生徒の居住する地域で生産されている農業製品をリストにし、それが製造されている位置を確定する。製品が市場に分配される過程を地図に表す。

(d)場所から場所へ、人やもの・知識を運ぶのに使われている輸送通信手段を認識する。

- ・合衆国で自動車輸送が担っている役割の重要性を諸外国のそれとを比較する。世界各国の1人当たりの自動車保有台数を示した地図とグラフを作成する。
- ・輸送する製品と輸送の目的の観点から、それぞれの輸送手段に備わる特質と限界をリストにし、それを記述する(体積と重量が大きな産品に適したトラックと貨車、価格が高く乗りやすい産品に適した飛行機、液体とガスに適したパイプライン、都市運動に適した自転車、軽便鉄道、自動車)。
- ・輸送通信手段の変化と、その変化が、貿易や経済活動に及ぼす影響を表した年表と地図を作成する(地域がある経済活動への専門化する。道路や冷蔵輸送技術が改善されると、遠隔地でも新鮮な果物や野菜が供給される、輸送通信システムが改善されると、市場が地域、国家、グローバルへと拡大する)。

- 理由を説明する(香港製の消費者製品、中国製の織物、ジャマイカ産の砂糖貿易の優位性)。
- ・国際貿易の流れを認識し、それを地図に表す(ヨーロッパと北アメリカへ移動してゆくイチゴとコロンビア産のコーヒー、グアテマラ産のバナナ、韓国産の自動車)。
- ・原材料を中心に輸出し、燃料と工業製品を中心に輸入している国々が存在することの原因と結果を推論する。

(e)過去と現在の経済貿易ネットワークを分析する。

- ・16世紀から17世紀にかけて、北アメリカ、アフリカ、ヨーロッパを結んだ三角貿易のルートを図に表す。三角貿易がこれらの国々の歴史に及ぼした影響を説明する。
- ・労働者移動の国内的なパターン、またグローバルなパターンを読み取る(合衆国における奴隷や外国人労働者、季節労働者の利用)。
- ・情報を分析し、帝国主義下の経済関係を分析する(18世紀と19世紀におけるイギリスとアメリカ植民地の関係、20世紀におけるベトナムとコンゴ)。

(f)合衆国の産業立地に影響を及ぼしている諸要因を認識し、説明する。

- ・合衆国の工業地帯の歴史的興隆と持続性を地図に表し、それを説明する。
- ・製造工場の立地を規定してきた地理的経済的要因という視点から、合衆国の主要産業について議論する(鉄鋼、航空機、肉製品、その他の食料品の製造)。
- ・主要産業の空間的パターンの変化を記述する(鉄鋼、家具生産)

(g)輸送通信システムが経済活動の発展に果たしてきた歴史的役割と現代的役割を比較し、それを評価する。

- ・品質、効率、速度の各観点から、今と昔の輸送通信システムを比較する。
- ・輸送通信機械の技術革新が、経済的相互作用のパターンに及ぼした影響を一般化する(冷蔵貨車、航空輸送、パイプライン、電話、ファクシミリ、テレビジョン放送、衛星通信システムの影響)。
- ・世界の主要港でこれまでに取られてきた船荷のタイプを比較し、それが変化してきた理由を推論する。

- ・帆船時代の貿易ルートの空間的パターンを分析する(探検家は、大陸の沿岸沿いに卓越風や海流を利用して航行した)。

- ・モノカルチャー経済システムに起因する土地利用のパターンを議論する(ヨーロッパの植民地支配に由来するカリブ諸島の砂糖プランテーション、アジアの橡樹プランテーション、スリランカの茶プランテーション)。
- ・運河が開発される前後のグローバルな貿易ルートと比較する。運河の開削の結果、世界貿易に生じた変化を説明する仮説を定立する(スエズ運河の開削前後の西ヨーロッパとアジアの移動ルート)。

(h)空間的視点から国際経済問題を分析し、それを評価する。

- ・ある地域の地価は、外国資本の投資に起因して変化することを説明する(1990年代になって、カナダやホンコンの人々が移住し、新しく事業を始める場所を探し始めると、ブリティッシュコロンビア州の地価は上昇した。カナダとドイツの投資の結果、ドミニカのリゾート地区の地価が上昇した)。
- ・国際的な借款危機が生じた原因と地理的結果について、これまでに議論されてきたことを整理する(外国資本の撤退に関連する諸事象、インフラ整備の失敗)。
- ・外国資本の企業に対して、土地の購入や工場の開設、また関連産業の経営を支配することの許可を与えることの意義と損失を吟味する(受入国の国内から資本が流出し、予算は赤字に転落する。投資機会も減少する。一方それに並行して、資本投資国との貿易機会が増大する)。

スタンダード12：集落の形成プロセス、パターン、および機能

第4学年までに、生徒は、次のことを知り理解する。

1. 集落の類型と空間的パターン。
2. 人間の居住地に影響を与える諸要因。
3. 集落の変化の空間的パターン。
4. 都市の空間的特質。

したがって、生徒は次のことができる。

(a) 合衆国ならびに世界の諸地域の土地利用パターンと集落類型を記述する。

- ・ 合衆国と諸外国の集落類型を過去と現在で比較し、それを記述する(集落形成の連続的系列、すなわち、小村から村、町、市への成長過程を記述する)。
- ・ 類似性と差異性に注目して、都市と郊外の住宅と土地利用を比較する(居住、サービス供給、工業生産の各地域、住宅の類型、中庭の広さ、人口密度、輸送施設、歩道や河川などのインフラの存在)。
- ・ 生徒の居住するコミュニティとは別のタイプのコミュニティについて述べた時や物語を読み、それぞれの類似性と差異性を表にまとめる(農村地域に住む生徒ならば、都市のコミュニティを調べる)。

(b) 集落の集積地の位置を確定し、そのような分布が成立する理由を推論する。

- ・ 地図を使って、集落の密集状況を把握し、それとの関連で、人間が居住できる場所の条件を推論する(肥沃な土壌、良好な輸送施設、利用可能な水が豊かなガンジス川流域。石灰や鉄鉱石、その他の天然資源、河川輸送の施設が豊ったルル地方)。
- ・ 合衆国の諸地域の過去と現在の移住者が著した文書を読み、人々がその場所を移住先として、または居住地として選択した理由を説明する(就業の機会、確保できる土地、その気候)。
- ・ 2つ以上の地域を比較し、人口規模と人口密度に類似性と差異性がみられる理由を推論する(集落の歴史、環境と資源、文化的伝統、歴史的出来事、交通の便)。

(c) 各時代ごとの集落パターンを説明する。

- ・ 世界的な文化の発祥地にみられる類似性と差異性を分析し、人々がその土地に初めて住み着いた理由、またそれらの集落が現在まで持続している理由を推論する(技術革新が進んだ、また文化的、社会的、経済的、政治的発展の中心地であることが、人々を他の場所よりもその場所に引き付けた)。
- ・ 子どもの居住するコミュニティ、または州の発展過程を特徴づける集落パターンを記述する(それまでに人が住んでいなかった場所への人口移動→地域全域への集落の拡大→小村から村への発展、経済的支配力と経済成長をかけた村相

第8学年までに、生徒は次のことを知り、理解する。

1. 世界の様々な地域における集落の空間的パターン。
2. 都市の発展を促した人文的事象。
3. 都市化の原因と結果。
4. 都市集落の空間的内部構造

したがって、生徒は次のことができる。

(a) 居住パターンを認識し、記述する。

- ・ 主な農業集落の類型をリストにし、それを定義し、また地図化する(プランテーション・コミュニティ、自給自足農業コミュニティ、遠郊農業コミュニティ)。
- ・ 主な都市集落の類型をリストにし、それを定義し、また地図化する(港湾都市、行政センター、計画都市、単一工業都市)。
- ・ 生徒に都市計画の現状を調査、研究させる。都市計画を立案するグループを組織し、新しい都市への願望を具体化する都市集落パターンを構想させる。

(b) 都市の発展に係わる諸要因を認識する。

- ・ 都市が出現する前の集落形態を記述する(教師や採集生活者の通り道にあった休憩地、周辺から孤立して存在する農場、村)。
- ・ 世界最初の都市の立地理由を説明する(人口密度、輸送、食料供給などの諸条件)。
- ・ 集落が分散する農村が、集落が密集する都市へと変貌を遂げる理由をリストにし、それを説明する(市場の必要性、宗教的要求、軍事的な防衛)。

(c) 散村から集村への移行過程でみられる景観と社会の変化を分析する。

- ・ 村落から都市への成長過程における人工景観の変化を記述し、説明する(大規模な市場、都市の城壁、穀物貯蔵地の変化)。
- ・ 村落から都市への成長過程における農業パターンの変化を記述する(都市人口に供給する余剰農作物への需要が増大、都市への人口流入にともない農村労働者が減少)。
- ・ 都市と周辺地域を結びつける輸送システムの発展を記述する。

(d) 都市化の原因と結果を説明する。

- ・ 工業発展と、農村から都市へと向かう人口移動との関係を説明する(ニューイングランドの新移民へ流入する人々の流れ)。
- ・ 人々を都市の中心部へと引き付ける文化活動を記述する(娯楽、宗教施設、高度な教育)。
- ・ 都市中心部が、経済的に魅力のある場所とみなされる理

第12学年までに、生徒は次のことを知り、理解する。

1. 都市地域の機能、規模、空間的配置。
2. 先進国と発展途上国で異なる集落の特徴。
3. 都市地域の内部構造が変化する過程。

したがって、生徒は次のことができる。

(a) 都市の機能を分析する。

- ・ 世界の諸地域の様々な都市について、その位置と立地を分析する(港湾に位置するシドニー、標高1マイルに位置するデンバー、島しょ部の都市としてのモントルオール)。
- ・ 都市の機能と村や町のそれとの差異を説明する(都市は、より専門的な経済社会活動を提供しており、様々なサービスを提供するとともに、同じサービスについても利用のし易さが異なる)。
- ・ 現在の都市機能と過去のそれとの差異を説明する(単一の機能のみの都市と複数の機能を備えた都市、単純な機能をもった都市と複雑な機能を備えた都市)。

(b) 都市の内部構造と形状を分析する。

- ・ 航空写真や地勢図、センサスのデータを使って、生徒の住む都市または同一地域内にある近隣都市の土地利用を学習する。次に、地域内におけるその都市の主要な機能を推測する(商業センター、大学都市、交通の分岐点)。
- ・ 都市の形状を比較分析し、都市の形態を規定している諸要因を認識する(輸送ルート、自然障壁、土地利用規制)。
- ・ 都市において、長期にわたって変化しないものと、変化しているものを認識する(歴史書、古い新聞、公文書、地図、航空写真、センサスデータを基礎にして)。

(c) 先進国と発展途上国の集落の特徴を分類する。

- ・ 発展途上国の都市の特徴を認識する。発展途上国と先進国の都市を、周辺の自然事象、位置や立地、機能、内部構造、その他の地理的要因の各視点から比較する。
- ・ 発展途上国と先進国の都市を、輸送施設と居住地域の各視点から比較する(ニューヨークのバスシステムとキングストンのタクシーシステム、合衆国の諸都市の特種道路システムとカイロやアジズアバの狭い街道)。
- ・ 基礎的な都市サービスを提供する都市構造の効率性を、先進国と発展途上国で比較する(学校や商業地区、医療施設への移動距離)。

(d) 都市地域の変化の本質、またその原因と地理的影響を記述する。

- ・ 都市地域における人口の増減の影響を、インフラへの人口圧力、効率のかつ効果的な治安の維持、防災、就業機

互の競争→提供できるサービスがほとんどない人口希薄な村から、提供できるサービスが多い人口過密な村・町・市への移行→郊外化と分散化などの現代的な集落パターン。

- ・集落の成長と衰退の理由を説明する(新興都市からゴーストタウンへ変化した鉱山町、高速道路への接続の有無に規定された町の成長と衰退、好景気と不景気それぞれの時期における企業城下町と工業都市の歴史)。

(d)都市の位置と特質を記述する。

- ・地図やその他の図解資料を使って、北アメリカの大都市の位置を確定する。また、その都市が成長してきた過程を説明する(輸送ルートに沿った位置と、利用できる資源の存在によって、その場所は移民と経済活動を引き付けた。その後、利用できる資源は拡大し、周辺都市との接続も改善されていった)。
- ・地図や写真、統計資料、個人的な記憶を頼りにして、合衆国諸都市の歴史的な変遷を記述する(都心の商業地域から周辺地域へと移動した工業生産、郊外の成長、都市地域の形状の変化)。
- ・大都市や小都市、町の電話帳を使って、集落規模の違いに由来する差異を認識し、それを記述する(財やサービスの利便性、文化活動やリクリエーション活動の機会、特異専門化したメディアのサービス)。

由を記述する(就業の機会、事業を起す機会、情報や他の資源への接近のしやすさ)。

(e)都市内部の空間構造を認識し、それを定義する。

- ・都市の同心円モデルを使って、近隣の都市がそのモデルにどの程度合致しているかを説明する(中心都市には、高層ビルディングがある。一般に都市中心部から遠ざかるにつれて、人口密度は低下する)。
- ・都市の第2モデルを使って、近隣の都市がそのモデルにどの程度合致しているかを説明する(扇形に広がる工業地域、金融・専門的サービス地域、これらの2つの地域からは遠く離れた場所に位置する住宅地域)。
- ・様々な輸送システムの発達で、都市のビジネスと産業、住宅の空間的配置に及ぼす影響を記述する。

会、税収入の各視点から予測する。

- ・都市におけるエスニック集団の居住地域の変化を読み取る。移民の集落パターンを、中心業務地区への近接性、都市周縁部に隣接する住宅地域、雇用の場へのアクセスの悪さの各視点から分析し、結論を引き出す。
 - ・主要産業や主要ビジネスが都市から撤退したり、都市に進出してきたときに、都市の内部構造が受けるであろう影響を予測する(自動車部品工場の開業、全米規模の保険会社の再配置と経営の縮小)。
- (e)現代世界に新たな都市形態が出現したことの自然的・人文的影響を吟味する。**
- ・都市構造の近年の変化を特徴づける都市形態を認識する(メガロポリス、郊外都市、メトロポリタン回廊の成長)。
 - ・輸送技術の変化と都市形態の変化の相互関係を説明する(非都市地域への移動を容易にした軽便鉄道の改良、都市間の快速列車システム、低価格でかつ頻繁に都市間を飛行する航空便)。
 - ・都市化の進行を意味する文化的痕跡を記述する(都市地域におけるエスニック集団の居住地の増加、エスニック集団や人種的マイノリティーの権利を保護するための警察制度の発展)。

スタンダード13：人間相互の協力および対立の作用は、地表面の区分や統制にいかん影響を及ぼしているか

第4学年までに、生徒は、次のことを知り理解する。

1. 領域の類型。
2. (ローカルからグローバルまでの)様々なスケールでみた政治的、社会的、経済的単位の広がりとその特質。
3. 地表面を区分する方法。
4. 協力と対立が、ローカルコミュニティに及ぼす影響。

第8学年までに、生徒は次のことを知り、理解する。

1. 生徒自身の世界に引かれた複数の領域区分。
2. 人間相互の協力と対立は、地表面の政治的区分をいかに形成するか。
3. 人間相互の協力と対立は、地表面の経済的社会的区分をいかに形成するか。

第12学年までに、生徒は次のことを知り、理解する。

1. 人間相互の協力と対立を反映した、様々なスケールにおける社会、政治、経済空間の分布。またその分布の成立理由。
2. 様々な空間的区分が、人々の日常生活に及ぼす影響。
3. 領土と資源をめぐる対立で、複眼的な見方と利己的な関心が果たす役割。

したがって、生徒は次のことができる。

(a)領域単位の類型を認識し、記述する。

- ・色紙や透明シート、その他の図解表現を重ね組み合わせて、ローカルからグローバルまでの様々なスケールにおける政治単位を認識する(選挙区、センサス地区、学区、タウンシップ、大都市圏、郡、州、国家)。
- ・政府機関が市民に提供している公的サービスのリスト、ダイアグラム、図解を用意し、それぞれの機関が管轄している範囲を認識する(地方警察署から都保安官、州警察、国家機関までの一連の警察組織の階層構造、地方裁判所から都裁判所、州裁判所、連邦裁判所までの一連の司法組織の階層構造)。
- ・様々な単位領域を表した地図図解を用意する(郡を単位とする州地図、州を単位とする合衆国とメキシコの地図、県を単位とするカナダの地図、北アメリカの諸国家の地図、地域的な貿易機構または協力関係にある諸国家を表した世界地図)。

(b)様々なスケールでみた政治単位の特質を記述する。

- ・政治地域が共通に備えている特徴を記述する(境界、法律、権能、自律した地位、統治機構)。
- ・面積と人口からみた上位10と下位10カ国を比較した図表を用意する。
- ・政治単位が果たしている諸機能(法の制定、法の執行、サービスの提供、課税)と、スケールによる違い(市町村自治体、郡、州、国)を記述する。

(c)人々が地表面を管理するために展開している競争と、その目的を説明する。

- ・各国の近年の経済、政治システムの変化を認識し(旧ソ連の解体、ユーゴスラビアの内戦、南アフリカのapartheidの終結)、そのような変化が生起している理由を推論する(エスニックまたは民族的起源の相違、政治的な支配力を求めた競争、経済的不平等)。
- ・地図を用意し、合衆国が自国の領土を現在の形状と面積にまで拡大してくる過程を図解する。
- ・州が現在の州界を制定するに至るまでの過程に注目し、州の地理史を調査する。分かったことを記述するとともに、それを図解する。

(d)協力と対立、その両者が融合してみい出される現代世界の諸事象を取り上げ、それを分析する。

- ・対立がみられる(生徒の住むコミュニティの)ローカルな問題を認識し、その状況を分析する。またその問題状況を通して、協力や対立の概念を図解する方法を考える。
- ・地元コミュニティまたは他地域のコミュニティの出来事を事例にして、人々が協力して問題解決に取り組む状況を図解する(道路脇のゴミを片付ける仕事、自警団への参加、公営住宅建設プロジェクトへの参加)。
- ・国家間の協力と対立が反映した現代社会の諸事象を、地図にあらわす。

したがって、生徒は次のことができる。

(a)生徒が居住する場所を空間的に区分する根拠を判別し、それを説明する。

- ・生徒が所属する世界の様々なサービス区分、または政治的、社会的、経済的区分を認識する(選挙区、タウンシップ、郡、州)。
- ・様々な空間的区分と生徒との機能的な関わりを説明する(郡地区、学区、電気の地区番号)。
- ・社会には、複数の、相互に重なり合う空間的区分が必要とされることを説明する。

(b)地表面を管理するためには、人間は協力すると同時に、対立にも関与せざるをえない理由を説明する。

- ・土地利用をめぐる対立の根拠を説明し、協力的な解決策を構想するための方略を提案する(農地を住宅地に転換する、国立公園に保護施設を建設する、森林地にリサイクルセンターを設立するなどの各産業の背後にある対立を解明する)。
- ・国家間および国内内部で対立が生ずる諸要因を認識し、それを説明する(希少資源をめぐる経済競争、国境紛争、文化的差異、戦略地点の支配)。
- ・宗教や資源、言語、政治的信念、その他の諸側面の地域的な類似性と差異性が、対立や協力を生起させていることについて、結論を引き出す。

(c)諸国の凝集と統合を規定している諸要因を記述する。

- ・各国の多様な形状を提示し、その形状が政治的凝集性に及ぼしている影響を説明する(細長い国土をもつイタリアとチリ、列島を形成する日本とインドネシア、正方形の国土をもつエジプトとスイス)。
- ・首都の象徴的意味を説明する(計画都市であり、またオーストラリアの首都でもあるキャンベラ、オランダの2つの首都の1つであり、また国際司法裁判所のような国際機関の中心地が置かれているハーグ)。
- ・各国に政治的対立が生じている要因を認識する(バルギーの言語と宗教、インドにおけるイスラム教徒とヒンズー教徒、独立して数十年しか経たないアフリカ諸国の多様なエスニック集団)。

(d)(ローカルからグローバルまでの)様々なスケールにおける地表面の区分を分析する。

- ・諸地域を比較し、地方、州、国家、国際の各レベルにおける地位の同格な政治空間について、その事例を認識する(カナダの郡と県、合衆国の郡と州)。
- ・国境を越えて組織された機関を比較し、それらの機関の社会的、政治的、経済的影響力を確定する(超国家的な協力関係、政治同盟、経済的グループ化、世界宗教)。
- ・ある大陸の国や州について、その発展の諸要因を説明する(領土と資源の獲得競争、自治権の獲得要求、ナショナリズム、独逸による支配の歴史)。

したがって、生徒は次のことができる。

(a)協力と対立が、社会的、政治的、経済的實在物の管理と発展に及ぼす影響を分析する。

- ・協力または対立が、地表面の管理域を規定していることを説明する(都市計画地域、学区、国家、自由貿易地域などの設定とその範囲の測定)。
- ・国境紛争の原因と文化集団の国内的対立を認識する(北朝鮮と韓国、スペインのスペイン人とマイノリティーのバスク人、ルワンダのアフ族とツツユ族の内戦)。
- ・下院議員選挙区境界が、変更される理由を説明する(法台上的変遷、人口の移動、エスニック集団や人種構成への配慮、政治権力の変化)。

(b)地表面における社会的、政治的、経済的實在物の広がり組織が、変化してゆく理由を説明する。

- ・帝国の空間的な勢力範囲と組織構造を解釈する(ローマ帝国、モンゴル帝国、カトリック教、大英帝国)。
- ・海岸線をもたない内陸国が存在する理由を説明する(ライバル国との戦争の結果、大陸の大きさによって生じる隔離、人種的文化的な分析状況に基づく隔離)。
- ・国連の諸機能と、様々なグローバル問題に対処している専門機関について記述する(平和維持、緊急援助、疾病予防)。

(c)地域外部の諸要因が、地域内部の利害関係に、経済的、政治的対立を引き起こすことがある理由を説明する。

- ・地域を変化させる要因として、新しい技術の導入や市場の広がり、資源に対する見方の転換を記述する(19世紀から20世紀にかけて、穀物や牛肉に対するヨーロッパの需要が高まった結果、アルゼンチンのパンパに起こった社会経済上の変化)。
- ・市場と資源の獲得をねらう国家的な野心が、その野心の対象地域に亀裂や分断を生じさせることがある理由を説明する(スズやタンクステン、ゴムなどの資源を入手するために、19世紀にインドネシアを植民地支配したフランス、1930年代の急増する人口増加の調整を図るために、リビアの海岸地帯を自国の領土にしようと構想したイタリア)。
- ・宗教間の対立や宗教の拡大が、地域内部に政治的、文化的な変化を引き起こすことがある理由を説明する(インドとパキスタンを成立させた1940年代のインド亜大陸におけるヒンズー教徒とイスラム教徒の分離、11世紀から12世紀にかけて十字軍が西ヨーロッパと南アジアの文化に与えた影響)。

スタンダード14：人間の活動は、いかに自然環境を改変しているか

<p>第4学年までに、生徒は、次のことを知り理解する。</p> <ol style="list-style-type: none"> 1.自然環境に依存する人間。 2.自然環境を修正する人間。 3.人間活動に適応を強いたり、人間活動を危険に曝すことがある自然環境。 	<p>第8学年までに、生徒は次のことを知り、理解する。</p> <ol style="list-style-type: none"> 1.人間が自然環境を改変することの帰結。 2.ある場所の自然環境の改変が、他の場所の変化をいかにして引き起こすか。 3.自然環境の改変に科学技術が果たす役割。 	<p>第12学年までに、生徒は次のことを知り、理解する。</p> <ol style="list-style-type: none"> 1.人間の改変にも適応できる自然環境の許容範囲内での、科学技術の役割。 2.自然環境の改変がもたらすグローバルな影響の意味。 3.適切なモデルと情報を応用して、環境問題を理解する方法。
<p>したがって、生徒は次のことができる。</p> <p>(a)人間の自然環境への適応のし方を記述する。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 図解表現を使って、大気圏や生物圏、岩石圏、水圏などの自然環境と、生徒の日常生活との関わりを示す。 ・ 人間の必要と欲求、自然環境の恵みをリストにする。地元のコミュニティや地域、州、または諸外国で得ることのできる自然の恵みを認識する(食料、きれいな空気、水、鉱山資源)。 ・ 地元の人々が自然へ依存している状況と、他州の人々の状況を比較し、それを説明する。 <p>(b)人間が自然環境を改変する方法を認識する。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 地元コミュニティにおける土地利用の変化の具体的事例を取り上げて、それをリストにする(荒野から農地へ、単一作物栽培の農地から複数作物栽培の農地へ、農地から家や店へ、工場または工業的土地利用から土地の放棄へ)。 ・ 地図やグラフを使って、都市の成長、輸送、農業技術の発展、新しい動植物種の侵入によって生じた地元コミュニティの自然環境の変化を図示する。 ・ 人間が自然環境を改変する方法とその目的を示したイラスト入りの冊子を作成する(灌漑プロジェクトの実行、住宅地やショッピングセンターを建設したり、作物を栽培する、また道路を建設するための土地の整理)。 <p>(c)人間活動が自然環境に及ぼす影響を評価する。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ かつて地元コミュニティでみることのできた動植物と現在でもみることのできる動植物とを比較し、それを図に表現する。また動植物相が、過去から現在にかけて変化してきた理由を推論する(気候、大気汚染、水質汚濁、人間の居住地の拡大)。 ・ 人間の営みを通じて自然の能力が高められた結果、地元のコミュニティや州、合衆国や諸外国の生活が改善されてきた事例を挙げて、それを説明する(土地生産性を上げるための灌漑農業や乾燥農法、侵食を防止するための森林事業、居住環境を保全するための洪水管理プロジェクト)。 ・ 地元コミュニティにおいて、自然環境が人間活動の圧力を受けている事実を具体的に指摘する。 	<p>したがって、生徒は次のことができる。</p> <p>(a)自然環境の改変が、環境に及ぼす影響を分析する。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 地球の自然環境を構成する4要素に、人間の諸活動が及ぼす影響をリストにし、それを記述する(大気圏:オゾン層の破壊、気候の変化、都市小気候の変化とその結果。生物圏:森林伐採、サバナの拡大、多様な生物種の減少とその結果。岩石圏:土壌侵食、土壌の炭化と酸化、カリ侵食、汚染された空気や水による風化の結果。水圏:海洋汚染、地下水面の低下とその結果)。 ・ 今後も継続するであろうエネルギー危機が、環境に及ぼす影響を推論する。 ・ 海岸の湿地帯にリクリエーション施設を開発する計画、または住宅を建設する計画が、環境に及ぼすであろう影響を評価する(フロリダのエバーグレイド、テキサスの南パドレ島、南カロライナの低地)。 <p>(b)ある場所の自然環境の改変が、他の場所の変化の原因にもなりうることを認識し、説明する。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ ある場所の環境変化が、他の場所に影響を及ぼすしくみを説明する(工場からの大気への排出物は、風下に位置するコミュニティの大気質に影響を及ぼす。また酸性雨は、風下側の生態系に影響を与える。河川システムに流れこんだ殺虫剤は、下流に位置するコミュニティの水質に影響を及ぼす)。 ・ 河川システムのある1箇所にダムや堤防を建設することが、そこよりも下流域に影響を及ぼすしくみを説明する(そのような建造物は、人間の水利を制限する、水力発電を可能にする、洪水を制御する、河川交通を改善する、生態系を変化させる)。 ・ 地図や表、グラフを作成し、世界のなかのある1地域の変化が、他の諸地域にも影響を及ぼすことのあるしくみを図解する(北アメリカの工業活動と酸性雨、チェルノブイリ発電所の事故と、アジア/ヨーロッパへの放射能の流出)。 <p>(c)科学技術が、自然環境を改変する人間の能力に与える影響を評価する。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 人類史上の科学技術の発達が、意図する意図しないに関わらず、環境にもたらす影響を分析する(化石燃料を利用する自動車、核廃棄物処理の問題を抱える原子力発電所、鉄製の鉱、農業用地の拡大)。 ・ 農業活動のために自然環境を改変する科学技術の役割を記述し、その行為が環境にもたらす影響をリストにする(化学肥料や殺虫剤の利用、近代的な耕作機械や技術の導入、穀物のハイブリッド化)。 ・ 過去も現在も同じように利用されている、自然環境の改変に寄与した技術革新の成果をリストにし、その意義を評価する(火力、蒸気、ディーゼル機械、電気、家電、爆発物)。 	<p>したがって、生徒は次のことができる。</p> <p>(a)自然環境を改変するべく人間の能力を拡大させてきた科学技術の評価する。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 人間活動の影響を吸収できる自然環境の限界を評価する(相乗効果やフィードバック作用、保持能力、限界値などの概念を使って、氾濫原へ堤防を建設する、古い森林を伐採する、あるいは乾燥地にゴルフ場を建設するなどの行動がもたらす影響を吟味する)。 ・ 地域内部の動植物相の多様性を衰退させる人間の役割を分析する(オンタリオ州西部の川や森に降り注ぐ酸性雨、海の生態系に流れ込む汚染物質、あるいは、北アメリカ北部海岸やフィリピン諸島での魚の資源がもたらす影響)。 ・ 自然環境を改変するために採られた100年前の方法と、今日の方法が、自然環境に及ぼす影響を比較する。またこれらのデータを基にして、今後の動向を見定める。 <p>(b)人間が、自然環境の変化に及ぼすグローバルな影響を説明する。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 意図する意図しないに関わらず、人間活動がもたらす空間的帰結を、とくにその帰結のグローバルな意味を記述する(全世界的な動植物種の絶滅、土壌の流出と堆積、熱帯土壌の侵食、居住環境の破壊、大気汚染、水循環システムの変化)。 ・ 地元のコミュニティ、または地域の景観変化がもつ肯定的否定的側面を、環境に対する人間の態度変化と関係づけて認識し、議論する(氾濫原の農地を農地に転換しようとする圧力、荒野を保全しようとする関心の高まり、歴史的保護の概念の広がり)。 ・ グローバルな環境変化にみられる特徴を吟味する。この変化は、人間活動の結果なのか、自然を原因とするものか、それとも二つの要因の組み合わせなのかを判断する(グローバルな環境変化がもたらす世界の温暖化、人間活動に起因する温室効果、自然活動に起因する大気中に浮遊する火山灰の量と地上に届く太陽光線の変化)。 <p>(c)自然環境の改変によって引き起こされるであろう環境変化のシナリオに対して、なんらかの解決策を構想する。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 周辺農地に投入される化学肥料の量がさらに増加した場合、あるいは集落の建設が氾濫原にまで拡大した場合に予想される河川システムの変化を認識する。 ・ 19世紀から20世紀にかけて人間が景観を大きく改変した事例を選択し、それぞれの事例にみられる自然環境の受容能力を比較する(合衆国、とくに高原地帯や西部、北東部における都市開発の例、郊外や住宅の農地への拡大)。 ・ 今日進んでいる人間活動の変化が、将来の環境に及ぼすであろう潜在的かつグローバルな影響をリストにする。また問題事例に即して、それぞれの影響を軽減するための方略を構想する(センターピット方式で灌漑用水を連続的にポンプアップすることで起きる地下水の減少は、栽培作物を変更し、新しい農業技術を導入することで軽減できる。中央アジアの灌漑プロジェクトに水を供給してきたアラル海の乾燥化と、それに伴う砂嵐の発生は、アラル海からの水の供給を止め、他の供給源を探すことで軽減できる)。

スタンダード15：自然システムは、人文システムに対していかに影響を及ぼすか

第4学年までに、生徒は、次のことを知り理解する。

- 1.自然環境の多様性は、人間の適応に、いかにして空間的パターンを作り出すか。
- 2.自然環境が、人間に可能性を与える機会。
- 3.自然環境による人間の諸活動の規制。

第8学年までに、生徒は次のことを知り、理解する。

- 1.自然環境の多様性に適応する人間。
- 2.多様な自然環境の諸特徴が人間に与えている可能性と、それぞれの場所での人間活動の規制。
- 3.人間活動に影響を及ぼす自然災害。

第12学年までに、生徒は次のことを知り、理解する。

- 1.人間活動を支持する能力を減衰させることのある自然環境の変化。
- 2.自然環境によって、ある場所に制約された人文システムへの対応方法。
- 3.自然災害に対する人間の見方や対応の方法。

したがって、生徒は次のことができる。

(a)自然環境の多様性に対する人間の適応のし方を記述する。

- ・自然環境に対する人間の適応のし方をリストにする(炊飯、住宅様式、農業活動、リクリエーション活動、食事、毎日の、季節の生活パターン)。
- ・地元のコミュニティ、地域または州に居住するネイティブアメリカンが営む伝統的な生活様式を記述し、それらを比較する。また、天然資源の利用のし方について結論を引き出す(ワッパローに依存する平原インディアン、五大湖地域の肥沃な土壌が生み出す作物に依存したイロコイ族、漁業に依存する北東部ならびに北西太平洋の人々)。
- ・地元のコミュニティや地域、または合衆国の様々な地域の住宅を撮影した写真を基に、建築資材の選択と建築様式を規定している自然環境を記述する。また、利用可能な建築資材に適応する過程で生み出された建築様式を記述する(グレートプレーンズの草の家、古代テキサスの薬草路として、合衆国東部の森林地帯でつくられた丸太小屋)。

(b)自然環境が人間に与える可能性を認識する。

- ・生徒の居住するコミュニティが自然環境から与えている利益を記述する(肥沃な農地で農産物を生かすを得る、地元の川で魚を獲る、嵐山で働く、天然の入江に位置する港、風光明媚で歴史的遺産のある旅行地、天然資源の利用に適した工業都市)。
- ・農業活動や住居形態、燃料消費、その他生徒の居住するコミュニティや州の諸活動に、天候や気候が及ぼしている影響を評価する(温度の幅、降水量の分布、生育期の長さ、嵐の期間、日照時間)。
- ・移住者が最初に引き寄せられる自然環境の諸特徴、また自然環境が今日の人間に与えている可能性を記述する。科学技術や文化の変化にともなって変化してゆく人間の環境に対する見方について、結論を引き出す。

(c)自然環境を規制している人間活動を認識する。

- ・生徒の居住するコミュニティや州、地域における人間の諸活動を、日や季節単位で、または永続的に規制している自然環境を記述する(農業やリクリエーション活動に対する天候、気候の諸影響、水の利用しやすさ、居住地域の拡大)。
- ・世界諸地域の気候上の特徴、また各地域の気候による人間生活の規制について記述する(永久凍土が広がる地域、年間200インチ以上の降水量のある地域、まったく雨の降らない地域の生活が、人間に与えている影響)。
- ・人間活動を規制している地形について説明する(人間の移住や移動を妨げてきた山中崖、沼、建築物の基礎としては強度に欠ける岩盤、農業や居住には傾斜がきつい斜面)。

(d)ある自然環境下で発生する自然災害を記述し、その位置を確定する。

- ・生徒の居住するコミュニティや地域、州で起きている自然災害の例を挙げ、それを定義する(洪水、暴風、竜巻、自身)。
- ・自然災害の位置、規模、頻度、人間への影響の各視点から、生徒の居住する自然環境において発生する災害と、類似した別の自然環境で発生する災害とを比較する。

したがって、生徒は次のことができる。

(a)自然環境の諸条件の下での人文システムの発展について分析する。

- ・生徒の居住するコミュニティ、または国内他地域のコミュニティにおける土地利用のパターンや経済生活、建築様式、建築物資、交通の流れ、リクリエーション活動、その他の文化的諸側面について、視覚的統計的データを収集する。また、これらの文化的事象は、自然環境の諸条件の影響をどの程度受けているかを確定する。
- ・様々な自然環境における農業生産システムを比較する(起伏の大きな丘陵地帯と起伏の小さな肥沃な土地、それぞれの農業的土地利用)。
- ・自然環境の望まれざる変化が、人間活動に与えるであろう影響を推測し、事態を緩和するための対応策を構想する(長期的な旱魃で水の供給が現在の半分になった場合、都市地域が洪水の被害を受けやすい状況の場合、人口過密地域に群衆が集中した状況)。

(b)様々な自然環境の諸特徴が、人間活動に及ぼす影響を説明する。

- ・多様な自然環境に対する人間の適応のし方について情報を収集し、自然環境が各地域の生活に与えている影響をまとめる(凍上現象や雪解け水による洪水、公共サービス施設の凍結、生育期間の短さ、覆せた土壌、輸送の妨げの沼地などのワンドラ環境の諸特徴に対して、シリアやアラブなどの高緯度地域の人々が適応してきた方法)。
- ・人間が自分たちの活動の位置を決定するとき、考慮に入れる環境の諸条件について事例を挙げて説明する(水の利用を考慮して、滝に沿って発展した初期のアメリカ工業)。
- ・人口分布と環境の質を表した地図を比較して、人口密度と環境の質との関係について記述する(資源分布、降水量、気温、土壌の肥沃度、地形、許容力)。

(c)自然災害が人文システムに及ぼす影響を記述する。

- ・合衆国と世界の諸地域における人間と自然災害との関係を記述する(オーストラリアや合衆国南部の乾燥地に住む人々との比較において、イチャピアの乾燥地に住む人々がおかれている科学技術、または経済発展の水準)。
- ・人間への影響の大きさを基礎にして、自然災害をランク付けする(災害の期間、生命の損失、経済活動への影響、社会的影響、災害が影響を及ぼす範囲)。
- ・人間が自然災害に備えるためのとっている方法を説明する(地震への備え、洪水多発地域では家を支柱の上に建てる、ハリケーン多発地域には避難ルートやシェルターを建設する)。

・生徒の居住する州、または合衆国の他地域の自然災害の発生状況を一定期間にわたって記録したデータを収集する。またそのデータを基づき、次のようなタイトルの主題図を作成する「月単位でみた州内及び国内の自然災害の発生地」。

したがって、生徒は次のことができる。

(a)人間活動を支持する能力を減衰させることのある自然環境の変化を、事例を通して分析する。

- ・地域の許容能力を記述し、評価し、環境の限界力を超えた場合に起こり得る結果を予測する(並北極圏に位置する、環境が破壊されやすいペリヤの経済開発がもたらした影響)。
- ・過去および現在の事例研究をおこない、人間の圧力に持ちこたえることのできる自然システムの能力限界を例示する。また、過度な開発のために、人口を支持する環境の能力が減退している状況を例示する(旱魃と疫病が広がるサヘル、気候雨脚が減少する中央アフリカ、砂嵐の被害を受けたグレートプレーンズ)。
- ・相乗効果、フィードバック、許容能力、限界値などの諸概念を用いてモデルを構想し、人間活動の影響を吸収することのできる自然システムの限界を記述する。

(b)「成長限界」の概念を応用して、自然システムが人文システムに課す限界に適応してゆく方法、あるいはそれを克服してゆく方法を提示する。

- ・自然環境の成長限界を記述し、環境の容量を拡大させる科学技術と人間の適応行動を明らかにする。
- ・植物の成長と集落の拡大を制約している土壌の条件と位置を記述する。また、各土壌類型の諸地域で成立し得る他の土地利用を提示する。
- ・成長限界が顕著な自然環境を認識し、これらの環境において人間存在を脅かしている諸条件を記述する。また、これらの制約を緩和するための方策を構想する(過度に寒冷で乾燥した、または過度に温暖で湿度な気候、山岳地帯と海岸地域の気候)。

(c)個人と社会は、各環境下の自然災害に対して多様な見方を抱いており、これらの自然災害に多様な方法で対応していることを説明する。

- ・個人と集団が、自然災害の前とその最中に、またその後にとった反応を収集し、世界諸地域の自然災害に対する多様な見方を要約する。
- ・地元コミュニティの自然災害に対する人々の態度や見方、対応を聞き取り調査し、調査結果にあらわれたパターンを説明する(信仰の影響、社会的経済的地位、過去の生活経験、その他災害に対する見方や対応を規定する諸要因)。
- ・自然災害の被害を抑制しようとする人間の営為とその効果を評価し、災害多発地域に居住する人々が環境に適応するためにとっている方法を説明する(大波の影響を受けやすい海岸地域を保護するために防波堤を利用する、環太平洋の陸地域では耐震建築技術が応用されている)。

スタンダード16：資源の意味、用途、分布、および重要性に生ずる変化

第4学年までに、生徒は、次のことを知り理解する。

- 1.再生資源、非再生資源、流動資源の特質。
- 2.資源の空間的分布。
- 3.日常生活における資源の役割

第8学年までに、生徒は次のことを知り、理解する。

- 1.資源の世界的分布と用途。
- 2.資源利用に関して様々な見方をもつ人がいること理由
- 3.資源の意味や利用の便、用途に影響を与える科学技術。
- 4.社会におけるエネルギー資源の基本的役割。

第12学年までに、生徒は次のことを知り、理解する。

- 1.人間の集落パターンに影響を及ぼす資源の空間的分布。
- 2.資源開発と資源利用の歴史的变化。
- 3.資源利用と資源管理を目的とした政策またはプログラムの地理的帰結。

したがって、生徒は次のことができる。

(a)再生資源、非再生資源、流動資源の違いを区別し、それぞれの資源が存在する位置を確定する。

- ・白地図に記号を配置し、非再生資源の産地を示す。また非再生資源の用途を説明する(化石燃料、鉱石など)。
- ・生徒とその家族、コミュニティーの構成員を調査し、学校や家庭、コミュニティーの1日当たりの平均的な資源消費量を測定する。またそれらを、再生資源と非再生資源、流動資源に分類する(再生:木、非再生:石油、流動:炭水化物)。
- ・様々な資源類型の特徴と資源の産地について、他の生徒に説明することを意図したドキュメンタリー作品の脚本をかく。

(b)資源産地と人口分布との関係性を説明する。

- ・地図を使って、経済活動と資源の関係性を記述する。また主な工業地域、および鉄鉱石や石炭、その他の天然資源の産地を認識する。
- ・地図を使って、資源と消費者を結びつける輸送ルートを書き記述し、それぞれのルートにおける輸送手段を認識する(船、パイプライン、はしけ、鉄道)。
- ・歴史的事例の研究を通して、資源の発見とその用途に影響を受けた集落パターンを説明する(19世紀後半に移住の中心地となるコロラドの鉱山町、18世紀に始まるアパラチア山麓の炭鉱地帯の都市と工業の発展)。

(c)生徒の日常生活において資源が果たしている役割と意味を記述する。

- ・地元コミュニティーで使用する電気が発電されている場所とその方法を記述する。またスケッチマップを利用して、発電に使われている原料の供給地を示す。
- ・白地図に、地元コミュニティーで広く使われている工業製品の原料供給地を示す(自動車、医薬品、衣服、食料)。
- ・資源の用途やその価値に注目して、生徒の居住する地域で使われている資源と世界の諸地域で使われている資源を比較し、その違いを簡潔に説明する(木材を燃料として利用するドミニカと、建築用材として利用する合衆国)。

したがって、生徒は次のことができる。

(a)資源の分布と用途の世界的パターンを記述し、分析する。

- ・石油や石炭、銅、鉄鉱石などの主要な埋蔵地を表した地図を作成し、これらの資源の世界的パターンについて議論する。
- ・ダイヤモンドや銀、金、タングステン、モリブデンなどの主要な埋蔵地を表した地図を作成し、これらの資源の世界的パターンについて議論する。
- ・調査対象となった資源の用途、および主要3資源について1900年当時と1990年の分布パターンを示し、両者の違いを説明する。

(b)資源利用が現代世界にもたらしている現状を記述する。

- ・石油や無煙炭、歴史炭、ダイヤモンド、銅などの主要資源について、現在の主要産地を地図に示し、それに産地と消費国を結ぶルートをかき入れる(ペルシャ湾から日本、韓国へ移動する石油、アフリカからベルギー、イスラエル、ニューヨークなどの消費地へ移動するダイヤモンド)。
- ・各国の生活水準と、資源確保の容易さの関係を議論する(大量のエネルギー資源や食料品、原材料を容易に確保し、それを加工して消費者物資を製造している国は、一般に生活水準が高い。その逆の国は、生活水準も低い)。
- ・資源の確保をめぐる競争と、地域間または国家間の対立現象の関係をみい出す(1930年代に満洲を占領した日本、1991年にクウェートを侵略したイラク)。

(c)資源利用に係わる多様な視点を評価する。

- ・資源の利用と酷使に関する人々の多様な態度を吟味する(電気自動車、水の供給、都市の公共交通機関、化石燃料の利用に対する、それぞれの人の態度)。
- ・環境保全局または関連機関の基準に基づいて、環境破壊の事例をリストにする。基準を満たすための将来の資源利用計画を提案する(古い森林地帯での過剰な森林伐採、合衆国西部におけるバッファローの減少、亜乾燥地域の土壌保全)。
- ・環境への影響という視点から、資源の採掘や資源利用の方法を吟味する(持続可能な林業や農業の実践、氷山から真水を手に入れる、都市廃棄物をリサイクルする)。

(d)資源開発と資源利用に科学技術が果たしている役割を認識

したがって、生徒は次のことができる。

(a)集落の空間的分布と資源の空間的分布の関係を分析する。

- ・集落パターンと、資源産地との関係性を記述する(東部アジアの農村を中心とする農業生産の組織化、北アメリカのコーンベルトの村や町、都市の空間的配置)。
- ・地域資源の発見と開発が、集落の形成を促すことがあることを説明する(石炭、ニッケル、鉄鉱石の発見にともなうシベリアの都市開発。鉱山資源や水力資源の開発にともない移住者が増大したオンタリオ北部やベックなどのローレンシア植民地)。
- ・資源が枯渇した結果、集落パターンに変化が生じた事例を記述する(コロラドの鉱山地域におけるゴーストタウンの成立、カナダの沿海県における漁業集落の滅亡)。

(b)世界の諸地域における資源や探検、植民、移民の相互関係を説明する。

- ・商業主義と帝国主義の発展がもたらした地理的帰結を説明する(16世紀から17世紀にかけてのスペイン人とポルトガル人のラテンアメリカへの植民、19世紀におけるオランダとアジアの勢力圏のアジアへの拡大)。
- ・資源の獲得を目指して行なわれた世界史上の探検や植民の事例を認識し、それを議論する(香料や貴金属を確保するために、インドや中国への交通路を発見しようとして行なわれたコロンブスの航海。毛皮や魚、木材、金を求めて、シベリアやアラスカ、カリフォルニアへ移住したロシア人)。
- ・ある時期には高く評価されたが、他の時期にはそれほど高く評価されなかった資源の事例を認識し、その理由を議論する(冷蔵庫が出現するまでは、食品の保存のために利用されていた塩や香辛料。内燃機関が発明される以前は、利用価値のない「地下オイル」として放棄されていた石油)。

(c)世界の諸地域で為されている資源利用に関わる政策決定を評価する。

- ・資源の消費量が各国の平均を遥かに上回る国について、その状況と理由を議論する(鉄鉱石を輸入しているドイツ、石油を輸入しているアメリカと日本)。
- ・様々な形態のエネルギーを開発し、利用してきたことの地理的帰結を説明する(再生資源、非再生資源、流動資源)。
- ・非再生資源の輸出に依存する国々の、短期的また長期的な経済見通しを吟味する(ナウルの銅産地が枯渇したときにナウル経済が受ける打撃、ノースコースアの森林の過剰伐採に起因する経済的社会的問題)。

(d)資源の用途に関連して、今日の重要問題を吟味し、それを認識する。

- ・原材料のリサイクルと再利用について、原材料ごとの特質と限界をリストにする。
- ・天然資源の保全方法を題材にした詩や演劇をかく。
- ・野生の動植物や湖沼など、地元の資源を保全するための計画を立案する（パワーボートの所有者が立案する保全計画と漁師が立案する保全計画、狩猟家が立案する保全計画と野生動植物を撮影する写真家が立案した保全計画、それぞれの見方）。

する。

- ・資源の探掘量の増加と、科学技術の発展との関係をみい出す（坑道を掘り進み巨大機械の利用、石油やボーキサイトを探索に使われる技術の発展）。
- ・資源の消費量と、科学技術の発展水準との関係をみい出す（ヨーロッパや北アメリカなど先進社会における1人当たりのエネルギー消費量の多さ。アフリカやラテンアメリカなどの発展途上国における1人当たりのエネルギー消費量の少なさ）。
- ・石油の探索において、衛星画像の技術が経済的に重要な意味をもつ理由を説明する（広大でかつ接近しにくい地域であっても、衛星画像の技術があれば、実験室内で予備的な調査を行なうことができる）。

(e)再生資源、非再生資源、流動資源の利用と管理に関わる長期計画を認識し、それに代わる新しい計画を提案する。

- ・石炭や石油、天然ガスなどの管理計画を立案する。
- ・現段階で知り得る化石燃料の供給可能年限を、資源の埋蔵量や消費量に関する様々な見積もりを基に予測する。また、化石燃料を使い果たして、代替エネルギーに移行するときの計画を立案する。
- ・水の保全と資源のリサイクルを進める計画を個人的に策定し、これから10年以内に可能性のある計画の変更と、その変更理由を推論する。

(f)人間社会の発展に、エネルギー資源が果たしてきた重要な意味を説明する。

- ・人間が新しい土地に移住するときに、木材や木炭、風力や水力などのエネルギー資源の存在が重要な意味をもつことを説明する（合衆国の西部、シベリア東部への人々の移住のとき）。
- ・社会が機能する上で、石炭や石油、天然ガス、原子力が果たす役割を認識する（輸送や工業生産に必要な動力を供給、建物の暖房と冷房）。
- ・太陽光や太陽熱など代替エネルギー資源を利用しようとする動きの広まりとその発展、またその動きが社会に及ぼす影響を説明する（水・大気の大質、エネルギー産業や工業生産活動に与える影響）。

(d)資源を再利用し、リサイクルするための方法を認識する。

- ・リサイクル可能な資源を確保するために、工業は立地戦略を変えつつあることを説明する（製紙工場、専理会社やカン会社、ガラスやプラスチック、ボトルの製造業者）。
- ・ローカルからグローバルまでの各レベルで、汚染された危険廃棄物を扱うことの地理的問題を議論する（廃棄物の移動、処理、加工、保管）。
- ・合衆国の諸州と外国のリサイクル法を比較し、資源管理に対する人々の態度を説明する（資源管理に対して本格的に取り組む法か、その種しのぎの法か、厳格な法か、緩やかな法か、強制力をもつ法か、自由放任的な法か）。

(e)資源利用に関わる政策またはプログラムを、様々な空間的スケールにおいて評価する。

- ・資源利用に関わる政策決定の地理的影響を評価する（早期の排水を規制したコミュニティ、各コミュニティのガラスや金属、プラスチック、紙製品の回収計画）。
- ・過去4代の合衆国大統領の政治成果を、資源管理政策に限定して主観的に評価する。
- ・発展途上国における資源の荒廃や枯渇の現状を、複数の視点から評価する（日本の企業家と国連食糧農業機関に所属する環境保全論者、それぞれの立場の人間が表明しているマレーシアの森林利用についての異なる見解）。

スタンダード17：過去を解釈するために、地理をいかに応用するか

第4学年までに、生徒は、次のことを知り理解する。

1. 場所と地理的意味の歴史的变化。
2. 場所に対する人々の見方と、地理的意味の歴史的变化。
3. 過去の人々や出来事に影響を及ぼした地理的背景。

したがって、生徒は次のことができる。

- (a) 場所の自然的特徴と人文的特徴の変化を記述する。
- ・ 生徒の居住する地域に建つ、様々なタイプの住居の写真を時代順に並べかえる。また時間とともに、家の規模や様式が変化してゆく理由を説明する(柱のバターン、人口学的変化、経済的条件)。
 - ・ 人々の就業形態を示したグラフを利用して、生徒の居住する州では生計を営む方法がどのように変化してきたかを読み取る(工業、農業、漁業、商品取引、政治)。
 - ・ 地域に生息する動植物の数の変化を図解した年表を作成する(人間が移住し、農業を始めたことに起因する。地域の植生の劇的な変化を読み取る)。
- (b) 生徒の居住するコミュニティの変化の過程を表現する。
- ・ 作成時期の異なる地図やイラスト、撮影時期の異なる航空写真を使って、コミュニティの土地利用の変化を促した諸要因を記述する(街道と道路の発達、人口の変化、土地利用の規制)。
 - ・ 一次資料と二次資料を基に、コミュニティの成長と発展、文化、土地利用のパターンに影響を及ぼした人々を認識する。
 - ・ 地域の高齢者に聞き取り調査をして、コミュニティのを取り上げた『その由来は』という物語を著すための基礎資料を得る。また地図や写真を使って、物語の内容を表現する。
- (c) 人間の移住や居住形態を規定する環境に対する人々の見方の変化を記述する。
- ・ 環境に対する人々の見方、移住のパターンに影響を及ぼした科学技術、または新たな資源の発見や枯渇について説明する(ペンシルバニア州の石炭、テキサスなどの諸地域における石油の歴史。大アメリカン砂漠に対する人々の態度の変化)。
 - ・ 一次資料と二次資料を基に、居住期間の長さや地域に抱く親密感とともに変化する、環境に対する人々の見方を記述する。
 - ・ 過去の子どもの生活を描いた物語を読み、当時の子どもたちの自然環境に対する態度を記述する。また当時の態度と、現代の子どもたちの態度を比較する。
- (d) 過去の人々や出来事に影響を与えた地理的背景を記述する
- ・ 地図や小説を使って、歴史的出来事を空間的にたどる(ボル・リアルの移動記録を読み、そのルートを通じたスケールにおいてたどる。南北戦争の主要な戦場の位置を特定し、その位置が戦争の進行過程に与えた影響を記述する)。
 - ・ 地図をもとに、昔の貿易ルートと、風向き、海流の方向を相互に突き合わせて、過去におけるこれらの関係を説明する(古代ヨーロッパ人の貿易ルートは、貿易風の風向きに反対する。イスラムの貿易船は、8世紀には季節風を利用してインド洋を渡った)。
 - ・ 次の問いに対する答えとなる、ある場所の自然的・人文的特徴を記述した文章、または視覚教材を用意する。「場所Xは、時期Yの頃、どのような様子だったか?」(生徒の居住する州について、世紀転換期の集落の様子と輸送ルートを示した地図を用意する)。

第8学年までに、生徒は次のことを知り、理解する。

1. 社会の空間的組織の歴史的变化。
2. 過去の出来事や状況に影響を及ぼした、場所や人間、資源に対する人々の多様な見方。
3. 過去の出来事や状況に影響を及ぼした地理的背景。

したがって、生徒は次のことができる。

- (a) 社会の空間的組織の歴史的变化を記述する。
- ・ 都市の位置の特徴、立地または機能の違いが分かるように、各時代ごとの都市の位置を地図におとし、合衆国における都市の成長過程を読み取る。
 - ・ 世界諸地域の各時代ごとの都市の内部構造と形態、機能の変化を読み取る。
 - ・ 世界諸地域の各時代ごとの人間の居住パターンを記述して、それらと比較する(中世ヨーロッパと近代ヨーロッパ、植民地時代の北緯と南緯、オーストラリアの南西部と中国の南西部)。
- (b) 過去の出来事において、空間的な見方または環境的な見方が果たしてきた役割を評価する。
- ・ 過去の人々の態度が、合衆国の居住パターンに及ぼした影響を説明する(フロリダに対して白人の見方、アラスカに対してこれまでに与えられてきた移住地としての再評価)。
 - ・ 19世紀のアメリカについて記述された文学作品、またはその他の資料の表現を基にして、広告や宣伝文が合衆国の西部に対する人々の見方を変化させるのに果たしてきた役割を理解する。
 - ・ 天然資源に対する競争を促進させている、ローカル、地域、国家、グローバルの各レベルにおける資源に対する多様な見方を説明する(ネイティブ・アメリカンと植民者との対立、1950年以降のラスカへの移住者とインディットの対立)。
- (c) 主要な歴史的出来事に影響を及ぼした自然的、人文的要因を分析する。
- ・ 自然的特徴や技術水準、戦地の変化と、戦争の結果との関係をみい出す(フォーツ谷の天候とアメリカ革命の結果)。
 - ・ アフリカの人々が南北アメリカに強制的に連行され、奴隷とされた自然的、人文的条件を読み取る(安価な労働力の必要性、三角貿易がもたらした利益、植民地と輸送の位置)。
 - ・ 地図を使って、合衆国の様々な土地区画システムを認識する。また今日のような景観の形成に、このシステムが果たしてきた役割を評価する(ジョージア州のように土地境界制度に基づいて形成された景観とその歴史と、アイオワ州のように長方形に土地区画された景観とその歴史を比較する)。
- (d) 歴史的出来事に関係している極めて重要な自然事象をリストにし、それを記述する。
- ・ 世界史上の軍事作戦で極めて重要な意味をもつ山道をリストにして、その位置を地図に表す。またこれらの山道のもつ意味を議論する(カイバール、パルマ、リナール)。
 - ・ 合衆国史で極めて重要な意味をもつ渡し場をリストにして、その位置を地図に表す。またこれらの渡し場のもつ意味を議論する(テラウエ川の渡津点に位置するトレントン、ワシントン州のタコマ水道)。
 - ・ 合衆国の移住者にとって極めて重要な意味をもつ峡谷や泉、その他の水文事象をリストにして、その位置を地図に表す。またこれらの水文事象がもつ意味を議論する(テラウエ峡谷、カンバーランド峡谷、オガララ水脈、グレートプレーンズの自噴井)。

第12学年までに、生徒は次のことを知り、理解する。

1. 空間的变化の過程が、出来事や状況を規定するしくみ。
2. 場所、環境に対する人々の見方の変化は、人間の空間的行動をいかに規定しているか。
3. 地理的状況が歴史的出来事でもたらした主要な役割。

したがって、生徒は次のことができる。

- (a) 空間的变化が、歴史に影響を及ぼすしくみを説明する。
- ・ 現象の空間的拡散の過程と、接触した地域への影響を読み取る(その例として世界的な広がりが、北アメリカからヨーロッパ、アフリカ、アジアへの喫煙の習慣の拡散)。
 - ・ 地図やその他の情報を基に、合衆国の地域的統合を促進させた全米輸送システムの発展過程を記述する(19世紀初期における運河システムの確立、1860年代における大陸横断鉄道の建設、20世紀中期における全国的規模での州際道路システムの整備)。
 - ・ 20世紀全体を通じた移民の大きな流れと、それに対抗する形で、南部の農村から北部や西部の中心都市へ移動するアフリカ系アメリカ人の流れについて、これらの人口移動がもたらした地理的影響を読み取る。
- (b) 地理的事象に対する人々の見方の変化が、人間社会に変化をもたらすしくみを吟味する。
- ・ 環境や資源の利用に関する各宗教の態度を比較する。また世界的にみた経済発展のパターンと文化的対立、またその逆に、社会統合に対してはたらく宗教の影響を吟味する。
 - ・ 事例研究に基づき、科学技術が自然に対する人間の統制力を高めてきた事実を、また科学技術が土地利用のパターンを変化させてきた事実を、図解を用いて説明する(大規模でとらえたウクライナと中国北部の農業、ロシアの鉄道網、合衆国南西部のセンターピット灌漑)。
 - ・ 敵国に包囲されたロシア、という見方が表現されている地図を用意する。このような見方が、ロシア(ソ連)の外交政策に及ぼした影響を吟味する。
- (c) 歴史的出来事または歴史的運動の展開過程に影響を及ぼした自然事象と人文事象を分析する。
- ・ 19世紀から20世紀にかけての経済史と政治史において、帝国主義と植民地主義、脱植民地主義が果たした役割とその一般的意義を評価する(植民地を組織するとき、また後に植民地が独立国となると、アフリカに存在する政治的境界を無視したヨーロッパ人。ヨーロッパ人がアメリカを植民地化するときに存在した原住民の神話)。
 - ・ 18世紀後半から19世紀初期のイギリスで、産業革命が成立した歴史的地理的要因を吟味する(当時そこで利用された資源や資本、労働力、市場、科学技術)。
 - ・ 飢饉や大規模な難民を発生させる自然的、人文的要因を評価する(1845年から1850年までのジャガイモ飢饉にともなうアイルランド人の苦境、一定期間のサイクルで発生する中国の飢饉、1970年代から80年代にかけてサヘルで起こった旱魃と飢饉)。

空間的世界	場所と地域	自然システム	人文システム	環境と社会	地理の効用
-------	-------	--------	--------	-------	-------

スタンダード18：現在を解釈するために、また将来の計画のために、地理をいかに応用するか

第4学年までに、生徒は、次のことを知り理解する。

1. 地理的状況の動態的性格。
2. 世界観を規定する人々の見方。
3. 社会問題、環境問題の空間的次元。

第8学年までに、生徒は次のことを知り、理解する。

1. 自然システムと人文システムの相互作用は、地球の現在と未来の状況をいかに形づくるか。
2. 地理的状況に対する多様な見方は、将来の計画にいかに影響を及ぼすか。
3. 地理的見方を応用して、地理的知性に基づいた意思決定を行い、社会問題や環境問題を解決してゆく方法。

第12学年までに、生徒は次のことを知り、理解する。

1. 人々の多様な見方は、地球資源の利用と管理をねらいつける政策の形成に、いかに影響を及ぼしているか。
2. 空間的側面と環境的側面から捉えた現代の諸問題。
3. 問題の分析と意思決定に、地理的知識や技能、見方を応用してゆく方法。

したがって、生徒は次のことができる。

(a) 地理的状況の変化を認識する。

- ・ 人口増加と資源利用について情報が示されたグラフを解釈し、両者の関係性を記述する。
- ・ 風刺漫画または物語を作成し、資源管理の方法と資源管理が重要とされる理由を図解する(土壌保全の事業は、現在の農業生産性を次世代にまで持続させるのに役立つ。非再生資源をリサイクルして使うのは、次世代の資源を確保することにつながる)。
- ・ 年表と視覚表現を使って世界人口の急激な増加を示す。

(b) 世界観の多様性を規定している人々の見方の多様性を記述する。

- ・ 情報検索表を使って、同じ場所、同じ環境、同じ出来事に対して抱く人々の多様な見方が表現されている情報の整理を試みる(多様な見方が現れた地図を吟味して、多様な世界像を理解する)。
- ・ 世界の子どもたちの多様な生活ぶりを、人生や教育、生き甲斐などに対する個人の感覚または態度、男子と女子の違い、などの各視点から比較する。
- ・ 次の問いに妥当性のある答えを導き出す「グローバルな環境危機は実際に存在するのか?、それはなぜ起こったのか?」

(c) 知識に基づいて、自然-社会問題に対する意思決定を行なう。

- ・ 合衆国の諸地域で生起している人為的な変化を記述し、未来への影響を予測する(ニュージャージー州沿岸部の湿地帯の開発・保全をめぐる論争)。
- ・ 環境問題に対する複数の解決策とそれぞれの解決策から予測される帰結を提示し、それについて議論する。議論を踏まえて、最善の解決策を決定する(地元コミュニティでプラスチック製の牛乳容器をリサイクルする最善の方法を考える)。
- ・ 社会問題を地図に表現して、その問題の空間的側面について分析する(都市地域における世帯収入の分布を示した地図を読み取り、その地域の失業率につ

したがって、生徒は次のことができる。

(a) 自然システムと人文システムの相互作用を分析し、地球上の現状について、その原因と結果を理解する。また、未来の状況を予測する。

- ・ 発展途上国の都市生活を比較し、経済、社会、政治、環境の変化の相互関係を吟味する。
- ・ 幼児死亡率、農村の貧困、病院、医療施設の普及について示したグラフと地図を用意し、都市と農村では異なる医療サービスや水の供給、衛生施設の利用のし易さを記述する。
- ・ 20世紀の主要なエネルギー源として、石油、石炭、原子力、太陽を利用することの地理的影響を評価する。

(b) 複数の視点を統合して、現代の地理的問題を分析し、それを評価する。

- ・ 同一の地理的問題をめぐる、異なる見解をもった二人の人間が会話している場面を描く(国有林の利用方法をめぐって議論している森林労働者と環境保全論者。発展途上国の性差に基づく分業をめぐって議論している男性と女性)。
- ・ 移民の立場をロールプレイし、そのような状況下で形成される人間の感情、または新しい国に対する人々の見方を記述する。また、環境に対する人々の信念や態度、価値観を尊重しつつ、新しい環境に彼らの生活を適応させるための方法を記述する。
- ・ 地理的側面をもつ社会、経済、政治、環境の各論争問題について、生徒自身と他者の見方を調査させる。それを踏まえて、本論争問題に関するレポートを作成し、実行されるべき解決策を知性的に判断する(犯罪や少年非行、貧困、大気汚染の各問題に対する解決策)。

(c) 人間活動と自然システムの空間的組織について分かったことを表現する。また、それらの知識に基づいて、知性的に判断する。

- ・ 次のような場合の空間的組織の将来的状況を記述する。

したがって、生徒は次のことができる。

(a) 様々な見方が反映した、地球資源の利用と管理を支援する諸政策を構想する。

- ・ 持続的な発展に関して異なる見解をもつパネラーが出席する公開討論会を想定する。そして、それぞれの立場の考え方に依拠したときの、予想される結果を説明する(熱帯国の材木需要に応えて、インドネシアの熱帯雨林を伐採することの是非。オーストラリア東部のグレートバリアリーフ周辺の海岸でリチルを採掘することの是非)。
- ・ グローバル経済の変化が、富裕層と貧困層の生活に及ぼす地理的影響とその程度を説明する。また、発展途上国における都市生活と資源利用、政治経済権力に対する人々の参入機会には、不公正があることを例示する(アフリカ、アジア、南アメリカの諸都市)。
- ・ 地図やグラフ、新聞の切り抜きなどの多様な情報源を活用して、自然災害が先進国と発展途上国に及ぼす影響を記述する。またこれらの情報を基に、災害に対する公的私的に対応状況を理解し、災害の再発に備えて策定された政策を評価する(1991年に日本西部の雲仙岳で起きた噴発と、1991年にフィリピン・ルソン島のピナツボ火山で起きた噴発、1993年にミシシッピ川流域で発生した洪水と、1993年にライオン湖で発生した洪水、1992年のハリケーン・アンドリューによる洪水と、1992年の季節風によるパングラデシュの洪水を、それぞれ比較する)。

(b) 空間的側面をもったローカル問題、または地域的問題の解決策を構想する。

- ・ 大規模な自然災害から人命と財産を守る計画を構想する(地図を使って、標高の低い島々がハリケーンに襲われた場合の避難計画を示す)。
- ・ 複数の地図または地理情報システムを使って、土壌や地下水、排水、水源、その他に関する情報を収集する。これらの情報を活用して、都市地域でゴミ処理場を建設するのに適した場所を選定する。
- ・ 都市内部に新しく建設されたスポーツアリーナの観客を輸送する大量交通機関を構想する。その際には、人々の

いて結論を引き出す)。

現在の状況、すなわち、消費や生産、人口増加のパターンが持続した場合。現在の消費パターンが持続するが、リサイクルや新しい鉱山技術の研究が進展した場合。生徒個人の考えや予測が実行可能になった場合。

- ・地理的問題を分析し、ある行動案を提起している勧告を擁護する議論を展開する(ダムや貯水池を建設する、商業地域を活性化させる、大量鉄道輸送機関を整備する)。
- ・大都市の環境の質の改善をねらいとした革新的計画を立案し、その勧告内容を地図に表現する(緑地帯、輸送道路、歩行者専用道路、自転車専用レーン)。

居住地や既存の輸送施設、交通機関の輸送能力などの諸条件を考慮する。

(c)地球の自然、人文システムの各視点から、現代の諸問題を分析する。

- ・土地の侵食と砂漠化を、自然システムと人文システムの相互作用の結果として説明する(自然システム:土地の乾燥、早魃、乾燥化、人文システム:集落を支える土地の耕作能力を越えた人間の行動)。
- ・先進経済国における人口の増加または減少が、人文システムと自然システムに及ぼす影響をリストにする(高齢者の就業問題、資源の過剰消費、経済市場の縮小)。
- ・世界の気温が華氏3度上昇した場合、人間またはその他の生物に、あるいは自然システムに予想されるシナリオを構想する(植物や動物性プランクトンへの影響を含む)。

(d)地理的知識と地理的技能を駆使して、問題の空間的状况を分析し、意思決定を行なう。

- ・地域資源を枯渇させた現行の経済活動を、持続可能な他の経済活動に転換させるための方略を構想する(漁業資源が枯渇してきたカナダ大西洋沿岸の漁村に対して、漁業に代わる経済活動を提案する。オガララ帯水層の水に依存してきた灌漑農業地域に対して、農業に代わる経済活動を提案する)。
- ・世界の特定地域について調査した国家機関の模擬報告書を作成する(世界または地域的広がりからみた諸国の位置や分布、国際関係のパターンを模倣する。次に国境や地形、気候パターン、生態系、人口分布、人口密度をはじめ、国内の都市配置や通信網を記述する。最後に、経済的・社会的・政治的發展を遂げるのために望まれる持続可能なアプローチを提示し、地域の将来像を評価する)。
- ・先進国または発展途上国における観光業の実態を調べ、資源利用をめぐる意見の対立、地元住民にとっての観光業のメリットとデメリット、様々な視点からみた観光業のコストと便益を把握する。最後に新しい場所に観光業を興すことについての賛否を示した声明書を作成する(ダイビングショップの経営者、ホテル従業員、観光業者、地元の漁師、それぞれの視点からみた観光業)。

Ⅶ 全米歴史スタンダード：歴史フレームワークの研究

－構成原理と方法の分析・考察，資料－

田 中 史 郎（岡山大学教育学部）

はじめに

本報告書は、連邦法に基づいて、歴史スタンダードのための全米協議会（National Council for History Standards, NCHS）によって作成された「歴史のためのナショナル・スタンダード」（National Standards for History, 以下、全米歴史スタンダードと呼ぶ）の構成原理と方法分析と考察、基本資料（翻訳）の提供を意図している。歴史スタンダードのための全米協議会（NCHS）による「全米歴史スタンダード」の特徴は、第一に、「社会科」ではなく、地理、歴史、公民・政治、というように学問的領域別に作成されていることである。第二に、K-12年間の歴史教育カリキュラムである。K-4年、5-12年（5-8年、9-12年）が段階をなして作成されている。それは、後述する4、8、12学年において一定水準の学力を習得して進級させるための全国的評価制度の創設と表裏の関係であろう。第三に、アメリカでは全国社会科協議会（NCSS）も独自の「社会科」カリキュラム基準を1994年に作成している。NCHSの「歴史スタンダード」を行政版というならば、NCSSの「社会科スタンダード」は民間版、といえよう。ただし、NCHSのスタンダードの作成にはNCSSも構成団体の一員として参加している。本論の構成は、1.全米歴史スタンダードの成立過程、2.全米歴史スタンダードの資料的検討、3.全米歴史スタンダードの概要、4.資料編（翻訳）、参考文献、となっている。

1. 全米歴史スタンダードの成立過程

1983年4月、レーガン政権下、ベル連邦教育省長官委嘱の「教育における優秀性(エクセレンス)に関する全米委員会」は2カ年の作業を終えて、報告書「危機に立つ国家」(Nation at Risk)を提出した。この報告書において、5つの教育改革の勧告がなされた(参考文献<1>、以下<>のみ記載する)。

89年に就任したブッシュが大統領はレーガン政権の課題を引き継ぎ、90年9月に全米州知事を招集して、「教育サミット」をヴァージニア州立大学で開催した。国政の重大事について大統領が全米知事を集めて相談したのは史上3回目である(1908, 1933に次ぐ、参考文献、佐藤p99)。80年代の教育改革は州主導のもとに進められてきていたことが背景にあった。ヴァージニア州知事クリントンが副議長を務めた。91年年頭の大統領教書は、連邦教育局と州知事の共同による「六つの全米目標」(National Education Goals)を発表した。それは、①就学率100%達成、②高校卒業率90%達成、③4、8、12学年において5教科(英語、数学、理科、歴史、地理)において一定水準の学力を習得して進級させる、④数学と理科の学力で世界一とする、⑤成人の識字率の向上と生涯学習、⑥全学校の麻薬・暴力からの解放と規律ある学習環境、である。91年3月にブッシュ大統領は「アメリカ2000-教育戦略」を宣言し、5教科の基準の開発と達成テストの開発を提起した。これは、世論に強く支持された。これを受けて、91年7月には教育の全米目標委員会(National Education Goals Panel)が設置された。(議長はコロラド州知事 Roy Romer, 州知事6人(民主党、共和党各3)、大統領府から4人、職権外4人で構成)。この委員会に対して、92年1月24日に「教育基準及

び全米テスト協議会」(National Council on Education Standards and Testing; Rey RourとBarrol A. Campbelが共同議長, 1991に設置)は, 「アメリカ教育基準の向上 (Raising Standarrds for American Education)」を答申した。5教科ナショナル・スタンダードの各作業部会報告, ナショナル・スタンダードと学力評価制度はセットされなければならないこと, 連邦と州・地方の政策開発のための協同などについて提言した(〈5〉)。

93年に大統領に就任したクリントンはブッシュ政権の教育政策を継承しつつ, ブッシュ大統領の教育改革6目標に, 教師教育・教師の専門性の開発および父母の教育参加の2項目を加えた。また, 教科を7教科(公民・政治, 芸術)に拡大して, 2000年までに学力達成することを目標とした。1994年4月22日に「目標2000; アメリカ教育法 (Goals 2000; Educate America Act)」を103回議会に提案した。この法律において, 国家教育目標の8項目, 国家的教育改革の指導・基準・評価, 州及び地方の教育の体系的改革, 両親の援助, 技術国家基準委員会, 国際教育計画, 安全な学校, 少数者の市民教育, 教育研究の改善, などのテーマを含んでいる。「教育目標, 基準, 評価」については, 国家教育目標パネル (NEGP), 国家教育基準および改善協議会 (NESIC), 技能国家基準委員会 (National Skill Standards Board)の制度の制定を含んでいる(〈6〉, 〈7〉, 〈2〉)。

「歴史のためのナショナル・スタンダード」(歴史スタンダードのための全米協議会), 「ナショナル・スタンダードー生活のための地理」(地理教育スタンダード・プロジェクト), 「公民・政治のためのナショナル・スタンダード」(公民教育センター)は, 1994年に作成された。

このアメリカ教育法の制定を受けて, 「各教科(9教科)でのスタンダードの作成がなされてきている。1996年までにほとんどの州が教育スタンダードを作成または作成中である。さらに基準に対応した学力テストの作成を進めている」(〈3〉)と報告されている。

2. 「全米歴史スタンダード」の資料的検討

「全米歴史スタンダード」(National Standards for History)は, 下記の「表1 全米歴史スタンダード基本文献資料比較表」に示す5部作からなる。即ち, ①基礎編, 1994年刊, ②K-4学年拡大編, 1994年刊, ③5-12学年合衆国史, 拡大編, 1994年刊, ④5-12学年世界史, 拡大編, 1994年刊, ⑤基礎編, 1996年刊である。これらの5部の資料を比較検討すると, 次のことが言える。

- (1) 基礎編は, 1994年版と96年版には内容の変化は全くない。これらの5部作の他に「改訂版」があるのかどうかは未確認である。
- (2) 下線「基準の開発」を含む章は, 「教養ある市民のための歴史の意義」「スタンダードの定義」「開発の評価基準 (criteria)」「スタンダードの開発(合衆国史の時代区分, 世界史の方法, 世界史の時代区分, 歴史的な理解, 歴史的な思考, 歴史的な理解と思考を統合したスタンダード, 質問)」「政策問題」などの総論である。
- (3) 拡大編は, 基礎編に比較して, 第2章において「思考」の達成事例を, 第3章において「スタンダード=理解+思考」の「達成事例」(Examples of student achievement of standards)を, それぞれK-2, 3-4; 5-6, 7-8, 9-12の段階ごとに例示している。スタンダードごとに具体化された膨大な達成事例は, 歴史理解に関する論争を呼び起こした。また, 合衆国史および世界史の拡大編は, 第4章にそれぞれ「教授資料」を“media” “printed sources” “teaching materials”に分類して, 資料を紹介している。
- (4) 「歴史スタンダード全米協議会」(National Council for History Standards)は30人の構成員からなる「全米歴史スタンダード・プロジェクト」の責任母胎であり, 全米歴史教育センターはそ

の事務局である。カリフォルニア大学名誉教授（教育学）Charlotte Crabtree, カリフォルニア大学教授（歴史学）Gary B. Nash が共同議長となり、また、カリフォルニア大学全米歴史教育センターの副所長の Linda Symcox がコーディネイターとなった。参加団体は34団体に及んだ。組織的な中心団体は、州教育長協議会、管理およびカリキュラム開発協会、社会科全国協議会、州社会科専門家協議会、アメリカ歴史協会、アメリカ歴史家団体、歴史教育全国協議会、歴史教育者団体、世界史協会である。

表1 米国歴史ナショナル・スタンダード基本文献資料比較

① 基礎編, 第一版 1994, 237頁	② 拡大編, K-4, 1994, 89頁	③ 拡大編, 5-12, 合衆国史 1994, 280頁	④ 拡大編, 5-12, 世界史 1994, 326頁	⑤ 基礎編, 1996, 225頁
第I部：歴史（K-4）のナショナル・スタンダード 第1章：K-4年の歴史スタンダードの開発（教養ある市民のための歴史の意義，K-4年の歴史の事例，スタンダードの定義，基準開発の基本的指導原理 第2章：歴史的思考のスタンダード 第3章：K-4年の歴史のスタンダード 第II部：合衆国史及び世界史（5-12）スタンダード 第1章：合衆国史及び世界史スタンダードの開発 第2章：歴史思考のスタンダード 第3章：5-12年の合衆国史スタンダード 第4章：5-12年の世界史スタンダード 付録	第1章：K-4年の歴史スタンダードの開発 第2章：歴史的思考のスタンダード 第3章：K-4年の歴史スタンダード 付録	第1章：合衆国史スタンダードの開発 第2章：歴史的思考のスタンダード 第3章：合衆国史スタンダード 第4章：合衆国史のための教授資料 付録	第1章：世界史スタンダードの開発 第2章：歴史的思考のスタンダード 第3章：世界史スタンダード 第4章：世界史のための教授資料 付録	第I部：歴史（K-4）のナショナル・スタンダード 第1章：K-4年の歴史スタンダードの開発 第2章：歴史的思考のスタンダード 第3章：K-4年の歴史スタンダード 第II部：合衆国史及び世界史（5-12）のナショナル・スタンダード 第1章：合衆国史及び世界史スタンダードの開発 第2章：歴史的思考のスタンダード 第3章：5-12年の合衆国史スタンダード 第4章：5-12年の世界史スタンダード 付録

- ① National Standards for History. Basic Edition : National Center for History in the Schools. LOS ANGELES, CA. : SPONS AGENCY Department of Education. DC. : National Endowment for the Humanities (NFAH). Washington, DC : 1994, 237p.
- ② National Standards for History ((K-4) ; Expanding Children's World in Time and Space, Expanded Edition, including Examples of Student Achievement for Grades K-2 and 3 - 4. 1994, 89 p ; 著者 ; Grabtree, charlotte ; Nash, Gary B.
- ③ National Standards for United States History. Exploring The American Experience Expanded Edition : Including Examples of Student Achievement. 1994, 280p.
- ④ National Standards for World History : Exploring Paths to the Present. Grades 5 -12, Expanded Edition : Including Examples of Student Achievement. 1994, 326p.
- ⑤ National Standards for History. Basic Edition : National Center for History in the Schools. LOS ANGELES, CA. : SPONS AGENCY Department of Education. DC. : National Endowment for the Humanities (NFAH). Washington, DC : 1996, 225p.

3. 全米歴史スタンダードの概要

(1) 全米歴史スタンダードの目的

スタンダード開発の目的は、第一に、全ての生徒に機会を公正に保障することである。「(1)全生徒が、何を知り、何をなすことができすべきであるかに対する高い期待を確立すること、(2)

その達成の構成要素を明確にすること、(3)最も重要なことは、教育において全生徒に提供されるべき学習の機会と財源における公正さを高めることである」。そのための、教師の専門性の向上と生徒のための教科書及びその他の学習教材の提供の重要性を指摘している。

第二に、歴史のための適正な授業時間の確保である。5学年から12学年の間に、合衆国史、世界史をそれぞれ最低3年間の学習の必要性を提起している。現状は、17州が合衆国史を3年間、14州が世界史を2年間以上、内6州が3年間である。第三は、州および地方のカリキュラム計画の多様性に適応することである。「図2 歴史スタンダードの要素と構成」(後掲参照)は、州および地方における履修学年の違いを考慮して、幅を持たせたスタンダードの設定をしている。

(2) 歴史スタンダードの概念

スタンダードは、次のように「定義」されている。スタンダードは、全ての生徒が習得する目標(goals)を明示するものである。歴史には、二つのタイプのスタンダードがある。一つは歴史的技能である。歴史的思考技能は、生徒が、「証拠の評価、比較や因果の分析、歴史記録の解釈、現在の生活における見識ある判断を基礎づける健全な歴史的論証及び展望の公正」を可能にする。第二は、歴史的理解である。「歴史理解は国民や世界の歴史について生徒が何を知るべきかを明確にすることである。これらの理解は、少なくとも5領域における人間の願望、努力、達成と失敗から導き出される。すなわち、社会的、政治的、科学・技術的、経済的及び文化的(哲学的・宗教的・美的)領域である。また、歴史的理解は、現代の市民が直面している同時代的論争問題及び課題の分析に必要な歴史的展望を生徒達に準備する」。さらに、「歴史的思考と歴史理解とは、それぞれ独立して発達するものではない。より高いレベルの思考はより高い歴史理解に依存し、また関連している」。このような理由から、第3章、4章において示されているスタンダードは、「歴史的理解」と「歴史的思考」の統合として示される。

(3) 教科論

1) 目標原理：歴史教育の目標は、「教養ある市民」の教育であるとする。それは、単なる政治教育にとどまらず、民主的社会の構成員として不可欠の教養である。(資料編, 1. 参照)

2) 内容構成原理：

①「教養ある市民のための歴史教育」を具体化する歴史教育の内容は、「歴史的理解」と「歴史的思考技能」の二つの要素によって構成される。「歴史的理解」は、「歴史は、人間の多様な活動における願望と努力を数え上げそして分析する、広範囲の統合された領域である。社会的、政治的、科学・技術的、経済的、および文化的。家族、コミュニティー、州、国家、および世界の種々の人々について探求する歴史学習は、現実の人々の生活、願望、闘争、成功と失敗の中に、同時にこれらの生活の全局面に生徒を引き入れる」と説明している。

②「歴史的思考技能」については、「生徒は何を知るべきかという規定—すなわち、全生徒が習得すべき合衆国及び世界の歴史を理解すること—を超えて、生徒は彼らの理解を証明し彼らの知識を生産的な方法で応用するためには何ができないかを探求することが本質的なことである」として、「生徒が自己の歴史理解を証明する」ための歴史的思考技能として年代的思考(chronological thinking)、歴史的理解力(historical comprehension)、歴史的分析と解釈(historical analysis and interpretation)、歴史的調査(historical research)、歴史的な論争問題の分析と意志決定(historical issues-analysis and decision making)の開発をあげている(「表2 全米歴史スタンダード：歴史的思考技能5-12」、および資料編、〈2〉歴史的理解と歴史的思考技能、参照)。

- ③ 歴史的理解と歴史的思考技能の統合：歴史的思考技能は「真空状態で発達したりあるいは表現することさえできない。これらの技能のそれぞれが機能するためには歴史的内容を必要とする」。歴史スタンダードは歴史的理解と思考技能の統合として表現される（図1参照）。

(4) カリキュラム

1) カリキュラム開発規準 (criteria)

カリキュラムの開発規準 (criteria)として、12の規準を示している。これらの規準には、歴史的に形成されてきた教科教育的諸原理が列挙されている。その特質を要約するならば、①学校におけるすべての段階における「知的権威」「最高の学問性」を追究すること(1, 3), ②事実・日付・名前の受動的な学習でなく、歴史の型、および因果関係の認識を内容とする能動的な問いと学習を原理とする(1, 3, 4), ③歴史学的方法に照らして理にかなった歴史的思考の諸原理および基本的資料操作技能を学習する(6, 7), ④世界史および合衆国史の幅広い領域のテーマと特定の間・事象の事例的研究, 地方・地域・合衆国, 世界のバランスのある有効な構成(5, 13), ⑤歴史は、人間文化の基本的諸側面を統合すべきである(14), ⑥合衆国史は、国民の多様性と共通性、歴史の過程で形成されてきた市民的同一性・共有する市民的価値、価値対立を狭める貢献と闘争、など公民教育に貢献すべきである。多様な文化・集団を認め、その葛藤の歴史に正対する学問的、知的誠実さ(8, 9, 10), ⑦世界史は、多様な文明の歴史と価値を扱うべきである。また、文明の相互作用に注意を払うべきである(15), ⑧合衆国史と世界史の関連性、内容の関連、構成方法の類似性、地球的文脈における合衆国史、世界史の部分としての合衆国史(11), 第二次大戦後の国際社会を扱うべきである(12), ⑨全生徒の基準であるべきこと(2)などである。(資料編く4)歴史スタンダード開発規準 criteria)

2) カリキュラム

全米歴史スタンダードのカリキュラムは、「K-4年のための歴史」「5-12年のための合衆国史」「5-12年のための世界史」の3領域によって構成される。K-4年においては「4トピック」、合衆国史については、「合衆国史時代区分論」に基づく「10時代区分」、世界史については、「世界史の方法」「世界史の時代区分論」に基づく「9時代区分」によって、それぞれ構成される(表3 全米歴史スタンダード：理解と思考技能の統合5-12, および、資料編く3)合衆国史及び世界史の時代区分, 参照)

(5) 授業の内容構成

授業構成において、「歴史的理解」と「歴史的思考技能」の統合は具体化される。図2の事例から「テーマ：時代3革命と国家」→「歴史理解のスタンダード1, 2, 3」→「スタンダード構成要素(下位理解)1A・・・」→「発達段階スタンダード(歴史理解+思考技能)」→「達成事例による歴史理解と思考技能の統合」=授業内容構成段階, へと具体化されている。資料編く5>「革命と国家」の授業内容構成段階における「達成事例」(スタンダード)を集録した。

表2 全米歴史スタンダード：歴史的思考技能5-12学年: National Standards for History, National Center For History in The Schools, 1996: より作成

<p>基準(スタンダード) 1: 年代的思考(Chronological Thinking) 生徒は年代的に考える: ゆえに、以下のことができる:</p> <p>A. 過去、現在、未来の時を区別する (distinguish)</p> <p>B. 歴史叙述あるいは歴史物語の時間構造を、複数の歴史叙述で見きわめる (identify)。始まり、真ん中、終わり (後者は、特殊な始まりの結果として規定される)</p> <p>C. 生徒自身が歴史叙述を構成して、時間の順序を確立する。</p> <p>D. 暦の時間を測定 (measure) し、計算 (calculate) する</p> <p>E. 提示された資料を時間系列において解釈する</p> <p>F. 歴史的継続 (succession) 及び持続期間 (duration) の型を再構成する (reconstruct)</p> <p>G. 時期区分のためのそれ以外の選択可能な型を比較する</p> <p>基準(スタンダード) 2: 歴史的理解力(comprehension) 生徒は多様な史料 (sources) を理解する (comprehend)。ゆえに、以下のことができる。</p> <p>* A. 歴史の記録 (document) や叙述 (narrative) の著者、源泉を見きわめ (identify)、その信憑性を評価すること。</p> <p>B. 字義どりに歴史的出来事を再構成する。誰が含まれ、どこで何が起り、どんな出来事がこれらの発展を導いたか、どんな結果や成果をもたらしたか。</p> <p>C. 中心的疑問 (複数の場合もある) を歴史叙述 (narrative addresses) によって見きわめる (identify)。叙述が構成されている目的、見方、観点を見きわめる。</p> <p>* D. 歴史の事実 (facts) と解釈 (interpretations) の違いを認める。 (differentiate)。しかし、これらの二つは関連していることを認める。歴史家が報告している事実は選択されたものであり、過去について最も重要なものは何かについて歴史家の判断を反映している。</p> <p>E. 歴史叙述 (narrative) を想像豊かに読む (read)。歴史叙述は含まれる個人や集団の人間性について何を開示しているか、あり得る彼らの価値、見解、動機、希望、おそれ、力強さ、弱さ。</p> <p>F. 歴史の見方 (perspectives) を理解する (appreciate)。(a) そこにいた人々の眼や経験を通して。過去の言葉で述べること、文学、日記、手紙、論争、芸術、人工物など。(b) 其の出来事が展開された歴史的脈絡を考慮すること; その時代や場の価値、見解、選択可能性、偶然性; (c) 現在の規範や価値によってのみ過去を判定する”現代性向”を避けること。</p> <p>G. 歴史地図のデータで調べる (draw upon)。歴史的出来事が生起する地理的環境に関する情報を得、あるいは明瞭にする。その絶対位置、距離や方向、その場の自然的人工的特徴、これらの特徴と歴史的出来事がそこで起きたことの決定的関連性。</p> <p>H. 視覚的、数学的、統計的データを利用する。歴史的叙述に提示されている情報について、明瞭にし、図解し、敷衍した図表、表、棒・線グラフ、フロー・チャート、ヴェン図、その他の図表組織法。</p> <p>I. 視覚的、文学的、音楽的資料で調べる (draw upon)。歴史叙述に提示されている情報を明瞭にし、図解し、敷衍している (a) 写真、絵画、風刺漫画、建築製図; (b) 小説、詩、演劇; (c) 民謡、流行歌、古典音楽:</p>	<p>C. 因果関係 (cause-and-effect relationships) を分析する: (a) 歴史における個人の重要性、(b) 思想、人間的興味、信仰、の影響; (c) 運、偶然と非合理的役割を含む多様な因果関係に心を留めて</p> <p>* D. 持続的な論点を明確にするために、時代と地域を交差させて比較する: 地域と時間の境界を超えた大規模、長期間の発達の場合:</p> <p>* E. 支持されない意見と歴史的証拠に根拠づけられた洗練された仮説を識別する</p> <p>F. 競合する歴史叙述を比較する</p> <p>G. 歴史的不可避性 (inevitability) の論証 (arguments) への挑戦: いかにより異なる選択が異なる結果を導くかについて、歴史の偶然性の事例を構成することによって:</p> <p>H. 歴史の解釈を仮説としてもつ: 新しい情報の不足、新しい意見が聞かれ、新しい解釈が提唱される時に変わることを条件に:</p> <p>I. 歴史家間の大論争を評価する: 過去について選択可能な解釈について:</p> <p>J. 過去の影響について仮説を立てる (hypothesize): 過去の決定の限界と可能性が与えられる機会の両者を含む:</p> <p>基準(スタンダード) 4: 歴史的探究能力: historical research capability 生徒は歴史的探究をする。ゆえに、以下のことができる。</p> <p>A. 歴史的疑問を明確にする: 歴史文書、目撃者の話、手紙、日記、人工物、写真、史跡、美術、建築、その他の過去の記録との出会いから:</p> <p>B. 多様な史料 (sources) から歴史的データを得る: 図書館、博物館、史跡、写真、雑誌、日記、目撃証言、新聞、等。記録フィルム、証人の口頭証言、国勢調査、租税記録、市の指令集、統計書、経済指標を含む:</p> <p>C. 歴史的データを吟味する (interrogate): それが作られた、社会的、政治的、経済的脈絡を露わにする; 史料の信頼性、権威、出所、内の一貫性、完全性を検査すること、事実の削除・隠蔽・創作による偏見、歪曲、宣伝を発見し、評価すること</p> <p>D. 利用しうる記録の空白を見きわめ、時・場所の脈絡ある知識と見方を整理する: 証言に基づいて想像豊かに敷衍するために、演繹的に空白を埋めるために、健全な (sound) 歴史解釈を導くために</p> <p>* E. 定量的分析を行う: 家族の規模と構成、移民の種類、富の配分、経済変化のような、変化のトピックを探究するために:</p> <p>* F. 歴史的証拠によって解釈を支援する: 表面的な意見よりもむしろ厳密に推理された論証を構成するために:</p> <p>基準(スタンダード) 5: 歴史的論点 (Issues) の分析と意志決定 (decision making) 生徒は歴史の論争点の分析と意思決定に携わる。ゆえに、以下のことができる:</p> <p>A. 過去の論争点 (issue) と課題 (problem) を明確にする (identify): 状況に内包されている利害、価値、見方、観点を分析する</p> <p>B. 前提条件としての諸環境、行動の課題と選択に関わる同時代の諸要因を整理する (marshal)</p> <p>C. 関連する歴史的な前提条件 (antecedent) を明確にする (identify) そして、同時代の論争点に不適当で、無関係の条件を弁別する</p> <p>D. 選択可能な行動の仕方を評価する (evaluate): 当時利用可能な情報、その決定によって影響を受ける人々の利害およびそれぞれの長期的-短期的影響、倫理的考察などに留意して:</p> <p>E. 論争点に関して行動する立場あるいは仕方を明確にする (formulate) 課題の性質を見きわめ、問題に寄与する背後要因を分析し、注意深く評価された選択肢からの選択によって、もっとも納得のいく解決を選ぶこと:</p> <p>F. 意思決定の意義 (implement) を評価する: それが貢献する利害を分析すること、含まれる各演技者の立場・権力・優先権を評価すること、その決定の倫理的次元を評価すること、多様な見方からの代償と利益を評価すること</p>
<p>基準(スタンダード) 3: 歴史的分析 (analysis) と解釈 (interpretation): 生徒は歴史の分析及び解釈に携わる。ゆえに以下のことができる</p> <p>A. 共通性と相違性を明確にすることによって、思想、価値、人柄、行動、制度の異なる特徴を比較・対照する</p> <p>B. 過去における異なる人々の多様な見方を考慮する: 動機、信仰、関心、希望、おそれの違いを証明すること:</p>	

[*印について]: 表は、本文の記述によったものである。基準2 * A, * D は、pp60-61 (概要=目次) では、基準3に入れている。: 基準3のDE、基準4のEFは、pp60-61 (概要=目次) にはないものが、本文には採用されている。

図1 歴史的な理解と歴史的な思考技能の統合（合衆国史：時代3，スタンダード1）

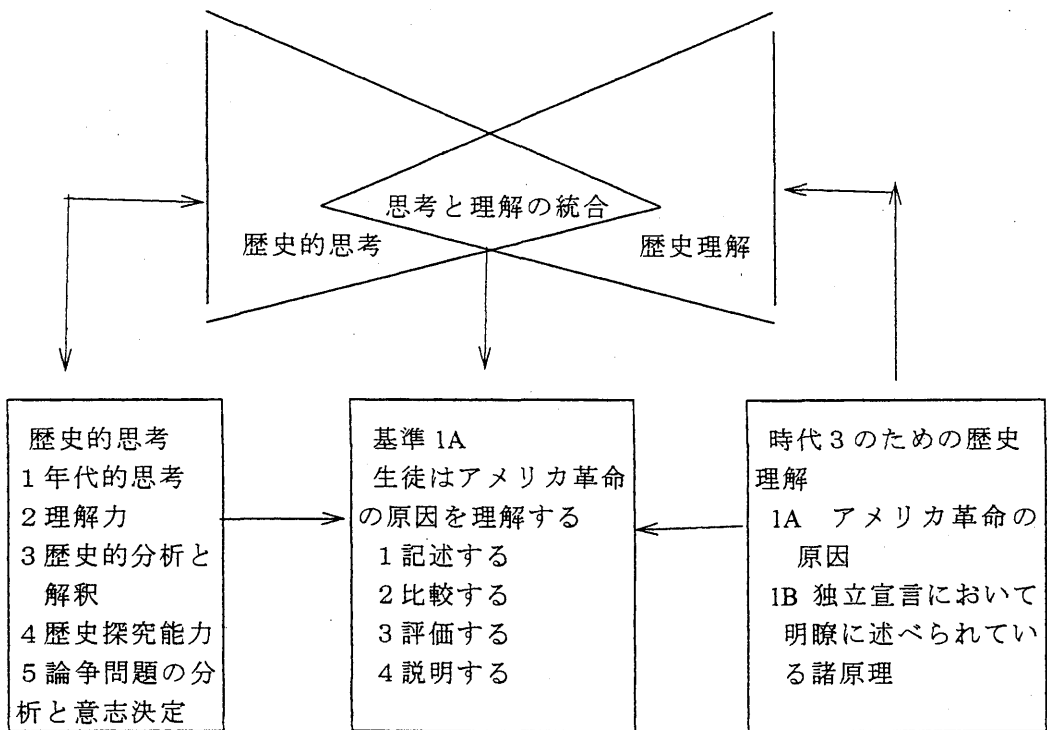
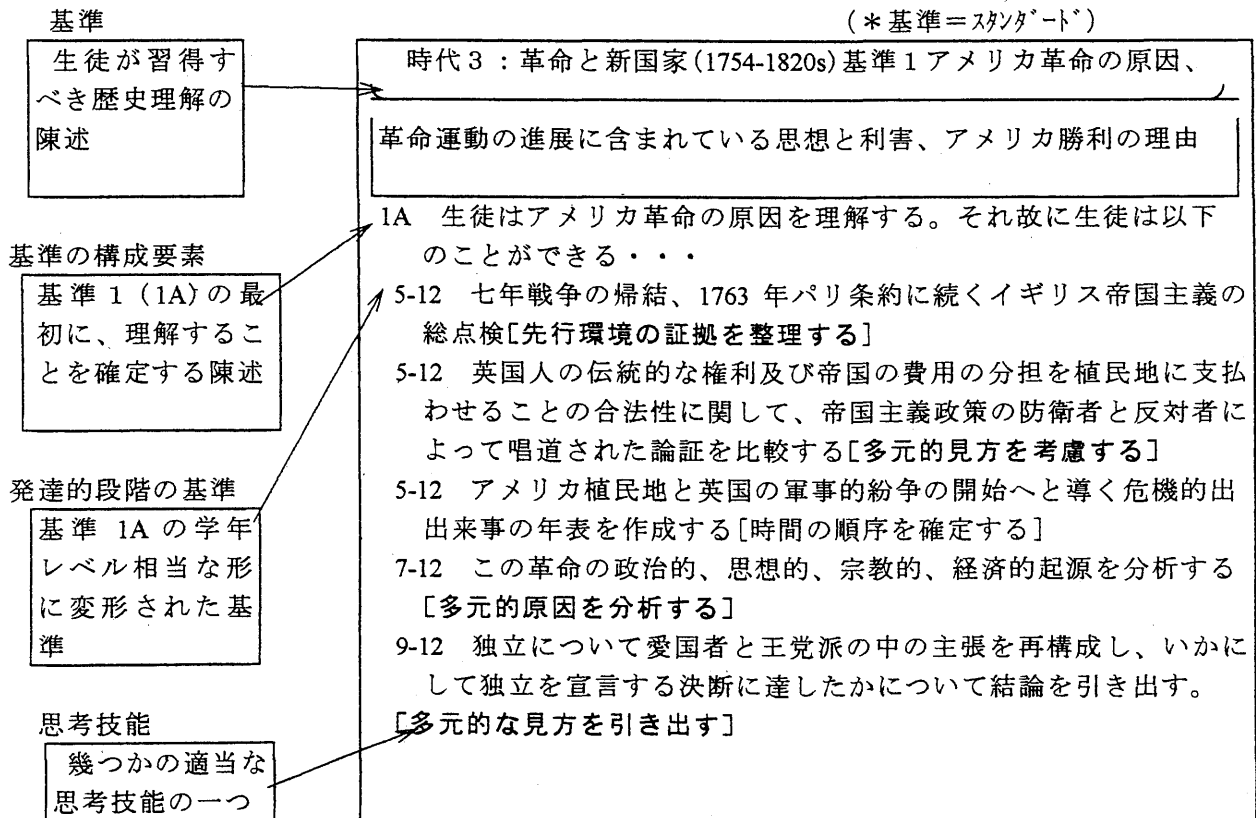


図2 歴史スタンダードの要素と構成（合衆国史：時代3 革命と国家）



National Standards for History, National Center for History in the Schools, 1996

表3 全米歴史スタンダード(基準):理解と思考技能の統合5-12

教養 ある市民:公的市民・私的個人

(*基準=スタンダード)

歴史的な理解: historical understanding *	歴史的な思考のスタンダード5-12: historical thinking *
<p><参考> k-4 段階のための歴史スタンダード ; トピック1 家族と地域社会での生活と共同労働、 今と昔: 2 生徒の州又は地方の歴史 3 合衆国の歴史: 民主的諸原理と価値 及び文化的、経済的、政治的遺産に 貢献した文化を担う人々 4 世界の多くの文化を持つ人々の歴史 < 5-12 > 合衆国史及び世界史のための基準(5-12 学年) (* 10 時代及び 31 主要事項の理解)</p> <p>合衆国史の基準 (5-12 学年): 時代1 三つの世界の出会(始まりー 1620) 2 植民地建設と定住(1585-1763) 3 革命と新国家(1754-1820s) 4 膨張と改革(1801-1861) 5 内戦と再建 (1850-1877) 6 産業的な合衆国の発達(1870-1900) 7 現代アメリカの出現 (1890-1930) 8 大恐慌と第二次世界大戦(1919-1945) 9 戦後の合衆国(1945-1970s) 10 現在の合衆国 (1968-現在)</p> <p>世界史のための基準(5-12): 時代1 人類社会の始まり 2 初期諸文明と遊牧民の出現、 4000-1000BCE 3 古典的伝統、大宗教、大帝国、 1000BCE-300CE 4 交易と出会いの範囲の拡大、 300-1000CE 5 半球の相互関係の増強、1000-1500CE 6 最初の地球時代の出現、1450-1770 7 革命の時代、1750-1917 8 危機と達成の半世紀、1900-1945 9 1945 以降の 20 世紀; 約束と逆説</p>	<p>基準1: 年代的思考 A. 過去、現在、未来の時を区別する (distinguish) B. 歴史話あるいは歴史物語の時間構造を見分ける (identify) C. 生徒自身の歴史話の構成において時間の順序を確立する D. 暦の時間を測定 (measure) し、計算 (calculate) する E. 提示された資料を時間系列において解釈する F. 歴史的継続 (succession) 及び持続期間 (duration) の型を再構成する (reconstruct) G 時期区分のためのそれ以外の選択可能な型を比較する</p> <p>基準2: 歴史的な理解力 comprehension A. 歴史記録あるいは叙述 (narrative) の著者あるいは源泉を明確にする (identify) B. 字義どおりに歴史的出来事を再構成する C. 中心の疑問を歴史叙述 (historical narrative addresses) で見きわめる D 歴史事実と解釈の違いを弁別する E. 歴史叙述 (narrative) を想像豊かに読む F. 歴史的見方を理解する (appreciate) G. 歴史地図のデータで調べる (draw upon) H. 視覚的、数学的、統計データを利用する: 図表、表、棒・線グラフ、 フロー・チャート、ヴェン図、その他図式組織法を利用する I. 視覚的、文学的、音楽的資料を参考にする (draw upon)</p> <p>基準3 歴史的な分析と解釈 A. 思想、価値、人柄、行動、制度のことなる特徴を比較・対照する B. 多様な見方を考慮する C. 個人の重要性、思想の影響、機会の役割 (chance of role) を含む、 原因-影響関係 (cause and effect) および多様な因果関係 (multiple causation) を分析する D. 持続的な論点を明確にするために、時代と地域を交錯させて比較 する E. 支持されない意見と歴史的証拠の根拠づけられた仮説を識別する F. 競合する歴史叙述 (narrative) を比較する (compare) G. 歴史的不可避性の論証への挑戦 H. 歴史の解釈を仮説として支持する (hold) I. 歴史家間の大論争を評価する J. 過去の影響について仮説を立てる (hypothesize)</p> <p>基準4: 歴史的な探究能力 A. 歴史的疑問を明確にする B. 歴史的データを収集する C. 歴史的データを吟味する (interrogate) D. 利用しうる記録の空白を見きわめ、時・場所の脈絡ある知識と見 方を整理し、健全な (sound) 歴史解釈を構成する E. 定量的分析を行う F. 歴史的証拠によって解釈を支持する</p> <p>基準5: 歴史的論争点 (issues) の分析と意志決定 A. 過去の論争点 (issue) と課題 (problem) を明確にする B. 前提条件としての環境、行動の課題と選択過程に関わる同時代の 諸要因を整理する (marshal) C. 関連する歴史的な前提条件 (antecedent) を明確にする D. 選択可能な行動の仕方を評価する (evaluate) E. 論争点に関する立場、あるいは行動の仕方を明確にする (formulate) F. 意思決定の意義 (implement) を評価する</p>

* National Standards for History; National Center For History In The Schools, 1996, より作成

(6) 歴史ナショナル・スタンダードの論争

連邦法に基づいて作成された、この「歴史ナショナルスタンダード」は、その内容および実施に関して、論争を呼び起こした。論争は、とりわけ合衆国史の拡大版の達成事例をめぐったなされた。論争点については、森田によれば、第一に「合衆国史スタンダードは、国家創設以来200年を主導してきた白人男性の功績 (achievement) を削減し、短所を強調している。一方、マイノリティーの功績を多く取り扱い、その迫害を強調している」「一貫して、アメリカが成し遂げた業績を最小限にとどめ、一方不当な点を強調している」「アフリカ人やアメリカ先住民社会の短所について明示していない」「近現代の部分は均衡がとれていない」「全国民についての重要な情報を除外し、異集団の間に存在する差違を拡張している」「客観的事実よりも意見や正しい態度がより重要視されている」など、イデオロギー的に政治的欠陥除去 (Politically Correct) と多文化的見方に偏向している、という論点である。

第二に、正しい教育実践の理解に立っていない。第三に、アメリカ精神を克服する闘争の継続性を描いている、第四に、ナショナル・スタンダードの作成には、連邦政府が関与すべきではない。第五にスタンダードは、彼らが先に表明した目的を逸脱している、などでの論点があげられている (参考文献②, 参照)。これらの論点は、資料編〈4〉スタンダードの達成事例 (時代3 国家と革命) において確認されうるはずである。

4. 資料編

<1> 教養ある市民のための歴史の意味 (1996年版)

学校において歴史のためのスタンダードをもうけるには、全生徒の一般教育における歴史の位置及び意義についての明確な考えを要求する。学校においてより多くの、より良い歴史に対する広範な、増大しつつある支持、小学校の早い学年における開始は、此の十年間のより勇気づける兆候の一つである。理由はたくさんある。しかし、歴史の知識は政治的知性の前提条件であるという理由以上に民主的社会にとって重要なものはない。その社会がどこからきたか、その中核的な価値は何か、過去のどんな決定が現在の状況を説明するかについて、歴史なしに社会はいかなる記憶も共有しない。歴史なしに、政治的、社会的、道徳的な社会問題に対して、分別ある探究を保証できない。そして、歴史的知識や探究なしに、民主的な統治過程、国民の民主的理想の全市民的実現に効果的に参加するのに必要な見識や分別ある市民性を得ることはできない。

トーマス・ジェファソンは、かつて、未来に生起することのために準備することを可能にするという理由で、自治に参加するすべての人のために歴史を書いた。E.ギルソンは、歴史が与える展望の特別な意味について注目した。”歴史は、思想の結果を検証するために我々が所有する実験室である”と述べた。歴史は生徒に人間の経験の偉大な記録を開示する。個人及び社会が彼らの直面する課題に為してきた広範囲の適応を明らかにし、そして、為されてきた様々の選択のもたらす結果を顕わにする。過去の選択と決定を学ぶことによって、生徒は、以前の選択肢について、そして、おそらくそれぞれの結果についてのより深い認識をもって、現在の課題と選択に向かうことができる。

勿論、現在の課題は過去のそれらの再現ではない。今日の論争問題に対して、歴史からの知的推論により深い技能が、それには又過去の理解が本質的に要請される：現在の論争問題の分析に適切に知識を提供する歴史的な前例なのか、全く関連のない前例なのかを識別すること。生徒たちは適切な歴史分析を見識ある意志決定に役立たせるために、十分に歴史的理解の基礎を教えられなければならない。

要請されていることは、ニーチェがかつて”批判的歴史”と定義したこと、そして、ゴードン・クレイグが”骨の折れる探究と冷静な判断の後に、歴史のどの部分が現在の課題に関連があり、また、どの部分が関連がないかを判断する能力”と説明したこと、その論争問題に関して、状況を評価すること、意見を形成すること、行動的な立場をとること、に習熟することである。これらのことを探究する中で、生徒たちは、歴史は、歴史の間違った類比に基づいて到達した高価な決断に満ちていること、同様に過去が与える重要な教訓に殆どあるいは全く理解しないで為された高価な行動に満ちていることを、すぐに発見するであろう。

これらの学習は、直接に公的市民(public citizen)の教育に貢献する、しかし、それらは、私的個人(private individual)の養育にも同様に、独自に貢献する。歴史的記憶は、時間の流れの中における自分の位置、そして、全人類と自分と関連を見つけるキイである。我々は古代の鎖の部分である、そして、過去の長い手は、良かれ悪しかれ、我々の上に置かれている、まさに同様に、我々の手が未来の子孫に寄りかかるであろう。自分のルーツ及び人間の歴史の大きな流れの中での自分の位置の知識を否定されるならば、個人は、自分の十二分な人格的発達並びに責任ある市民性の基礎である十分な自己感覚、及び共同体の一員としての感覚を奪われる。これらの目的のために、歴史及び人文科学は、学校カリキュラムの中で不可欠の役割を占めなければならない。

最後に、歴史は、生徒に世界及び彼ら自身のとは異なる多くの文化や生活様式についての包括的な理解を発達させる機会を開く。バランスがとれそして多くの内容を含む世界史から、生徒は世界の多くの人々についてもまた共有する人間性及び共通の課題についても正しい理解を得ることができる。生徒は又他者の目で物事を見る習慣を得ること、そして、周りの他者や他のやり方を学ぶときに自分自身をよりよく理解できることを悟るようになる。そのような世界史の比較学習による歴史理解は自分自身あるいは他者の社会の悲劇に対して、承認あるいは謝罪を要求するものではない。また、選択的価値体系およびそれらがすべての人々の基本的人権及び願望を支持したり、あるいは否定したりする影響を批判的に吟味する重要性を否定するものではない。とりわけ重要なのは、世界の多くの文化の歴史の理解は、増大しつつある多元的社会および増加しつつある相互依存の世界において要請される相互の忍耐、尊敬、市民的勇気の性質を育むことに貢献することができることである。

もし生徒が、より明瞭に先を見るべきであるならば、そして、彼らが市民として為し、支持しあるいは単に黙認するという意志決定によって、接触するすべての人と人間性を共有するための判断及び考慮によって行動する準備をすべきであるならば、学校は、カリキュラムのこの批判的領域に関心を向けなければならない。

<2> 歴史的理解と歴史的思考 (1996年版)

<歴史的理解> 歴史は、多様な人間活動における人間の願望と努力を数えあげそして分析する、広範に統合された領域である；社会的、政治的、科学/技術的、経済的及び文化的。家族、コミュニティ、州、国家及び世界の種々の人々について探求する歴史学習は、生徒を現実の人々の生活、願望、闘争、成功及び失敗の中に、同時に彼らの生活におけるあらゆるこれらの局面の中に引き入れる。

社会史を通して、生徒は社会のより深い理解に達する：人間であることが何を意味するかについて、家族構造について異なったそして変化していく見方について、男女の役割について、子供時代と子どもの役割について、社会における多様な集団及び階級について、そして、すべてのこれらの個人と集団間の関係について。この社会史の領域は、経済的、宗教的、文化的及び政治的变化が社会生活にどんな影響を与えてきたか、そして、無数の人々を運命づける歴史発達を具体化しているかを考究する：奴隷制、階級闘争、集団移住と移民の歴史；疫病、戦争及び飢饉の人的帰結；医学的、技術的及び経済的進歩によってもたらされる長期的生活展望及び生活水準の向上。

政治史を通して、生徒は、彼らの地域社会、州、国家、及び世界の様々な社会において政治的活動領域が発達してきた様子を理解する。政府や制度を創る努力；他者をしのぐ権力を獲得し、維持する動機；基本的人権、正義、平等、法律、秩序を社会において達成しそして維持する闘い；そして国際法を高めようとする地域的、世界的心理過程の進歩は、歴史学習において探求され、分析されるべき、あらゆる領域の中心的な人間ドラマである。

科学及び技術の歴史を通して、生徒は、自然を理解する科学的探求、我々が住んでいる世界、人間性それ自身が歴史の記録と同様に古いことを学ぶ。また、同様に、食物の生産から病人の看護、商品の輸送、経済的安定及び集団の福祉の進歩に至るあらゆる物事の仕方を改善するための探求がある。変化を推進し、そしてこれらの変化がほかのすべての領域の人間活動を変えてきた科学技術の発達を理解することは、歴史学習の中心である。

経済史を通して、生徒は、人々の生活の質を決定し、社会を作り、そして、出来事の過程に影響を

与えるのに、決定的な役割を果たしてきた経済力を評価する。文化圏内外との交易関係は、地域的、半球的そして地球的な経済支配の型を造りだし、他のすべての領域の活動に広範かつ深い影響を及ぼす、20世紀における国際経済の出現を可能にしてきた。

文化史を通して、生徒は、思想、信仰及び価値が歴史を通じて人間の行動に深い影響を与えてきたことを学ぶ。宗教、哲学、芸術及び民衆 (popular) 文化は、あらゆる社会の願望と達成の中心を占めてきたし、また、最初から歴史的变化の源泉であった。この領域の人間活動について生徒の探求は、文学、聖典、口承、条約、演劇、美術、建築、音楽、舞踊を通じて、人間的経験についての彼らの理解を深める。

これらの5領域の人間活動の分析は、歴史的時間と地理的空間の両者の脈絡においてそれらを考究することを要請される。歴史的記録は、それが発見された地理的環境と不可分に結びつけられている。人口移動及び植民、科学的及び経済的活動、地政学的礼拝儀式、そして、政治的、哲学的、宗教的及び美的観念の分布と広がり、すべて、ある程度、地理的要因に関連している。

あらゆる人々が、彼らの時代の論争問題及び挑戦に対処してきた機会、限界及び強制は、重要性の程度はあるが、その中で彼らが生活し、そして、彼らが関わってきた環境によって、そしてまた、以前に来た人々によって残された変更の利かない、風景に刻まれた悪意や善意の痕跡によって、影響を受けてきた。

これらの5領域の人間活動は、個人と社会の現実生活の中でまた、相互に織り合わされ、合衆国と世界の歴史における本質的な理解は、これらのカテゴリーを切り裂いている。したがって、アメリカ革命の原因を理解するために、生徒は啓蒙思想の哲学的理念、イギリス重商主義と植民地自身の利益の経済的利害の競争、イギリス普通法・権利章典・そして名誉革命の下での”イギリス人の権利”によって規定されている政治的前提条件、性・人種・経済的地位、そして地域によって規定されている植民地における異なる社会階層の多様な願望、に立ち向かわなければならない。

同様に、アメリカの勝利の結果を理解することは、これらの活動領域のそれぞれにおける変化が、しばしば、ある他の領域に、あるいはすべての他の領域にどんな衝撃を与えているかを証明している。植民地人の軍事的勝利の多くの帰結は、新しい、永続的な政治制度の発達、アメリカの勝利が異なった願望を持って戦争に参加あるいは戦争中反対側に同盟した多様な集団にあたる社会的・経済的影響、そして、”民主的革命の時代”と呼んできたものが生氣を与えているアメリカ革命の長期的な”哲学上の影響”をふくむ。これらの結果は、歴史的出来事の複合性 (complexity) および歴史それ自身の幅広い統合的性質 (integrative nature) を証明している。それらはまた、過去についてそして我々が今も過去の影響を受けているかについての生徒の理解を深める歴史の独自の力を再度確認する。

同様に、世界史において、15,16世紀における中米のイベリア人による征服へと導いた力を理解するために、生徒はアフリカ、アジアと海外貿易の前夜のヨーロッパの人々を結びつけている地域間貿易制度の経済に向かい合わねばならない；スペインとポルトガルの中央集権的王政の興隆に導かれた政治的・宗教的变化；ポルトガルとスペインの造船・航海と海戦行為、及び北欧、モスLEM、中国の航海技術のこれらの変化への影響。

同様に、イベリア人の中米征服の結果の理解は、人間活動の領域の何らかの一つの変化がしばしば、他のいくつかのあるいはすべての領域にいかん影響を与えるかを証明している。イベリア人の軍事的

勝利の多くの帰結は、例えば、アメリカにおけるスペインとポルトガルの植民地帝国の創設を含んでいた；コロンビアとの出会いによる植物群、動物群及び病原菌の世界的規模の交流、アメリカインディアンの人々の征服と奴隷化によってもたらされた社会的変化；アメリカへの新しい病原菌の導入を原因とする人口への荒廃的影響；ヨーロッパ人の植民地における、ほぼ 1000 万人のアフリカ人の強制的移住と奴隷化；アメリカへのキリスト教導入の結果としての宗教的信仰と実践の変化；アメリカの莫大な金銀資源のヨーロッパ経済への注入による経済的、社会的影響。これらの多くの影響は、歴史的出来事の複合性、及び歴史それ自体の広範囲の統合的性質を証明している。それらはまた、過去についてのそして過去によって今もなお我々が影響を受けていることについて、生徒の理解を深める歴史の独自の力を証明している。

<歴史的思考>

生徒は何を知るべきか、すなわち全ての生徒が習得すべき合衆国及び世界の歴史の理解、を超えて、生徒は彼らの理解を証明するために、そして彼らの知識を生産的な方法で応用するためにするべき可能なことは何かを考究することが必要である。

歴史の学習は、事実、日付、名前、場所の受動的な吸収以上の多くのことを含んでいる。歴史はその本質において過去からの証拠に基づいて推論する過程 (process of reasoning) である。この推論は、名前、日付、場所、思想、及び出来事のような事実の情報の注意深い収集、比較考察、立場の転換 (shifting) において、根拠づけられなければならない。しかし、この過程はここでとどまらない。現実の歴史的理解は、生徒が原因-結果の関連性を考えること、確実な歴史的解释に到達すること、現代における見識ある意志決定の基礎となりうる知識へ導く歴史的探求及び調査を行うこと、を要求している。これらの思考技能は能動的な学習過程である。

適切に教えらるるならば、歴史は分析及び判断の能力を発達させる。それは、選択の両義性を明らかにする、そして、しばしば人間に事後に苦しみをもたらす性急で安易な解決について、慎重さを高める。歴史は逆説の理解、また、人間の統制を超えたものとその手中にあるものや必然と偶然の見分けをするレディネスを育てる。歴史は、生徒が偏見を見破り、証拠を比較考察し、論証を評価する訓練をする。その結果、感性的・自立的に判断し、党派心の強い弁論者による歴史にたいする見せかけの訴えを嗅ぎ分け、小話と分析を区別することに生徒を準備する。

これらの潜在能力を獲得するために、生徒は次の5つ型の能力を開発しなければならない (以下略、「表2 全米歴史スタンダード：歴史的思考技能 5-12」参照)

<3>歴史スタンダードの開発規準 (criteria) (1996年版)

合衆国及び世界の歴史の全国基準の開発は、人間の歴史の偉大な宝庫について全生徒にとって何が習得すべき最も重要なものであるかを決断する特別の挑戦を示している。あまり意識されないが重要なことは、全生徒が達成すべき歴史的展望、歴史的推論の技術、価値分析、及び、政策的思考のエッセンスは何か、を決めることである。

広範な全国的な意見及び合意形成の過程を経て開発され、練り上げられた以下の基準は、歴史基準のための全国協議会によって、K-12 学年段階の歴史基準の開発を導くために採用されたものである。

1 基準は、最高の学問性を反映し、受動的な事実、日付、名前の習得よりも活動的な問い及び学習

を高めることを、知的に要求すべきである。

2 そのような基準は、全生徒に等しく期待されるべきであり、また、全生徒はこれらの基準を達成するカリキュラムに接する機会を平等に提供されるべきである。

3 基準は、最も早い基礎的年齢から歴史の意味及び歴史家の方法を学ぶための能力を表すべきである。

4 基準は、年代順に、歴史における型(pattern)及び因果関係(causation)の評価(appreciation)を育てる組織的な方法に基礎を置くべきである。

5 基準は、合衆国及び世界史の広範な主題の強調と特殊な歴史の出来事、思想、運動、人物、及び資料等の証明との間の均衡を突くべきである。

6 すべての歴史学習は、一般的な観念及び価値に照らした、情報の選択と配列を含む。歴史のための基準は、確実な歴史的推論—証拠の注意深い評価、因果関係の構成、公平な解釈、比較分析—の諸原則を表すべきである。省略、隠蔽、作りごとによる事実の歪曲・宣伝の発見と評価の能力は、本質的要素である。

7 基準は、歴史知識がそれによって達成される多様な証拠資料の認識、評価、利用能力を含む。資料には、文書資料、伝承、数量的資料、民間の風習、文学、人工物、美術と音楽、歴史的風景、写真とフィルムを含む。

8 合衆国史の基準は、人種、民族、社会的経済的地位、ジェンダー、宗教、政策、宗教によって例証される国民の多様性及び国民の公共性の両方を表すべきである。特定の集団及び個人の貢献と闘争が含まれなければならない。

9 合衆国史における基準は、共有する市民的同一性および政治において共有する市民的価値の理解および国民の歴史における主要な政策論争の分析、および、多くの人民の相互の尊敬、を発達させることによって、市民性の教育に貢献すべきである。

10 歴史基準は、市民社会の性質およびその政治や市民性への関連を強調すべきである。合衆国史の基準は、国民の民主的政治制度の歴史的起源、その理想と制度の継続的發展、理想と実際との間の格差を埋める論争及び闘争を語るべきである。世界史基準は、多様な民主主義から多様な独裁主義にわたる政治制度の異なる型、世界のすべての地域における文明によって発達した思想と願望を含むべきである。

11 合衆国史と世界史の基準は、内容においても、形式においても分離して、しかし関連させて開発されるべきである。合衆国史の基準は、国民が含まれている地球的連関を反映されるべきである。また、世界史は、合衆国史をその統合的部分の一つとして扱うべきである。

12 基準は、合衆国及び世界史の近年の出来事の適当な範囲を含むべきである。それは、第二次大戦後の時期の社会政治的発達及び国際的関連を含む。

13 合衆国史及び世界史の基準は、事例研究及び歴史研究による特殊な出来事及び運動の調査とによって、地域及び地方の歴史を利用すべきである。地方及び地域の歴史は合衆国史及び世界史のより広い型の入り口とすべきである。

14 合衆国及び世界史の基準は、宗教、科学、技術、政治と政府、経済、環境との相互作用、知的・社会的な生活、文学及び芸術のような人間の文化の基本的な相を統合すべきである。

15 世界史の基準は、西洋を含む異なる文明の歴史と価値を取り扱うべきである。そして、とりわけ、それらの相互作用を語るべきである。

<4>合衆国史および世界史のための時代区分

<合衆国史の時代区分> 合衆国や世界歴史が区分けして記述されている時代区分は、多様な仕方
で読みそして概念化できる本来乱雑な過去に、何らかの秩序を与えようとする歴史家によって、構成
されたものにすぎない、ということを生徒は理解しなければならない。

合衆国のような多様性をもった国家においては、どんな時期区分の計画もすべての集団に対して有
効ではないであろう。アメリカインディアンの歴史は、植民時代のヨーロッパ植民者の歴史と必ずとい
うことではないが時には重なる水準標識及び時期をもっている。それについては、イロコイ族の歴史
は、シュウ族あるいはズニ族の歴史と違った時期区分がなされるべきであろう。アフリカ系アメリカ
人の歴史は、南部において、白人年期奴隷から黒人奴隷労働への変化、奴隷貿易の廃止、移民主義の
始まり、等々の彼ら自身の分水嶺をもつであろう。また、女性の歴史やメキシコ系アメリカ人の歴史
もまた同様であろう。

それにもかかわらず、教師は政治的及び社会的歴史の融合に挑戦する時代区分を評価するであらう
と、我々は思う。この目的のために、合衆国史におけるアメリカ革命、憲法、内戦、進歩主義、ニュー
ディール、及び冷戦などの、始まりと終わりをかなり明確に規定できる政治的出来事は、合衆国史
のカリキュラムにおいて、転換点を提供し続けている。産業革命、労働運動、環境保護主義、育児や
家族規模の変化などはそのような始点と終点を持たず、革命、内戦、恐慌などによる時代区分を切断
する。事実、近年政治的及び制度的歴史に社会史を融合を試みた大学の合衆国史教科書は、いずれも、
戦争及び政治改革運動の一般的規定要因、そして、人工統計的・文化的変容と社会的変容の相互規定
性を考慮に入れることができていない。

我々は、歴史を時期区分することに固有の困難を、時代の始まりあるいはおわりというものは現実
には何もないこと、そして、すべてのそのような計画は歴史の過程に何らかの構造を与えようとする
歴史家の試みにすぎないことを証明するために、ある程度時代を重ね合わせることによって、克服し
ようとしている。合衆国史を時代区分するために選択された 10 の時代は以下のとおりである（以下
略、表 3 参照）

<世界史の視座> これらのスタンダードは、学校は全ての生徒が共有する包括的な歴史を教えな
ければならないという前提に基づいている。それは、人間性を包括する歴史を意味している。スタン
ダードを書くにあたって、最初の仕事は、過去において、比較的多くの人々を巻き込みそして影響を
与え、そして、後の世代に広範な意味を与えた発展を確定することである。これらの発展のいくつか
は、特殊な文明あるいは地域に関連している。他のものは、文化的及び政治的境界を越えて広がる人
間の相互関連の類型を含む。このフレームワークの中で、生徒は、単に地域的、地方的重要性しかも
ってきていない特殊な事例の歴史的变化のみでなく、過去のドラマ及び人間の本質を例証することを、
深く探究するように励まされる。

これらのスタンダードは、世界規模の歴史への強力な参加を示している。しかし、自己同一可能な
人々や文化的伝統にすべての注意を向ける試みをしてはいない。むしろ、ねらいは、生徒が人間の過
去について大きなそして探究的に問うこと、異なる世界の部分における連続性と変化の型を比較する

こと、そして、特殊な人々あるいは文明の歴史と達成をより広い社会的、文化的あるいは経済的脈絡の眼で吟味すること、を励ますことである。

<世界史のための時代区分> 合衆国史におけると同様に、過去の学習を一定の時期に組織することは、出来事の絶え間のない断片的な流れに秩序と首尾一貫性の一段階を与える一つの方法である。歴史家は世界の歴史を理解できる色々な時代区分の計画を工夫してきた。これらのデザインのそれぞれが歴史家の特殊なねらい、志向、あるいは文化的、社会的価値を反映した創造的な構成物であることを生徒は理解すべきである。

人間の過去の壮大な流れを包み込む世界史の時代区分は、比較的高いレベルの一般概念によるのみ理解できる。歴史家はまた、特殊な文明、地域や国家のために時期区分を作り出すことができる、そして、それらは、それ自身の有効性、標識と転換点をもっている。例えば、インドの歴史は、中国やヨーロッパの歴史とは必然的に違った時代区分がされるであろう。インドの歴史の主要な変化は、グプタ時代、ムガル帝国、独立後の時代などに関係しているからである。

我々は、教師が授業でより統合された世界史の学習に向けて働きかけ、世界の人口の大きな部分を含み、そして継続的な意味を持ってきた、広範囲な発展の学習を励ますような時代区分の設計をもつことを評価するであろう、と信ずる。このスタンダードは、世界史を9つの時代に分ける。各時代の表題はその時代の最も一般的特徴を捉える試みである。ある時代の時期は、ある発展の終わりと他の出発の両方を結合するために重なっていることに注意せよ。始まりと終わりの日付は人間の舞台における広範囲の変化を表現する接近法として見られるべきである。(以下略、表2参照)

<5>スタンダードの達成事例（時代3：革命と新国家）{拡大編、1994 }

アメリカ革命は合衆国史の学習における信号としての重要性をもっている。第一に、英国との植民地関係を断ち切り、法的に合衆国を創造したこと。第二に、革命世代は政治的哲学を定式化し、そして、われわれが現在生活している政治システムのための憲法的基礎をすえた。第三に、革命は大西洋を渡ってやってきた自然権と政治的権威に関する理念によって鼓舞され、その上首尾の達成は多くの世代にわたる地球の大きな部分の人民と政府に影響を与えた。最後に、それは長い時をかけて確立された社会的、政治的関係—主人と奴隷、男と女、上層階級と下層階級、雇用者と従業員、親と子にさえ—問題を喚起した。したがってそれは以後のアメリカ人の心を占めている改革のための議題に一線を描き、現在に至っている。

アメリカ革命の原因と成果についての思考において、生徒は革命の現実が如何に革命的であったかについて、その中心的な事項を直面する必要がある。このことについての判断に到達するために、彼らは異なる一連の眼を通してこの革命を見ることを欠いてはならないであろう—奴隷と解放奴隷としてのアフリカアメリカ人、原住アメリカ人、異なる社会階級・宗教・思想傾向、地域、職業の白人の男子と女性など—。

生徒は、如何に憲法が創造されたかそしてそれが 1787-88 にかけて殆どあらゆる地方において劇的な論争の後如何に批准されたかを探究することによって、戦後アメリカ社会の再定義のための諸議論の違いに気づくことができる。アメリカ史において憲政主義の最も創造的な時代の頂点として 1787 年憲法および権利章典の話題を切り出す一方、憲法がこの革命の時代に高揚した奴隷制度の廃棄の運動をそらしたという自己矛盾を生徒はまた熟考すべきである。また、憲法の批准が政府の権力に関する討論を終わりにしたと彼らが考えてはならない。むしろ、経済的、宗教的、思想的緊張が憲法の意味を越えて論争の継続を生み出されたこと。

革命後世代の学習において、生徒は、アメリカの二大政党制の胎芽が如何に形づくられたか、アメリカ人達がフランス革命の論争したとき如何に政治的動揺が起きたか、最高裁判所が如何にして優越的地位に昇ったかを理解できる。この時代における政治活動、政治的指導性および政治制度の学習は、だんだん増加してきている。しかし、生徒は注目されていない以下のトピックもまた理解する必要がある。原住アメリカ国民に対する軍事行動、自由な黒人共同体の出現、および宗教の民主化。

《概要》

【基準1】：アメリカ革命の原因、革命運動の進行に含まれている思想と利益、アメリカの勝利の理由。

【基準2】：アメリカ革命は、アメリカ社会の改革をめざした新国民の多くの集団の多極的な運動を、どのように含んでいたか。

【基準3】：革命の期間に創造された政府の制度と実践。そして、アメリカ政治システムを創造するために、1787-1815年の間に、それらがどのように修正されたか。

【基準1】〔生徒は理解すべきである：アメリカ革命の原因。革命運動の進行に含まれる思想と利益。アメリカの勝利の原因〕

【基準の構成要素1-1A】〔生徒はできるべきである：アメリカ革命の原因を理解していることを以下のことで証明すること〕

< 5-12 > 七年戦争の結果と 1763 年パリ条約に続くイギリス帝国主義政策の総点検を説明すること、前件と結果としての出来事間の関連性を証明すること[前件環境の証拠を整理する]

< 5-12 > イギリス人民の伝統的右翼に基礎を置く新帝国主義政策および植民地に帝国の費用の一部支払いを求めることの正当性について弁護者と反対者によって推進される論証を比較すること[多角的見方を考慮する]

< 5-12 > アメリカ植民地とイギリスの間の武力衝突の勃発へと導く重大な出来事の年表を再構成する[時間の秩序を確立する]

< 7-12 > 革命をもたらす政治的、宗教的思想と経済的利益の関連を分析する[多角的見方を考慮する]

< 9-12 > 独立についての愛国者と王党派の論証を再構成すること、そして、如何にして独立宣言の決定に至ったかについて結論を導き出す[多角的見方を考慮する]

【基準の構成要素-1-1A-達成事例】

[5-6] 基準 1A についての生徒の達成の事例は以下のことを含む

⇒ 七年戦争の主要な結果はイギリスの勝利であること、北アメリカにおける競合勢力としてのフランスの除去、母国の保護に対する植民者の必要性の減退、を見極める。

⇒ 年代の順序を選ぶこと、そして、レキシントン及びコンコードでの戦闘の勃発へと導いた主要な出来事を説明すること

⇒ 英国議会が、植民地防衛のための費用を植民地に負担させることを正当化する理由を少なくとも一つ、そして、何故、植民者が英国人としての彼らの権利の要求しつつ、“代表無き課税”として新課税の合法性に挑戦したのかについて、理由を少なくとも一つ説明する歴史的論証又は叙述を創作すること。

[7-8] 基準 1A についての生徒の達成の事例は以下のことを含む

⇒ 七年戦争の結果、英国の新帝国主義政策、ジョン・アダムス、トーマス・ジェファソン、ジョン・デイッキンソン、トーマス・ペイン、パトリック・ヘンリー、サムエル・アダムスなどの抵抗の指導者の声、を含む証拠を集めること、そして、次のような問題について筋道だった歴史的論証を構成すること：英国が植民地防衛戦争の費用を負担させるために植民者に課税することに正当な理由があったか？。アメリカ植民者は英国新植民地政策にたいする抵抗が正当であることを証明したか？

⇒ 王党派と北部商人、南部の米やたばこの農場経営者、独立自営農民、都市職人などの異なる経済的集団からなる愛国者の利益と立場を比較することによって、これらの論争点に関する植民地における不一致を説明すること。

⇒ “銃声が世界中に響きわたる” ことへと導く出来事を含む歴史的証拠を整理すること、そして、以下のような問題に関して歴史的論証を開発すること：レキシントンとコンコードでの戦闘の勃発は予想されていたか？その時点で、いかなる行動が英国との戦争を防止し得ただろうか？

[9-12] 基準 1A についての生徒の達成の事例は以下のことを含む

⇒ 以下の問題に関する筋道立った論証又は叙述を構成するために、英国の新帝国主義政策の反対者と擁護者によって唱道されている論証を引用すること：議会の課税に反対する論証は、慣習法のもとでの英国人の歴史的、伝統的権利の合法的・憲法的防衛であった；あるいは、単に課税のがれの防衛であったか？七年戦争末に植民地に軍隊を駐留させる英国の決定は、植民地の防衛のために任命した

のか、あるいは、闘争的で拡張主義的な植民者を統制するための意識的な決定を反映していたのか？

⇒高まる危機並びに議会及び植民地において母国との決裂を防ぐための努力についての証拠を以下の問題について筋道たった歴史叙述或いは論証を構成するために引用すること；英国との決裂は避けられなかったか？危機の拡大及び戦争の勃発へと導く環境を、選択されたこと以外の両方の決定は変えようはなかったのか？

⇒ヴァージニア・バプテスト派、中部大西洋長老派、千年王国派の思想を引用して、いかにして宗教がアメリカ革命の一要因となったかを評価すること。

⇒ある人が王党派或いは愛国者であることを選択するのは何故かを説明する要因を分析して歴史叙述を構成すること。何故、三分の一近くの植民者が中立にとどまることを望んだのか？経済的及び社会的違いは人々が立場を選択するのに役割を果たしたか？説明すること。

⇒以下のことを王党派及び愛国者はどのように見たかを説明する証拠を整理すること。1773年の茶条例、ボストン茶会、“我慢ならない”諸法律、レキシントン・グリーンの小競り合いの原因、王党派は独立宣言の自然権理論をいかに書き換えようとしたか？王党派は独立宣言における課税金 (the charges) にどのように答えようとしたか？

【基準の構成要素 1-1 B】〔生徒はできるべきである：独立宣言の条項の原理を理解していることを以下のことで証明すること〕

< 5-12 >独立宣言に表現されている主要な思想およびそれらの源泉を説明すること〔前件環境の証拠を整理する〕

< 7-12 >独立宣言に表明されている理想と財産としての奴隷制の現実との間の基本的矛盾を証明すること

< 9-12 >独立宣言がアメリカの独立を正当化したかどうかを考慮しつつ、筋道立った歴史的論証を構成するためにその諸原理を引用すること。〔歴史的資料を組織的に調べる〕

< 9-12 >独立宣言とフランスの人間と市民の権利宣言を比較すること、そして、19-20世紀における憲政的民主主義の拡大にとって、それらの重要性を評価する論証を構成すること。〔思想の異なる特徴を比較し、対照する〕

【基準の構成要素 1-1 B 達成事例】

【5-6】 基準 1B についての生徒の達成の事例は以下のことを含む

⇒ “すべての人” “平等に創られる” “彼らの創造主によって与えられる” “譲渡できない権利” “生命、自由及び幸福追求” “正当な権力” “被治者の同意” を含む独立宣言の術語を定義すること

⇒何故、ジェファソンが独立宣言を書いたか、その書類に署名者が彼らの名前を書くことの危険は何か、そして、新しく宣言された国家にたいして、その結果は何であったか。 ⇒アリス・ダルグリーシュによる7月4日物語、ヘレン・ピーターソンの“我々を自由を与えよ：独立宣言の物語”のような本から、独立宣言に表明されている思想を説明するための証拠を引き出すこと。

【7-8】 基準 1B についての生徒の達成の事例は以下のことを含む

⇒すべての人間の基本的権利、これらの権利の源泉、政府の目的、被統治者の同意に正当な権力の源泉、“これらの目的を破壊”する政府の変革または廃棄する人民の権利を含む、独立宣言において宣言されている主要な原理の説明。

⇒啓蒙思想のキー理念に独立宣言の歴史的由来；英国の普通法、英国権利章典、名誉革命の伝統；自然法、神の前にそして国家の前にすべての人は平等な価値があることを支持するユダヤ-キリスト教の伝統；を説明すること。

⇒奴隷制と独立宣言によって表明された理念の間の基本的矛盾を以下の問題への解答において筋道立った論証を組織的に述べる (formulate) することによって説明しそして分析すること；独立宣言によってすべての人の不可譲の権利であると要求されているどんな権利が奴隷制を支持する人々に否定されたか？そんな矛盾は正当化されうるか？

⇒サム・アダムズ、トーマス・ペイン、マーチン・オーチス・ウオーレン、エベネゼル・マッキントッシュのような独立のための闘いの前線にいた人物の生活を検討するために伝記から証拠を引き出すこと。

[9-12 基準 1B についての生徒の達成の事例は以下のことを含む]

⇒独立宣言の思想をジョン・ロックの「政府に関する2論文」の思想と比較すること。それらはどう違っているか？同じか？ジェファーソンは何故、「財産」の代わりに「幸福の追求」の語句を使ったのか？ジェファーソンは、「幸福の追求」にどんな意味を与えたのか？

⇒独立宣言の原理に基づいて、それがアメリカの独立を正当化したか否かに関する筋道だった歴史的論証の構成を導き出すこと。

⇒アメリカの異なる地域の奴隷制度の主唱者及び反対者の手紙、演説、その他の記録における論証を、独立宣言の理念の見方に照らして、比較し、評価すること。奴隷制度支持のアメリカ人は、どのように、譲り渡すことのできない自由の権利を支持しながら、奴隷制の防衛を正当化したか？奴隷化されたアフリカ人は、彼らの自由を獲得するために革命的理念をどのように採用したか？

⇒アメリカ独立宣言をフランスの人間と市民に関する権利宣言と比較すること。そして、19,20 世紀における憲政的民主主義の拡大に対するそれらの重要性について評価するような、筋道だった歴史的論証を構成すること。アメリカ及びフランスの革命を鼓舞したこれらの理念が、20 世紀のメキシコ及びロシア、中国、キューバ、ヴェトナムの革命にどのように影響を与えたか？アメリカ人はこれらの現代の革命をどのように見てきたか？

【基準の構成要素 1-1 C】 [生徒はできるべきである：戦争の過程に影響を及ぼし、そしてアメリカの勝利に寄与した諸要因について、理解していることを以下のことで証明すること]

< 5-12 > アメリカの勝利の進展を支援した軍事的、政治的、外交的指導者の性格と役割を分析すること [個人の重要性を評価する]

< 5-12 > 白人植民者、自由及び奴隷アフリカアメリカ人、原住アメリカ人を含む男性と女性の戦争における異なる役割および展望を比較し、そして、説明すること [思想の影響を吟味する]

< 9-12 > 戦争財政の問題を分析する、そして、戦時のインフレ、買いだめ、不当利益を扱うこと [過去における論争及び問題を明確にすること]

< 7-12 > アメリカの勝利を説明すること [複数の原因を分析すること]

【基準の構成要素 1-1 C-達成事例】

[5-6] 基準 1C についての生徒の達成の事例は以下のことを含む

⇒ 1775-78 における北部から、1778-81 におけるヨークタウンを最高潮とする南部への移動として、

戦争の経過の年表を再構成する。

⇒戦争の主要な発展、1775年のレキシントンおよびコンコードでの発端から1781年のヨークタウンの戦闘までを記録するtime lineを創る

⇒ジョージ・ワシントン、ベンジャミン・フランクリン、トーマス・ジェファソン、ジョン・アダムス、ジョン・ハンコック、リチャード・ヘンリー・リーのような、主要な政治的、軍事的、外交的指導者から少なくとも二人の指導的役割を明確にし、比較すること。

⇒ジェームス・コリアーとクリスファー・コリアー著「自由へ飛躍する船」、「わたしの兄弟サムは死んだ」、「戦争はウィリー・フリーマンの所にやってきた」、エスター・フォブス著「トレインの旅」などの本から戦争は人々の生活にどんな影響を与えたかを判断する証拠を引き出すこと。

[7-8] 基準 IC についての生徒の達成の事例は以下のことを含む

⇒革命戦争における主要な戦闘を分析し、アメリカと英国の双方の軍事的指導者の指導性を評価すること。

⇒アメリカ革命に対する現住アメリカ人の多様な反応をイロコイ族、チェロキー族を事例に分析すること。同盟を結ぶことと中立にとどまることのジレンマを吟味しながら、歴史叙述を構成すること。なぜアメリカと英国は双方とも原住民との同盟を求めたのか？オスエゴ協議会(1777)後にモホクの首長ジョセフ・ブラントが英国を支持した理由は何か？戦争がイロコイ同盟に与えた衝撃は何か？チェロキー族には？

⇒アフリカ系アメリカ人の見方から革命戦争を吟味すること、そして、英国と愛国者の双方の根拠にたいして支持を取り付ける説得的な論証、あるいは批判を構成すること。

ダンモアの声明はどんな衝撃を与えたか？何故、自由黒人および奴隷は、戦争の間、愛国者側についてたか？彼らはどんな根拠に基づいて自由のための訴えをしたか、戦争の間は、そしてその直後には？

⇒アメリカ人への課税、外国からの借款、軍隊に必要な物品及び労役の徴発、保証のない紙幣の発行、国家の支払い拒否などの革命戦争の財政経営のための努力について、利益と不利益の比較し、評価する論証を構成すること。

[9-12] 基準 IC についての生徒の達成の事例は以下のことを含む

⇒次のような戦線に男性・女性が関与する戦時の展開によって、男性・女性・子どもの日常生活はどのような影響を受けたかを知り、それに関する叙述を構成するために、日記・手紙・歴史物語を利用する：女性及び子どもが農場や都市の実業に従事する男性の役割を果たす必要性；戦闘によってもたらされる身体の破壊、英国軍による都市の占領と略奪；戦争に起因する経済的困難と窮乏；

⇒戦争の主な政治上、軍事上、外交上の指導者のうち少なくとも一人について、指導性の特徴と貢献の意味について筋道だった論証を構成すること。そして、もし、この指導者がこの場にいなかったならばこの戦争はどんな影響を受けたであろうか仮説を立てること。

⇒サラトガの戦闘が革命戦争の岐路であったと考えられてきた理由を説明すること。ベンジャミン・フランクリンはフランスの支持を得るためにこの戦闘をどのように利用したか？如何にフランスが重要であったか、そして、この戦争を通じてどうであったか？

⇒アメリカ革命はどの程度市民戦争であり、また、独立のための戦争であったかを分析して、論説又は歴史叙述を構成すること。キングス・マウンテンの戦闘によってこの革命の市民戦争的特徴を例証すること。

⇒正規戦と並んでゲリラ戦がどのようなであったかがアメリカ革命の特徴であったことを説明するために、多様な資料から証拠を引用すること。どちらがアメリカの勝利にとって重要であったか？

⇒パリ条約を生み出すのを支援した要因を説明すること。この条約は軍事的あるいは外交的勝利であったか？何故か？

【基準の構成要素 1-1 D】〔生徒はできるべきである：アメリカ革命の性格と結果と達成に影響を及ぼしたアメリカとヨーロッパ列強との関係についての理解を以下のことで証明すること〕

< 5-12 > 革命の期間のフランス、スペイン、オランダと合衆国との関係および各ヨーロッパ列強のアメリカの勝利への貢献を分析すること〔原因-結果の関連を分析する〕

< 7-12 > パリ条約の術語および合衆国と現住アメリカ人および北米における領域と利益を継続的に保持するヨーロッパ諸国との関係にとって、それらの意義を分析すること〔複数の見方を考慮する〕

【基準の構成要素-1-1 D-達成事例】

[5-6] 基準 1D についての生徒の達成の事例は以下のことを含む

⇒ベンジャミン・フランクリンのフランス政府との交渉およびアメリカへのフランスの援助の重要性を以下のような疑問についての歴史的論証の構成によって評価すること；財政不足と人員不足のアメリカ人がフランスの援助なしにヨーロッパ世界の最も強力な軍事力をうち負かせることができたであろうか？もし、フランスの陸海軍がヨークタウンでワシントンを援助するのに間に合わなかったならば、何が起きていたであろうか？

⇒パリ条約の術語を明確に述べ、この条約で合意された領土の変化を地図でつきとめること。

[7-8] 基準 1D についての生徒の達成の事例は以下のことを含む

⇒フランス、オランダ、スペインの利益、目標、行動を英国との戦争におけるアメリカの援助要求に対応させて比較し、対照すること。

⇒マルキ・ド・ラファイエット、ピエール・ド・ボマルケ、シュトベン男爵フリードリッヒ・ヴィルヘルム、ジョン・ド・カルブ男爵、ダグラス・コシューシコ、カント・カシュミール・プラスキ他のようなヨーロッパ人のアメリカの勝利に対する貢献を評価する歴史的論証を開発すること。

⇒戦争終了時の現住アメリカ人の立場を評価すること。アメリカ人に彼らとの交渉の独占権を与えらるというパリ条約の用語が与えられたときに、現住アメリカ人の展望はどんなものであったか？ 1763年の声明を越えて植民者と英国の緊張に貢献した白人の土地所有欲は、戦後どのようにそれを表現したか？

[9-12] 基準 1D についての生徒の達成の事例は以下のことを含む

⇒アメリカの外交的主導およびヨーロッパの軍事的指導者の貢献は、アメリカ革命の性格と成果にどのように影響を与えたかを説明すること。次の陳述に同意又は不同意する歴史的論証を構成すること；”アメリカ革命は、非常に愛国者の少数の指導者、フランス及びスペインのような外国政府の干渉が理由で成功した。そして、それは最高に幸運であった”

⇒フランスとスペインの利益は合衆国の国民的利益をどのように異なっていたかを吟味すること。フランスは、革命戦争の間に、合衆国に軍事的、財政的支援の代償に何を期待したか？スペインは対英戦争の結果として何を期待したか？

⇒パリ条約の用語、それが明確に述べた国境が、合衆国、現住アメリカ人、スペイン、イギリス、

フランスの経済的、戦略的利益にどんな影響を与えたかを比較すること。アメリカ革命以後のイギリス西インドとの交易の損失によって、どんな経済的衝撃があったか？パリ条約後に議論として残された境界は何か？パリ条約はどの程度インディアンに対する重要な論争問題を表現しているか？イロコイ族とのフォート・スタンブーク条約(1784)および革命後のチェロキー族とのホープウエル条約はどんな衝撃を与えたか？合衆国とインディアンとの同盟は、彼らの支援によってどんな利益を得ることが期待できたか？

⇒ 1783年のパリ条約の結果として合衆国とスペインの間の国境論争を記述すること。何故、1786年のジェイ・ガルドキ条約は新国家における地域的経済紛争をもたらしたかを説明すること。

⇒戦争の終わったときにインディアンの指導者とジョージ・ワシントンとの、彼らの人民間の長期的な紛争を如何にして解決できるかについての対話を構成すること。

【基準2】〔生徒は理解すべきである：アメリカ革命は、アメリカ社会の改革をめざした新国民の多くの集団の多極的な運動をどのように含んでいたか〕

【基準の構成要素 2-2 A】〔生徒はできるべきである：異なる社会集団間での社会的、政治的、経済的関係への革命の影響について理解していることを以下のことで証明すること〕

< 7-12 >多くの白人、アフリカ・アメリカ人、原住アメリカ人が、アメリカ革命の間、イギリス側とどまったことに影響を与えた理由およびアメリカの勝利が各々に与えた結果を比較すること。〔複数の見方を考慮すること〕

< 5-12 >異なった集団の革命の目標はどの程度達成されたか、そして、どのように革命は彼らの間の社会的、政治的、経済的関係を変えたかについて比較すること。〔異なる価値、行動、制度を比較し対照すること〕

< 7-12 >奴隷および解放されたアフリカ・アメリカ人の革命的希望、革命の間に奴隷制の廃止を求める改革派、北部諸州における革命後の漸進的奴隷制度廃止を分析すること〔思想の影響を吟味すること〕

< 7-12 >新しい役割と権利のために女性を議論に引き込んだ思想を分析すること；彼らの願望と達成を限定した18世紀の因習；1776年の後に女性が彼らの権利の獲得に成功した程度；〔思想の影響を吟味すること〕

< 9-12 >初期共和国におけるアフリカ・アメリカ人指導者の貢献、北部の自由黒人共同体において発達したアフリカ・アメリカ人制度の重要性を説明すること〔個人の重要性を評価すること〕

【基準の構成要素 2-2 A-達成事例】

〔5-6〕 基準2 A についての生徒の達成の事例は以下のことを含む

⇒次の集団のうち少なくとも二つについてアメリカ勝利の影響を比較すること；小農民；富裕商人；戦争努力に貢献した女性；アメリカあるいはイギリス側で戦い、新しく解放されたアフリカ・アメリカ人；アメリカあるいはイギリス側で戦った原住アメリカ人；

⇒アビゲイル・アダムス、マーシー・オズワール、ヒス・ワイトレイ、のような個人の伝記的素描を、リサ・ストーン著「叛乱の歌」のような資料で構成すること。

〔7-8〕 基準2 A についての生徒の達成の事例は以下のことを含む

⇒次のような論争問題に関して、筋道だった論証、論争あるいは叙述を構成するために、日記、手紙、新聞から記録された証拠から解釈すること；アメリカ社会において女性が新しい役割及び権利を求めることは正当化されたか？どの程度彼らは、自由、平等、代表権などの革命的理想によって影響を受けたか；どの程度 18 世紀の社会的慣習によって強制されたか？

⇒新しく解放されたアフリカ・アメリカ人の社会的、経済的、地域社会の生活を改善するために働いた、プリンス・ホール、ポール・カフェ、リチャード・アレ、アブラハム・ジョーンズのようなかつての奴隷の貢献についての筋道だった歴史叙述を構成するために、伝記及び他の歴史的資料から証拠を引用すること

⇒次のような問題に関して歴史的証言を整理するのに、バランスシート、討論、又は叙述の形式で歴史的論証を構成すること：革命を支持した人々の革命の目標はどの程度達成できたか？イギリスに忠誠を尽くした人々の目標は何であったか（王党派、原住アメリカ人、多くのアフリカ・アメリカ人）、そして、アメリカの勝利は彼らにとって何であったか？

⇒次のような多様な歴史物語および一次資料集を通して、革命期の間の生活に関して若い人々の展望を吟味すること：ポール・ザール著「未来のアメリカ」、「アメリカ革命における青年達」。

【9-12】基準 2-A についての生徒の達成の事例は以下のことを含む

⇒奴隷及び自由アフリカ・アメリカ人および原住アメリカ人の集団の利益は、アメリカの勝利によって、どの程度前進しあるいは遅れたかに関して筋道だった歴史的論証を開発すること。農民、商人、職人はアメリカ革命の結果どうなったか？

⇒初期共和政治期のアフリカ・アメリカ人の指導者および彼らが直面した人種差別の障碍を克服するために北部の自由黒人共同体で発達させた制度、南部における奴隷制反対運動に対する猛猛な抵抗の重要性を評価する伝記及び他の歴史資料を引用すること。北部における自由黒人の間の強力な共同体の建設においてアフリカ・アメリカ教会の役割は何であったか？

⇒ジョン・アダムスへのアビゲイル・アダムスの手紙(1776)、メリー・ウォルストン「婦人の権利の擁護」(1792)、「落ち穂拾い」(1798)の中のユダヤ人サジエント・マリのような論証を引用し、女性が彼らのジェンダーのための新しい役割と権利の要求を如何に発展を継続させているか、1776 年以降の年において新しい教育的及び政治的権利を得ることにどの程度成功しているか、そして、どの程度彼らはどの程度公共の領域にはいることができたかを分析すること。

【基準 3】〔生徒は理解すべきである：革命の期間に創造された政府の制度と実践。そして、アメリカ政治システムを創造するために、1787-1815年の間にそれらがどのように修正されたか〕

【基準の構成要素 3-3 A】〔生徒はできるべきである：国家および州レベルの双方での政府づくりについて理解していることを以下のことで証明すること〕

< 5-12 > 連合規約に関する論議を分析すること〔思想の影響を吟味する〕

< 9-12 > 少なくとも二つの州の憲法を比較すること、そして、何故、それらが違うのかを説明すること〔複数の因果関係を分析する〕

< 7-12 > 大陸会議の達成と失敗を評価すること〔歴史家の主要な論争を評価する〕

< 7-12 > 北西条例の重要性を評価する〔歴史の資料を調べる〕

【基準の構成要素 3-3 A-達成事例】省略

【基準の構成要素 3-3 B】〔生徒はできるべきである：3 B 合衆国憲法の創造と批准に含まれていた

論争点および憲法が制定して新政府について理解していることを以下のことで証明すること]

< 5-12 > シェアーズの叛乱を含めて、大陸会議の招集に含まれている諸要因を分析すること[複数の因果関係を分析する]

【基準の構成要素 3-3 B-達成事例】省略

【基準の構成要素 3-3 C】[生徒はできるべきである：権利章典の保証とその継続的意義について理解していることを以下のことで証明すること]

< 5-12 > 権利章典の意味およびその明確な保証を分析すること。[思想の影響を検証する]

< 9-12 > アリン及びセデション法(1798)はこれらの権利を脅かすものかどうか、そして、議会の法律についての司法的見解の欠如に彼らが主張した論争点を分析すること。[意志決定の含意を評価する]。

< 9-12 > 権利章典に含まれる最近の裁判事例において表明された論争点を分析し、それらの継続的今日的意味を評価すること。[歴史的先行条件に関連して証明する]

【基準の構成要素 3-3 C-達成事例】省略

【基準の構成要素 3-3 D】[生徒はできるべきである：最初のアメリカの政党制度の成長について理解していることを以下のことで証明すること]

< 9-12 > 政治的党派はたとえひどく非難されたけれども、二政党制が発達したことを説明すること[複数の因果関係]、

< 5-12 > 各政党の指導者及び社会的及び経済的構成を比較すること[異なる人格、行動、及び制度を比較対照する]

< 7-12 > 1790年代の中心的な経済及び外交政策の論争点に関して二つの政党の異なる見方を比較すること

【基準の構成要素 3-3 E】[生徒はできるべきである：1789年から1820年までの最高裁判所の権力の成長および意味について理解していることを以下のことで証明すること]

< 7-12 > 最高裁判所を連邦政治体制の独立且つ対等な部門として確立する際の、ジョン・マーシャルの先だてて定めた決定の重要性を評価する[個人の重要性を評価する]

< 9-12 > 1790年代および19世紀初期の間の最高裁判所の権力の発達を跡づけること、そして、その今日への影響を分析すること。[歴史の連続性と変化を説明する]

【基準の構成要素 3-3 E-達成事例】省略

参考文献

〈ナショナル・スタンダード成立に関する参考文献〉

- (1) Commission on Excellence in Education, *A Nation at Risk*, 1983; 橋爪貞雄訳『危機に立つ国家』黎明書房, 1984
- (2) 佐藤三郎著『アメリカ教育改革の動向』教育開発研究所, 1997
- (3) 岸本睦久, 90年代米国の初等中等教育改革の動向, 『文部時報』平成9年2月
- (4) National Center for History in the Schools; *National Standards for History, Basic Edition*, 1996
- (5) National Council on Education Standards and Testing, *Raising Standards for American Education, A Report on Congress, The Secretary of Education, The National Education Goals Panel, and the American People*, 1992. 1
- (6) *Goals 2000; Educate America Act Overview and Analysis*, 1993: ERIC NO-ED 359637, ABSTRACT
- (7) *Summary of Goals 2000: Educate Act*, 1994: ERIC NO-ED389130, ABSTRACT

〈ナショナル・スタンダード研究論文〉

- ① 森田真樹, アメリカ合衆国における教育改革と社会科系ナショナル・スタンダードの成立, 中四国教育学会『教育学研究紀要』第41巻第1部, 1995
- ② 森田真樹, 米国におけるナショナル・スタンダードをめぐる論争—「合衆国史ナショナル・スタンダード」を中心として—, 『教育学研究紀要』第42巻第1部(中四国教育学会), 1996
- ③ 森田真樹, 多文化社会米国における歴史カリキュラム開発—合衆国史ナショナル・スタンダードをめぐる論争を手がかりに—, 『カリキュラム研究』第6号, 1997.3
- ④ 岸本実, 米国の公民・政治ナショナル・スタンダードの特徴, 『社会科教育の創造第5号』(滋賀大学教育学部社会科教室研究室編), 1998
- ⑤ 田尻信一, 「歴史的思考」とは何か —「世界史ナショナル・スタンダード」等を手がかりにして—, 『1998年度社会科教育学全国大会研究発表資料』, 1998

〈関連研究論文〉

- ⑥ 三浦軍三, “人権の世紀”における米国公民形成と社会科の性格 —カリフォルニア州, 歴史—社会科学フレームワークの特色と背景を中心に—, 『社会科教育研究』No62, 1990
- ⑦ 小柳正司, 最近のアメリカにおける文化リテラシーをめぐる問題状況, 上・下, 鹿児島大学教育学部研究紀要・教育科学編, 第42号, 1990; 第43号, 1991
- ⑧ 金子邦秀, 現代アメリカ社会科の研究(5) —多文化教育による資格付与—, 『社会科研究』第41号, 1993
- ⑨ 広池典子, アメリカの社会科フレームワークにみる多文化主義, 『社会科における多文化教育の比較研究』東京学芸大学社会科教育研究室, 1993
- ⑩ Jesus GARUCIA, Amber WALKER (訳 川崎誠司), アメリカにおける社会科教育と多文化教育の展開 —1980, 90年代の検討を通して—, 『社会科教育研究』No72, 1995.2
- ⑪ 大森正, 文化リテラシー論とカリフォルニア州の「歴史—社会科学フレームワーク」, 『社会科教育研究』No75, 1996.3
- ⑫ 森茂岳雄, ニューヨーク州の社会科カリキュラム改訂をめぐる多文化主義論争 —シュレージン

- ガ, Jr. の批判意見の検討を中心に一, 『社会科教育研究』 No76, 1996
- ⑬ 江口勇治, アメリカ社会科の最近の動向(4) —NCSS のカリキュラム規準に関して— 『アメリカの学校教育における全米標準化運動に関する総合的研究— 平成8年度筑波大学学内プロジェクト助成研究(B) 研究成果報告書』, 1997.3
- ⑭ 桐谷正信, アメリカ多文化歴史教育における「新しい社会史」の位置と価値 —ニューヨーク州歴史シラバスの分析を手がかりに一, 『社会科教育研究』 No78, 1997
- ⑮ 桐谷正信, ニューヨーク州社会科フレームワークにおける多文化歴史教育 —「多様性」と「統一性」を中心に— 『1998年度社会科教育学全国大会発表資料』, 1998
- ⑯ 佐藤秀樹, シュタイナー学校における歴史教育の特質 —アメリカのハイスクールを事例として— 『1998年度社会科教育学全国大会発表資料』, 1998
- ⑰ 梅津正美, アメリカ中等歴史教育における社会史教授原理の展開 —政治過程における生活者の個別判断・競合の分析を視点とする新しい教材解釈モデルの提起— 『1998年度社会科教育学全国大会発表資料』, 1998

Ⅷ. アメリカの公民関連のナショナルスタンダードに みるカリキュラムの一貫性

江口 勇 治（筑波大学教育学系）

はじめに

本節ではアメリカ社会科の公民教育の一貫性の一端を解明するために、“National Standards for Civics and Government”（171頁）として、Center for Civic Education（Calabasas, California）から、1994年に刊行された資料の抄訳を行なう。本資料は、全米でのいろいろな教科のカリキュラム標準化の社会的要請に呼応し、公民教育関係の非営利団体である当センターが中心となって整理、提案したものである。そのため明確な連邦政府の要請によらない、本スタンダードは、アメリカの公民教育者、教育実践者、カリキュラム開発団体の総意と合意に基づくものであり、「政策的文書」という性格もさることながら、公民教育関係者の1980～1990年代当初の政治的な時代状況を色濃く反映しているものになっていると考える。とくに、公民教育をとりまく問題状況、たとえば極端な個人主義化の進行、公共性の弱体化、学校や地域社会の治安の悪化などを念頭に、アメリカの思想においてその位置を確保しつつある「共同体論」（Communitarianism）の主張を一部取り入れた、これまでの公民教育カリキュラムとは若干異なる方向をもっている。ただし、「教育省教育研究と改善に関する部局」（the Office of Educational Research and Improvement）と The Pew Charitable Trusts との財政を中心とする援助は受けていることは、はじめに指摘しておく。

本スタンダードでは、附属資料として「K-4」「5-8」「9-12」の各学年段階に対応した特徴の整理が掲載されているので、本節ではこれらの抄訳を主に行なう。なお、このスタンダードの基本的な特徴については後述する。

1. “National Standards for Civics and Government” の内容（抄訳）

(1) 基本的な質問とその内容

K-4 学年	5-8 学年	9-12 学年
I. 政治とはなにか、またどうあるべきか。	I. 公共的生活, 行政, 政治とはなにか。	I. 公共的生活, 行政, 政治とはなにか。
政治の定義 権力と権威の定義 政治の必要性和目的 政治の機能 ルールと法の目的 ルールと法の評価 制限された政府と制限されていない政府 制限された政府の意義	公共的生活, 行政, 政治の定義 制限された政府と制限されていない政府 法の支配 “憲法, 制度” の概念 “憲法, 制度” の目的と使用 立憲政治の繁栄の条件 権力分立と議会システム 同盟, 連邦, 単一体システム	公共的生活, 行政, 政治の定義 制限された政府と制限されていない政府 法の支配 “憲法, 制度” の概念 “憲法, 制度” の目的と使用 立憲政治の繁栄の条件 権力分立と議会システム 同盟, 連邦, 単一体システム

<p>II. アメリカ民主主義の基本的な価値と原理はなにか。</p>	<p>II. アメリカの政体の基本はなにか。</p>	<p>II. アメリカの政体の基本はなにか。</p>
<p>基本的な価値と原理 アメリカ社会の特徴 アメリカ人のアイデンティティ アメリカ社会の多元性 紛争の防止と処理 理想社会の推進</p>	<p>立憲政治についてのアメリカの考え方 アメリカ社会の特徴 アメリカの生活におけるボランティアリズムの役割 アメリカ社会の多元性 アメリカ人のアイデンティティ アメリカの政治的対立の特質 基本的な価値と原理 アメリカの政治や社会生活での価値や原理をめぐる紛争 アメリカの政治や社会生活での理想と現実の不一致</p>	<p>立憲政治についてのアメリカの考え方 アメリカの立憲政治はアメリカ社会の特徴にどのようにかかわっているか。 アメリカ社会の特徴 アメリカの生活におけるボランティアリズムの役割 政治における組織集団の役割 アメリカ社会の多元性 アメリカの国家的アイデンティティと政治文化 アメリカの政治的対立の特質 リベラリズムとアメリカの立憲民主主義 共和主義とアメリカの立憲民主主義 基本的な価値と原理 アメリカの政治や社会生活での価値や原理をめぐる紛争 アメリカの政治や社会生活での理想と現実の不一致</p>
<p>III. 憲法により設立された政府はアメリカ民主主義の目的、価値、原理をどのように実現しているか。</p>	<p>III. 憲法により設立された政府はアメリカ民主主義の目的、価値、原理をどのように実現しているか。</p>	<p>III. 憲法により設立された政府はアメリカ民主主義の目的、価値、原理をどのように実現しているか。</p>
<p>憲法の意味と重要性 国家の組織と主要な責任 州政府の組織と主要な責任 地方政府の組織と主要な責任 政治の主体を考える。</p>	<p>中央政府に配分され、所有され、制限されている権力 中央政府と州政府間の権力の分有 国内外政策での中央政府の主要な責任 税による財政 州政府と地方政府の組織と主要な責任 あなたの地方、州、中央政府の立法、行政分野でのあなたの代</p>	<p>権力の分立とその乱用の防止 アメリカの連邦システム 中央政府の制度 国内外政策での中央政府の主たる責任 税による財政 州と地方政府の憲法上の地位 州政府と地方政府の組織 州政府と地方政府の主要な責任 アメリカ社会における法の位置 個々人の権利の法的擁護</p>

	<p>表者はだれか。</p> <p>アメリカ社会における法の位置</p> <p>ルール，法を評価する基準</p> <p>個々人の権利の法的擁護</p> <p>政治的議論</p> <p>政治的コミュニケーション</p> <p>政党，キャンペーン，選挙</p> <p>結社と団体</p> <p>公共政策の策定と実行</p>	<p>政治的議論</p> <p>世論と有権者の行動</p> <p>政治的コミュニケーション： テレビ，ラジオ，新聞，演説</p> <p>政党，キャンペーン，選挙</p> <p>結社と団体</p> <p>公共政策の策定と実行</p>
IV. 他の国家や世界的事柄に対して合衆国はどんな関係をとるか。	IV. 他の国家や世界的事柄に対して合衆国はどんな関係をとるか。	IV. 他の国家や世界的事柄に対して合衆国はどんな関係をとるか。
<p>主権諸国家</p> <p>主権国家間の相互関連</p>	<p>国家－諸州</p> <p>国家－諸州間の相互関連</p> <p>合衆国の他の国家－諸州への関係</p> <p>国際諸機関</p> <p>世界の民主主義と個々人の権利擁護に対するアメリカの考え方の影響</p> <p>政治，人口，環境の発展</p>	<p>国家－諸州</p> <p>国家－諸州間の相互関連</p> <p>合衆国の外交政策の歴史的な文脈</p> <p>合衆国の外交政策の策定と実行</p> <p>合衆国の外交政策の目標と手段</p> <p>世界の民主主義と個々人の権利擁護に対するアメリカの考え方の影響</p> <p>政治的発展</p> <p>経済的，技術的，文化的発展</p> <p>人口と環境の発展</p> <p>合衆国と国際諸機関</p>
V. アメリカの民主主義における市民の役割はなにか。	V. アメリカの民主主義における市民の役割はなにか。	V. アメリカの民主主義における市民の役割はなにか。
<p>市民的資質の意味</p> <p>市民になること</p> <p>諸個人の権利</p> <p>諸個人の責任</p> <p>市民の効用を高め，アメリカの民主主義の働きを促進する傾向性</p> <p>参加の諸形態</p> <p>政治的指導者と公共サービス</p> <p>指導者の選挙</p>	<p>市民的資質の意味</p> <p>市民になること</p> <p>個人的権利</p> <p>政治的権利</p> <p>経済的権利</p> <p>権利の範囲と限界</p> <p>個人的責任</p> <p>公民的責任</p> <p>市民の効用を高め，アメリカの民主主義の働きを促進する傾向性</p> <p>公共的，政治的世界への参加と</p>	<p>市民的資質の意味</p> <p>市民になること</p> <p>個人的権利</p> <p>政治的権利</p> <p>経済的権利</p> <p>個人的，政治的，経済的権利の関係性</p> <p>権利の範囲と限界</p> <p>個人的責任</p> <p>公民的責任</p> <p>主体性のある市民になるための傾向性</p>

	個人と公共の目標の達成 政治的参加と社会的参加の違い 政治的参加の諸形態 政治的指導者と公共サービス 知識と参加	個々人の価値や人間の尊厳性を 尊重する傾向性 公共性に向かう傾向性 公共的事柄への思慮ある効果的 参加を進める傾向性 行政と個人や公共の目標達成と の関係 政治的参加と社会的参加の違い 政治的参加の諸形態 公共サービスにおける政治的指 導者とその仕事 知識と参加
--	--	--

以上の表に一覧化されているものは、内容的に見た基礎・基本、すなわち‘Content standards’である。「内容のスタンダードは、それぞれの教科目、たとえばシビックス、歴史、地理で理解すべき、また行なうことができることを述べたものである。それは、幼稚園から12学年までのあるコースで子どもたちが習得すべき知識理解や発達すべき技能に関係したものである。」(p.3)と簡潔に説明されているように、最低限「シビックス」や「政治」といった科目で行なう場合盛り込まれるべき内容を意味する。各項目についての細かな紹介は省略せざるを得ないが、表からアメリカの政治教育で今求められていることがうかがわれる。I.は政治の定義にかかわる問いであり、政治が権力と権威の行使によるものであり、この行使において法が創設され、その法のもとで行政が展開されている最も基本的な事項の理解を求め、II.においてはアメリカの政治的特徴とその特徴を生み出す社会的背景、政治の中に息づくボランティア的行為の意義、対立を調和へともたらしめる基本的価値と原理、理想と現実の解離という政治的現実の理解を求め、アメリカという世界において政治を学ぶことの重要性を鮮明にする。そのためIII.において、アメリカという国家のアイデンティティに光をあてて現に機能している政治的特徴の理解を求める。ここまでは基本的な国内政治に関連する内容と思われる。一方、IV.は、国際関係の中でのアメリカの外交政策に関する事項であり、アメリカ政治の一つの特徴があらわれている。「多様性の中の統一」をその国家建設のスタートから目指してきた合衆国においては、主権の行使に関するルールの確定していない世界において統一を求めていく姿勢は一般的にあり、この精神を外交の世界で証明して見せるのがこの内容であろう。ところでV.の参加に関する技能の重視は、これまでの政治教育ではそれほど見られなかった。この内容から、自由主義（リベラリズム）の中においていかに公共性を確保するかが、アメリカの政治教育の焦眉の問題であることが示されている。「個人主義」から「共同体主義」への傾向は、「傾向性」(Dispositions)として示される内容に明確に見られており、この傾向は後述する本書の原理でも表明されているのである。

(2) パフォーマンス・スタンダードの例示

本スタンダードは、子どもの実質的能力を高める方策の一つとして提起されたものである。そのため、内容のスタンダードを子どものレベルでどう確保したのかという点が重視され、実際の子どもの達成度基準というべきパフォーマンスの基準がそれぞれの内容に応じて設定されている。ここでは、その概略を抄訳により紹介してみたい。(pp.147～150)

パフォーマンススタンダードとは

パフォーマンス・スタンダードとは、内容スタンダードの達成度の望ましさを決定するための基準である。“よく達成されていれば、十分である”ということになる。生徒はこの達成度を次のような方法で証明することになる。

■書くことによるパフォーマンス

■話すことによるパフォーマンス

■参加的活動（によるパフォーマンス）

■視聴覚機器によるプレゼンテーション

内容スタンダードの達成度を証明しようとするこれらの諸手段それぞれが、生徒の次のような達成度の証拠となる。すなわち、主要な概念の理解度、適切な歴史的及び現代的状況の把握度、さらには現代の論争的問題についての評価と見解の表明と防御のために習得したことを適用することなどの証明となる。なお、以下のパフォーマンス・スタンダードの程度は、段階があること、内容のスタンダードと関係していることを示している。（生徒のより上の段階でのパフォーマンスを応答を評価するために設定されたものである。）たとえば、以下の例は9-12学年のパフォーマンス・スタンダードの事例である。

■基礎レベル：このレベルでは、「権力が制限された政府」と「権力が制限されていない政府」のそれぞれの主たる特徴の説明とそのような政府の歴史的、現代的事例の一つを少なくとも例示できるという段階である。

■上達レベル：このレベルでは基礎レベルに加えて、「立憲民主主義」としての「制限された政府」と「権威主義」「全体主義」による「制限されない政府」との差異を説明できる段階である。

■発展レベル：このレベルでは上の二つのレベルに加えて、両政府における市民社会の役割、権威主義や全体主義の支配形態に見られるイデオロギーの役割を含めた政府の特徴をより深く理解できる段階である。

内容スタンダードとパフォーマンス・スタンダードの関係例（9-12学年）

内容スタンダード

1. 「制限された政府」と「制限されない政府」

生徒は、この二つの政府の主要な特質を説明できなければならない。そのためには、次のようなことが達成されるべきである。

■「制限された政府」と「制限されない政府」の特質を記述できる。

□「制限された政府」は、その権力の抑制を設定しているし、そのことを承認している。

◇立憲による政治-政治権力に対しての法的制限を保有する政府

□「制限されない政府」は、その権力の抑制において法的な制限やその他の効果的な制限の手段を保有していない。

◇権威主義体制-政治的権力がある一人の人、あるいは特定の小集団に集中し、個人や団体はその権力に従属する政府

◇全体主義体制-政府が個人の生活のあらゆる局面をコントロールし、自治的組織を禁止する極端な権威主義の形態の現代版

■「制限された政府」と「制限されない政府」の歴史的事例や現代的事例を確定できるし、その

差異を説明できる。

□「制限された政府」－合衆国，イギリス，ボツワナ，日本，イスラエル，チリ

□「制限されない政府」－ナチ時代のドイツ，帝国主義段階の日本，フランコ政権下のスペイン，ペロン政権下のアルゼンチン，フセイン政権下のイラク，イラン

パフォーマンス・スタンダード

■基礎レベル：以下のことがいろいろな手段で説明できること。

制限された政府	制限されない政府
主 要 な 特 徴	
立憲に基づく政府	憲法に基づかない政府
憲法及びその他の法で効果的に抑制された権力 ・政治の目標やその目標達成の手段が憲法に違反しないこと。 ・警察／裁判権力の効果的制限。 ・行政権，立法権の制限。 ・国民及び政治を行なう人に法を適用すること。	軍事力などで憲法が抑制され効果的に働かないこと。 ・警察権力が効果的に制限されない。 ・行政にコントロールされる司法。 ・立法権や司法権によって抑制されない行政権。
歴 史 的 事 例	
・アメリカ合衆国 ・イギリス	・ムッソリーニ政権下のイタリア ・フランコ政権下のスペイン
現 代 的 事 例	
・イスラエル ・日本	・イラク ・リビア

■上達レベル：以下のことがいろいろな手段で説明できること。

制限された政府	制限されない政府
主 要 な 特 徴	
立憲に基づく政府	憲法に基づかない政府
権力を制限するための制度的工夫 ・成文憲法，不文憲法 ・司法権の独立 ・抑制と均衡 ・権力の分立 ・人権擁護規定 ・定期的，自由，公正な選挙 憲法の規定，すなわち人権擁護や共通善の促進	権威主義システム 個人や集団により行使される制限のない権力 国家に従属する個人の権利 政府の権力の抑制についての法や効果的方法がないこと。 ・選挙された議会がない ・普通選挙がない ・司法権が独立していない

のために権力は制限されること。	全体主義システム 政府が個人の生活のあらゆる局面をコントロールし、自治的組織を禁止する。 威嚇と恐怖の政治的利用
歴 史 的 事 例	
<ul style="list-style-type: none"> ・カナダ ・オーストラリア ・ニュージーランド ・アメリカ合衆国 	権威主義システム <ul style="list-style-type: none"> ・帝政期ロシア ・1930年代の軍事政権下の日本 全体主義システム <ul style="list-style-type: none"> ・スターリン政権下のソビエト連邦 ・毛沢東政権下の中国 ・チャウシェスク政権下のルーマニア ・ホルボト政権下のカンボジア ・金日成政権下の北朝鮮
現 代 的 事 例	
<ul style="list-style-type: none"> ・ボツワナ ・日本 ・デンマーク ・ベネズエラ ・アメリカ合衆国 	権威主義システム <ul style="list-style-type: none"> ・ケニア ・ミャンマー（ビルマ） 全体主義システム <ul style="list-style-type: none"> ・カストロ政権下のキューバ ・サダムフセイン政権下のイラク

■発展レベル：以下のことがいろいろな手段で説明できること。

制限された政府	制限されない政府
主 要 な 特 徴	
立憲に基づく政府	憲法に基づかない政府
<ul style="list-style-type: none"> ・政府の不合理な干渉から自由なプライベートな生活の確保 ・多数の政党の存在；“誠実な反対”の承認 ・多数の非政府組織からなる市民社会の存在 	権威主義システム <ul style="list-style-type: none"> ・特徴としてはしばしば軍事政権，半一軍事政権 ・しばしば国家主義的／伝統主義的 ・脅迫的な禁止組織 ・支配の利益に従って市民社会を制限 全体主義システム <ul style="list-style-type: none"> ・世俗的宗教としてのイデオロギー ・教育，文化，芸術，大衆のコミュニケーションの管理 ・旅行，出入国の管理または禁止 ・政党の支配外の権力／影響あるわずかな組織の存在（たとえば，軍人，科学者のエリート集団） ・独立した組織や結社が許されず，市民社会がない

2. 本スタンダードの全体的特徴について

このスタンダードは、「ゴール2000：1994年教育法」に記述された目標3「Student Achievement and Citizenship」の「2000年までに、…civics と government…（諸教科）などの課されている諸教科に関する能力の証明をもって4，8，12学年の段階を通過しなければならない。そして責任ある市民的資質，一層の学習，生産的な就職のために彼らを準備しなければならない。…すべての生徒は，良き市民的資質（good citizenship），地域社会での奉仕（community service），個人的な責任（personal responsibility）を高め，証明する活動に関わっていかなければならない。」という部分と目標6「Adult Literacy and Lifelong Learning」の「2000年までに，すべてのアメリカの成人は……市民的資質に見られる権利と責任の行使……に必要な知識と技能をもった教養ある成人に成らなければならない。」という部分を，基本的に受けて作成されたものである。そのため，前掲の内容スタンダードとパフォーマンス・スタンダードは，すべての生徒の4，8，12学年の出口における達成目標であって，シビックスや政治の学習内容の全体像を網羅したものではない。むしろ，目標6の達成に必要となる最低限の市民的資質に関する政治的教養としての基礎・基本である。また，市民的資質のスタンダードについては，①生徒のための基準，②先生のための基準，③学校のための基準，④州や学区の教育関係機関の基準の四つが連携的に設定される必要があるが，本書は①について「内容スタンダード」と「パフォーマンス・スタンダード」の2方向からその基準を示したものである。

前者の基準は，市民的資質の知識が実際の社会参加の技能に連動してはじめて意味を持つことを前提に，技能を含めた能力として，表現されていることに一つの特徴がある。いわば，知的技能（intellectual skills）と参加技能（participatory skills）によって，市民的資質の内容を確定するリアリズムないしプラグマティズムを明確に反映している。「知っていても，できなければだめ」という精神である。そのため，後者で生徒の具体的活動の基準が設定されることになる。

ところで，アメリカ市民に必要な基礎・基本としての教養を求める姿勢は，本スタンダードでもかなり強調されており，基本的な政治や価値の方向が本書からうかがえる。たとえば，内容スタンダードの基本概念として次のような用語と考え方が，原理の部分で記述されている。

- A. Civic life / private life（公共的生活／私的生活）：地域社会や国家といった公共的空間と私的な幸福を追求する私的空間の両者があること。
- B. Civil society（市民社会）：公的空間を支えるボランタリーな組織や関係があること。この社会では政府からの不合理な干渉はなく，政府の外から政府を支える関係にある。
- C. Constitution（憲法，政治形態）：いろいろな意味があるが，共通善と個々人の権利を保障するために設立される制限された政府についての，法により記述される政治形態であり，制限された政府と立憲政治は同義である。
- D. Liberalism（自由主義）：アメリカの政治的伝統のうちの一つで，個々人の権利を重視するロックやジェファーソンの考え方に古典的には求められる。個々人の権利を保障するものとして，合意される限りで，政府は正当化されるとする。
- E. Republicanism（共和主義）：アメリカの政治的伝統のうちの一つで，共通善を実現するために国民の代表により政治を行なうもので，古代ギリシャやローマに起源を持つ政治形態。直接民主主義と類似であるが現代においては代議制であり，公共善と公民的徳を重視する。
- F. Politics（行政・調整）：次のような過程で使う。①集団の結合と共通政策の実施に関する意思決定，②資源の配分，利益と負担の分配，紛争の調整に影響を与える意思決定の権力の追求，

③個々人では実現できない目標の実行

G. Systems of shared powers (権力の分立)：合衆国に見られる権力の配分，分有，制限としての権力の分立のシステムとして使う。例として大統領制，中央政府と地方政府の関係など。

H. Citizens and Americans (市民とアメリカ人)：市民とは広義の意味で使い，国籍がなくてもアメリカにすんでいるすべての人をさす。アメリカ人とは，ここでは合衆国の国民として任命されている人を指すものとして使う。

これらの用語と定義で注目されるのは，これまでの公民教育よりも共和主義的伝統をいかに現代的に再生させていくかということを中心とする姿勢が強いことである。とくに，A，B，FはRepublicanismに基づいた定義がなされており，公共善や公的徳の一貫として，市民的資質をとらえていると思われる。その結果，社会に参加する技能が重視されることになる。参加技能として，① politics (行政・調整)や government (統治，支配)を監視する技能，② politics や government に影響を与える技能，の2つを取り上げる。これらの能力は，国家からの干渉に対抗する，Liberalism (自由主義)に関連する面もあるが，むしろ論争問題に関わる，合意過程に関わるといったことから定義されているため，市民として共有すべき資質，共和主義の世界で基本的に要請される資質といった意味の方が強い。もちろん「共通教養」を確定しようとするスタンダードの流れから言えば当然のことになるが，政治的在り方や考え方自体の変化もこれに大きく関わっているのではないだろうか。社会問題の理解とその処理について，「ある考え方を共有しなければ，解決は難しい」という競争的状況があり，その打開としてこの文書が位置づくと考えれば，こうした市民的資質の方向はうなづける。本節では，紙幅の関係から個別の内容スタンダードの定義や考え方について言及できなかったが，それぞれの内容を見ると上述のような方向があらわれている。

ただ，リベラリズムの伝統が，なお息づく箇所がある。それは，前掲のIV.の国際政治に関する記述である。自由と民主主義をおびやかす「制限されない政府」に対する理解を十分に求めており，この方向から，国際的な人権，少数者の権利保障といった視点の重要性を強調し，リベラリズムの大切さを国際的な文脈で明らかにしていることである。この部分も「国民的統合」のために比較させるという意味もあるが，むしろ個々人の権利を擁護するという精神の表れであろうと考えたい。やはり，本スタンダードは，全体としては，やはりこれまでの政治的教養について合意されたものを，バランスよく身につけて欲しいという目的から作成されているのであろう。

以上，政治的資質についての一貫性に関する資料を中心に抄訳を行なった。公民教育の一貫性の議論では，経済の教育で一貫性がいかに図られているかといった点の解明も必要であるが，次節ではこれまでわが国であまり注目されてこなかった法的資質(法に関する知識，理解，技能)の一貫性に関する議論の紹介を行なう。公民教育の内容は，基本的には，政治，法律，経済，(市民)社会の4領域から大きくは規定されるものであり，今後は，法律と(市民)社会(具体的には国家とは別に存立する調整組織とボランティア的精神，活動)の一貫性を図ろうとしてアメリカで模索されているカリキュラムの解明も必要ではないだろうか。

IX. ナショナル・スタンダードとしての 法教育カリキュラムの構成 — “I’m the People” の分析を通じて—

磯山 恭子 (筑波大学大学院)

1. はじめに

本研究の目的は、1990年代、アメリカの「法教育」(Law-Related Education)においてアメリカ合衆国共通の基準として位置づけられた「法的リテラシー」(legal literacy)の内実とその育成の方法論について明らかにすることである^①。その方法として、「法教育指針」^② (“Essentials of Law-Related Education”) およびそれにもとづく法教育プログラム “I’m the People—It’s about Citizenship and You”^③ (以下, “I’m the People” とする。)の構成を検討する。

法教育とは、市民的資質の育成のための一つのアプローチであり、学校において広義の法を教育することを通じて法的リテラシーの育成を目標とする。アメリカ合衆国議会 (the U. S. Congress) において、1978年に “Law-Related Education Act of 1978”^④ が承認されて以来、法教育は、アメリカ合衆国全体の取り組みとして重要であるとの認識がなされてきた。本研究で実際に検討する「法教育指針」およびそれにもとづく法教育プログラム “I’m the People” は、アメリカにおける「ナショナル・スタンダード」の開発の動向を踏まえて、1990年代に法教育の展開に主要な役割を担ってきたアメリカ法律家協会 (American Bar Association) によって提案されたものである。これまでの法教育の展開において、これらは、はじめて法的リテラシーの育成のために必要な条件を精細に提示するとともに、その理念にもとづき小中高一貫した法教育カリキュラムを具体的に提示した点で注目に値すると考える。

2. ナショナル・スタンダードとしての「法教育指針」作成の経緯

クリントン大統領によって1994年に制定された「2000年の目標：アメリカ教育法」^⑤をうけて、各教科で全米共通の教育内容の基準である「ナショナル・スタンダード」が作成されたことは周知の事実である。社会科では、歴史的領域、地理的領域、公民的領域のそれぞれに応じて、「ナショナル・スタンダード」が開発された。そのことを背景として作成された「法教育指針」に関する議論については、「法教育指針」の「序文」^⑥とアメリカ法律家協会によって刊行されている資料 “Perspectives on LRE in the Year 2000”^⑦が参考となると考える。

まず、「法教育指針」の序文には、インディアナ州において1992年にアメリカ法律家協会の主催で開催された「法教育指導者会議」の議論を踏まえ次のように述べられている。

「会議の議論では、我々の関係者の中には、初等・中等学校教育のための『スタンダード運動』の提案に関心を示す人もいた。法教育の目標、内容、成果について明確に表明することが必要であると発言する人もいた。法教育が学校のカリキュラムに残るとしたら、法教育を行う者は教育で起こっているこの革命的な『運動』の議論に積極的に関与しなくてはならないだろうという発言には強い同意がなされた。このため、特別委員会では、我々の分野として構想し、それを維持するために探究し、二十一世紀における初等・中等教育を統合する際、法教育にとって『必要な要素』が何であるのかということに関する文書を提示する目的で、全米法教育指針案を調整することを引き受け

た。結果として提案した文書は、長い間法教育を行う者の知恵と経験に導かれるものであり、全米から集まった法教育の指導者の情報を反映したものである。」

さらに、ここでは、「法教育指針」の提案による成果を以下の三点であるとしている。

- ① 21世紀において、初等・中等学校の生徒に法教育が必要であることを主張するために、法教育という領域に重要な位置を確立し、効果的に準備するのに役立つ。
- ② 法教育にとって必要なカリキュラムの要素が、「公民・政治」「歴史」「社会科」の「ナショナル・スタンダード」や「ナショナル・アセスメント」などとともに、国家、州、地区の間に教育的に優先されることを保障する。
- ③ 「ナショナル・スタンダード」運動にたいして、領域として積極的に参加することで、国家的な支援を法教育に与える。

また、“Perspectives on LRE in the Year 2000”によれば、1992年、「公立学校における『法教育』が果たすべき役割と使命」と「今世紀の終わりまでに『法教育』に影響を与える要因」にかんする議論がなされ、「『法教育』の使命にかんする文書案」として、以下の八点が提案されたとされる⁹⁾。

- ① われわれアメリカ合衆国の民主主義に参加する市民の能力と意欲を高めること。
- ② 知識にもとづき、活動的で、責任ある市民を育成するのに必要な技能、知識、態度を培い、形成すること。
- ③ 動態としての法原理、法制度、法手続を批判的に検討することによって、民主的な正義の形態の実現に参加するように人々を教育すること。
- ④ 変化のある社会において、正義を推進し民主主義を維持するのに必要な責任を、人々に備えること。
- ⑤ 法の役割と、公的な意思決定に参加することにかんして、全ての個人を教育することによって、より公正で配慮のある社会を推進すること。
- ⑥ 「法教育」の使命は、民主的な価値と立憲的な原理を理解し、それに参与し、それをふまえた行動を行う市民を動かすことである。
- ⑦ 民主的でグローバルな社会において、活動的で模範的な市民となるのに必要な技能と知識を全ての生徒に提供すること。
- ⑧ 民主主義の原理にかんする理解をたかめ、参与するのに有効な市民的資質を育成すること。

これらの資料の論点は、次の二つに整理することができると考えられる。すなわち第一に「法教育指針」は、法教育にとって関連が深い『公民・政治ナショナル・スタンダード』にたいして、特に「法教育」としての位置を明確にするという目的のもとで、いわば「法教育」にとっての「ナショナル・スタンダード」として位置づけられたと考えられる。第二に、民主的で、公正なアメリカ社会を実現するにあたって、市民的資質の一つである法的リテラシーの育成は意味をもつものであり、そのために法教育において「活動」や「実践」を促す知識や技能を提供することが重要であるとの再確認がなされたと判断できる。

3. 「法教育指針」における法教育の理念とその内容

「法教育指針」は、これらの提案に示された法的リテラシーの育成の意義と方法論を具体化したものであり、「法教育」における教育目標、教育内容、および教育方法といった「法教育」の理念につ

いて詳述された前半部分と、それにもとづきカリキュラムを構成する際に留意されるべき要素を、教材、教育方法と教育環境、技能、態度・信条・価値にわたって、具体的に提示された後半部分からなっている。ここでは、法的リテラシーの育成と直接関連のある法教育の理念および法教育において認識されるべき基礎的教養としてとらえられる法教育の内容について検討する。

「法教育指針」の前半部分に提示される法教育の理念によれば、法教育とは、市民的資質の育成の一環として、「現実にいる人々に現実に影響を与える論争問題」を中心に、「法のもとでの権利と責任を追究し、紛争に立ち向かいそれを処理し、公共政策を議論し分析することのできる生徒の育成をめざし、活動的な経験を提供する」⁹⁹のものであるとされている。

この理念を具体的に実現するために、「法教育指針」の後半部分に提示された法教育において教育されるべき内容とは、具体的には表1に示した通りである（後掲）。そこには、総論的な意味合いの強い「法」と法的な概念である「権力」(power)、「正義」(justice)、「自由」(liberty)、「平等」(equality)を視点として、それぞれについて教育されるべき内容の基準が精細に提示されている。「民主主義」「法形成過程」「慣例法」といった多岐にわたった広義の法として「法」をとらえることが重要であることが確認することができる。

さらに、「法教育指針」の前半部分において、これらの教育内容を「法のもとでの権利と責任を追究し、紛争に立ち向かいそれを処理し、公共政策を議論し分析することのできる」能力にみられるような、言い換えれば、法的リテラシーの育成のためにカリキュラムを構成する際の二つの方法論について述べている。

第一に、法教育カリキュラムを構成する際に、必要である法的な概念として、「権力」「正義」「自由」「平等」をあげ、それらの価値をめぐる対立や論争を組織していくこととしている¹⁰⁰。第二に、社会において基本となっている価値と法的な概念の認識から、具体的な論争問題にたいするそれらの適用へという段階を考慮すべきであるとしている¹⁰¹。

4. 「法教育指針」にもとづく法教育プログラム“*I'm the People*”の構成

したがって、以上の二つの観点を中心に、法教育プログラム“*I'm the People*”の分析を試みたい。第一に、法的な概念である「権力」「正義」「自由」「平等」とその価値をめぐる対立や論争がどのように構成されるかという点である。第二に、社会において基本となっている価値と法的な概念の認識から、具体的な論争問題にたいするそれらの適用へという段階がどのように構成されるかという点である。

本プログラムは、「きまりや法律を作ろう」(Making Rules and Laws)、「紛争を処理しよう」(Resolving Conflict)、「コミュニティに奉仕しよう」(Serving the Community)、「公共政策に影響を与えよう」(Influencing Public Policy)という四つのテーマによって構成される。これらのテーマは、前述した「法教育指針」における「法教育」の目標観をうけて設定されたものと考えられる。また、それぞれのテーマについてレベルA (K～第3学年)、レベルB (第4～6学年)、レベルC (第7～9学年)、レベルD (第10～12学年)という四つの段階が設定されている。これら四つのテーマに関するそれぞれのレベルにおける目標と学習活動は、表2から表5の通りである（後掲）。

まず、「きまりや法律を作ろう」「紛争を処理しよう」「コミュニティに奉仕しよう」「公共政策を与えよう」という四つのテーマの相互の関係について考察する。

これら四つのテーマは、合衆国憲法と権利の章典をつらぬく法的な価値に関連して、憲法という限られた制定法の問題ではなく、「法」とは何かという課題にもとづき学習活動全体が組織されてい

るのは、大きな特徴である。合衆国憲法と権利の章典をつらぬく法的な価値とは、前述した「権力」「正義」「自由」「平等」のことである。「きまりや法律を作ろう」では、本法教育プログラム全体をつらぬく課題である「法」という概念の基本的な把握と、「権力」と「自由」という対立する法的な概念を、「紛争を処理しよう」「コミュニティに奉仕しよう」では、前者は法の機能的な側面を、後者は法と法的な概念や価値の関連性をふまえるとともに、法的な判断を下す際の基準となるであろう「正義」という法的な概念を、さらに、「公共政策を与えよう」では、再び「権力」と「自由」という対立する法的な概念を扱う中で、「法をつくる」という側面を学習活動として組織し、法教育プログラムが構成されている。

具体的な学習活動については、「きまりや法律を作ろう」では、法がつくるものであるという事実を認識すること、「紛争を処理しよう」では、価値にかんする対立の存在と理性的な議論にもとづく処理の意義を認識すること、「コミュニティに奉仕しよう」では、価値にかんする対立により具体的に問題があり、それを自ら解決する意義を認識すること、さらに、「公共政策を与えよう」では、効果的に公的な論争に影響を及ぼすために政策として意見を提示することを認識することといった構成がなされている。さらに、そこでは、法を作成する意義を再評価することが想定されていると考えられる。これらの一連の流れは、法システム観を反映しており、「事実を把握する段階」「問題の争点を明確化する段階」「論争、紛争を認識する段階」「基準を選択し、理性にもとづき判断する段階」、そして「理想と現実、原理と実践、公正と私利を衡平に照らした結果を評価する段階」が見受けられる。

つぎに、各学年の四つの段階の相互の関係について考察を行う。

「きまりや法律を作ろう」では、学年段階ごとに、私的なコミュニティにおけるきまりとは何か、公的なコミュニティにおける法とは何か、きまりと法の比較と区別、実際の具体的な法律を作ることの吟味、「紛争を処理しよう」では、紛争の認識、紛争と法を破ることの区別、理性的な紛争処理の意義、ADRの評価、「コミュニティに奉仕しよう」では、学校の問題の解決、消費問題という自分とコミュニティに関わりのある問題の解決、個人的な問題と市民としての問題の区別と、市民としての問題に責任を果たすことの評価、社会的な問題を市民として果たすことの意義、さらに、「公共政策を与えよう」では、学校における政策とは何か、政策の変化する要因、具体的な学校問題について政策を作成する、社会的な問題について政策を作成するといった段階が想定されている。このことにより、それぞれの段階には、「私的なコミュニティにおける問題状況」、「公的なコミュニティにおける問題状況」、「公的であることと私的であることの区別と、公的な問題状況に関わることの意義づけ」、「具体的な公的、社会的な問題状況」という共通の原理が見いだせる。

5. 結 語

本研究を通して指摘できる点は、以下の二点である。

第一に、「法教育指針」における法的実践能力育成の方法論を検討した結果、法教育カリキュラムを構成する際の基準となる原理が明らかになった。すなわち、法的な概念として「権力」「正義」「自由」「平等」を取り上げ、その価値をめぐる対立や論争を組織していくこと、そして、「ケース・メソッド」によるアプローチにみられる段階を考慮することである。

第二に、法教育プログラム“I'm the People”の分析により、上記の原理がどのように具体化されるかが明らかになった。すなわち、動態としての「法」といった「法をつくる」側面に着目しながら、「権力」と「自由」といった対立する価値をめぐる、その判断の基準となる「正義」の概念

にかんする学習活動を行うように構造化されているということと、「法がつくるものであるという事実」「価値にかんする対立の存在と理性的な議論にもとづく処理の意義」「価値にかんする対立により具体的に問題があり、それを自ら解決する意義」「効果的に公的な論争に影響を及ぼすために政策として意見の提示と法を作成する意義の再評価」といった「ケース・メソッド」によるアプローチに類似する段階がみうけられるということである。なお、法教育プログラムの分析の結果、それぞれの段階には、「私的なコミュニティにおける問題状況」「公的なコミュニティにおける問題状況」「公的であることと私的であることの区別と、公的な問題状況に関わることの意義づけ」「具体的な公的、社会的な問題状況」という共通の原理が見いだされた。

〔注〕

- (1) アメリカの法教育研究としては、江口勇治「社会科における『法教育』の重要性—アメリカ社会科における『法教育』の検討を通して—日本社会科教育学会『社会科教育研究』No 68, 1993年, 江口勇治「社会科50年とこれからの教育改革—『法教育』の意義とそのカリキュラムについて—」日本社会科教育学会『社会科教育研究』No 79, 1998年, 橋本康弘「市民的資質を育成するための法カリキュラム—『自由社会における法』プロジェクトの場合—」全国社会科教育学会『社会科研究』No 48, 1998年などがあげられる。
- (2) American Bar Association Division for Public Education. (1995). Essentials of Law-Related Education, A Guide for Practitioners & Policymakers.
- (3) American Bar Association Division for Public Education. (1995). Making Rules & Laws., Resolving Conflicts., Serving the Community., Influencing Public Policy.
- (4) Public Law 95-561. (1978). Law-Related Education Act of 1978.
- (5) Public Law 103-227. (1994). Goals 2000: Educated American Act. March.
- (6) American Bar Association Division for Public Education., op. cit. (1995). p. 1.
- (7) American Bar Association Special Committee on Youth Education for Citizenship. Perspectives on LRE in the Year 2000.
- (8) Ibid. p. 32.
- (9) American Bar Association Division for Public Education., op. cit. (1995). p. 2.
- (10) Ibid.
- (11) Ibid. p. 4.

(表1) 法教育指針における教育内容

法	<ul style="list-style-type: none"> ▲どのように、法の役割が、民主的な社会や他の社会において、基本的なものであるかということ。 ▲どのように、法が、作成され、施行され、解釈されるかということ。 ▲どのように、様々な法制度や法文化が、同じであったり、異なったりするかということ。 ▲どのように、法や法令が、歴史的に発展してきたかということ。 ▲組織 (structure) と機能 (function) は、対立するものであることと、他の法制度。 ▲憲法、刑法、民法、行政法、国際法などの、法の類型。 ▲現実の社会状況と仮想の社会状況のもとで、権力 (power)、正義 (justice)、自由 (liberty)、平等 (equality) など、どのように、法が、中心となる概念や価値に関連しているかということ。
権力	<ul style="list-style-type: none"> ▲どのように、権力が、組織されるのかということと、どのように、権力が機能するのかということ。 ▲どのように、政府が、設立されるのかということ。(目的、権限、制限) ▲どのように、合衆国と他の立憲制度が、社会において、権力を正当化しているかということ。 ▲同じ点と違う点が、様々な政府の種類のあいだにあるということ。(歴史的、現在の、理想) ▲中心となる概念と特質は、合衆国の立憲政治であるということ。 ▲どのように、法が、犯罪や他の違犯にたいして、制裁をおこない、罰を与えるかということ。 ▲合衆国の政治制度にたいしてアメリカ先住民の社会の関係があるということ。(歴史、主権、条約、現在の状況、実践)
正義	<ul style="list-style-type: none"> ▲様々な社会における正義の理想と実践。 ▲アメリカの政府と社会における、裁判と他の機関の役割/裁判制度の専門家。 ▲社会において、論争や紛争を処理するための当事者対抗主義と他の機構の役割。 ▲アメリカと他の社会において、正義を実現する方法は、個人や集団にとって目標となる理想であるということ。(歴史的にも現在でも) ▲合衆国の裁判制度のある特質や価値の定義。
自由	<ul style="list-style-type: none"> ▲人権の概念—個人的な権利、政治的な権利、社会的な権利、経済的な権利。 ▲“秩序ある自由”の原則。 ▲基本的な憲法上の権利。 ▲市民的権利 ▲アメリカと他の社会において、自由を保護する方法は、個人や集団にとって目標となる理想であるということ。
平等	<ul style="list-style-type: none"> ▲どのように、なぜ、様々な人間社会が、多様な理想を抱き、社会的平等や不平等にたいし実践を行っているのかということ。 ▲どのように、アメリカと他の社会における社会の理想と状況として、法が、平等を促進し、制限し、定義するのかということ。 ▲どのように、合衆国憲法の制度(修正第14条)のもとで、法による平等の保護が行われているのかということと、どのように、この権利が、アメリカの歴史をつうじて保障されたり、保障されなかったりしてきたのかということ。 ▲どのように、アメリカ社会や他の社会において、様々な社会的集団にたいして、参政権(選挙権)が拡大されてきたかということ。 ▲どのように、アメリカの社会や他の社会において、公共政策が、包括的であることを促進したり、抑制したりしているかということ。(アフーマティブ・アクション) ▲どのように、アメリカと他の社会において、社会的な平等が、個人や集団にとって目標となる理想であるかということ。(歴史的でも現在でも)
最も重要な文書	<ul style="list-style-type: none"> ▲合衆国憲法と権利の賞典 ▲合衆国独立宣言 ▲『フェデラリスト』 ▲著名な合衆国最高裁判所判決

(表2) きまりや法律を作ろう

	目標	生徒の学習活動
レベルA	<ul style="list-style-type: none"> ○どのように、法やきまりが要求にもとづき、社会にとって基本となるものかということ进行学习する。 ○ルールや法を作成し、分析する。 ○どのように、私たちの政府が基本法と統治への同意にもとづいているかということを議論する。 ○私たちの基本法にもとづく権利のいくつかを知り、どのように権利が責任と関連しているのかを議論する。 ○基本法に関する意思決定に参加する。 	<p>これらのレッスンで、生徒は、きまりや法という概念と、きまりや法を体系化した基本法の作成について追究する。まず、生徒は、きまりの必要性和權威の源泉をあらわす活動に参加する。次に、きまりと政府を求めている裏庭の動物たちに関するシミュレーションに参加する。生徒は、どんな種類の法が必要なのか、誰がきまりをつくるのかということ意思決定し、その動物たちに基本法を開発しながら、よいルールを作成することについて学習する。</p>
レベルB	<ul style="list-style-type: none"> ○様々な政府の形態を知る。 ○様々な統制の手段を述べる。 ○政府の機関を区別する。 ○基本法は、政府にとって基本となる一連の法であることを理解する。 ○市民としての行動をおこなうクラブのために、政府の一形態を設立する。 	<p>これらのレッスンで、生徒は、様々な政府の形態と、政府の主導者の権力について追究する。生徒は、権力の源泉とどのように権力が様々な手段に用いられるかを決定する。生徒は、政府と法の基本的な構造として基本法について考察する。この情報にもとづいて、生徒は、市民としての行動を行う組織のための自分自身の政府を作り、基本法を作成する。</p>
レベルC	<ul style="list-style-type: none"> ○きまりと法という用語の定義をする。 ○よいきまりと法のいくつかの特徴を知る。 ○学校のきまりとコミュニティの法のもとでの権利と責任を比較する。 ○生徒として生徒の役割と、市民としての生徒の役割との違うところ、同じところを知る。 	<p>これらのレッスンで、憲法にもとづく権利と責任に関連して、きまりと法という概念を追究する。生徒は、きまりと法を定義し、きまりと法の性格を知り、学校のきまりとコミュニティにおける法とを比較することで始める。</p>
レベルD	<ul style="list-style-type: none"> ○アメリカ合衆国憲法と権利の章典のもとでの権利と責任について議論する。 ○アメリカ合衆国と自分たちの州における選挙に関する法律と手続きについて議論する。 ○選挙について様々な方法を考察する。 ○一人一票制と累積投票制を比較する。 ○アメリカ合衆国における選挙に関する法律は変わるべきかどうか議論する。 	<p>これらのレッスンで、憲法にもとづく権利と責任に関連して、選挙に関する法について追究する。生徒は、仮の論争について投票する三つの方法を用い、生徒は、どのように選挙に関する法における変化が、選挙の結果に影響を与え、他の法と公務員の選択に影響するかということ考察する。この考えにもとづき、アメリカ合衆国における選挙に関する法に関して推薦する。議論の場では、生徒は、アメリカ合衆国憲法の実証を例として法の作成過程について考える。</p>

(表3) 紛争を処理しよう

	目標	生徒の学習活動
レベルA	<ul style="list-style-type: none"> ○紛争を認識し理解する。 ○紛争と法を破ることとを区別する。 ○生活における紛争を知る。 ○紛争を処理するのに交渉を観察し実際に行う。 ○調停を観察し実際に行う。 	<p>このレッスンでは、子どもたちに紛争を理解させ、紛争を処理する方法を紹介する。生徒は、紛争を解決するための様々な選択肢について議論し、模擬調停を観察したり参加したりする。</p>
レベルB	<ul style="list-style-type: none"> ○紛争と法を破ることとを区別する。 ○生活における様々な紛争を知る。 ○紛争を処理するのに交渉を実際に行う。 ○調停を観察し実際に行う。 	<p>このレッスンでは、生徒に紛争を理解させ、紛争を処理する方法を紹介する。生徒は、紛争を解決するための様々な選択肢について議論し、模擬調停を観察したり参加したりする。</p>
レベルC	<ul style="list-style-type: none"> ○紛争を知り、定義する。 ○紛争を処理するのに交渉と調停を用いる。 ○参加者の疑問を聞き尋ねることで、コミュニケーション技能を発達させる。 ○共同学習技能を発達させる。 ○自分自身の問題を解決することに正しい認識をもつ。 	<p>このレッスンの目標は、生徒が、紛争を構成するものを知り、様々な紛争処理理論について実践的な知識を身につけることである。レッスンでは、紛争を処理しなくてはならない状況の設定にたいして、ロールプレイを行う。授業は、紛争を処理するためにグループで行い、紛争処理に用いられる技能を評価する。</p>
レベルD	<ul style="list-style-type: none"> ○参加者の疑問を聞き尋ねることで、コミュニケーション技能を発達させる。 ○共同学習技能を発達させる。 ○紛争処理の様々な方法を学習する。 ○裁判外紛争処理(ADR)がもっとも有効であることを評価することで、批判的思考を身につける。 ○自分自身の問題を解決することに正しい認識をもつ。 	<p>これらのレッスンの目標は、生徒が、様々な紛争処理理論について実践的な知識を身につけ、紛争に関する知識を応用することである。レッスンは、様々な理論をロールプレイする必要がある仮想の紛争が含まれている。クラスは六つにわけ、(三つの紛争処理技能それぞれにたいして二つのグループが試みる。)それぞれのグループは、そのグループに割り当てられた技能にもとづき、紛争の処理を行わなくてはならない。それぞれのグループが紛争を処理した後、クラスはそれぞれの技能を評価する。</p>

(表4) コミュニティに奉仕しよう

	目標	生徒の学習活動
レベルA	<ul style="list-style-type: none"> ○生徒と市民は、自分や家族にたいして責任を負っているのと同様に、学校とコミュニティにたいして責任を負っていることを理解する。 ○学校に影響を及ぼす問題を知る。 ○学校における奉仕活動を開発する。 	<p>これらのレッスンで、どのように、グループの人々（動物たち）が、コミュニティの問題を解決するのに一緒にいるのかを追究する。生徒たちは、責任とは何かということをもっとよく理解するために、一連の絵を見ることで、様々な個人としての責任と市民としての責任を知るだろう。生徒は、アメリカ合衆国の市民は、他の人々を助けるという責任があることを理解するだろう。</p> <p>生徒は、学校に影響を及ぼす問題について考え、調査する時間を過ごす。先生は、問題を探するために休み時間やランチの時間に学校を歩かせて、この手順を支援する。生徒は、食べ物を残したり、散らかしたり、けんかしたり、割り込んだり、他の生徒に意地悪をしたりする人々がいることに気づくだろう。このレッスンでは、学校で見た問題について考えさせ、問題を解決するための考えを創造させる。先生は、守衛さんや校長先生や他の先生や、他のクラスの人たちのような学校にいる人々に、学校で起きている問題について、インタビューさせることで、その調査を支援する。</p> <p>レッスンは、生徒に、彼らが知った問題を主張する活動を選んで、活動させる。先生は、その活動をしている間と、その活動が終了したあとで、生徒にその活動を振り返らせる。さらに、先生は、その成果を認めるようにする。</p>
レベルB	<ul style="list-style-type: none"> ○奉仕活動から、個人とコミュニティにとっての利益を知る。 ○生徒と市民は、自分や家族にたいして責任を負っているのと同様に、学校とコミュニティにたいして責任を負っていることを理解する。 ○学校に影響を及ぼす問題を知る。 ○消費者とは何かを理解する。 ○消費者問題に関して、学校とコミュニティにおける奉仕活動を開発する。 	<p>レッスンは、コミュニティの問題を解決するのに一緒にやっていく人々の話で始まる。二つの本を推薦する。次に、先生は、消費者法の領域について紹介し、生徒に消費者を定義させ、消費者が購入することで起こる問題について語る。生徒は、家に帰って、購入とそれにもなう問題に関する大人の経験を大人にインタビューする。法律家は、消費者法と保証に関する説明にこれらの例を当てはめる。生徒は、消費者問題とその解決のよりよい理解をロールプレイを行うことで身につける。生徒は、消費者法の領域における奉仕活動を計画する。先生は、振り返ることと褒めることを行う。</p>
レベルC	<ul style="list-style-type: none"> ○個人的な責任と市民としての責任を区別する。 ○公的なサービスへの市民としての責任を果たすための知識と技能を身につける。 ○予想される活動の現場を知るのに、コミュニティの地図を使う。 ○奉仕活動から、個人とコミュニティにとっての利益を知る。 	<p>レッスンは、責任の紹介で始まる。生徒は、責任に関する様々な行動をそれぞれ個人としての責任と市民として分類する。さらに、生徒は、サービスを提供するために市民としての責任に焦点をあて、野外活動や、コミュニティの一員へのインタビューや、自分自身のコミュニティに関する知識によって、自分のコミュニティや学校の必要とされる評価をおこなう。生徒は、奉仕活動を行う現場を調査するのに、ポスター・マップや自分のコミュニティの実際の詳細な地図を用いる。生徒は、計画表を作成し、奉仕活動の特定の問題や特定のタイプへの関心で、グループを作る。それぞれの計画を企画実行するためのリーダーを支援するクラスの運営者を、それぞれのクラスチームごとに選ぶ。生徒は、活動を実行するための準備を行う。生徒は、振り返る機会を与えられ、その結果が認められる。</p>
レベルD	<ul style="list-style-type: none"> ○怠学、暴力、貧困、文盲、家庭内暴力、差別、公害、幼児虐待のような、学校やコミュニティに影響を及ぼす問題を知る。 ○奉仕活動から、個人とコミュニティにとっての利益を知る。 ○予想される活動の現場を知るのに、コミュニティの地図を使う。 ○社会的な問題を解決するのに価値ある貢献者としての資質を身につける。 ○社会に関心をもち、貢献する生涯にわたる態度を身につけた市民としての資質を身につける。 ○クラス運営者を用いて、意義ある奉仕活動を組織する。 ○奉仕の経験を振り返る。 	<p>このレッスンで、生徒にコミュニティ・サービスという概念を教える。まず、個人的なコミュニティ・サービスに関して議論を行う。生徒がコミュニティ・サービスに積極的に関わり、振り返っているビデオを見せる。</p> <p>議論の後で、生徒は、自分のコミュニティや近所での必要性を知り、野外調査や地図作成によって、他の人々の生活を異なるもののできるボランティア活動の特定の場所をリストにする。生徒は、奉仕活動を選択し、活動を計画するのを助けてくれる様々な外部の人々と、コミュニティにとっての必要性を議論する。生徒は、活動するのに問題リストにランクをつけ、計画を行うのに小さなチームを作成する。生徒は、クラス運営者の作った仕事表を検討し、それぞれのチームからクラス運営者を支えるように生徒を選出する。チームにおける生徒は、奉仕活動を実行する計画表を完成し、行動を始める。先生と法律家は、その間、振り返る機会をあたえ、その活動を支援する。生徒は、自分の貢献を知る。</p>

(表5) 公共政策に影響を与えよう

	目標	生徒の学習活動
レベルA	<ul style="list-style-type: none"> ○政策を定義し知る。 ○どのように政策が法ときまりに関連しているか学習する。 ○政策を作成するときに考慮される重要な考え方を知る。 ○政府が公共政策を作成するのに関係していることを認識する。 ○公共政策を作成するのに市民は役割があることを認識する。 	<p>このレッスンで、政策という考え方を定義し分類するため、生徒にクラスの政策を分析させる。学校は、なぜ政策が必要であり、誰が政策を作成するのかということの理解に焦点を当てて、用いる。それから、学校政策は、政府の政策と、比較され、生徒は、政策を作ることと公共政策を作ることとを学習する。さらに、生徒は、どのように政策が論争に取り組みのために用いられるのかを発見するために、政策作成者、公務員、市民のロールプレイを行う。</p>
レベルB	<ul style="list-style-type: none"> ○政策を定義する。 ○政策を必要とする論争を知る。 ○論争に取り組む政策を創造する。 ○なぜ、どのように政策が変化するのか説明する。 ○公共政策と他の政策を区別する。 ○政策作成者を知る。 	<p>この課では、生徒は、政策を定義し、政策が変化することを理解し、どんなことが、誰が政策の作成と変化に影響を与えるのかということを知り、公共政策と学校政策と商業政策を区別する。さらに、生徒は、コミュニティ政策が要求される状況を評価し、適切な政策を描く。</p>
レベルC	<ul style="list-style-type: none"> ○公共政策を定義する。 ○どのように公共政策が、政治的な指導者、特別な利益共同体、州や地方裁判所、個人としての市民によって作られるかを述べる。 ○どのように市民は、公共政策の作成に影響を与えることができるのか説明する。 ○提案された政策にたいして調査し世論調査を行う。 	<p>このレッスンは、どのように市民やその他の人々が公共政策の決定に影響を与えることができるのかということを追及すること、民主的な社会における公共政策を作成することを追究する。学校に制服を着ていっている小学校や中学校の子どもに頼むことで、政策案を分析し開発する。生徒は、問題の原因と影響と、その案から予想される結果を考察する。どのように提案された要求に関してコミュニティにおける人々が感じているのかを決定するのに公的な意見調査を行う。最後に、生徒は、その論争について自分の政策案を創造する。</p>
レベルD	<ul style="list-style-type: none"> ○公共政策を定義し、どのように公共政策が民主的な社会において形成されるかということとを述べる。 ○どのように政治的なリーダーや特別な利益共同体や報道や裁判所や個人としての市民によって、公的な議題が作成されるのかを議論する。 ○公共政策の作成にどのように市民が検討し、影響を与えるのかということとを説明する。 ○地方政府で起こった公共政策に関する論争にたいする立場を決め、定義する。 	<p>このレッスンでは、民主的な社会における公共政策の本質、政策決定過程、市民が公共政策の決定に影響を与えることができる方法を追究する。生徒は、どのように、若者が自分のコミュニティにおける政策決定に影響を与えられるか学習する。生徒は、コミュニティにおける若年齢層の犯罪の増加に対応して、夜間外出禁止を押し付けられるという政策案を分析し開発する。生徒は、その問題の深刻さと、法律と、その案を採用に影響を与えるかもしれない裁判の判決と、他のコミュニティにおける類似の政策による効果に関する情報を集める。また、提案された夜間外出禁止令に関してどのようにコミュニティの人々は感じるのかという決定に公的な意見調査を行う。最後に、生徒は、コミュニティにおける夜間外出禁止令に関する自分自身の政策案を創造し、可能であれば、その計画を自分のコミュニティの政策決定者と共有する。議論において、生徒は、人格教育に関する学区で提案された政策について評価する。</p>

X. イギリス, ナショナル・カリキュラム, 地理フレームワーク

岩 田 一 彦 (兵庫教育大学学校教育学部)

1991年3月に、イギリスは初めてわが国の学習指導要領に当たるナショナル・カリキュラムを告示した。各教科にわたる内容および方法の構造と到達目標を持つ順序性を示した。その作成に際しては、各教科専門および教科教育・教育学の科学者が総動員された。

地理だけでも数十頁にわたる本格的な内容の提示であった。各教科の内容があまりにも細部にわたっているとの批判が強く、1995年には早くも簡略化された内容への改訂が行われた。

本稿では、この Geography in the National Curriculum, 1991. 3. (中井修, 岩田一彦, イギリス『全国カリキュラム・地理 (Geography in the National Curriculum)』の解題と全訳, 社会科教育論叢, vol.43, pp.41-89) を分析検討して、「小・中・高等学校の一貫による社会科関連科目の連携に基づくフレームワーク」を、探っていく。

このカリキュラムでは、児童・生徒が、次の4段階に分けられている。この段階との関連で、到達目標、学習プログラムが提示されている。

<4段階に区分した児童・生徒の集団>

キー・ステージ1, 5～7歳, 初等学校前期

キー・ステージ2, 8～11歳, 初等学校後期

キー・ステージ3, 12～14歳, 中等学校前期

キー・ステージ4, 15～16歳, 中等学校後期

到達目標は、1から10のレベルに細分化されて示されている。レベルは児童・生徒の発達段階と目標の難易度を考慮して設定されており、キー・ステージとの対応は、次のように規定されている。

<10段階に区分したレベル>

キー・ステージ1, レベル1～3

キー・ステージ2, レベル2～5

キー・ステージ3, レベル3～7

キー・ステージ4, レベル4～10

身近な地域・郷土, 地図, 地域的特色をとらえる視点と方法に関して、提示されている内容・方法およびその系統について検討していこう。

1. 身近な地域, 郷土の内容および学習方法フレームワーク

身近な地域および郷土は、地理学習の基礎・基本を構成するものとして、体系的に学習されるように示されている。技能に関わる内容を除いて、その基礎・基本の構造は、次のようになっている。

身近な地域・郷土を扱う際の基礎・基本—技能に係わる内容は除く—

a. キー・ステージ1

<場所とテーマ>

01. 身近な地域において、見慣れた地理的事象を認識し、その名称を言う。

02. 身近な地域において、土地や建物の利用状況を調べる。
03. 身近な地域と他の地域との類似点と相違点を認識し、説明する。

(レベル3に関する内容)

04. 身近な地域で観察した地形・生産活動・余暇活動を認識する際、正しい地理的語彙を使用する。
05. 身近な地域のどこに経済活動が位置しているか説明し、さらに地域における特定の活動の立地について述べる。

〈自然地理〉

06. 土、水、岩、砂を調べ、これらの物質が、自然環境の一部であることを認識する。
07. 異なった様子水を認識する。
08. 川、丘、池、森などの親しみのある地形を認識し、斜度の異なった坂を調べる。
09. 気象が自分自身と周囲の環境に及ぼす影響を調べ、季節的な気象の型を認識する。

(レベル3に関する内容)

10. 親しみのある地形を認識し、説明する。
11. 雨が地面に到達したとき、地表や斜面の違いが及ぼす影響。

〈人文地理〉

12. 身近な地域やより遠く離れた地域で、建物の利用法について調べる。
13. 人々がどのように移動するか調べ、また、なぜ異なった輸送手段が必要なのか、なぜ人々が多様な移動をするのかについても調べる。
14. 多くの家は集落の一部であり、その集落には様々な規模の物があること。
15. 地域で必要とされている品物やサービスが、どのように供給されているか。
16. 大人が異なった仕事をしていること。

(レベル3に関する内容)

17. 土地がどのように異なった方法で用いられているか。
18. なぜ異なった交通手段が、異なった目的のために利用されるのか。また、人や品物は、どのようにして、交通手段を代えるのか。
19. なぜ人々は家を移るのか。
20. 集落の機能や起源は、どのように現在の形態と関係があるか。

〈環境地理〉

21. 身の回りの物質は、どこから手に入れられるのか。また、それはどのように取り出されるのか。
22. 児童の周りの環境の特徴について、好き、嫌いを話し合い、説明する。
23. 環境を変化させてきた活動を認識し、自分たちの環境を、自分たちでよく変えていける方法を考える。

(レベル3に関する内容)

24. 身近な地域での、またはこれまでに訪れたことのある場所での、環境を改善しようとする活動について。

b. キー・ステージ2

〈場所とテーマー身近な地域〉

01. 身近な地域における土地や建物の利用状況を調べ、身近な地域で観察した地形・産業・余暇活動などの型を、正確な地理的語彙を用いて認識する。
02. 身近な地域における土地利用・建物・人々の諸活動について、それらの相互関係を観察し、その理由を挙げる。
03. 身近な地域における経済活動の立地について理由を挙げ、なぜ特定の活動が身近な地域に立地しているかについての理由も説明する。

〈場所とテーマー郷土〉

04. 身近な地域は、郷土の一部をなしていると考えること。
05. 郷土の地理的事象。

(レベル5に関する内容)

06. 郷土の主な地理的事象が、どのように相互関係しているか。

〈自然地理〉

07. 親しみのある景観や地形を認識し、説明する。
08. 季節的な気象パターンを認識する。

c. キー・ステージ3

〈場所とテーマー身近な地域と郷土〉

01. 身近な地域は、地方の一部をなしていると考えられること。
 02. 郷土の主な地理的事象を認識し、それらがどのように相互に関係しているかを説明する。
 03. 正しい地理的な語彙を用いて、身近な地域の地理的事象や活動の型を認識する。
 04. 身近な地域において、どこに経済活動が立地しているかを説明し、それらの立地について理由を挙げる。また、身近な地域における土地利用、建物、人々の活動について、それらの相互関係を説明する。
 05. 郷土の発展に影響を及ぼしてきた要因を分析する。また、現在の郷土の特徴がどの程度、過去の影響を受けた物かについても考える。
 06. 郷土においての変化の影響を調べる。
 07. 形式的な地方、結節点としての地方、行政区画上の地方などの概念を、郷土に適用する。
- ### (レベル7に関する内容)
08. 郷土において、その安定や変化を導いてきた、地方・国家・国家間のそれぞれのレベルでの意思決定に至る過程。
 09. 地方の広がりや定義づける際、使用される基準。

d. キー・ステージ4

〈場所とテーマー郷土〉

- 01~09は、キー・ステージ3と同じ。
10. 郷土において、地理的なパターン・関係・過程を分析する。

(レベル10に関する内容)

11. 郷土のすべてをバランスよく説明するために、パターン、関係、過程を総合する。

ここで示された〈場所とテーマ〉について、その内容を検討してみると、次のような系統性が読みとれる。

キー・ステージ 1, 地理的事象の認識, 類似点および相違点の認識

キー・ステージ 2, 事象の相互関係の認識とその原因の探求

キー・ステージ 3, 事象の相互関係の認識とその原因の探求, 地域性形成要因の探求

キー・ステージ 4, 地域性説明のためのパターン・関係・過程の分析と総合

この系統性は、わが国のカリキュラムの構成に際しても、小・中・高において、計画的に配慮していくべきことである。

2. 地図の内容および学習方法フレームワーク

地図は地理学習において、地理的事象の探究手段、探究結果の表現手段として、重要な地位を占めている。地図無くして地理学習は成立しないともいわれてきた。しかし、わが国においては、必ずしも、体系的に学習されているわけではない。

地図の内容および学習の系統を検討して、小・中・高の地図学習フレームワークを探っていく。ナショナル・カリキュラムにおける系統を整理すると、次のようになる。

地図・教材の内容系統および学習活動

地図の内容系統	教 材	発展的活動
1. 地上, 鳥瞰, 垂直写真と地図 地図記号とシンボル 地図上の情報の使用 道路	学校周辺の鳥瞰, 垂直写真 学校周辺の特徴ある写真 学校周辺の大縮尺地図	大縮尺地図をもつての学校周辺探検 学校周辺模型の作製 学校から目的地点までの近道
2. 地図上の横線, 縦線の発見 4 コマ線の作成 北東のコマの確認	経緯線の入った学校周辺地図	横線, 縦線を使つての位置の指示
3. 4 方位, 8 方位の使用 地図記号, シンボルの発展 1 万分の 1 図の使用	磁石 身近な地域の 1 万分の 1 図	学校での磁石の使用 身近な地図上での方位の使用
4. 縮尺の概念 地図上での縮尺とスケール・バーの使用 縮尺の違う地図の使用	教室の縮尺図 面積図と縮尺	スケール・バーを使つての地図上での距離の測定
5. 時間的変化の概念把握のための地図の使用 違った時点の写真, 地図の比較 変化の継続概念	学校周辺の古い地図, 写真 新旧地図の比較のためのオーバーヘッド	地域がどのように発展したかのモデルの作成

6. 種々多彩な地図	絵はがき、書物、ゲームコンピュータ等に見られる地図	種々の地図の収集活動
7. 丘陵の鳥瞰 地図上での種々の丘陵の表現 高さの表現 1万分の1, 2万5千分の1地形図上の等高線 道路	丘陵の写真 学校周辺の大縮尺図 学区周辺の1万分の1, 2万5千分の1地形図 学校周辺および他地域の斜面の写真	人文的特徴と自然的特徴の識別 大縮尺図をもって丘陵地に出かけて実感する。 地形上の等高線の密度と斜面を確かめる。 等高線上での上り下り, 急傾斜, 緩傾斜を出し合う。
8. 地図記号の一般化 縮尺の違う地図の比較 縮尺の違う地図の読図技術	学校周辺の種々の縮尺の違う地図	同じ地域が違った縮尺ではどのように違うのか確かめる。
9. 主題図	主題の違った同じ地域の地図 特定の主題に絞り込んだ地図	主題図を重ねて, 問題点を話し合う。

ナショナル・カリキュラムにおけるこの系統とわが国の学習指導要領, 教科書の地図に関わる内容を検討すると, 次のような地図に関わるフレームワークが設定できる。

地図学習のフレームワーク

<ol style="list-style-type: none"> 1. 絵地図・旅行地図 (坂, 川, 丘, 森, 公園, 家の読みとり) 2. 絵地図, 部屋の配置図, 宝島の地図等の描図 4. 市街図からの読みとり 5. 教室外での地図利用 (林, 遊び場, 建物の形状の読みとり) 6. 通学路・学校周辺の地図作成 7. 航空写真の読みとり (建物, 線路, 道路等) 8. 5万分の1地形図の読みとり (森, 湖, インター等の座標) 10. 縮尺と距離 (家と学校, 家と公園などの距離の測定) 11. 垂直航空写真と地図との比較 (海岸線, 住宅地域, 植生等, 自然的事象と人文的事象の識別) 12. 地図帳の索引利用 (地名の引き出し) 13. スケッチ地図の作成 (オリジナル記号を使用した地図, 等高線の使用, 収集した情報の地図化) 14. 等高線の読みとり (高度, 斜面, 山頂, 谷底) 15. 地形図の読みとり・説明 (川, 道路沿いの地理的事象の説明, 縮尺の違う地図による距離の違いの読みとり) 16. 地球と平面図, 地球儀 (初歩的認識, 経緯線)

3. 国内の他の地域および外国の地域的特色をとらえる、内容および学習方法のフレームワーク

地理学習の主要な目的の一つは、地域的特色をとらえることである。それでは、ナショナル・カリキュラムはどのような内容と学習方法を、それに関して提示しているのだろうか。それぞれについて抽出し、フレームワークを探っていく。

(1) 国内の他地域をとらえる、内容および学習方法のフレームワーク

<キー・ステージ1 レベル1から3>

- 自分の住んでいる国は連合王国（イギリス）の一部であり、連合王国はイングランド、ウェールズ、スコットランド、北アイルランドより構成されている。
- 連合王国の構成国を地図上で示す。
- 身近な地域とは対照的な国内のある地域
- 身近な地域以外の地域の地理的事象を調べる。このような地理的事象が、どのように人々の暮らしに影響しているかを調べる。
- 学習した外部の地域の地理的事象やそこで行われている業務について説明し、さらに身近な地域におけるそれと比較する。

<キー・ステージ2 レベル2から5>

- イギリス国内の他の地域について、次のような学習をする。
 - ① 他の地域の地理的事象を調べ、それらの事象が人々の暮らしにどのように影響するかについても調べる。
 - ② 取り上げる他の地域の地理的事象や職業を説明し、身近な地域のそれらと比較する。
 - ③ 身近な地域と他の地域の類似点と相違点を、認識し説明する。
 - ④ 人間の活動の結果、取り上げる地域がどのように変化してきたか調べる。
 - ⑤ ある地域の最近の変化や提案されている変化について調べる。

<キー・ステージ3 レベル3から7>

- 形式的な地方、結節点としての地方、行政区画上の地方などの概念を、郷土に適用する。
- 郷土において、その安定や変化を導いてきた地方、国家、国家間のそれぞれのレベルでの意志決定にいたる過程。
- 地方の広がりや定義づける際、使用される基準。

<キー・ステージ4 レベル4から10>

- 形式的な地方、結節点としての地方、行政区画上の地方などの概念を、郷土に適用する。
- 郷土において、その安定や変化を導いてきた地方、国家、国家間のそれぞれのレベルでの意志決定にいたる過程。
- 地方の広がりや定義づける際、使用される基準。

(2) 外国の地域的特色をとらえる、内容および学習方法のフレームワーク

<キー・ステージ1 レベル1から3>

- イギリス国外のある地域
- 身近な地域以外の地域の地理的事象を調べる。このような地理的事象が、どのように人々の暮らしに影響しているかを調べる。
- 学習した外部の地域の地理的事象やそこで行われている業務について説明し、さらに身近な

地域におけるそれと比較する。

<キー・ステージ2 レベル2から5>

- 経済的に発達段階にある国の地域について、次のような学習をする。
 - ① 経済的に発達段階にある国の地域において、その景観、気候、豊かさが、人々の暮らしに及ぼす影響を調べる。
 - ② 経済的に発達段階にある地域の国と、イギリス以外のヨーロッパ共同体の国の地域の両方において職業、土地利用、集落の分布などが、どのようにその環境や位置と関係しているか。(レベル5)

<キー・ステージ3 レベル3から7>

- ヨーロッパ共同体について、次の学習をする。
 - ① ヨーロッパ共同体のうち、明確な特徴、多様な地方性、独自性を備えたフランス、ドイツ、イタリア、スペインの中から一つの国を取り上げ、その自然地理的および人文地理的特徴を調査する。
 - ② 選び出した国のある地域において、職業、土地利用、集落のパターンなどが、どのようにその地域の環境や位置と関係しているか。
 - ③ 選び出した国に含まれる地方を認識し、その中の2地方について、比較し対照点を見いだす。
 - ④ ヨーロッパ共同体全体に関して、次のテーマから一つを選び学習する。(レベル7)
 - a 農業の変化のパターン
 - b ヨーロッパ共同体の国家内・国家間の移住パターン
 - c 地方開発のパターン
 - d 観光産業
 - ⑤ ヨーロッパ共同体の異なる3つの地域について、選定したテーマと関係する開発の影響
- 経済的に発達段階にある国について、次の学習をする。
 - ① バングラデシュ、ブラジル、中国、エジプト、ガーナ、インド、ケニア、メキシコ、ナイジェリア、パキスタン、ペルー、ベネズエラの中から選んだ、経済的に発達段階にある国についての地理的な特徴と状況。
 - ② 選定した国のある地域における地理的特徴と職業について説明し、身近な地域のそれらと比較する。
 - ③ 選定したある国において、地形、気候、豊かさなどが、人々の暮らしに及ぼす影響を調べる。
 - ④ 選定した国のある地域において、職業、土地利用、集落のパターンなどが、どのようにその地域の環境や位置と関係しているか。
 - ⑤ 選定した国の人口分布の概要を把握する。また、それがその国の特徴や状況にどのように影響されているか。
 - ⑥ その国の発展の特徴として示すものの程度、大きさを評価する。
- アメリカ合衆国、日本、ソ連について、次のことを学習する。
 - ① アメリカ合衆国、日本、ソ連について、全体的なレベルで比較研究を行う。比較する項目は、位置、人口、経済活動と生産量、自然的特徴、貿易などである。
 - ② これらの国から一つを取り上げ、次の調査をする。

- a 工業の立地と発達
- b エネルギー資源の開発と石油貿易
- c 選定した国における産業の発達と関わる環境問題（レベル7）
- d 選定した国において、エネルギー資源が、工業の発達に、どのように影響してきたか。（レベル7）

●国際貿易について、次のことを学習する。

- ① 必需品の貿易の型を含めて、国家間の貿易のパターンを分析する。（レベル7）

<キー・ステージ4 レベル4から10>

●ヨーロッパ共同体について、次の学習をする。

- ① ヨーロッパ共同体のうち、明確な特徴、多様な地方性、独自性を備えたフランス、ドイツ、イタリア、スペインの中から一つの国を取り上げ、その自然地理的および人文地理的特徴を調査する。
- ② 選び出した国のある地域において、職業、土地利用、集落のパターンなどが、どのようにその地域の環境や位置と関係しているか。
- ③ 人々の活動の結果、地域はどのように変化したか。また、地域における最近の又は予定されている変化を調べる。
- ④ 選び出した国に含まれる地方を認識し、その中の2地方について、比較し対照点を見いだす。
- ⑤ ヨーロッパ共同体全体に関して、次のテーマから一つを選び学習する。
 - a 農業の変化のパターン
 - b ヨーロッパ共同体の国家内・国家間の移住パターン
 - c 地方開発のパターン
 - d 観光産業
- ⑥ ヨーロッパ共同体の異なる3つの地域について、選定したテーマと関係する開発の影響
- ⑦ 選定したテーマに関わる変化が、地域、地方の主導権や国家・国際レベルの決定事項によって、どの程度影響を受けたか説明する。
- ⑧ ヨーロッパ共同体の特定の地域について、選定したテーマの影響を評価する。（レベル9）
- ⑨ 選定したテーマに関わる、選択的な政府の政策、対策を評価する。（レベル10）

●経済的に発達段階にある国について、次の学習をする。

- ① バングラデシュ、ブラジル、中国、エジプト、ガーナ、インド、ケニア、メキシコ、ナイジェリア、パキスタン、ペルー、ベネズエラの中から選んだ、経済的に発達段階にある国についての地理的な特徴と状況。
- ② 選び出した国のある地域において、職業、土地利用、集落のパターンなどが、どのようにその地域の環境や位置と関係しているか。
- ③ 人々の活動の結果、地域はどのように変化したか。また、地域における最近の又は予定されている変化を調べる。
- ④ 選定したある国において、地形、気候、豊かさなどが、人々の暮らしに及ぼす影響を調べる。
- ⑤ 選定した国の人口分布の概要を把握する。また、それがその国の特徴や状況にどのような

に影響されているか。

- ⑥ 選定した国において、経済発展に影響を及ぼしてきた過程や要因を分析し説明する。
 - ⑦ 選定した国について、経済発展に対する国内投資の演じる役割（レベル9）
 - ⑧ 選定した国や他の組織が行ってきた、経済発展を刺激したり地域格差を是正しようとする試みの在り方を評価する。その際、外国投資、外国借款、援助プログラムなどを対象とする。（レベル10）
- アメリカ合衆国、日本、ソ連について、次のことを学習する。
 - ① アメリカ合衆国、日本、ソ連について、全体的なレベルで比較研究を行う。比較する項目は、位置、人口、経済活動と生産量、自然的特徴、貿易などである。
 - ② これらの国から一つを取り上げ、次の調査をする。
 - a 工業の立地と発達
 - b エネルギー資源の開発と石油貿易
 - c 選定した国における産業の発達と関わる環境問題
 - d 選定した国の異なった地域間において、経済的繁栄の多様性を説明する。
 - 国際貿易について、次のことを学習する。
 - ① 国際貿易の全体的な概要を学ぶべきであるが、同時に貿易国としての日本の増大する重要性や役割に対しては特別の注意を向ける必要がある。また、最近工業化を達成した国々の貿易パターンに与える影響に対しても、同様の注意が必要である。
 - ② 必需品の貿易の型を含めて、国家間の貿易のパターンを分析する。
 - ③ 個々の国の経済が、どのように相互依存しているか。また、個々の国の経済発展に及ぼす国際貿易の影響
 - ④ 個々の国の政策が、国際貿易のパターンやその変化、また、国際貿易の動向などに及ぼす影響を評価する。（レベル9）
 - ⑤ 国際貿易のパターンにおける最近の動向を分析し、将来予想されるパターンについても提言する。

身近な地域・郷土、地図、地域的特色をとらえる内容と学習方法、に関して、内容およびその系統について検討してきた。ここで示した内容およびその系統は、イギリスのナショナル・カリキュラムの中から、一定の視点を設定して抽出し、順序性をつけて示した。

わが国の小・中・高社会科関連カリキュラムの構成に際しては、この内容とわが国の学習指導要領、教科書から抽出した内容とを組み合わせることが必要である。

この課題の達成とそのフレームワークに基づく社会科授業設計・実践が、今後の課題である。

ⅩⅠ. イギリス, ナショナル・カリキュラム, 歴史フレームワーク

平 子 晶 規 (筑波大学大学院)

1. はじめに

イギリスでは、1988年7月にサッチャー保守党政権の下で「1988年教育改革法 (The 1988 Educational Reform Act)」が制定された^①。「1988年教育改革法」の制定は、イギリス教育史上、戦後最大の教育改革と称されている。「1988年教育改革法」の制定に伴って、全国共通の「ナショナル・カリキュラム (National Curriculum)」^②が中央政府によって作成されることになった^③。「ナショナル・カリキュラム」は、いわば我が国の「学習指導要領」に相当するものであり、法的拘束性を有する。中央政府による全国共通のカリキュラムの作成は、戦後初の試みであり、「ナショナル・カリキュラム」の制定・導入は、この点において画期的であったといえる。

「歴史」は、「地理」とともに生徒の社会認識を育成するための教科として、「ナショナル・カリキュラム」の「基礎教科 (foundation subjects)」に位置づけられた^④。「ナショナル・カリキュラム歴史」の作成は、教育科学省 (Department of Education and Science) の諮問機関として設置されたナショナル・カリキュラム審議会 (National Curriculum Council) の統括する歴史科調査委員会 (History Working Group) によって進められた。最終的に『ナショナル・カリキュラム歴史』は、1991年1月に省令として制定され、同年9月から導入された^⑤。「ナショナル・カリキュラム歴史」作成の経過、及び『ナショナル・カリキュラム歴史』の最終原案の概要については、森分孝治・戸田善治「全英共通カリキュラム・歴史コース」(全国社会科教育学会『社会科教育論叢』第38集, 1991年) に詳しい^⑥。

『ナショナル・カリキュラム歴史』は、1993年4月以降、見直しが始まり、1995年1月の新カリキュラム『改訂版ナショナル・カリキュラム歴史』の制定をみるに至った^⑦。新カリキュラムへの移行は、1995年9月にキー・ステージ (以下, KS と略す。) ^⑧ 1-3 で完全実施された。本稿は、我が国の社会科 (地理歴史科を含む) カリキュラム研究のための参考資料を提供すべく、新カリキュラム『改訂版ナショナル・カリキュラム歴史』を紹介するものである。

2. 新カリキュラム『改訂版ナショナル・カリキュラム歴史』の概要

「ナショナル・カリキュラム」の改訂作業を統括的に進めたのが、教育省 (Department for Education) の諮問機関である学校教育課程評価当局 (Schools Curriculum and Assessment Authority, 以下 SCAA と略す。議長は Ron Dearing 氏である。) である。1993年4月、当時の教育大臣・John Patten 氏は、Dearing 氏に「ナショナル・カリキュラム」見直しの要請を行った。これに答えて、Dearing 氏は、1993年7月に「中間報告書」を、1993年12月に「最終報告書」をまとめ発表した。1994年春以降、各教科ごとに調査委員会 (Working Groups) が結成され、各教科の改訂作業が開始された。それは「スリム化 (Slimming down)」をスローガンに、「法的拘束力を持つ内容の削減」と「柔軟性の向上」をねらいにしていた^⑨。「ナショナル・カリキュラム」の改訂は、生徒の学習の負担と教師の指導 (指導計画を含む) と評価の負担を軽減するための措置であった。SCAA の示した改訂のねらいは、次の7点である^⑩。①教授されるべき知識, 理解, スキルを明確にする。② KS 間, 教科間の有用でない重複を避ける。③ KS 間, KS 内の系統性をより明確にす

る。④教科全体にわたって、学習プログラムと到達目標の一貫性のあるより明確な関係を確立する。⑤到達命題に代え、レベル解説を導入する。ただし、音楽、美術、体育は除く。⑥あらゆる能力の生徒へのアクセスを拡大する。⑦現行の要領内の分かっている欠点を改善する。1994年5月、SCAAは各教科の「改訂版ナショナル・カリキュラム（原案）」を発表した。SCAAは、各方面からの意見を考慮し、原案に加筆・修正を加え、各教科の「改訂版ナショナル・カリキュラム」を最終的にまとめ上げた。新カリキュラム『改訂版ナショナル・カリキュラム歴史』は、「1988年教育改革法」で規定されているように、旧カリキュラム同様、「各KSで生徒に教授されるべき内容、スキル、過程」（同法第2条）を示した「学習プログラム（Programmes of Study）」と②「生徒が各KSの終了時までには習得することが期待される知識、スキル、理解」（同法第2条）を示した「到達目標（Attainment Targets）」の大きく2つの部分によって構成されている。

(1) 学習プログラム

「学習プログラム」は、KS 1から3までのKSごとに示されている。各KSの「学習プログラム」は、次の書式に従って示されている。①冒頭の「そのKSで知識、理解、スキルがどのようにして発達させられるべきか」⁽⁴⁴⁾を囲みで示した箇所、そのKSにおける教授・学習内容の概要を示した箇所（KS 1では「学習領域（AREAS OF STUDY）」、②KS 2, 3では「学習単元（STUDY UNITS）」と呼んでいる。）、③「キー・エレメント（KEY ELEMENTS）」と呼ばれる箇所、④各学習単元について、教授・学習内容を詳述した箇所（なお、KS 1には、「学習単元」が設定されていないので、この箇所はなく、iiで教授・学習内容が詳述されている。）。

表2は『改訂版ナショナル・カリキュラム歴史』に設定された「学習単元」を一覧表にしたものである。旧カリキュラムとの相違が比較できるように、表1も提示した。「学習単元」（「学習領域」）は、「過去において実際に何がどのように起こったかを記述した知識」であるところの「歴史的情報」⁽⁴⁵⁾（年号、人物や出来事などといった「事実的知識（historical facts）」）によって構成され、「学習プログラム」を組織している。KS 3では、学習単元1-4をこの順に学習することになっている。すなわち、イギリスの政治・経済史を中心にして、年代順に学習する⁽⁴⁶⁾。

③の「キー・エレメント」は、「1. クロノロジー」「2. 歴史に関する知識と理解の広がり」と深さ」「3. 歴史についての諸解釈」「4. 歴史に関する調査」「5. 構成と伝達」の5つの要素（エレメント）によって構成されている。これら5つの歴史学習の要素（エレメント）は、旧カリキュラムでは、「到達目標」の中に含まれていたものである⁽⁴⁷⁾。「キー・エレメント」は、改訂のねらいの4点目に示された「学習プログラム」と「到達目標」の関連を明確にするために、新たに設けられたものであると考えられる。各KSの「キー・エレメント」の冒頭には、「各キー・エレメントは、相互に密接に関連し合っていて、適宜、学習単元（学習領域）を通して発達させられるべきである。すべてのキー・エレメントが、必ずしも各学習単元（学習領域）で発達させられるべき必要はない」⁽⁴⁸⁾と囲みで記されており、単元計画の自由度が保証されている。

表1 旧カリキュラムの単元一覧

キー・ステージ1 (1単元)

- 単元名なし
- ・自分個人の歴史や家庭生活の学習
 - ・両親, 祖父母, 自分が住んでいる地域に関する身近な過去における変化の学習

キー・ステージ2 (9単元)

- 【学習領域】(5あるいは6単元)
1. 侵入者と定住者: イギリスにおけるローマ人, アンゴロサクソン民族, バイキング
 2. チューダー朝とスチュアート朝
 3. ピクトリア朝のイギリス
 4. 1980年以後のイギリス
 5. 古代ギリシア
 6. 探検と遭遇

* 3と4については, どちらか一方あるいは両方を選択。

- 【補足単元】(3あるいは4単元)
- カテゴリーA テーマ的な学習
「船と船乗り」「食料と農業」「住居と聖地」
「著述と印刷」「陸上交通」「家庭生活, 家族, 子ども」
- カテゴリーB 地方の歴史の学習
- カテゴリーC 非ヨーロッパの社会の学習
「古代エジプト」「メソポタミア」「ツシリア」
「インダス渓谷」「マヤ」「ベナン」

* Aから1単元, Bから1あるいは2単元, Cから1単元選択。

キー・ステージ3 (8単元)

- 【中核単元】(5単元)
1. ローマ帝国
 2. 中世の王国: 1066-1500年のイギリス
 3. 連合王国の形成: 1500-1750年の国王, 国会, 国民
 4. 拡大, 貿易, 産業: 1750-1900年のイギリス
 5. 第2次世界大戦の時代

- 【補足単元】(3単元)
- カテゴリーA このキー・ステージのイギリスに関する中核単元の学習を拡張する単元
- カテゴリーB 1914年以前のヨーロッパの歴史におけるエピソードあるいは転換点の学習を含む単元
- カテゴリーC 過去の非ヨーロッパの社会の学習を含む単元

* 各カテゴリーから1単元ずつ選択。

表2 新カリキュラムの単元一覧

キー・ステージ1 (1単元)

- 【学習領域】(1単元)
- 単元名なし
- ・過去における男性と女性や子どもの日常生活, 仕事, 余暇, 文化について
 - ・イギリスの歴史からの人物を含むさまざまな種類の有名な男性と女性の人生について
 - ・イギリスの歴史からの出来事を含む過去のさまざまな種類の出来事について

キー・ステージ2 (6単元)

- 【学習領域】(6単元)
1. イギリスにおけるローマ人, アンゴロサクソン民族, バイキング
 2. チューダー朝時代の生活
 3. a. ピクトリア朝のイギリス
b. 1980年以後のイギリス

5. 地方の歴史
6. 過去の非ヨーロッパの一社会の重要な特徴

* 3 a, 3 bのどちらか一方を選択。

キー・ステージ3 (6単元)

- 【学習単元】(6単元)
1. 中世の王国: 1066-1500年のイギリス
 2. 連合王国の形成: 1500-1750年の国王, 国会, 国民
 3. 1750-1900年頃のイギリス
 4. 20世紀の世界

5. 1914年以前のヨーロッパの歴史における一時代あるいは一転換点
6. 過去の非ヨーロッパの一社会

* 1, 2, 3, 4はこの順に教授すべきである。

(2) 到達目標

旧カリキュラムでは、「1. 歴史に関する知識と理解」「2. 歴史に関する諸解釈」「3. 歴史に関する資料の活用」の3つの到達目標が設定されていた。さらに、到達目標1には、下位目標として3つの「構成要素 (STRANDS)」（「i. 変化と連続性」「ii. 原因と結果」「iii. 過去の諸状況についての重要な特徴」）が設定されていたので、実質5つの到達目標が設定されていたことになる。5つの到達目標は、それぞれレベル1－10までの原則として10段階の「到達命題 (Statements of Attainment)」において具体化されていた。旧カリキュラムには45個の到達命題があった。新カリキュラムでは、到達目標は「歴史 (HISTORY)」1つに集約化され、それを具体化するレベル1－8と「特に優れた行動」の9段階の「レベル解説 (Level descriptions)」として簡略化された。

「レベル解説」は、「ある特定のレベルにおける生徒の作業が特徴的に示す行動の型と範囲を示したもの」⁽⁶⁾である。「到達目標」が「事実的知識」を排除して、能力・技能目標として記述されていることに、旧カリキュラムとの相違は見られない。また、「各KSの終了時に教師は、ある生徒の到達レベルを決定する際、どのレベル解説が生徒の行動に最もよく当てはまるかを判断すべきである」⁽⁷⁾とあるように、「レベル解説」は、生徒の歴史学習の到達度を評価するための到達基準としても用いられている。すなわち、「ナショナル・カリキュラム」は、全国共通のカリキュラムの中に、「到達目標」という系統的な評価体系を組み込んだカリキュラムであるといえる。そして、「大多数の生徒の行動は、KS 1終了時までにレベル1－3、KS 2終了時までにレベル2－5、KS 3終了時までにレベル3－7の範囲内にあるべきである」⁽⁸⁾とあるように、「レベル解説」は、各KSに配当されることによって、「学習プログラム」との関連性が保たれるようになっている。

3. 新カリキュラム『改訂版ナショナル・カリキュラム歴史』の抄訳

KS1の「学習プログラム」

生徒は、過去についての認識と過去と現在の異なる点についての認識を発達させる機会を与えられるべきである。生徒は、過去についての学習をクロノロジーの枠組みの中に位置づけ、過去について調べる方法のいくつかを理解するのを支援されるべきである。

学習領域

- 1. 生徒は、過去における男性と女性や子どもの日常生活、仕事、余暇、文化について教授されるべきである。例えば、衣服、食事、日用品、住居、店やその他の建物、仕事、交通、娯楽など。身近な状況から時間的・空間的により遠くの状況へと進んでいく中で、生徒は、次のことについて調べる機会を与えられるべきである。
 - a 自分自身の生活と家族や自分の周辺の大人の生活における変化
 - b 記憶を越えた過去におけるイギリスの人々の生活様式の諸側面
- 2. 生徒は、イギリスの歴史からの人物を含むさまざまな種類の有名な男性と女性、例えば、支配者、聖人、芸術家、技術者、探検家、発明家、先駆者などの人生について教授されるべきである。
- 3. 生徒は、イギリスの歴史からの出来事を含む過去のさまざまな種類の出来事、例えば、有名な地方や国家の出来事、他の国の出来事、百年祭、宗教的祭典、記念祭、火薬陰謀事件、オリンピック大会のような世代から世代へと記憶され、祝福されてきた出来事などについて教授されるべきである

KS1の「キー・エレメント」

- 1. クロノロジー
 - a クロノロジーについての認識を発達させるために、出来事や事物を配列すること
 - b よく使われる過去に関する語や句、例えば、古い、新しい、前、後、昔、日、月、年などを使用すること
- 2. 歴史に関する知識と理解の広がりと深さ
 - a 歴史に関する出来事についての話や目撃者の証言を含むさまざまな時代や文化からの話を通しての過去の諸側面について
 - b 人々があることをした理由、ある出来事が起きた原因、結果として起きたことを認識すること
 - c 時代による生活様式の相違を確認すること
- 3. 歴史についての諸解釈
 - a 過去が表されるさまざまな方法、例えば、絵画、文書、映画、テレビ番組、演劇、歌、複製品、博物館の展示品などを確認すること
- 4. 歴史に関する調査
 - a 工芸品、絵画、写真、大人が話してくれた大人自身の過去についての話、文字資料、建造物、遺跡を含む一連の情報資料から過去の諸側面について調べる方法
 - b 過去について質問をし、過去についての疑問に答えること
- 5. 構成と伝達
 - a 歴史に関する認識や理解をさまざまな手段によって伝達すること

KS2の「学習プログラム」

生徒は、ローマ時代から現代に至るイギリスの過去における重要なエピソードや発展について教授されるべきであり、古代文明や世界の他の地域の歴史について教授されるべきである。生徒は、異なる学習単元にわたって、関連づけを行うことにより、クロノロジーの枠組みを発達させるのを支援されるべきである。生徒は、地方の歴史について調査し、一連の情報資料から過去について学習する機会を持つべきである。

学習単元1：イギリスにおけるローマ人、アングロサクソン民族、バイキング

生徒は、紀元前55年から11世紀初頭に至るイギリス諸島の歴史とイギリスの社会がどのようにしてさまざまな民族によって形成されていったかを教授されるべきである。生徒は、ローマ人、アングロサクソン民族、バイキングの内、いずれか1つについてより深く学習する機会を与えられるべきである。

- 1. 生徒は、次のことについて概略的に教授されるべきである。
 - a ローマ人の征服とイギリスの占領
 - b アングロサクソン民族の到来と定住
 - c バイキングの侵入と定住
- 2. 生徒は、次の内の1つについてより深く教授されるべきである。
 - a ローマ人
 - ローマ人の征服とそれがイギリスに与えた影響
 - 日常生活
 - ローマ人の支配の遺産
 - _____ あ る い は _____
 - b アングロサクソン民族
 - アングロサクソン民族の到来と定住、それらがイギリスに与えた影響
 - 日常生活
 - 定住の遺産

c バイキング

- バイキングの侵入と定住，それらがイギリス諸島に与えた影響
- 日常生活
- 定住の遺産

学習単元 2：チューダー朝時代の生活

生徒は，君主を含む主要な出来事や人物のいくつかとチューダー朝時代における社会のさまざまな階級の人々の生活様式について教授されるべきである。

主要な出来事や人物

- a ヘンリー 8 世とローマとの仲たがい
- b 海外への探検
- c エリザベス 1 世と無敵艦隊 (1588年)

社会のさまざまな階級における人々の生活様式

- d 宮廷生
- e 都市と田舎の生活様式
- f シェークスピアを含む芸術と建築

学習単元 3 a：ビクトリア朝のイギリス

生徒は，イギリスにおける社会のさまざまな階級の男性と女性，子どもの生活とそれらが産業や交通の変化によって，どのような影響を受けたかについて教授されるべきである。

産業や交通の変化

- a 蒸気力，工場，大量生産
- b 鉄道の発達

都市や田舎における社会のさまざまな階級の人々の生活

- c 仕事
- d 家庭
- e 余暇
- f 学校

学習単元 3 b：1930年以降のイギリス

生徒は，イギリスにおける社会のさまざまな階級の男性と女性，子どもの生活とそれらが，第 2 次世界大戦，科学技術や交通の変化によって，どのような影響を受けたかについて教授されるべきである。

科学技術や交通の変化

- a 新しい科学技術の影響を含む産業や交通の変化

戦時中のイギリス人

- b 第 2 次世界大戦がイギリスの人々に与えた影響

イギリスのさまざまな地域におけるさまざまな階級の人々の生活

- c 家庭
- d 仕事
- e 余暇

学習単元 4：古代ギリシア

生徒は，古代ギリシア人の生活様式，思想，業績と古代ギリシア文明の現代の世界への遺産について教授されるべきである。

古代ギリシア人

- a アテネとスパルタ
- b 芸術と建築

- c ギリシアの神と女神，英雄とヒロインの神話や伝説
- d 他の民族との関係

古代ギリシア文明の遺産

- e 現代の世界への影響

学習単元5：地方の歴史

生徒は，地方の歴史の一側面について教授されるべきである。これは，次の中の1つであるべきである。

- a 長期間にわたる地方の社会の一側面，例えば，教育，余暇，宗教，人口の変化，定住と景観，法と秩序，貧民の保護など

あるいは

- b 短期間の地方の社会の一側面，あるいは，地方の社会の特定の出来事とのかかわり合い，例えば，バイキング・ヨーク，ノルマン征服が一地方に与えた影響，一地方における中世の廃村，チャールズ1世と国会との争いの期間の地方，どのようにして土地が区画されたか，第1次世界大戦が一地方に与えた影響など

あるいは

- c 学習単元において教授される発展を例証する地方の社会の一側面，例えば，地方の防御施設，地方におけるローマ人，アングロサクソン民族，バイキング，田舎の住居における生活，産業革命における少年労働，20世紀における新しい都市など

学習単元6：過去の非ヨーロッパの一社会

生徒は，次のリストの中から選ばれた過去の非ヨーロッパの一社会の重要な特徴について教授されるべきである。

- 古代エジプト
- メソポタミア，例えば，古代シュメール，アッシリア帝国など
- インダス渓谷
- マヤ
- ベナン
- アステカ

この単元は，次のことを扱うべきである。

- a 男性と女性の日常生活を含む重要な特徴
- b 人々や社会について調べる時に考古学を用いること

KS2の「キー・エレメント」

- 1. クロノロジー
 - a 学習する時代における出来事，人物，変化をクロノロジーの枠組みの中に位置づけること
 - b 古代の，現代の，紀元前，紀元，世紀，10年を含む過去に関する年号や用語，例えば，チューダー朝の，ビクトリア朝などのさまざまな時代を規定する用語を使用すること
- 2. 歴史に関する知識と理解の広がりや深さ
 - a 過去における人々の思想，信条，態度，男性と女性の体験を含む特定の時代や社会の特徴的な特徴について，学習する社会の社会的，文化的，宗教的，民族的相違について
 - b 学習する時代における歴史に関する出来事，状況，変化の原因と結果を記述し，確定すること
 - c ある時代における，また，いくつかの時代にわたる主要な出来事，状況，変化を記述し，関連づけること
- 3. 歴史についての諸解釈
 - a 過去が表され，解釈されるさまざまな方法を確認し，なぜ過去はさまざまに表され，解釈されるのか，その理由を示すこと

■ 4. 歴史に関する調査

- a 文書、印刷物、工芸品、絵画、写真、音楽、建造物、遺跡を含む一連の情報資料から学習する時代の諸側面について調べる方法
- b 質問をしたり、疑問に答えたりすること、あるトピックにふさわしい情報を選択し、記録すること

■ 5. 構成と伝達

- a 年号や用語を含む歴史に関する情報を思い出し、選択し、構成すること
- b 裁判所、君主、議会、国家、文明、侵略、征服、定住、改宗、奴隷制、貿易、産業、法律を含む学習する時代やトピックを記述するのに必要な用語
- c 組み立てられた話や記述を含むさまざまな手段によって、歴史に関する知識と理解を伝達すること

KS3の「学習プログラム」

生徒は、中世初頭から20世紀に至るイギリスの経済、社会、文化、政治組織の変化について教授されるべきである。生徒は、ヨーロッパの歴史や非ヨーロッパの歴史の諸側面について教授されるべきであり、学習するさまざまな時代や地域における歴史に関する出来事や変化を関連づけたり、結びつけたりするように教授されるべきである。生徒は、歴史に関する知識を使って、情報資料を評価・活用し、歴史に関する出来事や発展について話し、記述し、説明する機会を与えられるべきである。

学習单元1：中世の王国：1066—1500年のイギリス

KS 2におけるイギリスの初期の歴史の学習を基礎にして、生徒は、中世の君主制の発展やイギリス諸島の諸民族の生活様式を含むイギリスの中世の主要な特徴のいくつかについて教授されるべきである。

イギリスの中世の君主制の発展

- a ヘースティングズの戦い（1066年）とその影響を含むノルマン征服
- b マグナ・カルタ（1215年）を含む君主制と教会、封建領主、国民との関係
- c 他の国々との関係

中世の社会

- d 教会の役割を含む中世の社会の構造
- e ペストを含む健康と病気
- f 芸術と建築

学習单元2：連合王国の形成：1500—1750年の国王、国会、国民

KS 2におけるチューダー朝時代の生活の学習を基礎にして、生徒は、この時代にイギリスの歴史を形成した主要な政治的、社会的、宗教的変化のいくつかについて教授されるべきである。

政治的変化

- a チャールズ1世と国会との争い、空位期間、王政復古、名誉革命を含む変化しつつある国王の権力と国王、国会、国民の関係
- b 連合王国の形成とその影響を含むイングランド、アイルランド、スコットランド、ウェールズとの関係

社会的変化

- c 都市と田舎の変化、貧富の差、生活様式、文化

宗教的変化

- d 16・17世紀における宗教的変化と宗教的緊

学習单元3：1750—1900年頃のイギリス

生徒は、この時代の主要な出来事、人物、発展のいくつかについて概観すること、とりわけ、世

界的な拡大，産業化，政治的発展が，現代のイギリスを形成するのにどのように結びついたかについて教授されるべきである。生徒は，この時代の一側面について深く教授されるべきである。

■ 1. 生徒は，次のことについて概観すべきである。

イギリスの世界的な拡大

- a 貿易と大英帝国の成長，それがイギリスや植民地に与えた影響産業化
- b 産業の変化とそれが社会のさまざまな階級の人々の生活様式に与えた影響

政治的発展

- c アメリカ独立革命，フランス革命，ナポレオン戦争，公民権の拡大，一般民衆の抗議運動と改革運動を含む人物や出来事が与えた影響

■ 2. 生徒は，主要な出来事，人物，発展とその意義の内，少なくとも1つを深く学習する機会を与えられるべきである。

学習單元 4：20世紀の世界

生徒は，20世紀の主要な出来事，人物，発展のいくつかについて概観することと，それらとりわけ，世界大戦が，現代の世界をどのように形成してきたかについて教授されるべきである。生徒は，この時代の一側面について深く教授されるべきである。

■ 1. 生徒は，次のことについて概観すべきである。

- a 第1次世界大戦とその結果
- b ホロコーストと原爆投下を含む第2次世界大戦
- c 第2次世界大戦がイギリスや世界に残した遺産

■ 2. 生徒は，主要な出来事，発展，人物とその意義の内，少なくとも1つを深く学習する機会を与えられるべきである。

学習單元 5：1914年以前のヨーロッパの歴史における一時代あるいは一転換点

生徒は，ヨーロッパの歴史における一時代あるいは一転換点の意義について教授されるべきである。この学習單元は，次のことをすべきである

- a 主要な歴史的意義を持つ一時代あるいは一転換点に基づく。
- b ヨーロッパのさまざまな地域における発展の関連を例証する。
- c その時代あるいは転換点を与えた短期間の影響と長期間の影響を調べる。

例としては，新石器時代の革命，ローマ帝国，十字軍，イタリア・ルネサンス，近代におけるヨーロッパの拡大，16世紀における宗教改革と反宗教改革運動，16・17世紀においてオスマン帝国がヨーロッパに与えた影響，ビュートル大帝の時代，フランス革命とナポレオン時代，ドイツとイタリアの連合，19世紀におけるヨーロッパの拡大などがある。

学習單元 6：過去の非ヨーロッパの一社会

生徒は，過去の非ヨーロッパの一社会に関する重要な事柄について教授されるべきである。この学習單元は，次のことをすべきである。

- a KS 2の学習プログラムの学習單元6に挙げられた社会とは異なる1つあるいは複数の社会に基づく。
- b 長期間にわたる社会の学習を含む。
- c アジア，アフリカ，アメリカ，オーストラレーシアの過去の社会における非ヨーロッパを背景とする人々についての重要な歴史に関する事柄に焦点を当てる。

例としては，イスラム文明（7-16世紀），始皇帝からクビライ=カンに至る中華帝国，ムガル帝国からイギリス人の到来に至るインド，ペルーの文明，北アメリカの原住民，南北アメリカの黒人，将軍支配下の日本などがある。

KS3の「キー・エレメント」

- 1. クロノロジー
 - a 学習する時代における出来事、人物、変化をクロノロジーの枠組みの中に位置づけること
 - b 例えば、時代、中世の、宗教改革、産業革命、ハノーバー王時代の、ジョージ王時代のなどの歴史に関する時代や過去を記述する年号、用語、慣習を使用すること
- 2. 歴史に関する知識と理解の広がり と 深さ
 - a 人々の思想、信条、態度、男性と女性の体験を含む特定の時代や社会の特徴的な特徴を分析すること、学習する社会の社会的、文化的、宗教的、民族的相違を分析すること
 - b 学習する時代における歴史に関する出来事、状況、変化の原因と結果を記述し分析し、説明すること
 - c さまざまな学習単元の内容や地方の歴史、イギリスの歴史、ヨーロッパの歴史、世界の歴史を関連づけることによって、ある時代における、また、いくつかの時代にわたる主要な出来事や変化を概観する能力を発達させること
 - d 学習する主要な出来事、人物、変化の意義を評価すること
- 3. 歴史についての諸解釈
 - a 歴史に関する出来事、人物、状況、変化のいくつかが、どのようにしてさまざまに解釈されてきたのか、また、どうしてそのようにさまざまに解釈されてきたのか
 - b 諸解釈を分析し、評価すること
- 4. 歴史に関する調査
 - a 文書、印刷物、工芸品、絵画、写真、映画、音楽、証言、建造物、遺跡を含む一連の情報資料を使いながら、学習する時代の諸側面について自立的に調べること
 - b 意義のある質問をしたり、意義のある疑問に答えたりすること、資料を歴史的な文脈の中で評価し、ある調査に必要な資料を確定し、あるトピックにふさわしい情報を収集し、記録し、結論にたどり着くこと
- 5. 構成と伝達
 - a 年号や用語を含む歴史に関する情報を思い出し、選択し、構成すること
 - b 政府、議会、教会、国家、帝国、君主制、共和国、条約、革命、改革、階級、貴族、農民、法律、貿易、産業化、共産主義、ファシズム、民主主義、独裁制を含む学問の時代やトピックを記述し、説明するのに必要な用語を的確に選択し、配置することによって、歴史に関する知識と理解を構成すること
 - c 広範囲にわたる話や記述、実証的な説明を含む一連の技術を使いながら、歴史に関する知識と理解を伝達すること

(訳者注) 波線部は、本文中ではイタリック体で標記されており、法的拘束力を持たない例示であることが明記されている。なお、紙幅の都合上、KS 2の学習単元1-4、KS 3の学習単元1-4に示された法的拘束力を持たない例示内容は割愛した。

「レベル解説」

■ レベル 1

生徒は、自分自身の生活や他の人々の生活における現在と過去の相違を認識する。生徒は、2、3の出来事や事物を配列することによって、また、過去についての日常的によく使われる用語を使用することによって、現れつつあるクロノロジーについての認識を示す。生徒は、過去についての話からのエピソードを知っていて、詳しく話す。生徒は、情報資料から過去についての疑問に対する答えを見つけ始めている。

■レベル 2

生徒は、過去に関する用語を使用することによって、また、出来事や事物を配列することによって、また、自分自身の生活の諸側面と過去の諸側面との間の相違を見分けることによって、発達しつつあるクロノロジーについての認識を示す。生徒は、記憶を超えた過去の諸側面についての事実に基づく知識と理解、学習した主要な出来事や人物のいくつかについての事実に基づく知識と理解を示す。生徒は、過去の人々がそのように行動したのには、理由があるということを認識し始めている。生徒は、過去が表されるさまざまな方法のいくつかを確認し始めている。生徒は、単によく見ることによって、情報資料から過去についての疑問に答える。

■レベル 3

生徒は、過去が異なる時代に区分されることをより認識することによって、また、このような時代の間共通点と相違点のいくつかを認識することによって、また、年号や用語を使用することによって、クロノロジーについての理解を示す。生徒は、適切な学習プログラムからの主要な出来事、人物、変化のいくつかについての事実に基づく知識と理解を示す。生徒は、主要な出来事や変化の 2、3 の原因と結果を示し始めている。生徒は、過去が表されるさまざまな方法のいくつかを確認する。生徒は、単によく見ることを越える方法で、情報資料を活用することによって、過去についての疑問に対する答えを見つける。

■レベル 4

生徒は、KS 2 あるいは KS 3 の学習プログラムからのイギリスや他の国々の歴史の諸側面についての事実に基づく知識と理解を示す。生徒は、これを使って、過去の社会や時代の特徴的な特徴を記述し、ある時代における、また、いくつかの時代にわたる変化を確認する。生徒は、主要な出来事、人物、変化のいくつかを記述する。生徒は、主要な出来事や変化の原因と結果のいくつかを示す。生徒は、過去のいくつかの側面がどのようにさまざまに表され、解釈されてきたかを示す。生徒は、資料から得られる情報を選択し始め、関連づけ始めている。生徒は、年号や用語を適切に使用しながら、組み立てられた作業をし始めている。

■レベル 5

生徒は、KS 2 あるいは KS 3 の学習プログラムからのイギリスや他の国々の歴史の諸側面についての事実に基づく知識と理解の深まりを示す。生徒は、これを使って、過去の社会や時代の特徴を記述し、また、関連づけ始める。生徒は、出来事、人物、変化を記述する。生徒は、出来事や変化の適切な原因と結果を記述し、関連づける。生徒は、出来事、人物、変化の中には、さまざまに解釈されてきたものがあるということを知っていて、このことに対する有り得る理由を示す。知識と理解を使いながら、生徒は、情報資料を評価し始めている、特定の課題に役立つ情報資料を確定し始めている。生徒は、年号や用語を適切に使用しながら、情報を選択し、構成して、組み立てられた作業をする。

■レベル 6

生徒は、KS 3 の学習プログラムからのイギリスや他の国々の歴史の事実に基づく知識と理解を使って、過去の社会や時代を記述し、ある時代における、また、いくつかの時代にわたる特徴を関連づける。生徒は、出来事や変化の原因と結果を調べ、また、分析し始めている。生徒は、出来事、人物、変化についてのさまざまな歴史に関する解釈を記述し、説明し始めている。知識と理解を使いながら、生徒は、結論にたどり着き、結論を支持するのに批判的に活用する情報資料を確定し、評価する。生徒は、年号や用語を適切に使用しながら、適切な情報を選択し、構成し、配置して、

組み立てられた作業をする。

■レベル7

生徒は、KS 3の学習プログラムからのイギリスや他の国々の歴史の概略的な事実に基づく知識と理解と詳細な事実に基づく知識と理解を関連づける。生徒は、これを使って、ある特定の時代あるいは社会の特徴の関係を分析し、出来事や変化の原因と結果を分析する。生徒は、さまざまな歴史に関する解釈がどのようにして、また、なぜ作り出されてきたのかを説明する。生徒は、知識と理解を使って、情報資料を批判的に確定し、評価し、活用しながら、自立的に調査をし始めている。生徒は、実証的な結論に自立的にたどり着き始めている。生徒は、年号や用語を適切に使用しながら、適切な情報を選択し、構成し、配置して、よく組み立てられた話、記述、説明を生み出す。

■レベル8

生徒は、KS 3の学習プログラムからのイギリスや他の国々の歴史の概略的な事実に基づく知識と理解と詳細な事実に基づく知識と理解を使って、出来事、人物、変化の関係や過去の社会の特徴の関係を分析する。出来事や変化の原因と結果についての生徒の説明や分析が、より広範囲にわたる歴史的な文脈の中に位置づけられている。生徒は、さまざまな歴史に関する解釈を分析し、説明し、また、さまざまな歴史に関する解釈を評価し始めている。歴史に関する知識と理解を頼りにしながら、生徒は、情報資料を批判的に活用し、歴史に関するトピックについての調査を行い、実証的な結論に自立的にたどり着く。生徒は、年号や用語を適切に使用しながら、適切な情報を選択し、構成し、配置して、絶えずよく組み立てられた話、記述、説明を生み出す。

■特に優れた行動

生徒は、KS 3の学習プログラムからのイギリスや他の国々の歴史の広範囲にわたる詳細な事実に基づく知識と理解を使って、広範囲にわたる出来事、人物、思想、変化の関係や過去の社会の特徴の関係を分析する。出来事や変化の原因と結果についての生徒の説明や分析が、よく実証されていて、より広範囲にわたる歴史的な文脈の中に位置づけられている。さまざまな国やさまざまな時代において起きた出来事や発展の関連を分析する。生徒は、歴史的な文脈との関係において、歴史に関する出来事や発展についてのさまざまな解釈の価値について、バランスのとれた判断を下す。歴史に関する知識と理解を頼りにしながら、生徒は、情報資料を批判的に活用し、歴史に関するトピックについての調査を行い、実証的なバランスのとれた結論に自立的にたどり着き、それを支持する。生徒は、年号や用語を適切に使用しながら、広範囲にわたる適切な情報を選択し、構成し、配置して、絶えずよく組み立てられた話、記述、説明を生み出す。

4. おわりに

イギリス「ナショナル・カリキュラム歴史」は、「学習プログラム」と「到達目標」の2つの部分によって構成され、歴史教育における知識と能力・技能を明確に分離させた点に、カリキュラム構造上の特徴を持つ(図1)。イギリスの歴史教育における「スキル (skills)」（歴史を認識するための能力・技能）重視の点は、「ナショナル・カリキュラム歴史」のカリキュラム構造にも見出すことができる。「スキル」を重視したイギリスの歴史教育、及びそれを理論的背景とした「ナショナル・カリキュラム歴史」は、我が国の社会科教育にとって参考になると考えられる。また、イギリス国内において、「ナショナル・カリキュラム歴史」に基づく歴史教育が教育現場でどのように実践されているかについては、今後の研究に期待される。

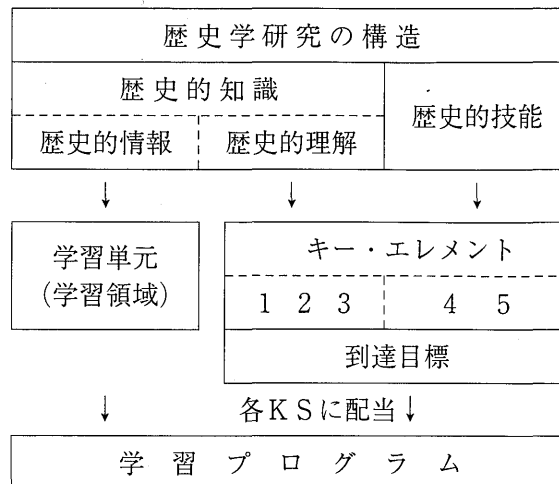


図1 新カリキュラムの構造

【註】

- (1) 「1988年教育改革法」が適用されるのは、イングランドとウェールズのみである。本稿では、イングランドに限定して論述する。
- (2) 本稿では、'National Curriculum'の訳語としては、「ナショナル・カリキュラム」を使用することにする。
- (3) 「ナショナル・カリキュラム」を編成する権利は、イングランドとウェールズには別々に与えられている。
- (4) 「ナショナル・カリキュラム」(現行)の教科は、「中核基礎教科 (core foundation subjects)」の英語、数学、科学と「基礎教科 (foundation subjects)」の美術、地理、歴史、現代外国語、音楽、体育、デザインと技術、情報技術の11教科である。
- (5) Department of Education and Science, *History in the National Curriculum*, HMSO, 1991. なお、本稿では、本書(旧カリキュラム)を『ナショナル・カリキュラム歴史』と呼ぶことにする。
- (6) 森分孝治・戸田善治「全英共通カリキュラム・歴史コース」(全国社会科教育学会『社会科教育論叢』第38集, 1991年)。
- (7) DEPARTMENT FOR EDUCATION, *History in the National Curriculum*, HMSO, 1995. なお、本稿では、本書(新カリキュラム)を『改訂版ナショナル・カリキュラム歴史』と呼ぶことにする。
- (8) 11年間(5-16歳)の義務教育期間を4つの段階(Key Stages)に区分している。5-7歳がKS 1, 7-11歳がKS 2, 11-14歳がKS 3, 14-16歳がKS 4である。なお、「歴史」はKS 1-3で必修になっている。
- (9) School Curriculum and Assessment Authority, *HISTORY IN THE NATIONAL CURRICULUM DRAFT PROPOSALS*, SCAA, 1994, p. i.
- (10) Ibid.
- (11) Ibid., p. iv.
- (12) 森分孝治・戸田善治「全英共通カリキュラム・歴史コース」(全国社会科教育学会『社会科教育論叢』第38集, 1991年), p. 44. 戸田氏の「歴史的情報」の定義による。
- (13) KS 3がイギリスの政治・経済史を中心的内容とするのに対して、KS 2は、イギリスの生活・文

化史を中心的 content としている。

- (14) School Curriculum and Assessment Authority, *HISTORY IN THE NATIONAL CURRICULUM DRAFT PROPOSALS*, SCAA, 1994, p. iv.
- (15) Department for Education, *History in the National Curriculum*, HMSO, 1995, pp.3, 5, 11.
- (16) *Ibid.*, p.15.
- (17) *Ibid.*
- (18) *Ibid.*

〈第3部〉

資料編 文部省研究開発指定校等におけるカリキュラム研究

市 川 博（横浜国立大学教育人間科学部）

栗 原 幸 正（横浜国立大学大学院生・茅ヶ崎市立茅ヶ崎小学校）

目 次

1. 横浜国立大学教育人間科学部附属横浜小学校
2. 福島大学教育学部附属小学校
3. 東京学芸大学教育学部附属大泉小学校
4. 上越教育大学学校教育学部附属小学校
5. 奈良女子大学文学部附属小学校
6. 神戸大学発達科学部附属明石小学校
7. 新潟県上越市立大手町小学校
8. 横浜国立大学教育人間科学部附属鎌倉小学校
9. 宮城教育大学附属中学校
10. 福岡教育大学教育学部附属福岡中学校
11. 鳴門教育大学学校教育学部附属中学校
12. 千葉県館山市立第二中学校
13. 岩手大学教育学部附属中学校
14. 名古屋大学教育学部附属中・高等学校

1. 横浜国立大学教育人間科学部附属横浜小学校 (平成10年度研究)

研究題目 共に学びをつくり上げる子どもを育てる教育課程の創造
 カリキュラムの特色

- ・ 既存各教科領域の中でのカリキュラム開発
- ・ 教科横断的カリキュラム開発

研究の概要 自己決定力・自己責任能力・かかわりあう力の3つの力の育成を目指し、既存教科の枠組みの中で、教科横断的な側面も重視しながら、カリキュラム開発をおこない、横浜小プラン2を創出する研究

<資料抜粋> 『横小プラン5p』

	4月	5月	6月	7月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	
単元名	◎社会的実践力 □問題探求力 □社会的認識力 ◎社会的実践力 □問題探求力 □社会的認識力											
単元で育てたい力	◎生活圏を中心としたまちを探索し、まちにある公共施設を利用したり、様々な人々の存在や生活の様子を知ったりすることを通じて、さらにまちを知りたいという意欲をもちながら実践することができる。 ◎まちを観察し、簡単な地図に表したり、まちの人々にインタビューしたりすることを通じて人々とまちとの関わりについて問題意識を抱き、探究することができる。 ◎まちの人々は、まちをよりよくしようと様々な努力をしていることに気づき、まちに親近感をもちながら、まちの成長として自らのあり方を考えることができる。											
単元例	『まちにとびだせ、たんけんたい』 ◎まちを出で、まちにあるものや、人とふれあう。 ◎公園・ログハウスなどが集まる場所を利用し、様々な人々が共に集まる場所を利用することができるようになる。 ◎まちをたんけんして、わかったことなどを新聞や地図にまとめ、自分なりによりよいあり方に向けて実践に取り組み。											
	『みんなの遊び場』 (13) ◎まちの公共施設の利用したり、観察したりする中から様々な人々の要求や願いを実現するための問題を見つけて、関心や調査や調べ活動を通して探究することができる。 ◎まちの人々は自分たちの生活を豊かにするために、公共施設で活動していることに気づき、自分たちの公共施設の利用の仕方について考えることができる。											
	『みんなの遊び場・相葉公園オーロラジ』 ◎相葉公園オーロラジを利用し、その様子をとらえる。 ◎自分たちの住む地域にも、ログハウスのような公共的な施設があることを知り、進んで利用して遊べることを考える。 ◎自分たちの地域のログハウスを進んで利用し、区によって特徴のあることをとらえる。 ◎自分が考えるよりよい公共施設のあり方に向けて取り組み、まちの成長に積極的に働きかける。											
	『みんなが笑顔でくらすまち』 ◎オーロラジで知り合った様々な人と、積極的に関わり、交流をしていく計画を立てる。 ◎交流会に向けて具体的な役割分担を決めたり、実施の方法を考えたりする。 ◎交流会の準備に向けて、まちの商店街などを利用して、まちの人々と関わりを深める。 ◎交流のためによりよい方法を考え実践する。 ◎交流会に取り組み。 ◎交流会を通して、進んでまちとの関わりについて質問をもつ。 ◎交流を通して明らかになったまちの問題点を解決するために、さらにまちに関わり自分なりの方法で実践する。 ◎よりよいまちのあり方に向けて、まちの人々に働きかける計画を立てる。 ◎ボランティア活動に取り組み、まちの人々に実際に働きかける。											
	『新山下地域ケアプラザでお年寄りとお年寄り』 ◎地域ケアプラザでボランティア活動に取り組む。 ◎お年寄りや交流するために、どんなことが必要か考える。 ◎お年寄りや交流するために、一緒にする内容について考える。 ◎お年寄りや交流する中で、昔の人々の知恵、願い、生活の様子に気づく。 ◎様々な人と共によりよく生きるための自分たちのあり方行動について考え、実践する。											
学年日課表	身近なまちにおける暮らしを体験したり、暮らしたり、高めたりする人々の営みや、現代までにおける人々の生活やまちの変化の様子について、実際に体験したり、行動的に探究したりする活動に参加したりすることを通じて、自分との関わりで問題をとらえ実践し、まちの人々の生活をよりよくしようとする意欲をもち、様々な人々と共に生きるまちの実現に向けて自分なりの行動の仕方やあり方を考え、実践する力を育てる。											
年日課表	『3年一歩「まちの人々と手をつなごう」』 ◎子どもたちの意識の湧け ◎まちのひみつをつたえたい ◎まちの人々とふれあおう ◎まちの人々と仲良くしよう ◎まちの人々と仲良くしよう											

	4月	5月	6月	7月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月
単元名	まちパトロール (10)		さわやかで安全なまち (23)		かわりゆく私たちのまち (42) 横断<10>国語			しらせよう私たちのまち、知りたい他のまち (21)			
単元で育てたい力	◎付属小のあるまちは住みよいまちかという視点で、積極的にまちに出てインタビューしたり調査活動に取り組んだりする。 ○付属小のあるまちをパトロールした経験をもとに問題点を見つけ、聞き取り調査などを通して探究することができる。 □付属小のあるまちの問題点をつかみ自分なりの考えをもつことができる		◎地域社会における人々の健康や安全を守るための諸活動について、実践を通して問題点を把握し、学習したことをもとに、地域社会の会員として自分なりに考え実践することができる。 ○地域社会における人々の健康や安全を守るための諸活動について問題意識を持ち、体験的な活動や問題解決的な活動によって探究することができる。 □地域社会における人々の健康や安全を守るための諸活動について調べそこで行われている様々な工夫や努力について学んだことをもとにして自分なりによりよい行動の仕方について考えることができる。		◎さらによりよいまちにしていくための様々な取り組みについて実践的、行動的に調べ、具体的なプランを計画し、提案することができる ○付属小のあるまちが住みよいまちになっていくためには、どのように開発されていくといいだろうかということに問題意識を持ち、身近なモデル地区について調べたり、聞き取り調査をしたりしながら考えることができる。 □住みよいまちにするための未来の開発について地図や各種資料を効果的に活用しながら考え、住み良くなるための工夫や努力について自分なりの考えをもつことができる。			◎自分たちのまちでの問題点は他地域ではどのように解決されているのかという問題意識をもって、他地域の人々と交流することができる。 ○自分たちの住んでいるまちと自然条件の異なる他地域の人々の生活の様子に関心を持ち、工夫や努力について探究していくことができる。 □自然条件の異なる他地域における人々の生活の様子について学び、自分たちのまちと比較することができる。			
単元例	①3年生の学習での内容を想起し、4年生でまちのどのような点について調べるか話し合う。 ②まちに進んで出て前時で考えた視点で視点でまちの問題点について調べる。 ③問題点を整理し、細かく学習していくための計画を立てる。 ④実際に問題解決のために取り組んでいる人々に話を聞いたり、問題点(ごみ)等の解決に、実際に取り組んだりしながらさらによりよい方法を考える。 ⑤パトロールの結果を基にして、1年間の学習の計画や指針を立てる		①交通安全や防災等の安全面、ゴミや水などの健康面等について、それらを保持するための取り組みについて一つずつ選択し、学習計画を立てることができる。 ②ゴミの収集やリサイクルに取り組んでいる人々とふれあいながら、その様子を探究する。 ③これからのよりよい環境づくりのために自分たちでできることについて話し合い実践する。		①今までの学習をもとにして、まだ解決できていないまちの問題について話し合う。 ②自分たちのまちがより住みよいまちになるために、自分たちのまちはどうあったらよいのかについて、実際にまちに出て調べる活動を通して考えることができる。 ③公園・緑地・町並み・等自分たちにとって身近な問題について調べ、人々のまちをより良くしようとする取り組みを検証していく。 ④よりよいまちづくりのために、自分たちが取り組んでいくことを計画し、プランづくりに取り組む。 ⑤よりよいまちづくりのために、モデル地区などを実際に調べながらより具体的で実際的なものとなるように考える。 ⑥自分たちのプランを市やまちの人々に聞いてもらい、全体的な計画が必要であることに気づく ⑦まちがより住み良くなるためには、人々の努力が必要で、そのことが社会を変革する力になっていることを、自分たちのまちに実際に調べる活動をしていくことによって、考えることができる。			①今までの学習から、自分たちのまちについて振り返る。 ②自分たちのまちと違うまちについて、今まで訪れた体験などを元にして、違いを話し合う。 ③自分の知っている他地域に絞って、自分たちのまちで今まで学習してきたことを伝えながら、その地域の小学生と仲良くなる方法について考える。 ④Eメール、手紙、ビデオレター等様々な方法で実際に他地域の人々と交流する。 ⑤交流の中で浮かび上がってきた、自分たちの生活との違いについて問題意識をもち調べる計画を立てる。 ⑥調べた結果を基にして、よりよい方法で自分たちの生活について伝えるようにする。 ⑦「自分たちの友達マップ」を作り他地域の暮らしについてまとめる。			
学年目標	身近なまちにおける暮らしを維持したり、豊かにしたり、高めたりする人々の営みや、現代までにおける人々の生活やまちの変化の様子について、実際に体験したり、行動的に探究したり諸活動に参加したりすることを通して、自分との関わりで問題をとらえ探究し、まちの人々の生活をよりよくしようとする智慧に学び、様々な人々と共に生きるまちの実現に向けて自分なりの行動の仕方やあり方を考え、実践する力を育てる。										
指導	4年テーマ「まちの暮らしを見つめよう」 <子どもたちの意識の流れ> ○パトロールで問題を 探そう。 ○環境にやさしく安全な町にしている人々に 学ぼう。 もっとより良いまちをつくり出す人々に学ぼう。 ○他のまちに学ぼう。										

	4月	5月	6月	7月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月
単元名	ものにあふれた私達のくらし。 (10)		今、日本の食は？ (32)			今、日本の工業製品は？ (27)			今、日本の環境は？ (27)		
単元で育てたい力	<p>◎自分たちの生活を支えている生産物を行動的にまらに出で実際に調べたり、聞き取り調査をしたりすることができる。</p> <p>○私たちの生活を支える生産物について自給や、環境保護等の問題点を見出し追究していくことができる。</p> <p>□自分たちの生活を支える生産物を自分との関わりでとらえ、自分たちの生活をより良くしていくために、自分たちのあり方を考えることができる。</p>		<p>◎自分たちの生活とつなげながら食料生産についてまらに出たり、インタビュー活動をしたりしながら行動的に、調べることができる。</p> <p>◎自分たちの生活と、安全な食料との関わりについて学習したことを元によりよい食生活のあり方について考え実践することができる。</p> <p>○食生活と安全な食料生産の関わりについて問題意識を持ち、まらの人々や生産者に聞き取りながら、追究することができる</p> <p>□食料生産や流通に取り組む人々は、安全で質のよい食料を消費者に届けるために、様々な工夫や努力をしていることを理解することができる。</p>			<p>◎自分たちの生活を支える工業生産と環境との関わりについて学習したことを元に、資源の保護について考え、自分なりに実践することができる。</p> <p>○工業生産と環境との関わりについて問題意識を持ち、環境保護を志向した工業生産のよりよいあり方を追究することができる。</p> <p>□工業生産と自分たちの生活との関わりについて調べ、環境保護を考慮した工業生産のあり方について理解することができる。</p>			<p>◎森林ボランティアについて調べたことを元にして、日本の環境保護について考え、自分たちでできることを実践することができる。</p> <p>○森林資源を守るための人々の働きについて問題意識を持って調べ、その意味と自分たちの暮らしとの関わりについて考えることができる。</p> <p>□森林を守るために様々な人々学風や努力を重ねていることを理解し、自分たちのあり方について考えることができる</p>		
単元例	<p>①自分たちの生活にあふれるものについて話し合い、その実態について調べる計画を立てる。</p> <p>②まらで生産される物はどこからどのように来るのか、という視点でまらに調べ活動にでかけ、もの過剰供給や自給などの問題点や、環境に対する問題点を見出すことができる</p> <p>③問題点を元にして、自分たちがより詳しく調べていく方向を考える。</p> <p>④1年間の学習計画を立てる。</p>		<p>①食料の安全性や環境に対する配慮等の視点から、まらで調べ活動に取り組む。</p> <p>②実際に稲や野菜を栽培することを通して、自分たちと生産現場を身近に引き寄せ、調べ活動に取り組む。</p> <p>③生産者と交流をしていく中で今の日本の抱える生産現場の問題点に気付くことができる。</p> <p>④現在の食料生産が抱える問題点と、人々の努力についてまとめる。</p>			<p>①紙と私たちの生活という視点から、様々な調べ活動を実際にまらでしていくことを通して、洋紙や和紙という種類があること、消費量も生産量も騰登りに増え続けていることに気づく。</p> <p>②紙と自分たちの暮らしについて考え、自分たちでリサイクルに取り組んだり、実際に紙を減らす活動に取り組んだりしながら、問題点を焦点化していく。</p> <p>③紙をリサイクルし、生産している会社実際に取材しながら、人々の工夫や、リサイクルに取り組む人々の意気込みについて気づく。</p> <p>④自分たちでできる紙すきなどの活動を通して、リサイクルの大切さに気づき自分たちの生活に実際に生かすことができる。</p> <p>⑤和紙の紙漉きに挑戦し、人々のくらしと和紙とのつながりについてとらえる。</p> <p>⑥和紙の生産を続けている人々に取材し、生産に取り組む人々の工夫や努力についてとらえる。</p> <p>⑦これからの自分たちの生活と紙の生産について考え、自分なりの方法で紙の節約等の活動に取り組む。</p>			<p>①今までの産業を通した学習から、環境との関わりについて考え、学習の視点をもつ。</p> <p>②紙の生産や、森林の伐採がもたらす自然破壊について考え話し合う。</p> <p>③森林と自分たちの生活との関わりについて調べ、話し合う</p> <p>④森林資源の保護に取り組むボランティアの人々の取り組みについて調べる。</p> <p>⑤森林ボランティアに参加し人々の願いを知る。</p>		
学年目標等	<p>我が国の国民生活を支える産業の様子や国土の様子について、身近なまらにおける人々の営みを具体的に調べたり、実際に活動に参加したり、行動的に探究したりすることを通して、自分との関わりで問題をとらえ探究し、これらの産業が、環境保護に配慮し、よりよい国際関係の上に成り立ちながら、自分たちの生活を支えていることに学び、様々な人々と共に生きる社会の実現のために自分なりの行動の仕方やあり方を考え、実践する力を育てる。</p> <p>5年テーマ「環境と産業のよりよい関わりを求めて」</p> <p><子どもたちの意識の流れ></p> <p>○「物」はどこから来るのか探ろう。 ○人にも環境にも優しい食べ物を探ろう。 ○環境に優しい工業のあり方を探ろう。 ○人と環境の温かい関わりを求めて</p>										

	4月	5月	6月	7月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	
単元名	研究しよう。みんなにとってやさしいまちは？ (33)				人々の願いと歴史 (48) ・戦争と横浜 ・開港と横浜 ・吉田新田 ・鎌倉みち ・緑が丘貝塚				世界の友だちと手をつなごう (15)			
単元で育てたい力	<p>◎様々な立場の人々にとって自分たちの住む町は優しいと言えるのが調べたことを元に、ボランティア活動に自分なりに取り組むことができる。</p> <p>○自分たちのまちは様々な人々にとって優しいのかという問題意識をもって追究活動に取り組み、人々にインタビューしたり、観察活動をしりながら、行動的に取り組むことができる。</p> <p>□様々な人々が安心してまちで暮らすことができるように、人々の願いを市や国に生かすための様々な方法があることを理解することができる。</p> <p>□基本的人権の尊重の考えを元にして、様々な人々が共に生きていくための政策を行っていることを理解することができる。</p> <p>・年間を通してボランティア活動に取り組む</p>				<p>◎まちのお年寄りに聞き取り調査をしたり、模擬活動や観察活動をしりして、身近に歴史を調べ自分たちのあり方について考えることができる</p> <p>○地域素材を中心として歴史事象について問題意識を持って追究することができる。</p> <p>□昔から人々は、様々な工夫と努力をしながら自らの生活をよりよくしてきたことに気づくことができる。</p> <p>・戦争時代の人々の生活と人権</p> <p>・開港と日本の暮らしの変化</p> <p>・吉田新田開発と江戸時代の米を中心とした人々の暮らし</p> <p>・鎌倉道と武士の生活</p> <p>・緑が丘貝塚と大昔の人々の暮らし</p>				<p>◎様々な国の子ども達と仲良くすることを通して、国や地域によって多様な考え方があること、人々が仲良くするためにはそれらの違いを乗り越えていく必要があることに気づき、交流することができる。</p> <p>◎世界にはまだ戦乱や貧困などによって、悲惨な状況に置かれている子ども達がいることを知り、それらの国々には日本からもたくさんの人々がボランティアとして派遣されていることについて調べ自分たちのできることについて考えることができる。</p> <p>○世界の子どもたちと交流するに当たっての問題点についてとらえ、多面的に追究する事ができる。</p> <p>□各国には日本の自分たちの暮らしと違いがあることに気づくことができる。</p>			
単元例	<p>①私たちのまちは「全ての人にとって優しいまちか」という視点で、実際にまちに出て調べ活動をしていくことを通して、まちには様々な立場の人々が生活していることに気づく。</p> <p>②「全ての人にとって優しいまち」になるためには、施設面での一層の充実が必要であることに気づく。</p> <p>③施設面で足りない部分を補うだけでなく、自分たち自身も優しさをもって生活すること、そしてボランティア活動などの実際の行動に出ていくことの大切さを感じ取ることができる。</p>				<p>①地域の昔探しを通して、まちが歴史と結びついていること、人々の生活の習性が、今でも息づいていることに気付くことができる。</p> <p>②まちのお年寄りに聞き取り調査などをしたりすることを通して戦争の頃における人々の生活の様子などを実感的に理解しようとする事ができる。</p> <p>③開港の頃の横浜の町の様子について調べ、開港が人々に与えた影響や、そのことによる日本の発展に気づくことができる。</p> <p>④吉田新田の開発の経緯と意味について調べ、米を中心とした経済の様子や人々の暮らしについてとらえることができる。</p> <p>⑤鎌倉を中心とした道路網の様子について調べ、その意味について探り、ご恩と奉公を基本としたその頃の武士の考え方に気づくことができる。</p> <p>⑥緑が丘の貝塚を中心にして、大昔の人々の暮らしについて調べ、狩猟を中心とした暮らしや米の栽培による生活の変化についてとらえることができる。</p>				<p>①横浜にある様々な外国の人々が通う学校と実際に交流活動をしていくことを通して人々の生活の違いや考え方の違いが分かる</p> <p>②違いを乗り越えていくために自分自身の行動の仕方を考えていくことができる。</p> <p>③世界で見られる悲惨な状況に対処するためにはたらく人々の存在を知り、じぶんたちにできることに取り組む。</p>			
学年目標	<p>地域の具体的な事例や様々な人々との交流を通して、「基本的人権の尊重」という憲法の基本理念や、どの時代にも様々な人々が生活をよりよくするために努力を重ねてきたことこれからのよりよい国際社会を目指して、正しい国際理解が大切であることを、具体的に調べたり、実際に活動に参加したり、行動的に探究したりすることを通して自分との関わりで問題をとらえ探究し、様々な人々の人権を尊重するための地方自治を初めとする政治の働きや、様々な人々と共に生きる社会の実現のため尽くすボランティア活動に学び、自分なりの行動の仕方やあり方を考え、実践する力を育てる。</p>											
単元テーマ	6年テーマ「共に生き抜く社会を目指して」											
子どもたちの意識の流れ	<p>○全ての人にとって優しいまちは？ ○私たちのボランティアをしよう ○まちの歴史と、人権尊重の今に至るまでの人々の歴史をさぐる。 ○世界の人々と手をつなごう</p>											

2. 福島大学教育学部附属小学校（平成7年度研究）

研究題目 21世紀に生きる心豊かな人間を育成する教育課程の創造
カリキュラムの特色

・新教科「表現科」・「地球科」・「人間科」の創出

研究の概要 全学年に「表現科」、低学年に「生活科」、中・高学年に「地球科」・「人間科」を新設し、特別教育活動の内容を教科教育の中に取り組み、新たな教育課程を構想していく研究

<資料抜粋>

人間科単元一覧表 『報告書54p』

	3年	4年	5年	6年
4月	楽しい学校	楽しい学校	楽しい学校	楽しい学校
5月	友だちのわを 広げよう ① あくしゅでなかよし ② いつもお世話になっている人たち	わたしたちの くらしを見つめて ① ごみ問題を考える	畑からわたしたちの 食卓に ① ビニルハウスを訪ねて	見つめよう 人間の歩み ① わたしたちのまち再発見
6月	なしを作る人売る人 ① なし作りののみつI	② くらしを守るために	② 買い物の前に	② 奈良の都
7月	友だちのわを 広げよう ③ 友だちのわをせかいへ	③ くらしを豊かにした人々	③ 野菜を用いた料理を作ろう	③ わたしが興味をもった時代
8月	楽しい学校	楽しい学校	楽しい学校	楽しい学校
9月	なしを作る人売る人 ① なし作りののみつII ② スーパーマーケットのみつ	自分でできたよ ① できることはないかな ② 自分たちでやってみよう ③ こんなこともできそうだよ	世界の人と 手をつなごう ① よりよい製品を作る人々 ② 世界の国々となかよく	みんなの願いを 実現するために ① みんなの願いを知ろう ② みんなの願いと改善
10月	楽しい学校	楽しい学校	楽しい学校	楽しい学校
11月	家族といっしょ ① 家族がいいな ② 自分でできたよ	ぼくらのともだち ① 養護学校のともだちといっしょに	高齢者の生きる姿を 見つめて ① 高齢者社会を見つめて ② 老人福祉施設を訪ねて ③ わたしたちができることは	家庭生活に うるおいを ① 家族に必要なものは ② ぼく・わたしができること
12月	昔の人々から学ぼう ① おじいさん・おばあさんといっしょに	② 外国のともだちといっしょに		
1月	楽しい学校	楽しい学校	楽しい学校	楽しい学校
2月	昔の人々から学ぼう ① おじいさん・おばあさんといっしょに	いろいろな土地に生 きる人々 ① 福島のくらし ② 日本のくらし	伝統の中によさを見 つけて ① お正月に楽しかったことは ② 「家族の日」をつくろう!	わたしたち地球家族 ① エセフって、何? ② 世界の国々を見つめて
3月	③ れきしを学んだわたしたち			
月	楽しい学校	楽しい学校	楽しい学校	楽しい学校

学習内容の系統

『報告書50p』

内 容	3 年	4 年	5 年	6 年
家庭生活 ・ 学校生活	<p>簡単な調理を通して、家族の一員として家庭生活を楽しみましょうとする。</p> <p>自分たちの学級を楽しくする活動に進んで参加する</p>	<p>簡単な調理や被服製作などの活動を通して、家族の一員として家庭生活に関わろうとする。</p> <p>自分たちの学級や学年を楽しくする活動に進んで参加する。</p>	<p>調理や被服製作などの活動を通して、よりよい家庭生活の在り方を考える。</p> <p>自分たちの学級や学年、学校を楽しくする活動に進んで参加する。</p>	<p>住まいの働きや意味について調べることを通して、よりよい家庭生活の在り方を考え、関わろうとする。</p> <p>最高学年としての自覚をもち、自分たちの学級や学年、学校を楽しくする活動に進んで参加する。</p>
生 産 ・ 消 費 ・ 環 境	<p>地域の消費生活や生産活動を調べることを通して、人々の努力や協力について考える。</p>	<p>地域の資源や廃棄物の様子について調べることを通して、地域の人々の健康な生活の在り方を考える。</p>	<p>我が国の産業や国土について調べることを通して、環境の保全や資源の重要性について考える。</p>	<p>世界の国々との産業や経済の関わりについて調べることを通して、環境の保全や資源の重要性について考える。</p>
文 化 ・ 伝 統	<p>昔の道具を実際に使ったり、お年寄りと交流したりすることを通して、昔の人々の知恵や努力によって時代が移り変わってきたことに気付く。</p>	<p>地域の発展の様子を見学や調査活動によって調べることを通して、先人の考え方や努力をとらえる。</p>	<p>伝統的な行事の意味や方法について調べることを通して、昔ながらの考え方や習慣が、今の生活にも息づいていることに気付く。</p>	<p>先人の営みや文化遺産について調べることを通して、当時の人々の生きる姿や社会の様子をとらえる。</p>
公 共 ・ 福 祉	<p>お年寄りとの交流を通して、お年寄りの生き方を感じ取る。</p>	<p>障害をもつ子供たちとの交流を通して、障害をもつ人々への理解を深める。</p>	<p>地域の高齢者との交流を通して、高齢者の生きる姿や支える仕組みを追究し、自分なりの考えをもつ。</p>	<p>障害をもつ人々との交流を通して、障害をもつ人々の生きる姿や支える仕組みを追究し、自分なりの考えをもつ。</p>
国際理解	<p>遊びを中心とした交流を通して、外国の人々に関心をもつ。</p>	<p>生活文化を中心とした交流を通して、外国の人々の生活と自分たちの生活との共通点や相違点があることに気付く。</p>	<p>貿易面から我が国と諸外国との関連を調べたり、国際協力機関の活動に従事している人の体験談を聞いたりすることを通して、外国との協力の在り方について考える。</p>	<p>国連の活動の様子を調べたり、国連活動に従事している人の体験談を聞いたりすることを通して、世界の中の一人としての役割について、自分なりの考えをもつ。</p>

出典 福島大学教育学部附属小学校 平成7年度研究開発実施報告書

3. 東京学芸大学教育学部附属大泉小学校（平成8年度研究）

研究題目 豊かな学力の育成—総合学習の創造—

カリキュラムの特色

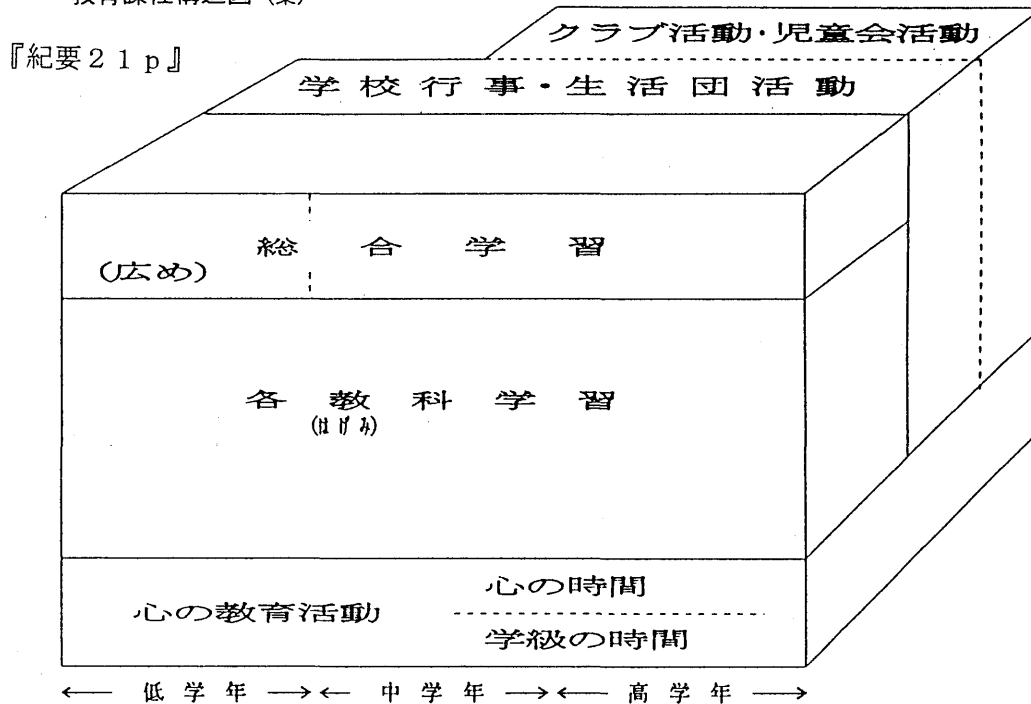
・教科＋総合学習＋心の教育＋集団活動・児童会活動・クラブ活動・学校行事と
いう4領域のカリキュラム構成

・内容知、方法知、自分知の3つの「知」を基にした総合学習の再構成

研究の概要 内容知・方法知・自分知の3つの「知」による学力概念を基に、各教科学習、
総合学習、心の教育活動、特別活動の捉え直しと、再構成を目指す研究

<資料抜粋>

教育課程構造図（案）



授業時間数

		第1学年	第2学年	第3学年	第4学年	第5学年	第6学年
各 教 科 学 習	国語	182	227	227	227	163	163
	社会			70	70	70	70
	算数	153	158	158	158	162	162
	理科			70	70	70	70
	音楽	60	60	60	60	60	60
	図画工作	60	60	60	60	60	60
	家庭科					60	60
体育	68	70	70	70	70	70	
総合学習	136	140	70	70	70	70	
心の教育の時間	34	35	70	70	70	70	
総授業数	693	750	855	855	855	855	

※1 学校行事、クラブ活動、委員会活動の時間数は含まれていない。

※2 国語、算数には朝のはげみ学習（朝自習）の時間を含んでいる。

総合学習 中学年 年間指導計画 『紀要38p～39p』

		第 3 学 年		
学期	月	単元名	時数	単元のねらい
一 学 期	4	タンポポって なに草？ 【環境+人間】	14	<p>解 〇身のまわりにはさまざまな野草があり、それぞれが生活環境をもっている。</p> <p>〇野草は雑草という呼び方は、人間の都合でつけたものである。</p> <p>注 〇タンポポと自分との関わりを探るために、遊んだり、食べたりすることを通して親しみ、自らタンポポに働きかける。</p> <p>〇タンポポへの見方を広げるために、友達と共に活動したり、自分なりの表現で伝えたりする。</p> <p>別 〇タンポポを含めた野草を命あるものとして受けとめ、自分の考えをもって関わっていこうとする。</p>
	5			
	6	みんなで作ろう カレーライス (学級の人間関係をつくる) 【人間】	7	<p>解 〇私たちの身の回りには、いろいろな人が生活し、関わりをもっている。</p> <p>注 〇欲しい材料を手に入れるために、情報を集める。</p> <p>〇問題解決の糸口をつかもうとするために、友達と共に活動する。</p> <p>別 〇自分一人ではできないことも、友達と協力すると、できることに気づく。</p>
二 学 期	7	大泉フリース タイム学習 【環境+人間】	20	<p>解 〇学校のまわりには、この地域ならではの自然や歴史などがあることに気づく。</p> <p>注 〇調べたいことをはっきりさせるために、身近なものの中から、興味を持った素材を見つけ、関わる。</p> <p>〇自分なりの追究をするために、自分に合った調べ方を見つけたり、必要な本や資料を探したりする。</p> <p>別 〇自分は何が知りたいのか、はっきりさせようとする。</p> <p>〇身の回りのことで、自分が興味を持ったことについて、自分から進んで調べていこうとする。</p>
	9			
	10			
	11			
	12			
三 学 期	1	どうやって 伝えようか 【人間】	11	<p>解 〇コミュニケーションする方法はさまざまなものがある。</p> <p>〇コミュニケーションは、その状況や目的・対象などによって違ったり、意識しないでも伝わったりするものがある。</p> <p>注 〇コミュニケーションするために、その障害となるものをいろいろな視点から考える。</p> <p>〇相手とコミュニケーションするために、相手の気持ちやその目的・方法などを考える。</p> <p>別 〇自分は、いつも友達に何かを伝えようとしていることに気づく。</p> <p>〇自分のことを相手に正確に伝えたい。</p>
	2			
	3	高浦フリース タイム学習 (活動は第4学年へ継続する)	5 (25)	<p>内 〇高浦の自然、歴史、産業、伝統、風土等の素晴らしさや巧みに気づく。</p> <p>方 〇自分のテーマをはっきりさせるために、様々な素材に触れる中から、興味を持った素材を見つけ、関わる。</p> <p>〇自分なりの追究をするために、自分に合った調べ方を見つけたり、必要な本や資料を探したりする。</p> <p>〇自分の追究の足りを聞き手にわかってもらうために、工夫して発表する。</p> <p>別 〇自分は何が知りたいのか、はっきりさせようとする。</p> <p>〇身の回りのことで、自分が興味を持ったことについて、深く詳しく調べていこうとする。</p>

		第 4 学 年		
学期	月	単元名	時数	単元のねらい
一 学 期	4	高浦フリース タイム学習 (活動は第3学年からの継続)	20 (25)	<p>内 〇高浦の自然、歴史、産業、伝統、風土等の素晴らしさや巧みに気づく。</p> <p>方 〇調べたいことをはっきりさせるために、様々な素材に触れる中から興味を持った素材を見つけ、関わる。</p> <p>〇自分なりの追究をするために、試行錯誤しながら自分に合った調べ方を見つけたり、必要な本や資料を探したりする。</p> <p>〇自分の追究の足りを聞き手にわかってもらうために、工夫して発表する。</p> <p>別 〇自分は何が知りたいのか、はっきりさせようとする。</p> <p>〇身の回りのことで、自分が興味を持ったことについて、深く詳しく調べていこうとする。</p>
	5	学校に トンポを呼ぼう 【環境+人間】	12	<p>解 〇プールや池の中には、さまざまな生き物が生きている。</p> <p>〇ヤゴ(トンポの幼虫)は、水の中の環境と深く関わりをもっている。</p> <p>注 〇トンポは自分のくらしにあった環境を求めてやってくる。</p> <p>〇自分と環境との関わりについて考えるために、トンポの視点から環境を見つめる。</p> <p>〇トンポの生きる環境を考えるために、身の回りの環境に自分から働きかける。</p> <p>別 〇自分なりの考えをもって、生き物に関わっていこうとする。</p> <p>〇身のまわりの自然には、さまざまな生き物が命を育むための優れた仕組みがあることに気づく。</p>
	6	おもちゃって 何だろう 【人間】	14	<p>解 〇みんなが遊んでいるおもちゃにはいろいろな特徴や違いがある。</p> <p>〇みんなのおもちゃには一人一人の思いや願いがある。</p> <p>〇あまり遊んだ事のないおもちゃにもそれぞれのよさがある。</p> <p>注 〇おもちゃのよさを追究するために、おもちゃの選び方(流行、新旧、自分の成長)に目を向ける。</p> <p>〇自分のおもちゃに対する考えを深めたり広げたりするために、自分と違うおもちゃを選んだ友達と交流する。</p> <p>別 〇ふだん、何気なく遊んでいた自分のおもちゃには、いろいろなよさがあることに気づく。</p> <p>〇いろいろなおもちゃに浸ったり、それを使って遊んだりすることを通して、自分が成長していたことに気づく。</p>
二 学 期	7	みんなの名前 (学級の問題への取り組み) 【人間】	8	<p>解 〇名前には家族の思いや願いがあることに気づく。</p> <p>〇友達にもみんな家族があり、一人一人が大切な存在であることに気づく。</p> <p>注 〇よりよい人間関係を築くために、相手の気持ちや立場をよく考えたり、確かに自分を伝えたり、自分を振り返りたりする。</p> <p>別 〇人権を大切に。よりよい人間関係を築いていこうとする。</p> <p>〇自分の生き方について見つめ直そうとする。</p>
	8	今、わたしたち にできること 【国際+人間】	11	<p>解 〇私たちの身の回りには、さまざまな人々が関わりながら共に生きている。</p> <p>注 〇「してあげる」「やってあげる」の考えから、「なすことによって学ぶ」の考え方で接する。</p> <p>〇自分にできることを見つけるために、さまざまなコミュニケーションを通して相手の気持ちや立場を考える。</p> <p>別 〇身の回りに生きる人々は誰でも、よりよくなるの願いをもって共に生活している。</p>
	9	箱根フリース タイム学習 (活動は第5学年へ継続する)	5 (20)	<p>内 〇箱根の自然、歴史、産業、伝統、風土等の素晴らしさや巧みに気づく。</p> <p>方 〇自分のテーマをはっきりさせるために、様々な素材に触れる中から、興味を持った素材を見つけ、関わる。</p> <p>〇自分なりの追究をするために、自分に合った調べ方を見つけたり、必要な本や資料を探したりする。</p> <p>〇自分の追究の足りを聞き手にわかってもらうために、工夫して発表する。</p> <p>〇自分の追究方法や発見方法を深めるために、互いの追究や発見からよさを見い出す。</p> <p>別 〇自分がかかわっている輪や考え方に気づき、それらに貢献することについて、意に重んじられることとする。</p> <p>〇各教科・領域で学んだことやこれまでの自分の経験を生かし、物事に詳しく関わりながら学習を深めていこうとする。</p>

総合学習単元一覧
 < 5年生の総合学習単元一覧表 >

『紀要46p～47p』

単元名	単元のねらい
「箱根フリータイム学習」 ※自分の興味・関心ある対象に児童自ら働きかける活動を通してテーマを設定し、見直しを持って追究し続ける学習。 ★4年生3学期からの継続	内容知：箱根の自然、歴史、産業、伝統、風土等のすばらしさや巧みに気づく。 方法知：自分のテーマをはっきりさせるために、様々な素材に触れる中から、興味や疑問が持てる素材を見つけ、関わる。 : 自分なりの追究をするために、自分に合った調べ方を見つけたり、見直しを持って必要な物の準備や資料情報の収集を行う。 : 自分の追究の足どりを聞き手にわかってもらうために、工夫して発表する。 : 自分の追究方法や発表方法を高めるために、友達の見直しや発表からのよさを見いだす。 自分知：自分のこだわっている物や考え方に気づき、それらに関連することについて、常に関心を持つとする。 : 各教科、領域で学んだことやこれまでの自分の経験を生かし、物事に対し進んで学習を深めていこうとする。
「びん、缶、ペットボトル君ならどれを選ぶ？」 ※物は巡り巡って、そのサイクルからはみ出た物は自然にも有害になるという「物の循環の視点」を意識した学習。	内容知：社会にはリサイクルの仕組みがあり、その仕組みにうまくのっている物とそうでない物があることがわかる。 方法知：自分が選択するために、情報に関係機関へ問い合わせなどして集め、情報を比較しながら多くの視点から判断していく。 自分知：リサイクルの視点で自分の生活を振り返ったり、リサイクルの仕組みに自ら関わったりして生活をしていく。
「アッチャー 手で食べよう」 ※本国文化と異文化の間に共通性・普遍性、独自性を見だし、相手を受け入れて共に生きていこうとする「共生の視点」を意識した学習。	内容知：外国の食事の習慣と日本の食事の習慣との違いや類似点を探り、各国の食文化を知る。 方法知：その国の文化（生活習慣やその背景）を知るために、日本の文化と比較したり、その国の人を通して文化を探っていく。 自分知：違いの意味を捉え、本国文化、異文化のよさを見つめ、共に認め合おうとする。
「自分らしさとは」 ※自分をとりまく文化などについて考えることを通し、自分らしさや自分のよさを見つめ、自分の生き方を探っていく「人間関係の視点」を意識した学習。	内容知：人には様々な長所、短所があり、価値観も多様であることがわかる。 方法知：自分のあり方を探すために、身の回りの文化、価値観を整理、比較しながら自分について考えていく。 自分知：お互いのよさに目を向けながら、自分らしさや自分のやりたいことを大切にしていこうとする。
「自分にとっての土とは」 ※自然と人間の関わり方やバランスを考えていくという「自然と人間の共存の視点」を意識した学習	内容知：自然や生活の中で土は重要な役割していること、自然を取り戻すには時間がかかることがわかる。 方法知：自然をよく知るには、様々な立場から対象を見たり、関連づけて考えたり、直接関わっていくとよいことがわかる。 自分知：自然のすばらしさを感じ、豊かな環境にしていこうとする。
「日光フリータイム学習」 ※自分の興味・関心ある対象に児童自ら働きかける活動を通してテーマを設定し、見直しを持って追究し続ける学習。 ★6年1学期まで継続	内容知：日光の自然、歴史、産業、伝統、風土等のすばらしさや巧みに気づく。 方法知：自分のテーマを深めたり、絞ったりするために、これまでのフリータイムとの関連を考えながら、興味や疑問が持てる素材を見つけ、関わる。 : 自分なりの追究をするために、自分に合った調べ方を見つけたり、見直しを持って必要な物の準備や資料情報の収集を行う。 : 自分の追究の足どりを誰にでもわかってもらうために、聞き手に応じて工夫をして発表する。 : 自分の追究方法や発表方法を高めるために、友達の見直しや発表からのよさを見いだす。 自分知：自分のこだわっている物や考え方に気づき、それらに関連することについて、常に関心を持つとする。 : 各教科、領域で学んだことやこれまでの自分の経験を生かし、物事に対し進んで学習を深めていこうとする。

< 6年生総合学習単元一覧表 >

単元名	単元のねらい
「日光フリータイム」 ★5年3学期より継続する	★5年生の単元に同じ
「わたしと環境」 ※自然と人間の関わり方やバランスを考えていくという「自然と人間の共存の視点」を意識した学習。	内容知：生き物を通して、自然の営みを人間との関わりでとらえる。 方法知：自然と人間の関係をとらえるために、立場を入れ替えたり、実体験を根拠にして考えていく。 自分知：共存の視点を通して環境に対する望ましい関わり方や人間の生き方を考えていく。
「英雄像を考える」 ※自分の夢やあこがれを考えることを通し、自分らしさや自分のよさを見つめながら、自分の生き方を探っていく「人間・人間関係」の視点を意識した学習。	内容知：英雄とは自己変革の中で夢をつかみ、自分の生を精一杯生きた人物であり、人によって英雄は様々であることがわかる。 方法知：英雄の英雄らしさをはっきりさせるために、情報を集めたり、自分自身と英雄との生き方を比べて考えていく。 自分知：自分や友達、英雄の中に共通点を見だし、自分も高まっていこうという気持ちになる。
「外国の友達と交流しよう」 ※本国文化と異文化の間に共通性・普遍性、独自性を見だし、相手を受け入れて共に生きていこうとする「共生の視点」を意識した学習。	内容知：その国の人々の歴史や文化とその特色、日本とその国との交流の様子がわかる。 方法知：その国の子どもたちや在日外国人の方との交流を通して、確かな理解の上に立ったコミュニケーションの大切さに気づく。 自分知：その国のよさや日本との共通性に目を向け、両国の友好や交流を進めていける自分に気づく。
「卒業に向けて ～オペレッタで伝えよう～」 ※一人ひとりの個性を生かしながら、学級の絆を越え、自分たちの夢や願いを実現していこうとする学習。 ★音楽の時間との関連	内容知：自分と友だちとの願いや考えには違いや共通点があること、それぞれが様々な持ち味を持っていることがわかる。 方法知：自分たちの思いを伝えていくために、自分にあった表現方法を選択し、友だちと協力しながら自分の役割を果たしていく。 自分知：持ち味を発揮できた自分や友だちのよさに気づきながら、一つのことに向かって力を合わせて創り出していくことのすばらしさを感じ取っていく。
「静岡フリータイム学習」 ※自分の興味・関心ある対象に児童自ら働きかける活動を通してテーマを設定し、見直しを持って追究し続ける学習。 ★6年1学期まで継続	内容知：静岡の自然、歴史、産業、伝統、風土等のすばらしさや巧みに気づく。 方法知：自分のテーマを深めたり、絞ったりするために、これまでのフリータイムとの関連を考えながら、興味や疑問が持てる素材を見つけ、関わる。 : 自分なりの追究をするために、自分に合った調べ方を見つけたり、見直しを持って必要な物の準備や資料情報の収集を行う。 自分知：自分のこだわっている物や考え方に気づき、それらに関連することについて、常に関心を持つとする。 : 各教科、領域で学んだことやこれまでの自分の経験を生かし、物事に対し進んで学習を深めていこうとする。

(※は単元の学習のイメージを表している。)

出典 東京学芸大学教育学部附属大泉小学校 平成8年度研究紀要

4. 上越教育大学学校教育学部附属小学校 (平成8年度研究)

研究題目 豊かな学力の育成—総合学習の創造—
カリキュラムの特色

- ・発達特性に即した教育課程の段階的編成
- ・教科活動+総合教科活動+心の活動+集団活動

研究概要 1年生は教科+総合単元、2・3年生は教科+総合単元+集団、4・5・6年生は教科+総合教科+心の活動+集団活動という子どもの発達特性に合わせた教育課程編成を行う研究

<資料抜粋>

『カリキュラム表1 O P』

月	4	80	8	97	110	788.5(375.5)	9	101.5	1011.5	11	99	1	285.5(397.5)	1	78	2	98	3	71(247)	
3年1組年間カリキュラム	年間総時数1043=1020+23																			
175	かけ算にしようせん 7	かけ算のひっ算 8	かけ算のひっ算 8	かけ算のひっ算 8	かけ算のひっ算 8	かけ算のひっ算 8	かけ算のひっ算 8	かけ算のひっ算 8	かけ算のひっ算 8	かけ算のひっ算 8	かけ算のひっ算 8	かけ算のひっ算 8	かけ算のひっ算 8	かけ算のひっ算 8	かけ算のひっ算 8	かけ算のひっ算 8	かけ算のひっ算 8	かけ算のひっ算 8	かけ算のひっ算 8	
35	私の体 10	石と土 6	空気と水 10	日なたと日かげ 8	光を当てよう 8	音を出そう 8	音を出そう 8	音を出そう 8	音を出そう 8	音を出そう 8	音を出そう 8	音を出そう 8	音を出そう 8	音を出そう 8	音を出そう 8	音を出そう 8	音を出そう 8	音を出そう 8	音を出そう 8	
70	私の体 10	石と土 6	空気と水 10	日なたと日かげ 8	光を当てよう 8	音を出そう 8	音を出そう 8	音を出そう 8	音を出そう 8	音を出そう 8	音を出そう 8	音を出そう 8	音を出そう 8	音を出そう 8	音を出そう 8	音を出そう 8	音を出そう 8	音を出そう 8	音を出そう 8	
355	トライ トライ	<p>牧場・農場でトライ トライ・・・牧場や農場での飼育観察をしながら、動物や植物、自然とコミュニケーションし続ける ○羊・アヒルの世話(観察・記録・話し) ○別れ ○畑作り・種まき・苗植え(観察・記録・話し) ○収穫</p> <p>散歩でトライ トライ・・・本町商店街を散歩しながら、自然や人とコミュニケーションし続ける ○東田公園・市・本町商店街を歩き回り寄り道し散歩する。散歩しながら見つけたことを記録したり、やってみることをやってみたりする。 ○市や本町商店街で買い物をする。その時、市の人や商店街の人と会話する。</p> <p>上越教育トライ トライ・・・上越の特色ある地域を散策したり、季節ごとの楽しみを味わったりしながら、自然や人やものコミュニケーションし続ける ○東田公園で花見 ○ちまき作り ○湯水浴 ○川遊び ○川遊び散策 ○春日山散策 ○丸の内散策 ○春日山散策 ○春日山散策</p> <p>100歳博覧会・・・自分がトライしてきたことの中で、感じたことを整理して定期的に準備にまとめていく。その中で、少しずつ自分らしい感じ方が深まっていくことを期待している。</p>																		
210	ことばの世界 210	自己紹介 5	インタビュー 5	詩を詠もう 3	詩を詠もう 3	詩を詠もう 3	詩を詠もう 3	詩を詠もう 3	詩を詠もう 3	詩を詠もう 3	詩を詠もう 3	詩を詠もう 3	詩を詠もう 3	詩を詠もう 3	詩を詠もう 3	詩を詠もう 3	詩を詠もう 3	詩を詠もう 3	詩を詠もう 3	
210	ことばの世界 210	自己紹介 5	インタビュー 5	詩を詠もう 3	詩を詠もう 3	詩を詠もう 3	詩を詠もう 3	詩を詠もう 3	詩を詠もう 3	詩を詠もう 3	詩を詠もう 3	詩を詠もう 3	詩を詠もう 3	詩を詠もう 3	詩を詠もう 3	詩を詠もう 3	詩を詠もう 3	詩を詠もう 3	詩を詠もう 3	
70	明るい声で歌おう 6	挑戦！音楽音楽 6	呼びかけ合って楽しもう 8	チャレンジャー名人 4	ポプラ音楽会で発表しよう 12	音楽に愛情を付けよう 5	音楽に愛情を付けよう 5	音楽に愛情を付けよう 5	音楽に愛情を付けよう 5	音楽に愛情を付けよう 5	音楽に愛情を付けよう 5	音楽に愛情を付けよう 5	音楽に愛情を付けよう 5	音楽に愛情を付けよう 5	音楽に愛情を付けよう 5	音楽に愛情を付けよう 5	音楽に愛情を付けよう 5	音楽に愛情を付けよう 5	音楽に愛情を付けよう 5	
105	10秒間走 9	体の動きで新そう 7	「まち」やぶりサッカー 12	フットボール名人 12	フットボール名人 12	フットボール名人 12	フットボール名人 12	フットボール名人 12	フットボール名人 12	フットボール名人 12	フットボール名人 12	フットボール名人 12	フットボール名人 12	フットボール名人 12	フットボール名人 12	フットボール名人 12	フットボール名人 12	フットボール名人 12	フットボール名人 12	

4年1組 年間カリキュラム

年間総時数 1082 = 1023.5 + クラブ 35 + 学校行事 23.5

月	4	81	5	97	6	109.5	7	(377) 89.5	9	101.5	10	111.5	11	100	12	(399.5) 86.5	1	78	2	98	3	(247) 71	
算数	線の間接比を比べよう、角 10																						
理科	いろいろな四角形を作り出そう 8																						
社会	大きな大きな数を大まかに表そう 18																						
総合	算数のいかに大きな数のかげ算・わり算 - 19																						
総合	記号を用いた式と計算の工夫 10																						
総合	教室や学校の広さを比べよう 10																						
総合	小量の仕組みと計算の仕方を見付けよう 23																						
総合	生活の特徴を調べよう 5																						
総合	分数の仕組と計算の仕方を調べよう 15																						
総合	変化をグラフで表そう 6																						
総合	発見、いろいろな展開 10																						
総合	変化をグラフで見よう 13																						
総合	そろばんを使って 5																						
総合	算数アイディアブックを作ろう 7																						
理科	春の生き物を調べよう (9)																						
理科	電球や光の働きを調べよう 11																						
理科	生き物と人の活動を比べよう 10																						
理科	夏の生き物を調べよう (6)																						
理科	流れる水の働きを調べよう (15)																						
理科	秋の生き物を調べよう (6)																						
理科	水のすかたとゆくえ 12																						
理科	ものの重さとてんびん 9																						
理科	冬の生き物を調べよう (7)																						
理科	物のあたため方と体積 12																						
理科	生き物の1日をふりかえって 8																						
社会	くらしを支える水 (11)																						
社会	新潟県おすめガイドブックを作ろう 15																						
社会	くらしを支える水 (13)																						
社会	関川水源の開発に努めた人々 (20)																						
社会	安全なくらし 18																						
社会	さまざまな土地のくらしを調査しよう 28																						
総合	今の関川と人の姿を追う 99 (99=26+理15+社21+国15+図22)																						
総合	今の関川と人の姿を考える (101=26+理21+社23+国15+図16)																						
総合	昔の関川と人の姿を追う																						
総合	未来の関川を考える 27 (27=20+理7)																						
総合	<ul style="list-style-type: none"> 各流域で、特徴的なことを調べる。関川中流～下流(高田～直江津) 関川中流(新井) 上流域(妙高) 現地ではわからなかったことを資料で調べたり施設に問い合わせたりする。 見たこと、感じたことなどをもとに自分のとらえた川の様子を文章で書きためる。絵に表す。 川と仲良くなる活動を行う。各流域での親しみ活動を試みる。 																						
総合	<ul style="list-style-type: none"> 各流域を調べる。 これまで調べてきたことをもとに現在の関川の姿を整理する。(ホームページ、ガイドブックづくりなど) 秋の親しみ活動 																						
総合	<ul style="list-style-type: none"> 昔の関川と人について調べたいことを整理する。 水害の歴史、災害復旧工事など水を治める人の歩みを調べる。 発電や農業用水など水を利用する人の歩みを調べる。 必要な施設の見学を行う。 初冬の親しみ活動 																						
総合	<ul style="list-style-type: none"> 他地域の川情報を収集・整理し、関川を見つめ直す。 建設省、土木事務所の計画を調べる。 関川と人間のかかわり方について自分の意見をまとめる(提案書づくり、ポスターづくり、ホームページづくり・・・文章表現・造形表現の両面で) 冬の親しみ活動 																						
総合	<ul style="list-style-type: none"> <組立を考えて書こう(9)> <メモをとりながら(6)> <内容をまとめて(6)> <施設を立てて書こう(9)> 																						
国語	音読で気持ちを伝えよう 12																						
国語	文章を正確に読もう 15																						
国語	紹介し合おうすきな主人公 14																						
国語	もの名前を調べよう 12																						
国語	読みの世界を広げよう 12																						
国語	著者の考えを読みとろう 15																						
国語	読みの世界を広げよう 13																						
国語	段落と段落に注意して 12																						
国語	情景をうかべて 10																						
国語	生き方を学ぶ (16)																						
国語	段落と段落に注意して 12																						
国語	読みの世界を広げよう 12																						
国語	方言調べ 10																						
国語	<ul style="list-style-type: none"> <国語辞典の使い方 8> <言葉を伝えよう(7)> <読書のほど 5> <書き 13> <ローマ字カルタを作ろう 10> <言葉で伝えよう(11)> <読書のほど 5> <書き 14> <読書のほど 4> <書き 8> 																						
心の活動	<ul style="list-style-type: none"> こんな自分見つけた 一生い立ちの記 - 22 生い立ちの記のレイアウトを決める (20=13+国7) 家族などに取材したことを書き込んでいく 「生い立ちの記」を作る活動を通して、様々な自分の姿に気付いていく。感想を交換し合う。 																						
心の活動	<ul style="list-style-type: none"> こんな自分見つけた 一〇〇な自分 - 38 友達から自分についての情報をもらおう (38=17+国13+図8) これまでの生活の中から、自分の性格や行動で特徴的なものを書き出す。 自分の夢を文や絵に表す。 																						
心の活動	<ul style="list-style-type: none"> こんな自分見つけた 一生い立ちの記 - 14 生き方を学ぶ (国14) 伝記や物語に出る人物と自分を対比する。 10歳のぼく・わたしについてまとめる。 20歳の自分に手紙を書く。 																						
図工	異次元への旅 4																						
図工	わたしの伝えたい関川 (12)																						
図工	うかべて遊ぼう (10)																						
図工	材料は生きている 8																						
図工	これが私 これも私 (8)																						
図工	かがやく世界 8																						
図工	こんなことしたよ 関川四十景 - 版で表そう (10)																						
図工	空想を広げて 未来の関川 (6)																						
図工	思いを伝えよう 4																						
音楽	ひびきをつけて歌おう 6																						
音楽	器を比べて歌おう 8																						
音楽	ぼくは音楽へインター 6																						
音楽	アンサンブルのフイル 6																						
音楽	オーケストラ曲を作ろう 4																						
音楽	ポップ音楽会で発表しよう 12																						
音楽	ぼくは作曲家 7																						
音楽	感じの違いを探ろう 6																						
音楽	拍子の違いを探ろう 6																						
音楽	メロディにあったリズムの探検 5																						
音楽	打楽器アンサンブルを作ろう 4																						
体育	動きでお話をつくろう 6																						
体育	ツーフイドゴールサッカー 9																						
体育	〇秒間、短距離・リレー 9																						
体育	できる技をしよう、マット運動 6																						
体育	記録への私の挑戦 水泳 9																						
体育	リズムよく走ろう障害走 6																						
体育	ぼくらのハンドボール 6																						
体育	できる技をしよう 飛び箱運動 6																						
体育	タンホー ル幅跳び高・飛び 6																						
体育	調子を合わせ て走ろう 持久走 6																						
体育	ハラン ス技をしよう 6																						
体育	できる技をしよう 縄跳び 6																						
体育	できる技をしよう スキー 9																						
体育	円形ゴール ポートボール 9																						
体育	できる技をしよう 鉄棒運動 6																						
算数	新学期 スタート 3																						
算数	新学期 スタート 2																						
算数	新学期 スタート 2																						
算数	さよなら一組 お楽しみ会 4.5																						

5年1組 年間カリキュラム

年間総時数1081時間=1023+クラブ35+学校行事23

月	4 81	5 97	6 111	7 88.5(377.5)	8 101.5	9 111.5	10 100	11 100	1286.5(399.5)	1 78	2 97	3 71(246)
算数 175	整数と小数の関係11	入れ物の大きさをはかろう13	小数のかけ算・わり算22	発見、図形の性質 12	比べてみよう18	面積調べ21	分数のたし算・ひき算28	文字の力6	多角形のひみつ16	割合のまじり方13	数の関係7	1年間のまとめ8
理科 93+(12)	気温と天気の変化11	植物の発芽と成長15	魚のたまごの成長 12	自由研究 8	花粉のはたらき8	動物と人の誕生10	太陽と月の動き8	ものとはかた13	てこのはたらき12 いろいろなエネルギー	おもりのはたらき12		
社会 55+(50)	環境問題ってなあに? 15 ・身近にある環境問題		工業生産をささえる人々 25 ・工業地域・公害問題と環境問題		変わっていく稲作27 ・自然を生かした農業		変わりゆく水産業15 ・これからの食料生産		くらしを結ぶ仕事10 ・運輸、日本の貿易		くらしと通信13	
総合 152(44+108)	生き続けるために 152(152=44+国34+社50+理12+家12) 市街を歩いたり、関川を歩いたりする活動を通して、身近にある環境問題に気付く。いろいろな環境問題を子供は取り上げて来るが、繰り返し町を歩いたり、インタビュー活動を行ったりするなかで自己課題を設定していく。1、2学期はエネルギー問題やゴミ問題を中心に活動を行う。2学期後半以降は自己課題をもとに活動していく。											
家庭 58+(12)	オリジナルおやつ9	台所から見える私の家族12	生活を楽しく11	住まい方を見直す12				オリジナル野菜料理12	チャレンジミッション8	生活チェック6		
国語 125+(85)	みんなで考えよう(説)24 「一秒が地球をこわす」	伝記を読む12 「サリバン先生との出会い」	物語を読む20 「すずめのおくりもの」 「大漁じいさんとがん」	見学記録 10	説明文を読む18 「色や形とわたしたちの暮らし」 「動物の体」	狂言「清水」7	詩を読む5	作文・短作文 5	読書に親しむ7	読書に親しむ8	宮沢賢治を読む25 「注文の多い料理店」 「よだかの星」ほか	説明文を読む13 「小学生新聞記事」
心の発達 131(35+96)	自分を見つめて 131(106=35+国51+集団35+体10) ◎様々なふれ合い活動や読書、日記、話し合い活動などを通して、他者を思いやる心と自分を見つめ続ける心と育てる。 ・4年の自分を紹介しよう ・素敵な自分を紹介しよう(日記、作文から) ・夏休みの自分を紹介しよう ・素敵な自分を紹介しよう ・伝記を探よう ・伝記から学んだことを紹介しよう ・映画や伝記を使って、偉人の生き方を調べよう ・心を揺さぶる資料や本を見つけよう ・資料を使って、感想文や意見交換をしよう ・学年の問題や学校内の問題を考えよう ・資料を使って討論会をしよう ・心の活動を振り返ろう ・素敵な自分と素敵な友達 ・これからの自分											
生活活動 (35)	5年1組物語 35(係活動、ゲーム・集会活動、百人一首、学級新聞活動、学級内のトラブル解決のための話し合い活動など)											
体育 95+(10)	大人に近づく身体と心7	挑戦!体操・マット14	記録への挑戦 短距離走13	記録への挑戦 水泳12	記録への挑戦 障害走6	サッカー8	記録への挑戦 マット・鉄棒 12	ディスク6	ストレスを考える3	スキーをしよう9	バスケットボール 15	
図工 70	遊びの絵を描こう10	私たちの学校案内6	私たちの焼き物8	くらしの中から10	アルミ缶の変身/ポプラ祭16	思い出作品集8	コンピュータで作品作り12					
音楽 70 1023	響き合って6	音を探して6	協奏曲8	自分の高さ4	リコーダー4	ポプラ音楽会を開こう14	本のふしを作ろう9	アンサンブル8	昔話に音楽を8	一年の思い出3		

6年1組 年間カリキュラム

年間総時数 1082 = 1023.5 + クラブ35 + 学校行事23.5

月	4 81	5 97	6 111	7 89.5(379.5)	8 101.5	9 111	10 100	11 86.5(400)	12 78	1 97	2 71 (246)			
算数 175	分数をかけたり割ったりしよう 29		発見、対称な図形 16	割合で表わそう 8	比で表わそう 11	大きさを変えて表わそう 14	ともなって変わるきまり 22	立体を作ろう 12	場合の数を調べよう 10	グラフで表わそう 11	単位ブックを作ろう 11	算数のまとめをしよう 31		
図工 48(+22)	ハタハタアレ? 4	スケッチトーク 4	トリックアート 6	森のおくりもの 8	土のおくりもの 6	生まれ変わる材料 4	夢見る旅人 8	写楽 8	ぼくらが伝えたい上越の芸術家 10		造形表現「ゆめ」-6年間の思い出- 12			
家庭科 52(+18)	くらし 発見 -人と食- 22 自分の食生活を見直し、食品を選ぶ視点や利用方法などをとらえながら、よりよいくらし方を探っていく。				くらし 発見-一人の衣- 15 衣類の購入のし方を見直すことから有効な活用方法を探る。		くらし 発見-一人の住- 15 住環境を見直しながら、快適な住まい方の工夫を探る。		くらし 発見 「ゆめ」-一人の家族- 18 人にとっての家族がどんな存在であるか見つけ、自分にできることを探る。					
社会 (+105)	歴史 発見 -人と社会- 人物をクロスアップしていくことで、その人の行為を生んだ社会を歴史概観・高田城・謙信・親鸞・戦国武将・徳川家康・明治時代				明らかにしていく。 ・15年戦争・野口英世・聖徳太子・源頼朝・藤原氏 等 83				私の生活と政治 12		未来社会の日本人と世界 10			
道徳 心 人間 374.5 (113.5+261)	人・人・人*(人との出会い、経験を豊かにする時期) 129=42+社43+理13+国25+音6 多くの人、いろいろな人と出会う。実際に会って一緒に過ごす。一緒に語り合う。そんな中でその人の生き様を全身で実感していく。ここでは、時間や空間を超えた出会いも大切していく。各自が各様に人と出会うことに加え、学級で共通に出会う場面も用意する。パラリンピックでの出会いをきっかけに世界の人や障害のある人とも体験を共有する。そこでは、自分の生活との違いを実感する。ホームステイや訪問体験も行う。これらの体験活動と文章表現活動との交互作用を生かして、子供が思考を深めていく。				人・人・人*(人に対する経験の集積から社会に目を向ける時期) 128=46+社40+国32+体10 人の生き様の裏側に見える社会問題を追求していく。多くの人の生活を見ていくと、そこには社会の持つ問題が浮き彫りになってくる。国際社会の一員として共に生きていくこと、障害のある人が生き生きと生活する社会づくりのこと、老人も子供も充実した生活が送れるまちになることなど、人との出会いの中で明らかになってきた問題を追求していく。そうすることがその人の生き様をより一層深く知ることにつながる。こうした質的に高まったデータを集積し、文章表現による再構成を行う。このことで、子供の思考は一層深まる。				人・人・人*(生き方について考えをまとめる時期) 117.5=7.5+理12+国36+家18+音12+図12 これまでに書きためてきた作文を分類する。さらに、プロットを立てて、「人・人・人」という卒業論文にまとめ直す。この活動を通して、これからの未来社会での自分の生き方を考えていく。また、これまでの活動をまとめて、卒業発表を行う。多様な表現形式を駆使し、個が生きていく発表を行っていく。					
理科 80(+25)	植物とデンプン I 4	炎の秘密 10	からだの不思議 13	植物とでんぶん 10	さくろうぼくらの大地 15	星空のひみつ 10	水溶液のひみつ 13	電磁石のひみつ 14	全ての命を包む地球環境「ゆめ」12					
国語 133(+77)	不思議な世界を音読で 9	私の環境レポート 人の行為 15	主題を考えよう 主人公を追って 9	ことばと文化 10	人物像を探ろう 10	私の研究レポート 自然と人 12	主題について 語ろう 10	ある生き方 6	シルクロード研究レポート 10	ことばに託された思い 11	書写 6			
音楽 54(+16)	詩を読もう 8	詩を読む 8	習組みのことば 6	書写 12	熟語の意味 6	言葉のガイドブックを作ろう 12	5・7のリズム探しを追究 8	書写 14	この人を紹介します 4	私たちの合奏 7	ポプラ音楽会で発表しよう 12	バンドをやろう! 10	リコーダー二重奏を作ろう 5	音楽表現・組曲「ゆめ」 10
体育 95(+10)	記録にチャレンジ 5	チャレンジ体操をつくろう 5	記録への私の挑戦 短距離リレー 9	みんなでテニール 8	記録への私の挑戦-水泳- 12	記録への私の挑戦 障害走 6	サッカー 8	バスケットボール 6	記録への私の挑戦 走り高跳び 6	これが私の走り方 持久走 6	エイズ* 私生活調査 4	得意技を楽しもう スキー 9	得意技を楽しもう -マット、跳び箱- 9	得意技を楽しもう 鉄棒運動 6

* 生命教育との関連単元及び活動

『カリキュラム表 2 2 p』

5. 奈良女子大学文学部附属小学校 (平成10年度研究)

研究題目 「総合的な学習」の提案
カリキュラムの特色

・奈良プランの「しごと」「けいこ」「なかよし」のカリキュラム構成
研究の概要 「しごと」「けいこ」「なかよし」のカリキュラム構成に基づく学習の積み上げによる、総合的な学習を内包する「奈良の学習」の発展を目指す研究

<資料抜粋>

『文献90p』
第2学年「しごと」学習の展開例 (平成9年度より)

学期	日	「しごと」学習一環び・社会・文化・自然	(朝の会)	《なかよし集会》	主な学校行事
1	4	「おのたんけん」 ・校歌、花たん ・家のまわり ・たごっこ 【トランプ】	【おのたんけん】 ・たごっこ ・おのたんけん ・家のまわり ・たごっこ	《なかよし集会》	入学式 始業式 春の遠足
	5	「おのたんけん」 ・おのたんけん ・家のまわり ・たごっこ	【おのたんけん】 ・たごっこ ・おのたんけん ・家のまわり ・たごっこ	《なかよし集会》	春の運動会
2	6	「おのたんけん」 ・おのたんけん ・家のまわり ・たごっこ	【おのたんけん】 ・たごっこ ・おのたんけん ・家のまわり ・たごっこ	《なかよし集会》	学習発表会 秋の大運動会 プール開き
	7	「おのたんけん」 ・おのたんけん ・家のまわり ・たごっこ	【おのたんけん】 ・たごっこ ・おのたんけん ・家のまわり ・たごっこ	《なかよし集会》	(夏休み)
3	9	「おのたんけん」 ・おのたんけん ・家のまわり ・たごっこ	【おのたんけん】 ・たごっこ ・おのたんけん ・家のまわり ・たごっこ	《なかよし集会》	プール開きの会 秋の大運動会 秋の遠足
	10	「おのたんけん」 ・おのたんけん ・家のまわり ・たごっこ	【おのたんけん】 ・たごっこ ・おのたんけん ・家のまわり ・たごっこ	《なかよし集会》	秋の大運動会 秋の遠足
4	11	「おのたんけん」 ・おのたんけん ・家のまわり ・たごっこ	【おのたんけん】 ・たごっこ ・おのたんけん ・家のまわり ・たごっこ	《なかよし集会》	秋の遠足
	12	「おのたんけん」 ・おのたんけん ・家のまわり ・たごっこ	【おのたんけん】 ・たごっこ ・おのたんけん ・家のまわり ・たごっこ	《なかよし集会》	春休み

『文献88p』
第1学年「しごと」学習の展開例 (平成8年度より)

学期	日	「しごと」学習一環び・社会・文化・自然	(朝の会)	《なかよし集会》	主な学校行事
1	4	「おのたんけん」 ・校歌、先生、友だち ・楽しい学校 ・遊び、習習、くらし ・おのたんけん 【おのたんけん】	【おのたんけん】 ・校歌、先生、友だち ・楽しい学校 ・遊び、習習、くらし ・おのたんけん	《なかよし集会》	入学式 春の遠足
	5	「おのたんけん」 ・校歌、先生、友だち ・楽しい学校 ・遊び、習習、くらし ・おのたんけん 【おのたんけん】	【おのたんけん】 ・校歌、先生、友だち ・楽しい学校 ・遊び、習習、くらし ・おのたんけん	《なかよし集会》	春の運動会 始業開始
2	6	「おのたんけん」 ・校歌、先生、友だち ・楽しい学校 ・遊び、習習、くらし ・おのたんけん 【おのたんけん】	【おのたんけん】 ・校歌、先生、友だち ・楽しい学校 ・遊び、習習、くらし ・おのたんけん	《なかよし集会》	学習発表会 プール開き
	7	「おのたんけん」 ・校歌、先生、友だち ・楽しい学校 ・遊び、習習、くらし ・おのたんけん 【おのたんけん】	【おのたんけん】 ・校歌、先生、友だち ・楽しい学校 ・遊び、習習、くらし ・おのたんけん	《なかよし集会》	(夏休み)
3	9	「おのたんけん」 ・校歌、先生、友だち ・楽しい学校 ・遊び、習習、くらし ・おのたんけん 【おのたんけん】	【おのたんけん】 ・校歌、先生、友だち ・楽しい学校 ・遊び、習習、くらし ・おのたんけん	《なかよし集会》	プール開きの会 秋の大運動会 秋の遠足
	10	「おのたんけん」 ・校歌、先生、友だち ・楽しい学校 ・遊び、習習、くらし ・おのたんけん 【おのたんけん】	【おのたんけん】 ・校歌、先生、友だち ・楽しい学校 ・遊び、習習、くらし ・おのたんけん	《なかよし集会》	秋の大運動会 秋の遠足
4	11	「おのたんけん」 ・校歌、先生、友だち ・楽しい学校 ・遊び、習習、くらし ・おのたんけん 【おのたんけん】	【おのたんけん】 ・校歌、先生、友だち ・楽しい学校 ・遊び、習習、くらし ・おのたんけん	《なかよし集会》	秋の遠足
	12	「おのたんけん」 ・校歌、先生、友だち ・楽しい学校 ・遊び、習習、くらし ・おのたんけん 【おのたんけん】	【おのたんけん】 ・校歌、先生、友だち ・楽しい学校 ・遊び、習習、くらし ・おのたんけん	《なかよし集会》	春休み

『文献92p』

■ 第3学年「しごと」学習の展開例

(平成4年度より)

◇ここでは、平成4年度に実践した「羊のいる学校」の事例を紹介することにする。

- ・「附小に羊がやって来る」…前年度11月下旬に、ある保護者を通じて羊をもらい受けることになった。
 - ・「名前がメリーちゃん」…メリーちゃんと名づけられて、学校の人気者となっていた。世話は、飼育グループ。
 - ・「メリーちゃんの出産」…年が明け、2月に3頭（内1頭は死産）の子羊が産まれた。
- ※新しい学年に進級して、3年月組で羊の世話をしていくことに決め、学級での取り組みが展開していった。

1 学期	2 学期	3 学期
<ul style="list-style-type: none"> ・羊さんたちにごあいさつ ・当番を決めよう ・子羊に名前をつけよう(メーちゃん、リーちゃん) ・どんな世話をしたらよいのだろう ・どんな顔が好き(よい)だろう ・「リーちゃん」の目、おかしいよ ・汚れている毛を洗ってあげよう ・「めいめい牧場」の見学に行こう ・「めいめい牧場」はどこにあるのかな ・「めいめい牧場」の見学 ・羊さんの毛を刈ろう ・羊の毛で、毛糸を作ろう ・夏休み中の当番を考えよう ・リーちゃんの病氣(こちょう症) 	<ul style="list-style-type: none"> ・羊をあげてもいいか(絶対、反対) ・どの羊をあげようか ・お別れ会をしよう ・(鎌田小に子羊を1頭あげる) ・リーちゃん、元気かな(手紙を出す) ・冬に備えよう ・顔にする草刈り(干し草を作ろう) ・わらを集めよう ・羊さんの家は、これでいいのか ・羊小屋の改修作業 ・メリーさんの一周年のお祝いしよう ・羊さんの学習の本を作ろう ・冬休みの世話を相談しよう (冬休みの羊当番、お正月) 	<ul style="list-style-type: none"> ・羊さんで学習したことは何かな ・「本作り」の原稿を書こう ・メーちゃんのお誕生会をしよう ・もうすぐ、4年生 (羊の世話を、どうしたらよいか) ・「本作り」の原稿仕上げ ・リーちゃんに会いに行こう (鎌田小学校に行く-春休み中) <p>※「羊のいる学校」の本の印刷発行 (平成5年8月完成)</p>



△羊さんと散歩

冬に備えて△干草作り



△毛刈り



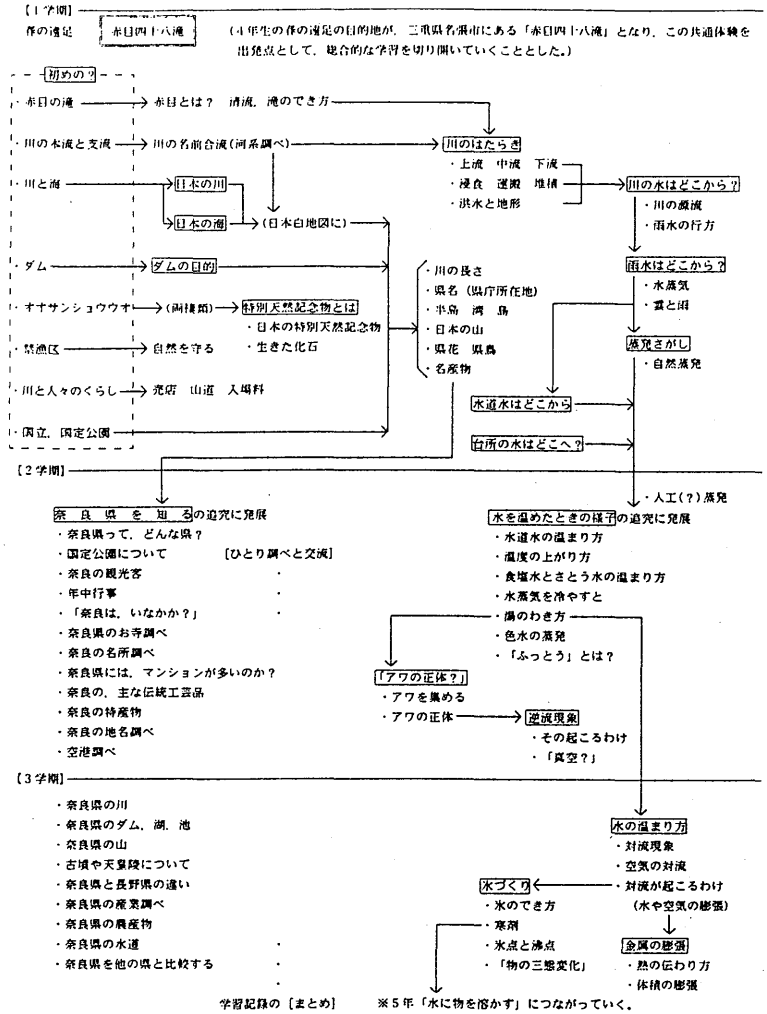
△大へんのまじり

『文献94p』

■ 第4学年 総合的な学習の展開例

(平成5年度より)

年間テーマ《水を探る》



第5学年 総合的な学習の展開例

(平成6年度より)

社会的な現象の追究では、年間の中心的なテーマが「私たちの暮らしと産業」であった。初めは身の回りから始め、だんだんと視野を広げていくように図らった。日本各地、そして諸外国と、追究の範囲を広げていった。

- ・主な内容は、産業・地理・地形・環境・公害・貿易・自然災害・森林破壊・過剰消費・人口問題などであり、多様な問題について、同時並行的に取り組ませていった。
- ・「ひとり調べ」と発表による「共同学習」を適宜折り返しながら、進めていった。

自然現象に関しては、4学年からの継続で、1学期中は「水」に関連した現象や、その追究から派生した発展的な問題が取り扱われていった。

- ・年間の主な内容を判記すれば、「水を作ろう」「ミクロの世界を探ろう」「物が溶ける」「天気の子思」「私たちの体と育ち」「この原理」「ふりこのきまり」などとなっている。
- ・あまり大きな単元を構成することは、していなかったようである。むしろ、国語学習と関連させたり、派生した問題にみんなで関わったりして、柔軟で幅広く、話し合いを重視した展開を図ってきたように思える。

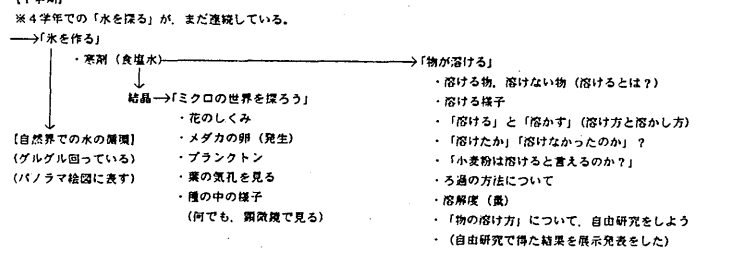
社会的現象の追究の導入法

- 「私たちの暮らし」(4/18)
- ①「私たちが暮らし、生きていく上で必要な物」を思いつくままに判記させる。(連想法)
 - ②判筆された「物」を、「仲間分け」してみる。(個人で、グループで、学級全体で)
- 【仲間分けした例】
- お金で買っている物……食べ物(食料品・飲み物)、乗り物(交通機関)、インテリア、衣類(商品、品物、製品) 薬品、文房具、機械、ベット、家具、建物、土地など
 - 「くらしに必要な物」 買わないでもある物……太陽(日光)、親兄弟、空気
 - (?どっちでもない物)……お金、友だち、勉強、学校、愛など
- ③この後、話し合いを重ねて、「産業」の分類まで進める。
 - ④日本の白地図、「国勢調査ジュニア版」「資料集」などを紹介する。
 - ⑤子ども各自に「調べる問題」を決めさせ、「ひとり調べ」に移って入っていく。

「ひとり調べ」で取り組む問題の例 5月30日の時点

- 「農業について」……野菜を中心に、各県の特産物を探し、気候や輸入との関係を探る。
- 「水産業について」……私が、あまり知らないから、お料理によく使われているので調べたい。
- 「工業地帯」……工業がさかんで、集まっているのはなぜか、どれくらい生産があるか調べたい。
- 「野菜の取れ高」……パンのできるまでが知りたい、今学期中は、かかる。
- 「米の生産について」……米不足で外国から輸入している。米の取れ高を探る。(等々)

自然現象の追究の歩み



第6学年 総合的な学習の展開例

(平成7年度より)

《ジャガイモの科学》の実践経過

- ①ジャガイモの植えつけ
 - 春休み中に、理科教材園と集積の花壇にジャガイモの植えつけをする。(3/29)
- ②1学期始業式後に、春休み中にジャガイモを植えつけたことを話す。(4/8)
- ③探究意欲を盛り上げ、活動を方向づける。
 - 「ジャガイモについて知っていること」を、みんなで出し合う。(4/20)
 - 「たないもの観察」をする。(4/27)
 - 「今、土の中では?」1株掘り起こして、土中での様子を調べる。(5/2、8、10)
 - 「新しいイモに、デンプンがあるか?」(5/11)
- ④生長を見守り、ジャガイモを科学する。(5/11~31)
 - 「新しいイモのデンプンは、どこから来たのだろうか?」と、共通課題が設定される。
 - 「光合成とは?」を明らかにする。(5/18)
 - 光合成しているジャガイモから発展して、「草木のつくりと働き」を説明していく。
 - 「植物と水」と題して、ここまでの探究を総括する。(5/31)
 - 「酸素や二酸化炭素」に関心が向けられていく。
- ⑤「酸素や二酸化炭素」に迫る。
 - 「酸素や二酸化炭素について知っていること」を出し合い、製法や捕集方法を知る。(6/1)
 - 酸素や二酸化炭素の性質や働きについて、実験を通して調べていく。(6/2~12)
 - (物の燃え方、置き、呼吸との関係、水に溶ける、光合成、空気の種類など)
- ⑥再度、「ジャガイモの育ち」を調べる。
 - 「あれから1ヵ月」今現在の育ちの様子を確認する。(6/13)
 - 日当たりによる生育の違いの大きさを算く。
 - 「空気と動物・植物との関係」と題して、自分の考えをまとめる。(6/14)
 - 新しい追究の方向を探る。
- ⑦光合成・呼吸・燃焼・発芽を結ぶ「空気」
 - これまでの追究活動を振り返り、新たな追究の方向を定める。(6/14)
 - 「酸素は、体のどこを通過して、二酸化炭素に変わって出てくるのだろうか?」を共通の問題にして話し合う。(6/15)
 - ヒトの体の仕組み、酸素の通り道を調べて、発表し合う。
 - 「体の中で、物が燃えるような変化」が起っているのではないかと?
 - 「食べた物」が燃えると、二酸化炭素ができることを確かめる。(6/16、19)
- ⑧ヒトの体とジャガイモ
 - ひとり調べが続けられる。(6/19~)
- ⑨「ジャガイモパーティ」をしよう。(6/19~)
 - 「学級なかよし」時に提案があり、その後断続的に、相談と準備が進められていく。
 - 1年生聖組(兄弟学級)を招待して、7月5日に実施と決まる。
 - ジャガイモの料理法と必要な材料、パーティの会場づくり、出し物、買い物、予算等の相談や分担が連日続けられる。
 - 洪水警報発令、豪雨の中でジャガイモ掘りを行う。(7/4)
 - ジャガイモパーティを実施。(7/5)
- ⑩「今、調べていること」を確かめ、夏休みを迎える。
- ⑪「もっと調べてみたいこと」について話し合う。(9/12)
- ⑫ジャガイモの「実」の観察
 - 北海道中津津の知人より届けられたジャガイモの「実」を、みんなで観察する。(9/14)
- ⑬何か新しい提案はないか、話し合う。(9/15)
- ⑭学習記録の製本
 - 「ジャガイモの科学」の実践を通して書いてきた学習記録を、製本する。(2学期末)

6. 神戸大学発達科学部附属明石小学校（平成7年度研究）

研究題目 学習主体としての子どもを支援する12か年の教育課程の開発
 ー総合・探求学習を核にした幼稚園・小学校・中学校の連携研究の試みー
 カリキュラムの特色

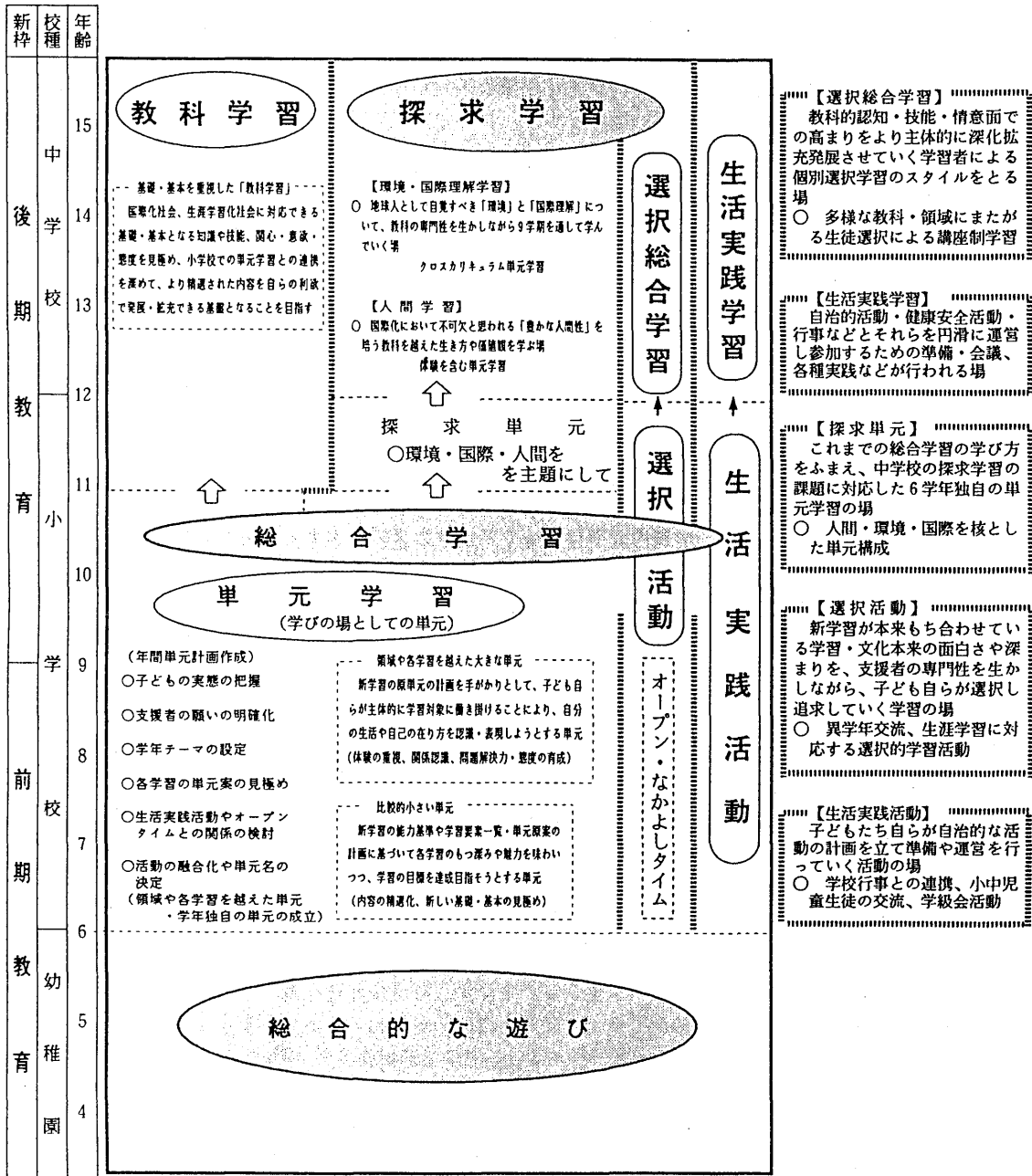
- ・幼稚園、小学校、中学校の連携
- ・総合学習を核とし、4領域の教育課程の創造による教科再編

研究の概要 「身体健康」「心の表現」「環境探求」「数理表現」の4領域で教科再編を行い、幼稚園では総合的な遊び、小学校前期では総合学習、小学校後期・中学校では教科+探求学習を軸にして、子ども中心の教育課程の創造を目指す研究

<資料抜粋>

『紀要12p』

「総合的な遊び」-「総合学習」-「探求学習」を中心とする教育課程の側面図



	4月	5月	6月	7月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	
学年テーマ ガッツでたのびよう	ガッツで飛び出せ/探検隊 <ul style="list-style-type: none"> ○ 探検隊の本部をつくろう ・探検隊の約束 ・探検隊の歌 ・探検グループ ・探検隊だけの暗号 <ul style="list-style-type: none"> ○ なかよし/探検隊員 ・隊員何でもベストテン(趣味・誕生日・血液型…) ・表とグラフで表す <ul style="list-style-type: none"> ○ 探検の計画を立てよう ・探検の目的地 ・もって行く物 <ul style="list-style-type: none"> ○ 探検グッズを作ろう ・コンパスでデザインしたかっこいい隊員バッジ ・探検隊の旗 ・隊員証 	わたしは計算博士I <ul style="list-style-type: none"> ○ かけ算ビンゴ ○ かけ算博士 ○ わり算博士 ○ 距離を測ろう ○ 時間を計ろう 	数えられるかな <ul style="list-style-type: none"> ○ 大きな数を数えよう 	アリス・ワールドを探検しようI <ul style="list-style-type: none"> ○ 数を使ったゲームをしよう ・迷路ゲーム ・計算パズル ・びったんこゲーム ・タングラム ・デザイン展 ・暗号 	食品加工工場I <ul style="list-style-type: none"> ○ 食品加工工場をつくろう ・加工食品を集める ・作り方を調べる <ul style="list-style-type: none"> ○ ごっくん/野草茶 ○ チャレンジ/複製 ○ おいしい/漬け物 ○ 変身/小麦粉 ○ 成功パーティー! ・作った加工食品を持ち寄る 	探検に行こうII <ul style="list-style-type: none"> ○ 秋見つけ ○ 秋の食べ物 ○ 明石公園探検 ○ 探検で見つけたものを、地図に表そう ○ 見つけたもので飾ろう ・石ころアート ・落ち葉のスタンプ 	アリス・ワールドを探検しようII <ul style="list-style-type: none"> ○ ゲームをつくろう ○ 計算機を使おう ・電車 ・そろばん ・パソコン 	わたしは計算博士II <ul style="list-style-type: none"> ○ わり算の筆算 ○ かけ算の筆算 	分けられるかな <ul style="list-style-type: none"> ○ 分数で表そう ○ 分数で計算 	小さな数の世界 <ul style="list-style-type: none"> ○ 小数で表そう ○ 小数で計算 	発見/かかれた数 <ul style="list-style-type: none"> ○ □の式 	ようこそ/サイエンスワールドへ <ul style="list-style-type: none"> ○ 「なぜなに」を集めよう ○ 「なぜなに」の答えを調べよう ○ 調べたことを実験などで確かめてみよう ○ 科学工作を作ろう ○ 分かったこと・不思議に思ったことをみんなに説明しよう ○ 科学展を開こう
		育てよう/夏野菜 (キュウリ・トマト・ピーマン・トウモロコシ)					育てよう/冬野菜(ダイコン・ニンジン・キャベツ)					
		上手に読めるよ <ul style="list-style-type: none"> ○ 楽しいお話 ○ おもしろい詩の世界 	小さな詩人 <ul style="list-style-type: none"> ○ まね詩を作ろう ○ 詩で家族を紹介しよう ○ 詩集を作ろう ○ 詩の発表会を開こう 	わたしは漢字博士 <ul style="list-style-type: none"> ○ 漢字を分解 ○ 辞典を探検 ○ 暗号漢字を作ろう 	お話大好き <ul style="list-style-type: none"> ○ お話を読もう ○ お話を作ろう ○ お話の絵を描こう ○ ミニ発表会を開こう 		探検新聞発行 <ul style="list-style-type: none"> ○ 見つけたことを新聞に書こう ・季節新聞 ・からだ新聞 ・昔新聞 ・食べ物新聞 	説明できる?サイエンス <ul style="list-style-type: none"> ○ 身の回りの不思議を調べ、説明しよう 				探検発表会 <ul style="list-style-type: none"> ○ 一年間の探検の思い出を話し合おう ○ 探検アルバムを作ろう ・思い出の絵を描く ・写真の説明文を書こう ○ お札の手紙を出そう ・交流学級へ ・6年生へ
		こんにちは/リコーダー	リコーダーとなかよし	愉快的なバンブーダンス			ボディパーカッション	音を呼ぶ絵 <ul style="list-style-type: none"> ・図形楽譜 	楽器を作って、楽しもう			
		毛筆で遊ぼう	毛筆となかよし	点・画に気を付けて			のびのび書こう	書き初め大会	いろいろな筆を作ろう			
		ガッツでスポーツ <ul style="list-style-type: none"> ○ リレーをしよう ○ がんばるぞ! スポフェスの練習 	ガッツでボールI <ul style="list-style-type: none"> ○ 球技を楽しもう ・ドッジボール ・バレーボールゲーム 	ガッツでスイム <ul style="list-style-type: none"> ○ 浮かう ○ 進む ○ クロールできるかな ○ いろいろな泳ぎ方に挑戦 	ガッツでオリンピックI <ul style="list-style-type: none"> ○ 陸上競技に挑戦 ・立ち幅跳び ・走り幅跳び ・リレー ・ハードル走 	ガッツでオリンピックII <ul style="list-style-type: none"> ○ 体操競技に挑戦 ・鉄棒 ・跳び箱 ・平均台 ・床(マット) 	ガッツでなわとび <ul style="list-style-type: none"> ○ 一人で跳ぼう ・長く跳ぼう ・新しい技 ○ みんなで跳ぼう ・何人続くかな ・みんなで何回跳べるかな 	ガッツでマラソン <ul style="list-style-type: none"> ○ 遠くまで行こう ○ 速く走ろう ○ タイムを記録しよう 	ガッツでボールII <ul style="list-style-type: none"> ○ ルールを決めて球技を楽しもう ・サッカーゲーム ・バスケットボールゲーム 			
		こんにちは/わたしのからだ <ul style="list-style-type: none"> ○ 検査を受けて健康状態を知ろう 										
		(1年生を迎える会) (スタート集会) (スポーツフェスティバル) (あじさい集会) (ガッツ集会)					(もみじ集会) (ガッツ集会) (ふれあいフェスティバル) (ファイナル集会) (6年生を送る会)					
		なかよしタイム					なかよしタイム					

	4月	5月	6月	7月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月
学年テーマ わたしにつながるもの わたし発・人間ネットワークを結ぼう	夢の一冊札をつくらう ○ お札の仕組みを探らう ○ 優や美の大きさ比べをしよう ○ どっちが便利？ ・漢数字VSアラビア数字 ○ 夢の一冊札を作らう ・お札のデザインを決めろ	計算博士にならう ○ かけ算やわり算の算の決まりを見つつけよう。 ○ 四則の他の計算をつくらう ○ 電卓を使って計算しよう	デザイナーにならう ○ いろいろな形の角度を比べよう ○ 分度器帽子を作らう ○ 明石川探検に出かけよう (明石川物語をつくらう) ○ 砂や土のルーツを探らう ・地層の見学 ○ 地図の面白さを探る ・ミニ地図探検 ○ 明石川探検に出かけよう ・流水、産業、等高線調べ ・いかだ作り ・生物や環境の調査 ○ 水道料金の謎にせまらう ○ 水道のルーツを探らう ・浄水場や下水処理場の見学 ・おいしい水のコンテスト ○ 水道の使用料を表そう ・水道料金の表を使って ○ 水道使用量をグラフにする ○ マンホール探検に出かけよう ○ 川の腐材やゴミを生かして作品展をしよう ・ソーラー、附属浄水場	林間学校大作戦 ○ 高原の暮らしを想像しよう ・食物、気温、子どもの遊びや生活など ○ 県内地図探検をしよう ・県内地名探し ・山地・高地、川 ○ 明石と比べよう ・気候、産業、地形 ○ 地図の大きさを比べよう ・縮尺による地図の違いを見つける ・およその距離を測る ・標高を小数で表す ○ 高原の暮らしを探らう ・方言、伝説、 ・産業や交通 ○ 林間学校の計画を立てよう ・自分の課題 ・生活の決まり ・地名の由来 ○ 高原の自然にふれよう ・ネーチャージョ ・森林浴 ○ 林間学校の思い出を紹介しよう ・演劇や道彰、新聞など	測量士にならう ○ 宅地の分譲計画 ○ 土地の測量に出かけよう ○ いろいろな広さを面積で表そう 買物名人にならう ○ 明石の特産品リストを作らう ○ 広告の値段比べをしよう ○ 一万円びったんこゲームをしよう ○ 単価と個数の関係を探らう	測量士にならう ○ 宅地の分譲計画 ○ 土地の測量に出かけよう ○ いろいろな広さを面積で表そう 買物名人にならう ○ 明石の特産品リストを作らう ○ 広告の値段比べをしよう ○ 一万円びったんこゲームをしよう ○ 単価と個数の関係を探らう	食物に学ぼう ○ 夏の食中毒騒動を思い出そう ○ 好きな食物リストをつくらう ○ 安全な生活を守る人々に学ぼう ・保健所の方を招いて ○ 食べ物の文化に学ぼう ・物の文化を比べて ○ 食物のゆくえを探らう ・ゴミのゆくえを追って ○ ニュースキャスターにならう ・調べたことを紹介しよう 発明王にならう ○ 夢の自動車をつくらう ・電気を使って ○ 附属サーキットを作らう ○ 電気の決まりを探らう ○ ソーラー電気を役立てよう ○ バランスモビルを作らう	小数や分数の世界を広げよう ○ 小数と分数の使い方を比べよう ・日常生活のなかでの使い方を調べる ○ 小数や分数の計算の仕組みを探らう ○ 分数レースをしよう ○ 分数の便利さを味わおう	スークアデザイナーにならう ○ 垂直と平行を使ってデザインしよう ○ 四角形をデザインしよう ○ へんでこ立体を作らう 数字マジックに挑戦しよう ○ 電り方の秘密を探らう ○ 計算ゲームを作らう	ふるさとネットワークを結ぼう ○ ふるさと自慢を調べよう ・明石を調べる ・兵庫県の市町村 ○ ふるさとネットワークをつくらう ・特産品比べ・自然比べ ・方言比べ・観光地紹介 など ○ 明石を紹介しよう ・映像を作ろう ・明石のCMを作らう ○ 全国の友達と交流しよう ・通信手段を使って ・品物を届けよう ○ 空想日本旅行に出かけよう ・ガイドブックを作らう ・時刻表を楽しもう ○ 方言ネットワークを結ぼう ・全国方言マップをつくらう	県内テーマ旅行に出かけよう ○ 県内の小学校と交流しよう ・パソコン通信を使って ○ 時間表の不思議を探らう ・時間と距離の関係を探る ・値段表を比べよう ○ 県内の観光ガイドを集めよう ・市町村の観光パンフレット ○ 県内旅行のテーマを考えよう ・港めぐり・異国情緒 ・坂づくり・お城めぐり など ○ 旅行記にまとめよう ・費用や見学の紹介 もうすぐ5年生 ○ これまでの学習を活かして体験しよう ○ ミニコンサートを開こう
	わたし大図鑑をつくらう ○ 自分の自慢を紹介し合おう ○ 自己紹介しよう ○ もう一人の自分をつくらう ・等身大の自分を描く ・体と心のなかを探らう ・体力調べ、体の音探し ○ 自分の成長を表そう ・グラフをかきして ○ 発表会をしよう ○ ばく詩わたしをつくらう ・詩を生かした言葉遊び	いい土をつくらう ○ 庭のネーチャージョに出かけよう ○ 庭の我が家をつくらう ○ いい土を探そう ・上と砂の大実験をする ○ コンポストを役立てよう ・畑づくり ○ 野菜や草花を行てよう ○ 砂文字を描こう	作家にならう 「木琴物語」 ○ 好きな物語や詩を探そう ○ にせ話をつくらう ○ お話発表会をしよう ・音を加える ○ 絵本をつくらう ・ちぎり絵、立体を活かして ・心の言葉を広げる (擬態語・擬音語)	漢字博士にならう ○ こんな漢字があったらいいな(夢の漢字をつくらう)を話し合おう ○ 辞典の使い方を学ぼう ・漢字辞典と国語辞典の使い方に慣れる ○ わたしを表す漢字をつくらう あつたらしいな ○ 地球にやさしいマシンを想像しよう ○ 自分のマシンの紹介をしよう ・紹介文 ・パンフレット	こんな恐竜がいたらいいのにな ○ 恐竜・伏魔図鑑をつくらう ○ 恐竜の特性を説明文で紹介しよう ○ 恐竜の模型を作らう 読書案内をしよう ○ 自分の読書自慢を紹介しよう ・読書量 ・好きなジャンル ・好きな作家など ○ 素敵な作品の自慢をしよう ・推薦文を作る	しゃれ名人にならう ○ 同音異義語を使った小話を作る ○ 擬音語・擬態語を使って短文を作る ○ 早口言葉を作らう ミュージカルをつくらう ～もの世界を題材に～ ○ シナリオを考えよう ○ 行事や出来事から ○ 音楽を作らう ・リズム・テーマソング ○ ダンスやパフォーマンスを演出しよう	科学者にならう ○ 水の手品師にならう ・霧をつくる ・雨を降らせる ・水の変化を利用して ○ テーマ別「生活のなかの不思議を探らう」 ・水の三態・気象・電気・動力 など ○ 博士論文を紹介しよう 民話作家にならう ○ 民話や方言を紹介しよう ・いろいろな作品に親しむ ○ 物語の構成を調べよう ○ にせ・続き話をつくらう 思い出文庫をつくらう ○ 文庫やカルタに表そう ゲームパズルをつくらう				
	春の詩画集をつくらう ○ 詩の工夫を味わおう ○ 絵の具模様を生かして詩画集をつくらう 音のリレーをしよう ○ リズムをつくらう ○ 手のパーカッションを演奏しよう	点画で想像世界を表そう ○ 自分だけの文字を作らう ○ 絵巻物を作らう	自分体力の秘密を探らう スポーツフェスティバルに参加しよう スクリーンパフォーマンスをしよう ・表現や表情の美しさ コーンをぶっとばせ ・ボール運動 水泳記録会をしよう ・速く泳ぐ ・息を長く泳ぐ	6分間走をしよう トライアングルサッカー 心と体のバロメータを探らう ○ 健康の意味を考えよう ○ 心の変化と体調の関係を探らう							
	(一年生を迎える会) セミナー 決定	(スポーツフェスティバル) セミナータイム	(ふれあいフェスティバル) セミナータイム	(総合表現発表会) (ファイナル集会) (6年生を送る会) セミナータイム発表会							

	4月	5月	6月	7月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	
学年テーマ 自分自身を見つめて わたし発見の「いのち」との響き合いのなかで	計算プロを目指そう ○ 数の仕組みを探ろう ・整数、小数の十進位取り記数法 ○ 見当付けをしよう ・暮らしのなかの小数 ・積、商の範囲 ・積、商の見積り	体積調査官になろう ○ 立方体を比較しよう ・体積の概念と単位 ○ 「かさ」比べをしよう ○ 身の回りにおける立方体と直方体の体積を求めよう ・水筒、教室、プール ○ およその容積を求めよう ・ランドセル、筆箱	図形デザイナーになろう ○ 合同な三角形、四角形をかこう ○ 三角形、四角形の内角調べをしよう ○ 図形でデザインを作ろう	数の変身ゲームをしよう ○ 整数を偶数と奇数に分類しよう ・仲間わけ ○ 倍数ゲームをしよう ・倍数と公倍数探し ○ 約数ゲームをしよう ・約数と約数探し ○ 分数の大小を考えよう ・約分と通分 ○ 分数を変身させて計算しよう	気象博士になろう ○ 9月の気候を調べよう ○ 天気用語を調べよう ・気圧、アメダス ○ 天気博士になろう ・雲の種類、台風 ○ 天気図を読み取ろう	形の変身を見破ろう ○ 三角形の面積を求めよう ○ いろいろな図形の面積を求めよう ○ 変形した身の回りの形の面積を求めよう	ダイアグラムをつくろう ○ 速さの意味を理解しよう ○ 電車の速度調べをしよう ○ 1日1万円 の地図旅行 ・指定コース	円の秘密を探ろう ○ マンホール調べをしよう ・円の周と直径 ・円周、直径、同周率の関係 ○ 円の面積を求めよう ○ 多角形、扇型の作図をしよう	買物名人になろう ○ パーセントの意味を考えよう ・割引の意味 ・パーセント広告 ○ 身の回りから百分率歩合など、割合の表現を探そう ・割合計算	ゲームワールドを創ろう ○ 数や図形、量を使って、ゲーム広場を創ろう ・パドックス ・ブロック ・おもしろ計算 ○ 大会を開こう		
	きらめきハート&ボディー ～わたしの誕生調べをしよう ○ 様々な「いのち」の誕生を見つめよう ・植物のつくりと役割 ○ わたしの誕生を調べよう ・「いのち」の誕生の仕組み(受精から誕生まで) ・ビデオ(生命の誕生) ○ 11年間のわたしの成長ドラマを図鑑に表そう ・母子手帳、父母の記録 ・身体計測グラフ、父母の思い ・記録写真、心に残る思い出	きらめきライフI ～食物とわたし～ ○ 一日の食物調べをしよう ・食物の問題点を探ろう ・添加物、農薬 ○ 食物と体の関係を調べよう ・塩分、糖分 ○ 無農薬栽培に挑戦されるおじさんに会いに行こう ○ 無農薬栽培と農薬栽培を比較しよう ○ 野菜の産地とルート調べよう	きらめきライフII ～海とわたしたち～ ○ サマースクール(鳥取県東浜海洋)の計画を立てよう ・エキスポ活動(目的別活動) ・3日間の暮らし作り ○ 明石の海を調べよう ・海岸ゴミ調査 ・海水から塩作り ○ フラクション調査 ○ 全国の海を調べよう ・資料収集とアンケート ○ 海に関する研究テーマを決めよう ○ ペットボトル筏を作ろう ・リサイクル ・筏の設計図、ペイント	きらめきライフIII ～アースケア大作戦～ ○ リサイクルについて考えよう ○ ゴミの再利用を考えよう ・暮らしと生ゴミ ○ E.Mの仕組みを調べよう ・E.M菌の謎 ・E.Mで土を作る ・花を植える ○ 省エネ大作戦を展開しよう ・リサイクルアート ○ アースケアの輪を広げよう	お米の大研究 ○ お米の歴史を調べよう ○ お米の一生を調べよう ・農家の見学 ○ お米料理に挑戦しよう ・お米の栄養素 ○ レポートを発表しよう	明石発/きらめきブリッジストーリー ○ 明石海峡大橋の学習計画を立てよう ・橋にかかわるひと・もの・こと ○ 世界に架かる様々な橋を調べよう ・レポート発表(橋の目的・特徴) ○ フォトコンテストを開催しよう ○ 自分が好きな明石海峡大橋 ○ 明石海峡大橋を追究しよう ・架橋の歴史、メリットなど ○ 明石海峡大橋を科学しよう ・強度と安全性 ・1/10000の模型制作 ○ 橋に対する様々な人々の思いを聞こう ・架橋労働者、近隣住民、船舶関係者 ・漁業関係者、行政 など ○ 淡路や四国の5年生と、橋に対する思いを交流しよう ・淡路石屋小学校 ・鳴門教育大附小(アンケート) (FAX通信)	サイエンスワールド ○ サイエンスワールドの学習計画を立てよう ・実験してみたいこと ○ 実験に挑戦しよう ・暮らしのなかの科学を探ろう ・結晶のひみつ ・暮らしとふりこ ○ 橋と物との衝突 ○ サイエンス報告会を開こう	きらめきライフVI ～太陽とわたし～ ○ 太陽のイメージを表そう ○ 太陽のデータファイルを作成しよう ・太陽の身体検査 ・太陽の正体、家族 ○ 太陽ファンクラブを作ろう ・伝説、ことわざ ・古代人と太陽 ○ ソーラー発明王を目指そう ・ソーラーシステム ・アイデア機器 ○ 発明商品のCMを作ろう ・期間限定商品 ・保障期間 など				
	ミニ劇場を開こう ～もう一つの探検物語～ ○ 物語を読もう ・ヤドカリ探検隊 ○ 比喩表現のよさを調べよう ○ 想像物語を書こう ○ 物語を表そう ・寸劇・朗読、ペープサート	きらめき詩人大集合 ○ 詩を読もう ○ 5年生になった詩を作ろう ○ 詩を筆で表そう ○ 詩集を作ろう	説明文を書く ○ 海に関する研究テーマ ・説明文と物語文の違いを見つめる ・自分の好きな文で説明文を書く ○ 海文字を作ろう ・海のイメージを制作文字に表す ・海文字を筆で表す ○ サマースクールに行く準備をしよう ・シノーケル	ケチャを楽しもう ○ バリの音楽、リズムにふれよう ○ ケチャに挑戦しよう ・集会で発表しよう	ルポノ一枚の写真 ○ 写真から想像できることを発表し合おう(ルワンダの子どもたち) ○ 討論会を開こう	読書月刊大作戦を展開しよう ○ 読書について話し合おう ○ 本に親しもう ○ 学校を舞台とした推理小説のシナリオを書こう ○ 劇に表そう ○ 推理小説ふれあいフェスティバルのステージで発表しよう	推理劇場を開こう ○ 推理のおもしろさを話し合おう ○ 推理小説の特徴を調べよう ○ 学校を舞台とした推理小説のシナリオを書こう ○ 劇に表そう ○ 推理小説ふれあいフェスティバルのステージで発表しよう	ことばの大研究II ○ ことばの辞典を作ろう ・複合語、多義語 など	ウエディングベルを鳴らそう ○ 物語を読もう ・幕僚の中の神様 ・時代背景 ○ 様々な結婚問題について話し合おう ○ 「おみつきさん」と大工さんの結婚式を創造しよう ・結婚スピーチ ・役割分担 ○ 結婚式を開こう ・アトラクション ・演奏 など	ことば大研究III ○ 6年生から様々な役割を受け継ごう	思い出文集を作ろう	
	きらめきハート&ボディー ～わたし発見をしよう～ ○ 友達から見たわたし像を知ろう ○ わたしのコンプレックス ○ 心と表情の関係を探ろう ・わたしの表情研究	ボディサウンドを楽しもう ○ 体全体でリズムを表そう ○ 発表しよう	ことば大研究I ○ ベンネームを作ろう ○ アナグラムを楽しもう	アルトリコーダーに挑戦しよう	毛筆で大きな字を書こう ○ 筆の特性を生かそう	ことばの大研究I ○ ことばの辞典を作ろう ・複合語、多義語 など	エキスポ活動	ことば大研究II ○ ことばの辞典を作ろう ・複合語、多義語 など	エキスポ活動	ことば大研究III ○ 6年生から様々な役割を受け継ごう	思い出文集を作ろう	ことば大研究III ○ 6年生から様々な役割を受け継ごう
	きらめきハート&ボディー ～わたしの体を探ろう～ ○ わたしの体をチェックしよう ・身長、体重、胸囲、視力、歯科検診など ○ わたしの体力チェックをしよう ・走力、ジャンプ力、握力、投力など ○ 心と体の関係を聞こう ・きらめき心と体を表現しよう	スポーツフェスティバルに参加しよう ○ 自分の体を表現しよう	長く泳ぐ練習 ・浜辺の集い ・ビーチフラッグ ・トライアスロン ・健康で安全な3日間のルール作り ○ 東浜海岸サマースクールに行こう	ソフトボールを楽しもう ○ ソフトボールの楽しいルールを考えよう ○ グループに分かれて、リーグ戦をしよう	器械運動に挑戦しよう ○ 器具や道具に慣れよう ○ 体の美しさやしなやかさを表現しよう	附小NBAを開こう ○ バスケットボールを楽しもう ○ リーグ戦をしよう	おなかのリズムを調べよう	わたしのベース走 ○ 持久力を試そう ○ 駅伝に挑戦しよう ○ 記録会を開こう	学年オリンピックを開こう ○ おもしろ種目を考えよう ・ボール運動、器械運動 ○ オリピックを聞こう			
	<p>(1年生を迎える会) (スタート集会) (スポーツフェスティバル) (夏の集会) (サマースクール)</p> <p>セミナーガイダンス セミナー決定 セミナー活動</p>											
	<p>セミナータイム セミナー発表会</p>											

学年テーマ 生きていくわたしたちの未来創造への旅

出典 神戸大学発達科学部附属石小中学校 研究紀要 37 「生きる力を育む総合学習の展開」 東洋館出版社

<p>4月</p> <p>炎の逆転分数ゲームをしよう</p> <p>1・6なかよしほんわか大作戦</p> <ul style="list-style-type: none"> ○ 入学式の準備をしよう ○ 1年生を迎えよう ○ 入学式を成功させよう ○ 朝のほんわかタイムを楽しく過ごそう ○ ほんわか給食タイムを楽しく過ごそう ○ 1年生を迎える会の計画を立てよう ○ 1年生を迎える会を成功させよう ○ 1年生の先生になって一緒に学習しよう ○ 生活づくり先生 ○ なんでも運動先生 ○ いろいろアート先生 ○ 春見つけ先生 ○ 仲良しほんわか集会をしよう ○ なんでもゲーム ○ ケーキ作り <p>地球誕生の謎にせまろう</p> <ul style="list-style-type: none"> ○ 地球誕生について調べよう ○ 人類誕生までを調べよう ○ 生命誕生の秘密 ○ 恐竜の繁栄と滅亡 ○ 旧人類と新人類 ○ 化石調査に出かけよう ○ 炎の化石調査隊 <p>ディスカバー・マイ・セルフ</p> <ul style="list-style-type: none"> ○ 6年生になった今の思いを作文に表そう ○ 6年生になった今の思いを詩に表そう ○ 自分の好きな言葉(字)を書こう、その文字にふさわしい絵やデザインをしよう ○ 自分たちのリズムをつくろう、自分たちの歌をつくろう ○ 6年生の生活をつくっていきこう ○ 顔を探そう <p>自分の体を見つめよう～成長と心～</p> <ul style="list-style-type: none"> ○ 身体計測から ○ 体力測定から ○ 健康診断から 	<p>5月</p> <p>生活のなかの比を探そう</p> <ul style="list-style-type: none"> ○ 生活のなかから比を見つけそのよさや意味を探る ○ 比を使って表す <p>火事を科学しよう</p> <ul style="list-style-type: none"> ○ 火の秘密を調べよう ○ 燃焼の条件について調べよう ○ 火事の原因と防止について調べよう ○ 消防署見学 ○ 消火器作り <p>人類誕生の謎にせまろう</p> <ul style="list-style-type: none"> ○ 古代の人々の暮らしに学ぶよう ○ 古代服作り ○ 土器作り ○ 火おこし ○ 狩猟道具 ○ 祭り <p>人類誕生の秘密を探ろう</p> <ul style="list-style-type: none"> ○ 遺跡を訪ねよう <p>古代食VS現代食それぞれの秘密を探ろう</p> <p>歴史解説者になろう</p> <ul style="list-style-type: none"> ○ 人間の歩みを知ろう ○ 古代から戦国時代にかけての人物を調べよう ○ 歴史解説者になって歴史上の人物を紹介しよう <p>漫画で表情を表そう(喜怒哀楽)</p> <ul style="list-style-type: none"> ○ 自分の表情を考えよう(表情豊かに表現しよう) <p>いろいろな書体に親しもう</p> <p>創作短歌・俳句に挑戦しよう</p> <p>木片サウンドをつくろう</p> <ul style="list-style-type: none"> ○ バターンミュージックを楽しもう ○ 木片の音楽づくりをしよう ○ 「木片」の音楽の鑑賞 ○ わたしたちの木片サウンド <p>スポーツフェスティバルを成功させよう</p> <ul style="list-style-type: none"> ○ プロジェクト活動 ○ 企画・計画・運営 ○ 集団行動 ○ 応援合戦 ○ 走運動 ○ ゲーム ○ ギネスに挑戦 ○ 競争遊戯 ○ 球技 ○ フォークダンス <p>自分の体を見つめよう～成長と心～</p> <ul style="list-style-type: none"> ○ 身体計測から ○ 体力測定から ○ 健康診断から 	<p>6月</p> <p>割合を使って表そう</p> <ul style="list-style-type: none"> ○ 割合の和や差を使って問題を解く <p>割合を使って表そう</p> <ul style="list-style-type: none"> ○ 割合の和や差を使って問題を解く <p>割合を使って表そう</p> <ul style="list-style-type: none"> ○ 割合の和や差を使って問題を解く 	<p>7月</p> <p>不思議な形をつくろう</p> <ul style="list-style-type: none"> ○ 線対称 ○ 点対称 ○ 多角形と対称 ○ 拡大と縮小を使って <p>秀吉ロードを歩こう</p> <ul style="list-style-type: none"> ○ 激動の戦国時代を調べよう ○ 戦国の武将 ○ 君はどのタイプ ○ 信長・秀吉・家康 <p>秀吉の伝説</p> <ul style="list-style-type: none"> ○ ロマン見つけ ○ 大作戦を考えよう ○ 探す目的 ○ 探すもの ○ 場所 ○ まとめ方 ○ 情報収集 <p>わたしのなかの宮沢賢治を探ろう</p> <ul style="list-style-type: none"> ○ 宮沢賢治の作品を読もう ○ 情景や描写の変化に気をつけて ○ 読んだ作品から宮沢賢治という人にせまろう <p>個人メドレーに挑戦しよう</p> <ul style="list-style-type: none"> ○ クロール・平泳ぎをできるだけ長く泳ごう ○ 背泳ぎ・バタフライの25mに挑戦しよう <p>陸上競技選手権</p> <ul style="list-style-type: none"> ○ 短距離走 ○ 障害走 ○ 走り幅跳び ○ 走り高跳び <p>かけ(事故)の三要因を探ろう</p>	<p>8月</p> <p>こちらは炎の探偵事務所</p> <ul style="list-style-type: none"> ○ 数字や記号や言葉の推理を楽しもう <p>秀吉ロードを歩こう</p> <ul style="list-style-type: none"> ○ 激動の戦国時代を調べよう ○ 戦国の武将 ○ 君はどのタイプ ○ 信長・秀吉・家康 <p>秀吉の伝説</p> <ul style="list-style-type: none"> ○ ロマン見つけ ○ 大作戦を考えよう ○ 探す目的 ○ 探すもの ○ 場所 ○ まとめ方 ○ 情報収集 <p>わたしのなかの宮沢賢治を探ろう</p> <ul style="list-style-type: none"> ○ 宮沢賢治の作品を読もう ○ 情景や描写の変化に気をつけて ○ 読んだ作品から宮沢賢治という人にせまろう <p>個人メドレーに挑戦しよう</p> <ul style="list-style-type: none"> ○ クロール・平泳ぎをできるだけ長く泳ごう ○ 背泳ぎ・バタフライの25mに挑戦しよう <p>陸上競技選手権</p> <ul style="list-style-type: none"> ○ 短距離走 ○ 障害走 ○ 走り幅跳び ○ 走り高跳び <p>かけ(事故)の三要因を探ろう</p>	<p>9月</p> <p>こちらは炎の探偵事務所</p> <ul style="list-style-type: none"> ○ 数字や記号や言葉の推理を楽しもう <p>秀吉ロードを歩こう</p> <ul style="list-style-type: none"> ○ 激動の戦国時代を調べよう ○ 戦国の武将 ○ 君はどのタイプ ○ 信長・秀吉・家康 <p>秀吉の伝説</p> <ul style="list-style-type: none"> ○ ロマン見つけ ○ 大作戦を考えよう ○ 探す目的 ○ 探すもの ○ 場所 ○ まとめ方 ○ 情報収集 <p>わたしのなかの宮沢賢治を探ろう</p> <ul style="list-style-type: none"> ○ 宮沢賢治の作品を読もう ○ 情景や描写の変化に気をつけて ○ 読んだ作品から宮沢賢治という人にせまろう <p>個人メドレーに挑戦しよう</p> <ul style="list-style-type: none"> ○ クロール・平泳ぎをできるだけ長く泳ごう ○ 背泳ぎ・バタフライの25mに挑戦しよう <p>陸上競技選手権</p> <ul style="list-style-type: none"> ○ 短距離走 ○ 障害走 ○ 走り幅跳び ○ 走り高跳び <p>かけ(事故)の三要因を探ろう</p>
--	---	--	--	--	--

(入学式) (1年生を迎える会) (スタート集会) (スポーツフェスティバル)

セミナー決定 セミナータイム

<p>10月</p> <p>こちらは炎の探偵事務所</p> <ul style="list-style-type: none"> ○ 数字や記号や言葉の推理を楽しもう <p>秀吉ロードを歩こう</p> <ul style="list-style-type: none"> ○ 激動の戦国時代を調べよう ○ 戦国の武将 ○ 君はどのタイプ ○ 信長・秀吉・家康 <p>秀吉の伝説</p> <ul style="list-style-type: none"> ○ ロマン見つけ ○ 大作戦を考えよう ○ 探す目的 ○ 探すもの ○ 場所 ○ まとめ方 ○ 情報収集 <p>わたしのなかの宮沢賢治を探ろう</p> <ul style="list-style-type: none"> ○ 宮沢賢治の作品を読もう ○ 情景や描写の変化に気をつけて ○ 読んだ作品から宮沢賢治という人にせまろう <p>個人メドレーに挑戦しよう</p> <ul style="list-style-type: none"> ○ クロール・平泳ぎをできるだけ長く泳ごう ○ 背泳ぎ・バタフライの25mに挑戦しよう <p>陸上競技選手権</p> <ul style="list-style-type: none"> ○ 短距離走 ○ 障害走 ○ 走り幅跳び ○ 走り高跳び <p>かけ(事故)の三要因を探ろう</p>	<p>11月</p> <p>遊びの殿堂「カジノザウルス」をつくろう</p> <ul style="list-style-type: none"> ○ 一攫千金の世界を調べよう ○ カジノ、競馬、宝くじ、クイズ番組ゲームセンター ○ 推理作家になろう ○ 推理小説を紹介しよう ○ 推理小説について語り合おう ○ 短編推理小説づくりをする ○ 推理ドラマをつくろう <p>謎性雨は今/</p> <ul style="list-style-type: none"> ○ 水溶液の性質を利用 <p>地震の予知情報をしよう</p> <p>平和について考えよう</p> <ul style="list-style-type: none"> ○ 人間の歩みを知ろう ○ 戦争から戦後 ○ 核という言葉から ○ 核問題を考える ○ 修学旅行に行こう ○ 修学旅行について考える ○ 目的地について調べる ○ 修学旅行に行く ○ 平和公園でレクイエムを奏でる ○ 修学旅行をまとめる ○ 「平和資料館(ピーススクエア)」をつくろう <p>木版画で読書案内をしよう</p> <ul style="list-style-type: none"> ○ 「宮沢賢治生誕100年記念館」をつくろう <p>日本語の知恵を見つけよう</p> <p>いろいろなアンサンブルを楽しもう</p> <ul style="list-style-type: none"> ○ 衣服を大切に着ていく工夫 ○ 汚れの落とし方 <p>大会を開こう</p> <ul style="list-style-type: none"> ○ リレー ○ 競歩 ○ マラソン ○ 三段跳び ○ ソフトボール投げ ○ エアロビ投げ <p>バスケットボールを楽しもう</p> <ul style="list-style-type: none"> ○ 競技日程・ルールを決める ○ 試合をする <p>病気の三要因を探ろう</p> <p>健康な生活について考えよう</p>	<p>12月</p> <p>不思議な立体をつくって表そう</p> <ul style="list-style-type: none"> ○ 角柱と円錐 ○ 角柱と角錐、体積と表面積 <p>健康シンポジウムを開こう</p> <p>電気の発明・発見をしよう</p> <p>コスモラベル</p> <p>日本を紹介しよう</p> <ul style="list-style-type: none"> ○ 世界の出来事を紹介しよう ○ 生活の中の外国を見つけよう ○ 外国の人の交流会を開こう ○ 国際見本市を開こう ○ 文化や生活を比べよう ○ いろいろな国の食生活を調べる ○ 外国語から日本の文化を探ろう ○ 世界の音楽を聴こう ○ 各地の民族音楽を聴こう <p>言葉を大切に</p> <ul style="list-style-type: none"> ○ 敬語、漢語、和語、漢字の形と意味 <p>オーケストラに挑戦しよう</p> <ul style="list-style-type: none"> ○ 総合表現発表会 <p>衣服の知恵</p> <ul style="list-style-type: none"> ○ ファッションコンテスト <p>わたしのベース走</p> <ul style="list-style-type: none"> ○ 一定の速さを保ちながら走ろう <p>世界の国に挑戦しよう</p> <ul style="list-style-type: none"> ○ 世界のスポーツ文化にふれよう(個人選択) 	<p>1月</p> <p>重の測り方を工夫しよう</p> <ul style="list-style-type: none"> ○ 長さ、かさの測定の工夫 <p>世界のなかの日本人として考えよう</p> <ul style="list-style-type: none"> ○ 日本と世界の関係を探る ○ アジアの国々や太平洋近隣の国々を紹介する ○ 暮らしのなかの日本国憲法を紹介する ○ 一日国会議員になる <p>今自分にできることを考えよう</p> <ul style="list-style-type: none"> ○ いろいろなボランティアを探ろう ○ ボランティアに携わる人の願いを探る ○ ボランティア活動に参加しよう ○ ボランティアをみんなに呼びかけよう <p>わたしが好きになった人物を紹介しよう</p> <ul style="list-style-type: none"> ○ 世界のなかで ○ 歴史のなかで ○ 年表や新聞記事にまとめて <p>未来のわたしの伝記をつくろう</p> <ul style="list-style-type: none"> ○ 伝記を通して人生の生き方によれる ○ 作者や主人公の心情にせまる <p>未来のわたしへメッセージを送ろう</p> <ul style="list-style-type: none"> ○ 毛筆で表そう ○ 篆刻で表そう 	<p>2月</p> <p>未来のわたしを求めて～卒業に向かって～</p> <ul style="list-style-type: none"> ○ 卒業のテーマを考えよう ○ 卒業までの足跡を残そう、未来の夢を描こう ○ アルバム・文集・絵画 ○ 算数の卒業論文に挑戦しよう ○ 学習してきたことの集大成として ○ 卒業制作に取り組もう <p>チャレンジ学習をしよう</p> <ul style="list-style-type: none"> ○ 6年間の経験を生かして自分がやってみよう ○ 科学者にチャレンジ ○ 料理の達人にチャレンジ ○ 歴史評論家にチャレンジ ○ 俳優にチャレンジ ○ 番組作りでチャレンジ ○ 未来の家庭生活を考えよう ○ 将来の家庭生活を楽しむために <p>卒業表現発表をしよう</p> <ul style="list-style-type: none"> ○ 卒業表現発表の計画を立てよう ○ 卒業表現発表の準備をしよう ○ 家の人への招待状 ○ 卒業制作の完成 ○ 卒業表現発表をしよう ○ チャレンジ学習の発表をする ○ 卒業表現をする(6年間を紹介する)(卒業演奏をする) ○ 卒業制作を披露する ○ 自分たちの卒業式をする ○ 門出をともに祝う ○ 胸を張って卒業する 	<p>3月</p> <p>未来のわたしを求めて～卒業に向かって～</p> <ul style="list-style-type: none"> ○ 卒業のテーマを考えよう ○ 卒業までの足跡を残そう、未来の夢を描こう ○ アルバム・文集・絵画 ○ 算数の卒業論文に挑戦しよう ○ 学習してきたことの集大成として ○ 卒業制作に取り組もう <p>チャレンジ学習をしよう</p> <ul style="list-style-type: none"> ○ 6年間の経験を生かして自分がやってみよう ○ 科学者にチャレンジ ○ 料理の達人にチャレンジ ○ 歴史評論家にチャレンジ ○ 俳優にチャレンジ ○ 番組作りでチャレンジ ○ 未来の家庭生活を考えよう ○ 将来の家庭生活を楽しむために <p>卒業表現発表をしよう</p> <ul style="list-style-type: none"> ○ 卒業表現発表の計画を立てよう ○ 卒業表現発表の準備をしよう ○ 家の人への招待状 ○ 卒業制作の完成 ○ 卒業表現発表をしよう ○ チャレンジ学習の発表をする ○ 卒業表現をする(6年間を紹介する)(卒業演奏をする) ○ 卒業制作を披露する ○ 自分たちの卒業式をする ○ 門出をともに祝う ○ 胸を張って卒業する <p>わたしのベース走</p> <ul style="list-style-type: none"> ○ 一定の速さを保ちながら走ろう <p>世界の国に挑戦しよう</p> <ul style="list-style-type: none"> ○ 世界のスポーツ文化にふれよう(個人選択)
---	---	---	--	--	--

(ふれあいフェスティバル) (総合表現発表会) (総まとめ集会) (卒業式)

セミナータイム セミナータイム発表会

7. 新潟県上越市立大手町小学校 (平成9年度研究)

研究題目 自分を開発し続ける子どもを育む教育課程の創造
カリキュラムの特色

研究の概要 7単元群で構成されるカリキュラム
既存教科の枠組みを、7単元群に再編し、「生きる力」としての自立・創造
共生する力を育てる教育課程の編成を目指す研究

<資料抜粋>

『報告書16p』

単元群の目標と内容構成の特色

単元群の目標	内容構成の特色
生活・環境 身の周りの自然や社会の事象を幅広い視野からとらえ、願いや欲求を実現したり課題を解決したりしながら、主体的に追求しようとする実践的態度と行動力を育てる。	子どもの生活や身の周りの環境を学習対象とし、見る・触る・遊ぶ・探検、調査、追求、探究といった観点から活動を構成する。
言語 自分と言語とのかわりやを基にその意味や役割を探り、適切な言葉を選びながら言語感覚を磨く。	想像力、思考力を高める読書や言葉の意味や役割を体験的に理解するコミュニケーション能力を養う活動を重視する。
数量・図形 事物や現象を数理的にとらえ、数量や図形への見方を広げながら、数理的な処理のよさやおもしろさを見いだそうとする能力や態度を育てる。	子どもの生活や体験、活動に即して論理的な思考を育成し、ITも取り入れて学習の習熟を図る活動を展開する。
総合科学 身近な事象に問題を見だし、その特徴や仕組み、変化や規則性などを明らかにすることを通して、自然や社会・歴史に対する理解を深めるとともに、科学的客観的な見方や考え方を養う。	身近な地域の事象を多面的にとらえ、さまざまな情報を活用しながら科学の基礎的な事項の習得を目指す活動から構成する。
創造表現 自分の思いを表現したり、様々な表現を鑑賞したりする創造的な活動を通して、豊かな感性や表現力を培い、表現のよさを味わおうとする態度を養う。	主に音やものを素材とした表現を大切にしながら、言語表現や身体表現といった様々な表現方法も取り入れた総合的な表現活動を含めて構成する。
身体・健康 自分の生活や身体の仕組み、変化を知り自ら試し高める活動を通して、健康の保持増進と体力の向上を図るとともに、ライフスキルを高めながら、よりよい生活を築く態度と能力を育てる。	自分の健康についての見方、考え方を深め、実践するために、食、運動、衛生・生活リズムの領域を関連付けるとともに、習得したスキルの日常化を図る活動を構成する。
自分・集団 自分を見つめ、人間としての生き方や自分についての見方・考え方を深めるとともに、人に働き掛け、共に生きようとする姿勢を育む。	家族や友達、地域の人びと、自らの信憑性を基に生きる人々とふれあう活動や、異学年の全校縦割りのグループを中核にして人に働き掛ける活動を構成する。

	1年	2年	3年	4年	5年	6年
生活・環境	102	105	140	140	140	140
言語	238	245	210	210	175	175
数量・図形	136	175	175	175	175	175
総合科学			70	105	140	140
創造表現	102	105	105	105	105	105
身体・健康	102	105	105	105	140	140
自分・集団	85	88	123	123	123	123
総時数	765	823	928	963	998	998

『報告書20p』

経営の基本方針

- 主体的な追求活動を生かす息の長い総合的な活動を構想する。
- 地域を見つめ、地域の事象や人と出会う活動展開を図る。
- テーマ性や内容、活動など、具体的な活動の方向を明確にする。

生活・環境単元群
経営案

『報告書23p』

		発 達 特 性			
		<1・2年>	<3・4年>	<5・6年>	
		<ul style="list-style-type: none"> ・様々な事象を主観的にとらえ多くのことに興味を抱く。 ・自分のしたいことに夢中になって取り組む。 	<ul style="list-style-type: none"> ・具体的な事実を多角的にとらえ、関心をもつ。 ・自分なりのやり方を考えたり他の考えを取り入れたりしながら、試そうとする。 	<ul style="list-style-type: none"> ・様々な事象の関係を総合的にとらえ考えようとする。 ・活動の方向性や見通しを考えながら取り組もうとする 	
自立	自らの思いや問いを基に事象に働き掛け、試行錯誤を繰り返しながら自分の願いを自分の力で実現していこうとする資質・能力	様々な事象を感覚的にとらえ、夢中になって活動する。	様々な事象に興味や関心をもち、継続的に対象に働きかけようとする。	活動の方向性や課題解決の見通しをもって、計画的に活動を進めようとする。	学年における期待する子ども像
創造	多面的に対象を見つめ、自分なりの方法を考えたり必要な情報を収集したりして、自分の考えを深めていく資質・能力	興味をもったことに対して、これまでの経験を生かし、自分なりの思いをもって取り組む。	願いを達成するために、いろいろなやり方を調べたり工夫したりして活動に取り組む。	課題解決に必要な情報を収集し、自分の考えを深めながら活動に取り組む。	
共生	事象のもつ意味をとらえて自分の考えをまとめたり立場が違う人の考えを認めたりする中で、対象とのかかわりを深めていく資質・能力	友達とかかわりながら、遊びその中で様々な事象への気づきを深めていこうとする。	自分の生活を見つめ対象のもつ意味を多面的に探っていこうとする。	自分の在り方や生き方を見つめ、対象のもつ意味を総合的に探り、自他の考えを練り上げていこうとする。	
単元構想の視点		諸感覚を動員した具体的・直接的にかかわる活動を構成する。	身近な地域の生活に触れたり、目的をもって対象に働き掛けたりして、対象のもつ意味を多面的に探る活動を構成する。	自分なりの視点から事実を集積し、対象のもつ意味を総合的に探り、自分の考えを練り上げる活動を構成する。	

条件整備	<ul style="list-style-type: none"> ・子どもの思いが生き、豊かな発想が生まれる学習環境や教材教具を準備する。 ・子どもが思い切り活動できる時間の運用と活動エリアを確保し、意識の連続を図る。 ・地域の素材や人材を開拓し、追求活動に取り込む。 	実践の方策	<ul style="list-style-type: none"> ・多様な活動の組合せにより、多面的な追求を促す。 ・自分なりのとらえや思いを重視し、体験活動や思考活動を結び付ける。 ・他の単元群と関連を図り、意識の連続や学びの広がりを生かす。
------	---	-------	---

経営の基本方針

- ・多面的な気づきが生まれる事象の提示が可能な単元を構想する。
- ・情報活用能力の育成を図る学習活動を位置付ける。
- ・国際理解教育に立つ地域の歴史や伝統文化を活用する。

総合科学単元群
経営案

『報告書28p』

		発 達 特 性		
		<3・4年>	<5・6年>	
自立 創造 共生	事象の中から自分なりの課題を見付け、解決しようとして取り組む資質・能力	身近な事象に興味や関心を持ち自分からかかわろうとする。	身近な事象とのかかわりの中から問題を見付け、自分なりに追求しようとする。	学年における期待する子ども像
	事実や情報を客観的にとらえ総合的に整理したり判断したりして課題を解決する資質・能力	身近な事象の違いや共通点をとらえ、自分なりに解決していく。	さまざまな事実や情報をもとに事実をとらえたり関係を整理したりして、考察していく。	
	これまでによりよい社会を目指して新たなものをつくり出してきたことに気づき、自分の生活や社会を振り返る資質・能力	活動をもとに、自分の身の回りの生活に目を向ける。	活動したことから、自分の生活や社会に目を向ける。	
単元構想の視点		身近な事象や離れた地域と、主体的に繰り返しかかわる活動を組織する。	より広い視野に立って考えたり内容を相互に関連させて考えたりできる活動を組織する。	

条件整備	<ul style="list-style-type: none"> ・自由試行の場を設定するなど、一人一人の子どもの追求活動を保障する。 ・教材、教具の補充や整備をする。 ・地域素材の教材化を一層進める。 ・上越市や新潟県などの地域資料を充実する。 ・コンピュータ活用に伴う環境整備と、一人一人の子どもが扱う時間と場を確保する。
------	--

実践の方策	<ul style="list-style-type: none"> ・問題別、方法別などによる複線型活動の構想と展開 ・追求する視点の拡大と促す情報メディアの活用
-------	--

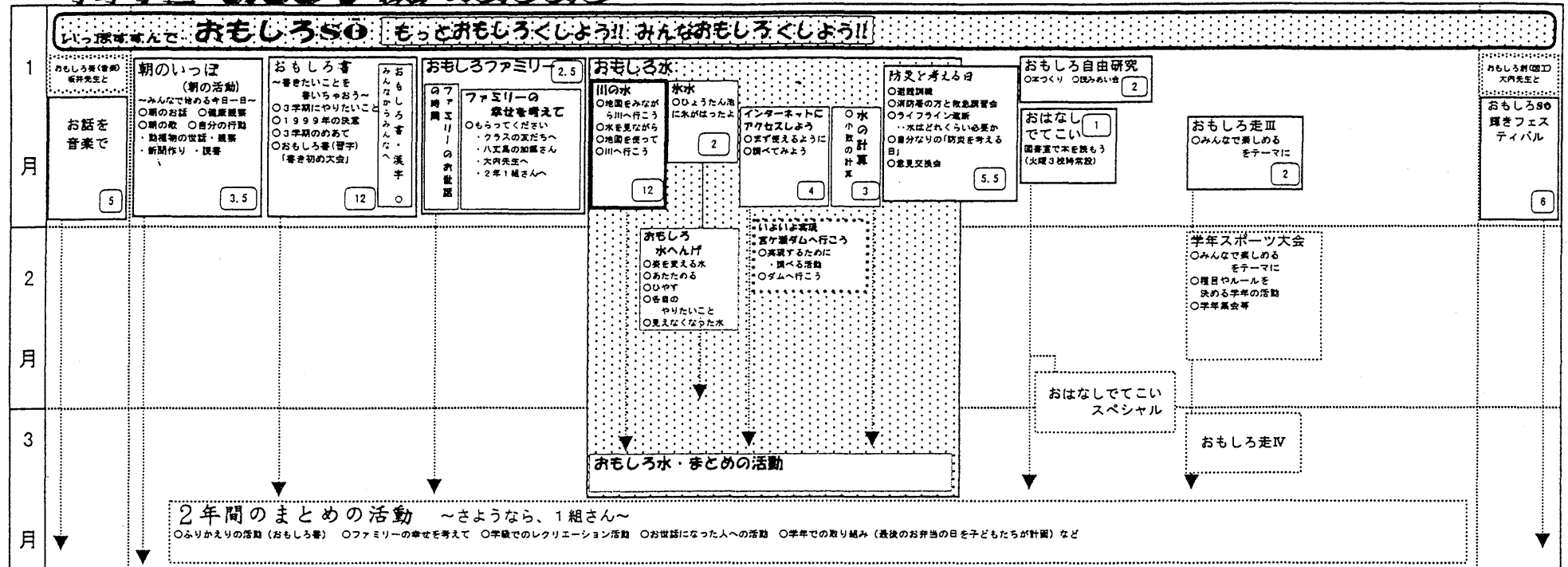
出典 新潟県上越市立大手町小学校 平成9年度報告書

4年1組 おもしろS.O.のあしあと

1998年度

4年生でも「いっぱいぼ」

4月	音楽	朝のいっぱいぼ (朝の活動) ～自分たちで始める一日～ ○朝の挨拶 ○朝の歌 ○自分の行動 ○動物の生活・観察 ○新聞作り・読書・ハム作り ○新しい音が生まれたよ ○モルモットの赤ちゃん ○草と夏と虫の動物たち 1-(1)(2), 2-(1)(2)	「いっぱいぼ」から4年生へ! 出会いと別れを大切にす。4月: 2-(1)(2)(3), 4-(1) (20)	3年生との出会い「3年生となかよし」 ・ようこそ背へーん(二週) ・「新しくかぶってね、二週」 ・実行委員を中心に計画・学年集会・ハイキングと別荘渡し ・「離れの生活がんばって1～2年生を喜ばせよう」	お世話になった先生方へ 「さようならの気持ちこめて」 ・お手紙やプレゼント作り 1年生との出会い 入学式準備・入学式	おはなし でてこい 国書室で本を読もう 10	木をつかっ て何の木 気にな るいろ つくろ う」		
	ことば リズム	朝のいっぱいぼ (朝の活動) ～自分たちで始める一日～ ○朝の挨拶 ○朝の歌 ○自分の行動 ○動物の生活・観察 ○新聞作り・読書・ハム作り ○新しい音が生まれたよ ○モルモットの赤ちゃん ○草と夏と虫の動物たち 1-(1)(2), 2-(1)(2)	「いっぱいぼ」から4年生へ! 出会いと別れを大切にす。4月: 2-(1)(2)(3), 4-(1) (20)	3年生との出会い「3年生となかよし」 ・ようこそ背へーん(二週) ・「新しくかぶってね、二週」 ・実行委員を中心に計画・学年集会・ハイキングと別荘渡し ・「離れの生活がんばって1～2年生を喜ばせよう」	お世話になった先生方へ 「さようならの気持ちこめて」 ・お手紙やプレゼント作り 1年生との出会い 入学式準備・入学式	おはなし でてこい 国書室で本を読もう 10	木をつかっ て何の木 気にな るいろ つくろ う」		
5月	ことば リズム	夢真緒 (学年での取り組み) ○学年集会 ○各委員の活動 ○係ごとの打ち合わせ ○夢真緒学年発表の練習 1-(1)(2)(4), 2-(1)(3), 3-(1)(1), 4-(1)(2)(4)	夢真緒 (クラスの取り組み) 真緒へ行こう ○下見に行こう ○真緒の地図 ○真緒の人々の暮らし ○地図上の距離と道のり ○お店調べ ○約具店・実店舗 ○料理店・施設 「方位磁針を使って」	地図を使って ○真緒の地図の見方・応用 ○真緒の地形 ○真緒の人々の暮らし ○地図上の距離と道のり 「距離メーターを使って」 ○あっちむいて方位 「方位磁針を使って」	距離と時間 ○自分で歩いて ・歩く時間 と歩いた距離 ・歩いたら何分? ○時間の測定 ○距離の測定	夢真緒 (グループ・個人での取り組み) ○歌やマークのアイデアを出そう ・「ぼくわたしの夢真緒シンボルマーク」 ・「テーマソングに入りたい言葉」 ○真緒祝賀会開催・下見場所 ○グループ決め・決めの・計画の話し合い ・集り物調べ (JTB・バス) ・計画表作り ・係の仕事 ○お店調べ (約具店・実店舗・料理店・施設) ○パソコンを使って調べよう・「夢真緒」ソフトを使って ○夢真緒学年発表の練習・発表内容についての話し合い 1-(1)(2)(4), 2-(1)(3), 3-(1), 4-(1)(2)(4)	かけあしの いっぱいぼ ○体育館の練習 ・使った遊園地作り ○サッカー大会 ルールを決めよう ○実習の先生と 新しい遊び作り 「魔法ゲーム」 2-(3)	計算でいっぱいぼ ○3位数×2位数 ○3位数×3位数 ○3位数÷2位数 ○あまり ○大きな数(億) の和・差 ○だいたい ○小数の和・差 24	
	ことば リズム	夢真緒 (学年での取り組み) ○学年集会 ○各委員の活動 ○係ごとの打ち合わせ ○夢真緒学年発表の練習 1-(1)(2)(4), 2-(1)(3), 3-(1)(1), 4-(1)(2)(4)	夢真緒 (クラスの取り組み) 真緒へ行こう ○下見に行こう ○真緒の地図 ○真緒の人々の暮らし ○地図上の距離と道のり ○お店調べ ○約具店・実店舗 ○料理店・施設 「方位磁針を使って」	地図を使って ○真緒の地図の見方・応用 ○真緒の地形 ○真緒の人々の暮らし ○地図上の距離と道のり 「距離メーターを使って」 ○あっちむいて方位 「方位磁針を使って」	距離と時間 ○自分で歩いて ・歩く時間 と歩いた距離 ・歩いたら何分? ○時間の測定 ○距離の測定	夢真緒 (グループ・個人での取り組み) ○歌やマークのアイデアを出そう ・「ぼくわたしの夢真緒シンボルマーク」 ・「テーマソングに入りたい言葉」 ○真緒祝賀会開催・下見場所 ○グループ決め・決めの・計画の話し合い ・集り物調べ (JTB・バス) ・計画表作り ・係の仕事 ○お店調べ (約具店・実店舗・料理店・施設) ○パソコンを使って調べよう・「夢真緒」ソフトを使って ○夢真緒学年発表の練習・発表内容についての話し合い 1-(1)(2)(4), 2-(1)(3), 3-(1), 4-(1)(2)(4)	かけあしの いっぱいぼ ○体育館の練習 ・使った遊園地作り ○サッカー大会 ルールを決めよう ○実習の先生と 新しい遊び作り 「魔法ゲーム」 2-(3)	計算でいっぱいぼ ○3位数×2位数 ○3位数×3位数 ○3位数÷2位数 ○あまり ○大きな数(億) の和・差 ○だいたい ○小数の和・差 24	
6月	ことば リズム	夢真緒Ⅱ ○学年発表委員会(学習発表) ○ふりかえり ○親子作り・グループ ことば原稿を作ろう ○お世話になった人へ 手紙や色紙作り ○夢真緒と離れの生活 真緒と離れを比べて ○真緒へお礼に行こう ○真緒と江ノ島 海と島で比べてみよう 2-(1)(4), 3-(1), 4-(1)(5)	心に植える おもしろ草 ○心のようすを 描いてみよう ○育てる水って?	ローマ字 4	理科室がおもしろそう ○理科室探検 ・おもしろそうな物を探そう ○双眼鏡体験装置を使って観察しよう	おもしろTani ○どっちが釣れる? 真緒と離れの島・釣り場調べ ○釣り道具・魚調べ ○行き先の話し合い江ノ島へ ○おもしろ Tani in Enoshima グループ決め・計画・お店調べ (和田約具店) 釣りに出かけよう 2-(1)(2)(3), 3-(1), 4-(5)	おもしろ草 ーおもしろファミリー ○太陽農場へお引っ越し・植え込み ○おもしろ草のたね・たね調べ・たねはどこから来るの? たね探し ○おもしろ草ファミリー ○太陽農場のお世話 ○「全部でファミリー」 3-(1)(2), 4-(2)	平行と垂直 ○三角定規を 使って直線を書こう ○二つの直線と角・垂 直と平行 ○いろいろな形 ○同じ形を書こう 12	「みんなの 夢、マ ワールド」
	ことば リズム	夢真緒Ⅱ ○学年発表委員会(学習発表) ○ふりかえり ○親子作り・グループ ことば原稿を作ろう ○お世話になった人へ 手紙や色紙作り ○夢真緒と離れの生活 真緒と離れを比べて ○真緒へお礼に行こう ○真緒と江ノ島 海と島で比べてみよう 2-(1)(4), 3-(1), 4-(1)(5)	心に植える おもしろ草 ○心のようすを 描いてみよう ○育てる水って?	ローマ字 4	理科室がおもしろそう ○理科室探検 ・おもしろそうな物を探そう ○双眼鏡体験装置を使って観察しよう	おもしろTani ○どっちが釣れる? 真緒と離れの島・釣り場調べ ○釣り道具・魚調べ ○行き先の話し合い江ノ島へ ○おもしろ Tani in Enoshima グループ決め・計画・お店調べ (和田約具店) 釣りに出かけよう 2-(1)(2)(3), 3-(1), 4-(5)	おもしろ草 ーおもしろファミリー ○太陽農場へお引っ越し・植え込み ○おもしろ草のたね・たね調べ・たねはどこから来るの? たね探し ○おもしろ草ファミリー ○太陽農場のお世話 ○「全部でファミリー」 3-(1)(2), 4-(2)	平行と垂直 ○三角定規を 使って直線を書こう ○二つの直線と角・垂 直と平行 ○いろいろな形 ○同じ形を書こう 12	「みんなの 夢、マ ワールド」
7月	ことば リズム	1学期のふりかえり ○心に育つおもしろ草 ○1学期のふりかえり ○夏休み・2学期の動物植物 ○みんなで遊ぶよ ○大掃除 1-(1)(3)(5), 2-(4), 3-(1), 4-(2)(4)	おもしろSui (水) ○土から探して、他に大切なものは何だろう? ○みんなの知っていること・疑問ー各自の調べ学習ー出し合おう ○水について学習しようー話し合おう ○2学期へ向けて、みんながやりたい「おもしろSui」 1-(3), 2-(3)	おもしろファミリーの夏休み ○みんな!! ファミリーが増えたよ ○自分のファミリーのお世話をしよう	おもしろSui (水) ○土から探して、他に大切なものは何だろう? ○みんなの知っていること・疑問ー各自の調べ学習ー出し合おう ○水について学習しようー話し合おう ○2学期へ向けて、みんながやりたい「おもしろSui」 1-(3), 2-(3)	おもしろファミリーの夏休み ○みんな!! ファミリーが増えたよ ○自分のファミリーのお世話をしよう	おもしろSui (水) ○土から探して、他に大切なものは何だろう? ○みんなの知っていること・疑問ー各自の調べ学習ー出し合おう ○水について学習しようー話し合おう ○2学期へ向けて、みんながやりたい「おもしろSui」 1-(3), 2-(3)	おもしろファミリーの夏休み ○みんな!! ファミリーが増えたよ ○自分のファミリーのお世話をしよう	空想パノ ラマ ワールド」
	ことば リズム	1学期のふりかえり ○心に育つおもしろ草 ○1学期のふりかえり ○夏休み・2学期の動物植物 ○みんなで遊ぶよ ○大掃除 1-(1)(3)(5), 2-(4), 3-(1), 4-(2)(4)	おもしろSui (水) ○土から探して、他に大切なものは何だろう? ○みんなの知っていること・疑問ー各自の調べ学習ー出し合おう ○水について学習しようー話し合おう ○2学期へ向けて、みんながやりたい「おもしろSui」 1-(3), 2-(3)	おもしろファミリーの夏休み ○みんな!! ファミリーが増えたよ ○自分のファミリーのお世話をしよう	おもしろSui (水) ○土から探して、他に大切なものは何だろう? ○みんなの知っていること・疑問ー各自の調べ学習ー出し合おう ○水について学習しようー話し合おう ○2学期へ向けて、みんながやりたい「おもしろSui」 1-(3), 2-(3)	おもしろファミリーの夏休み ○みんな!! ファミリーが増えたよ ○自分のファミリーのお世話をしよう	おもしろSui (水) ○土から探して、他に大切なものは何だろう? ○みんなの知っていること・疑問ー各自の調べ学習ー出し合おう ○水について学習しようー話し合おう ○2学期へ向けて、みんながやりたい「おもしろSui」 1-(3), 2-(3)	おもしろファミリーの夏休み ○みんな!! ファミリーが増えたよ ○自分のファミリーのお世話をしよう	空想パノ ラマ ワールド」



研究題目 心の育ちを願う総合学習
 -ひらかれた人・空間・時間の中で-
 カリキュラムの特色
 ・総合学習を核とし教育課程を創造する
 ・「足跡カリキュラム」

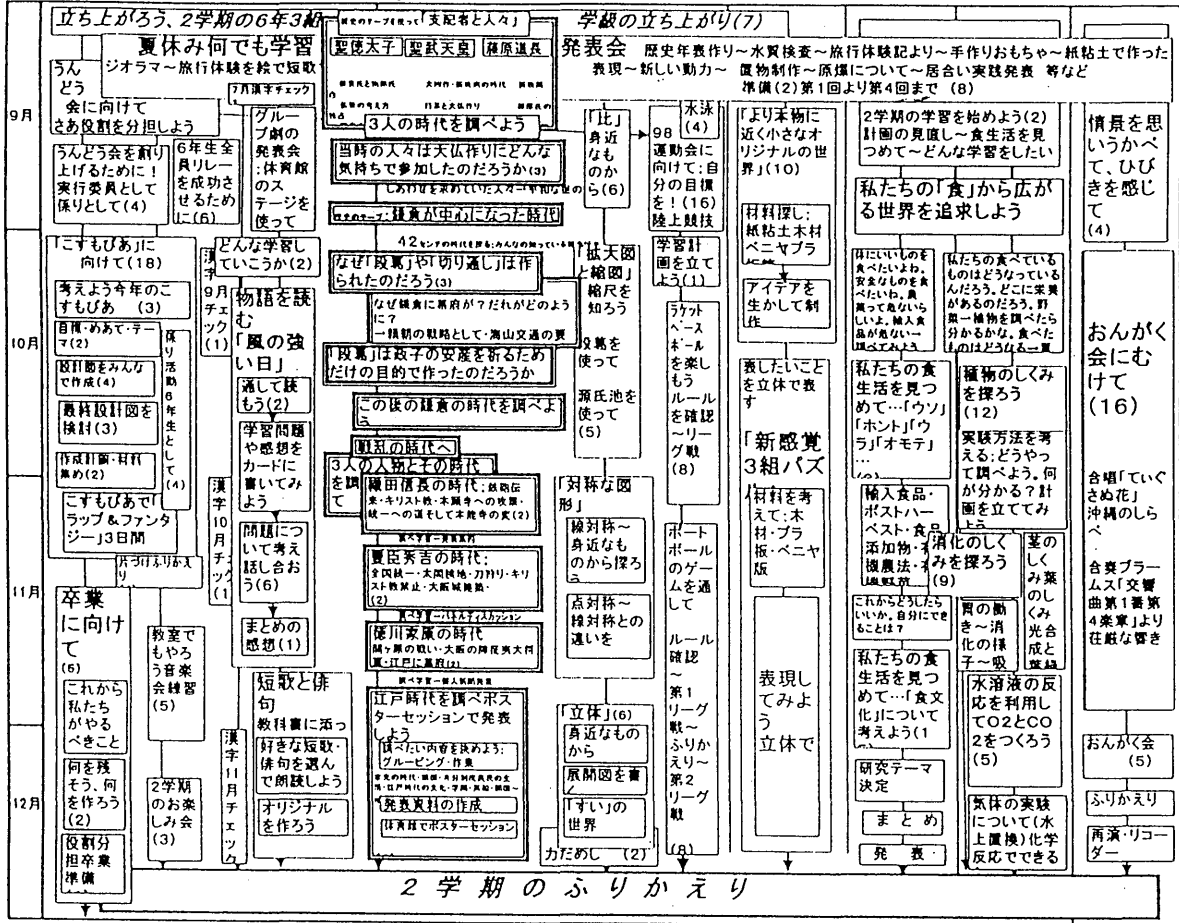
研究の概要 学校の教育課程全体を総合学習として位置づけ、子ども・学級ごとの学びの
 跡を「足跡カリキュラム」として作成し、それを基にカリキュラムを学級ご
 とに編成していく研究

注 平成10年度4年3学期、平成10年度6年3学期の2月以降の部分は、指導計画な
 ので点線とした

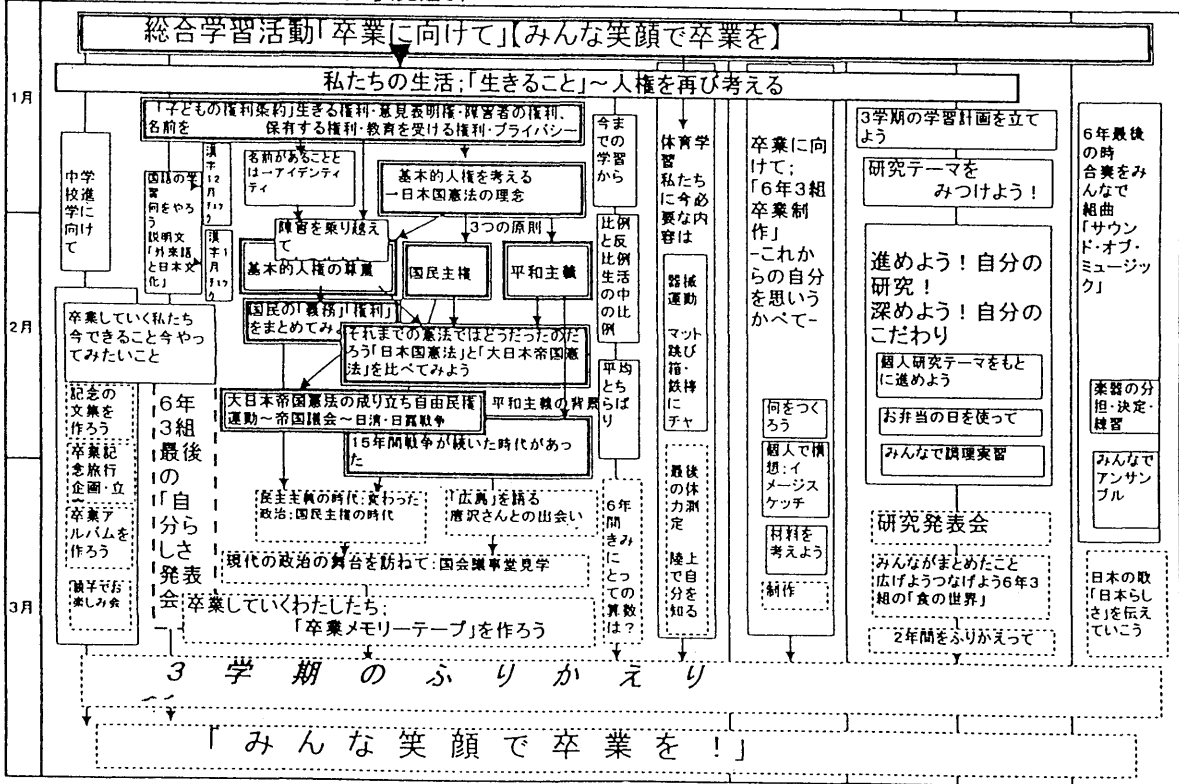
1997年度5年3組の「あしあと」



1998年度6年3組第2学期の「あしあと」



1998年度6年3組3学期の「あしあと」(見通し)



出典 ・ 横浜国立大学教育人間科学部鎌倉小学校
平成9・10年度『指導案・資料・あしあと等ファイル』
・『心の育ちを願う総合学習』 明治図書 1998年刊

9. 宮城教育大学附属中学校 (平成7年度研究)

研究題目 新しい教育課程の創造－関連・統合化を図った教育課程の開発
カリキュラムの特色

研究の概要 新教科「芸術科」「生活文化科」の創設
音楽・美術を統合しての芸術科。技術・家庭、保健体育科の保健分野、社会科と理科の一部を統合して生活文化科を創設。各教科間のカリキュラムの連携の研究。

<資料抜粋>

平成8年度 関連・統合化を図った

『報告書64p～65p』

題材(教材)配列表 1年 (□内は特に生活及び学年間・教科間の関連・統合化を図った題材である。)

月 教科	4 (3)	5 (3)	6 (4)	7 (7)	8 (1)	9 (3)
社会	地理	世界の国々例	人々の生活と環境 <例>・ゲルでの生活 ・ロングハウスの生活 ・イヌイットの生活 ・ペルーの生活 ・世界の人々の生活について調べよう (生・生文)		様々な地域 <例> アメリカ合衆国 (生・生文)	
	歴史	人類のはじまり 日本のはじまり (生・生文)	古代の文明 (生・国・芸)	日本の国のはじまり	律令国家の形成と展開 (生・生文)	平安の都と武士のおこり
生活文化	生活の技術 (生産技術と生活)例 ・生活を支える植物を栽培しよう例					
	日常生活 (食べる)(社・理) ・飲む例 ・食べる例					
	生活の技術 (動く)例 ・身体を支える骨 ・体を動かす筋肉 ・循環する働きの上 (命を救う方法) (眠る)例 (食べる)例 ・着衣の水難体験 ・眠りの中身 ・排泄する					

10 (3)	11 (3)	12 (4)	1 (7)	2 (1)	3 (3)
様々な地域 <例>・中国				世界から見た日本 ・中・南アフリカ (生・国)	
武家政治のはじまり	古代から中世の仏教文化	内乱と下剋上の時代	世界の中のヨーロッパ (生・芸)	戦国の世と武家の全国統一	江戸幕府の政治と産業 (生・生文)
生活の技術 (情報と生活)(社・数) ・情報処理の技術を身につけよう					
日常生活 (着る)例 ・あたたかく着る例・繊維から糸へ・糸から布へ・布から衣服へ・着こなし					
生活の技術 (けがへの対応) (身体からの信号) ・倒れたとき ・応急処置の意義と方法 ・人工呼吸と心臓マッサージ ・創傷・ねんざ・やけど ・具合が悪い ・発熱 ・止血と輸血					

題材(教材)配列表 2年 (□内は特に生活及び学年間・教科間の関連・統合を図った題材である。)

月 教科	4 (3)	5 (3)	6 (4)	7 (2)	8 (1)	9 (3)
社 会	身 近 な 地 域 ・地図の約束 ・地図作業 ・身近な地域の調査(生・芸・生文・理・数)		日 本 の 北 東 部 ・東北地方 ・北海道地方(生・生文・理)		日本の南西部 ・九州地方 (理・生文)	
	ヨーロッパの近代化と世界 (芸・生文)		近 代 国 家 へ の 歩 み (生)		日本の大體 侵略 (生・国)	
生 活 文 化	生活技術分界 (道具と生活)(社・芸) ・道具の進歩 ・生活に役立つものを作ろう		生活の技術 (生産技術と生活)(社) ・工業技術と生活の関連を調べよう			
	生活文化分界 生活と家族 (いのち)(理・社)・生きていくこと ・生命の誕生秘		・子どもから大人へ ・共に生きるⅠ ・共に生きるⅡ ・老化と死			

10 (4)	11 (4)	12 (3)	1 (2)	2 (4)	3 (2)
日本の南西部 ・中国・四国地方	日 本 の 中 央 部 ・近畿地方 ・中部地方 ・関東地方圏			世界の 結びつき	
日本の大體侵略 (生・国)	社会の 変化と文化 史跡	第 一 次 世 界 大 戦 と 日 本 国	第 二 次 世 界 大 戦 と 日 本 (生・国)		
日常生活 (住む)(社・理・芸) ・いろいろな住まい ・安全で快適な住まい構 ・住まいの役割					
生活の技術 (病気の予防) ・歯の病気(ブラッシングの実習も含む)		・目の病気 ・耳や鼻の病気 ・かぜ			

題材(教材)配列表 3年 (□内は特に生活及び学年間・教科間の関連・統合を図った題材である。)

月 教科	4 (3)	5 (3)	6 (4)	7 (2)	8 (1)	9 (3)
社 会	経済のしくみと生活 ・くらしと経済 ・企業と生産 ・国民生活と環境 ・貨幣と流通 ・国民生活と福祉 (生・生文)		人間の尊重と日本国憲法 ・人間の尊厳と憲法 ・日本国憲法と基本的人権 (生・生文)		民主政治と三権分立 ・住民の生活と地方 自治(生・生文)	
	生活技術分界 食生活(社・理) ・いろいろな食品 ・世界の食に目を向けよう ・日本の食について考えよう ・食事を作ろう構		生活文化分界 エネルギー(社・理) ・エネルギーの利用と環境 ・資源とエネルギー		人間と情報(社・英) ・情報化社会に生きる ・情報化社会の問題点	

10 (4)	11 (4)	12 (3)	1 (2)	2 (4)	3 (2)
民主政治と三権分立 ・選挙と政党 ・国会 内閣 裁判所	現代社会と日本経済		国際社会と平和主義 (公民と歴史の統合)		社会科を学習して
課題学習 (国・社・理・芸・ス、健) ・テーマの決定と研究の 計画 ・調査研究 ・まとめ ・発表	からだ ・体温調節と変化を たしかめる実験 ・自律神経 ・血圧測定 ・成人病	人間と自然環境(社・理) ・人間の生産活動と環境 ・生活廃棄物と環境	家族(社) ・結婚 ・子の誕生と成長 ・家計 ・家族の形態とその変化 ・家族のはたらき		

10. 福岡教育大学教育学部附属福岡中学校（平成9年度研究）

研究題目 豊かな人間性を育む教育課程の創造

－「生き方」と「学び方」の統合を通して－

カリキュラムの特色

- ・教科学習＋総合学習＋特別活動の3領域
- ・総合学習は、生き方学習・WORLD TIME・卒業研究の3つから構成

研究概要 従来の教育課程を総合学習の視点から見直し、新たな教育課程の編成を目指す研究。

<資料抜粋>

【本校の三つのタイプの総合学習の特徴】 『報告書11p』

	生き方学習	WORLD TIME	卒業研究
実施学年	全学年	全学年（合同）	第3学年
年間実施単位時間	70（3年は35）	35	35
主な活動形態	学級 学級内グループ	個人 異学年グループ 学年内グループ	個人 学級内グループ 学年内グループ
主な指導・支援者	学年担当教師	講座担当教師	全教職員
体験活動場所の決定者	教師と生徒	生徒	生徒
体験活動場所への引率	原則として必ず教師が引率する	特に引率を行わないが、連絡が必要な場所は事前に教師が連絡を取っておく	特に引率を行わないが、連絡が必要な場所は事前に教師が連絡を取っておく

【第3年次】

『報告書13p』

（年間総授業時間数 1015時間）

区分	教 科									総 合 学 習			特活
	国語	社会	数学	理科	音楽	美術	保体	技家	英語	WT	生き方	卒研	
1 本 年 校	157	123	87	88	70	70	105	70	105	35	70	/	35
	4.5	3.5	2.5	2.5	2	2	3	2	3	1	2	/	1
2 本 年 校	123	122	123	87	52	53	105	70	140	35	70	/	35
	3.5	3.5	3.5	2.5	1.5	1.5	3	2	4	1	2	/	1
3 本 年 校	123	87	123	122	52	53	105	70	140	35	35	35	35
	3.5	2.5	3.5	3.5	1.5	1.5	3	2	4	1	1	1	1

	「生き方学習」の目標	設定した主題	活動計画と活動時間数
平成7年度	<p>「TOUGH TIME」(現「生き方学習」)</p> <p>○様々な人々との出会いを体験し、その人々の「生き方」に学びながら、生徒一人一人がこれからの「人間としての望ましい生き方・在り方」を探究する。</p> <p>○「生き方」に対する見方・考え方を体験活動を通して広げたり深めたりしながら生徒一人一人が自己の「生き方の指針」をつかむ。</p>	<p>(1) 1年前期「私の世界を見つめて」(全主題の概観)</p> <p>(2) 1年後期「人と人との輪を広げよう」(福祉)</p> <p>(3) 2年前期「身近な自然・環境を考える」(環境)</p> <p>(4) 2年後期「伝統ある福岡・博多の街」(伝統文化)</p> <p>(5) 3年前期「情報化社会を生きる」(情報)</p> <p>(6) 3年後期「国際人として」(国際理解)</p>	<p>①導入の道徳(1)</p> <p>②導入の学級活動(1)</p> <p>③体験活動の計画立案(1)</p> <p>④体験活動(3×3回)</p> <p>⑤体験活動のまとめ(3)</p> <p>⑥収束の道徳(1)</p> <p>⑦収束の学級活動(1)</p> <p>計17時間</p> <p>※()は時間数を表す。</p>
平成8年度	<p>○自分を取り巻く自然や文化社会や人々と積極的にかかわりを持ち、お互いが共存・共生できる状態を創り出していく資質や能力を育成する。また、いろいろな人の生き方を通して自分なりの生き方を見いだしていけるようにする。</p>	<p>(1) 1年前期「Friendship in 附中」(仲間)</p> <p>(2) 1年後期「高齢化社会と私たち～お年寄りのためにできること」(福祉)</p> <p>(3) 2年前期「水と人間」(環境)</p> <p>(4) 2年後期「伝統ある福岡・博多の街」(伝統文化)</p> <p>(5) 3年前期「地球の未来は大丈夫?～世界の食糧問題について考えよう」(国際理解)</p>	<p>①体験活動の事前指導(2)</p> <p>②体験活動(3×3回)</p> <p>③体験活動のまとめ(3)</p> <p>④体験活動の報告会(3)</p> <p>⑤体験活動の振り返り(1)</p> <p>⑥課題を把握する(6)</p> <p>⑦課題解決の方法を考える(5)</p> <p>⑧実行に移し、課題解決を行う(6)</p> <p>計35時間</p> <p>※①～④=体験活動 ⑤～⑧=総合学習 ①～⑧で「生き方学習」と呼んでいた。 ※それぞれの時間数は大まかな目安である。</p>
平成9年度	<p>○自分を取り巻く環境である自然や文化、社会や人々と積極的にかかわりをもつことを通して、現代社会における今日的・人類的な諸課題を多面的かつ自分の問題として認識し、共存・共生を目指す態度や資質を育む。</p>	<p>(1) 1年前期「仲間の輪を広げよう」(仲間)</p> <p>(2) 1年後期「お年寄りの住みよい社会をつくらう」(福祉)</p> <p>(3) 2年前期「環境のために私たちができること」(環境)</p> <p>(4) 2年後期「伝統ある博多の町を再発見しよう」(伝統文化)</p> <p>(5) 3年前期「アジアの一員として」(国際理解)</p>	<p>①問題を把握する(10)</p> <p>②問題解決の方法を探る(12)</p> <p>③問題解決に向けて実践する(13)</p> <p>計35時間</p> <p>※各段階(①～③)の時間数は主題によって多少異なる。</p>

学習計画作成上の考え方	指導体制と活動を支援する手だて	評価の仕方
<p>基本的に1主題を17～18時間で扱い、大きく三つの段階から構成した。また、体験活動を主題展開の中核に据え、「道徳の時間」「学級活動」との関連を図りながら、幅広く生徒一人一人の「望ましい生き方」への自覚を深めていくようにした。</p>	<p>○道徳、学級活動は、学級担任が行い、体験活動は、原則として学年担当教師が引率する。</p> <p>○専門的な内容については外部から講師を招聘する。</p> <p>○「体験活動の手引き」で活動の概要をとらえさせ、探求活動の目的を明確にさせる。</p>	<p>○生徒が活動のまとめで行う文章表現による自己評価</p> <p>○活動の途中で記入している学習プリントの分析</p> <p>※生徒のまとめにおける自己評価を通知表(所見)に記載する。</p>
<p>3回の体験活動(「TOUGH TIME」)後に総合学習を位置付けた。また、生徒に身に付けさせた力や・事象の変化の様子や実感を的確にとらえ、問題を把握する力</p> <p>・自然や文化、社会や人々と共に生きる道を考える力</p> <p>・自分たちにもできることを計画し、解決に向けて行動する力</p> <p>ととらえ、学習過程の段階を「変化」「共生」「創造」と位置付けた。</p>	<p>○道徳、学級活動は、学級担任が行い、体験活動は、原則として学年担当教師が引率する。</p> <p>○総合学習は、教師の特性や教科との関連を考慮して、学年担当教師を中心に分担する。</p> <p>○専門的な内容については外部から講師を招聘する。</p> <p>○「創造」の段階で、学級や学年での発表会、文化祭での発表など発表の場を多様に設定し、活動の意欲を高める。</p>	<p>平成7年度と同じ</p>
<p>それぞれの学習過程の段階を「問題を把握する段階」「問題解決の方法を探る段階」、問題解決に向けて実践する段階」と位置付けた。</p> <p>また、生徒に身に付けさせた力や</p> <p>・事象の変化の様子を多面的にとらえ、自分の問題としてとらえる力</p> <p>・自然や文化、社会や人々と共に生きる道を考える力</p> <p>・自分たちにもできることを計画し、解決に向けて行動する力</p> <p>ととらえ、それぞれの段階に体験活動を位置付け、さらに認識と行動の統合が図れるように主題展開を考えた。</p>	<p>○主として学年担当教師による協働体制で指導する。</p> <p>○専門的な内容については、外部講師や保護者などの協力を得る</p> <p>○体験活動の後に活動のまとめ、振り返りの時間を設定し、体験したことによる知的な省察を加えさせたり、自分なりの意味付けを行わせたりする。</p> <p>○体験活動で得たものを補充・深化・統合するために、体験活動の前後に道徳の時間を設定する</p> <p>○学習のつまずきや障害を取り除くために学習プリントや自己評価表を基に相談活動を行う。</p>	<p>○学習の事前・事中・事後の生徒の姿や活動の様子の観察</p> <p>○各活動後の学習プリントの分析</p> <p>○生徒が活動のまとめで行う文章表現による自己評価</p> <p>※以上の項目を学級担任が総合的にとらえて、生徒の「よさ」を見だし、肯定的に評価したものを通知表(所見)に記載する。</p>

「WORLD TIME」の実施形態の変遷

『報告書101p』

	平成7年度	平成8年度	平成9年度
「WORLD TIME」の目標	これからの21世紀を生き抜くために求められる創造力、探究力、表現力、指導力、専門性等を育てる。	生産学習の視点に立ち、21世紀を生き抜くために必要となる学ぼうとする意欲、主体的に学ぶための技能、豊かな表現力、学習したことを生かそうとする態度といった「学ぶ力」の育成をねらいとする。	平成8年度に同じ。
位置付け	選択教科	総合学習	総合学習
対象学年	2・3年	1～3年	1～3年
講座設定の特徴及び指導形態	理科と家庭科の異教科TTによる講座「生活の中の不思議にチャレンジしよう」をはじめ、全8講座で実施した。	指導者の人数的な問題から教科をベースとした教科内TTを中心に、全10講座で実施した。	前年度と同様の形態で実施し各自のテーマに沿って複数の教科にまたがるような内容も積極的に認めるようにした。
実施時間	事前の講座案内等は別として、35時間で活動を行った。	平成7年度に同じ。	講座案内・訪問等の事前の活動や打ち合わせの時間も含めて、35時間で活動を行った。
保護者の参加スタイルと参加者数	指導者と学習者の二つの参加スタイルで参加を募り実施した。20名	五つの参加スタイルで参加を募り実施した。88名	参加スタイルは継続し、テーマに沿った指導者の呼びかけを行った。95名
外部人材・校外施設の活用	大学からの留学生 各地区の図書館 校外活動先が広がっていて、資料活用が十分にできていなかった。	留学生・保護者 市立総合図書館他 新しく、総合図書館ができたことで、活動先がしぼられ、内容面での充実が図られた。	平成8年度に同じ。 福祉プラザや書店、デパート等ができたことにより、活動の質・量ともに広がりが見られた。
評価の観点と評価の仕方	「課題意識、学び方、自己表現、生活・価値化」の4観点から3段階の絶対評価を行うための基準表を作成し、評定を行った。また、異学年合同での実施にともない各講座毎に、その学年の発達段階に配慮しながら評価を行った。	観点は前年度と同様で行った。総合学習としての実施にともなって、特に「学び方」のとりえ方について、講座毎に明らかにすることを心がけた。また、指導計画・評価計画表の効果的な活用を意識しながら実践していくようにした。	平成8年度に同じ。

「卒業研究」の実施形態の変遷

『報告書128p』

	平成7年度	平成8年度	平成9年度
「卒業研究」の目標	中学校3年間のすべての学習やこれまで個人的に取り組んできたことを振り返り、さらにそれらを深めさせるとともに将来にわたって生きていく上で大切にしたいことや専門的に学びたいことを追究させる。	平成7年度に同じ。	中学校3年間のすべての学習やこれまで個人的に取り組んできたことを振り返り、それらの中からさらに学びたいことに取り組むことを通じて、これまでの学び方をさらに深めさせるとともに、これからの自分の生き方を探らせ、よりよく生きようとする態度や資質・能力を育む。 「生き方」と「学び方」を統合させ、これからの「自分探し・自分割りの旅」の始まりの場として位置付けた。
実施時期と活動時間数	9月29日～12月16日 計20時間 第1年次とあって、企画が遅れ、9月からの取り組みとなった。	6月29日～12月5日 計19時間 教育課程上は35時間の設定であったが、19時間しか時間確保ができなかった。	6月26日～11月19日 計35時間 進路決定の時期を考慮し、終了時期を早めた。
活動計画	①オリエンテーション ②テーマ相談一決定 ③探究活動(計3回) ④論文執筆(原稿用紙10枚) ⑤学年発表会 ⑥活動のまとめ	①オリエンテーション ②テーマ相談一決定 ③探究活動(計3回) ④論文執筆(原稿用紙10枚) ⑤学年発表会 ⑥活動のまとめ	①オリエンテーション ②道徳 ③テーマ相談一決定一交流 ④夏休みの探究活動 ⑤探究活動(計3回) ⑥論文の書き方指導一執筆(原稿用紙10～20枚) ⑦学級発表会一学年発表会 ⑧活動のまとめ一学級活動
指導体制	学び方の指導は学級担任が主に行い、専門的な指導は全教官で行う。	平成7年度に同じ。	学び方の指導は学級担任が主に行い、専門的な指導は全教職員、保護者、専門家や地域の人材を積極的に活用する。
目標の達成や生徒個々の活動を支援するための手だての工夫	・「WORLD TIME」や「TOUGH TIME」(現「生き方学習」)の活動記録VTRの視聴 ・教官の専門分野・趣味・特技リストの提示	・「卒業研究ノート」の作成 ・前年度の卒業研究テーマや論文の提示 ・サブテーマの設定による研究内容の具体化	・「卒業研究」ノートの充実 ・「卒業研究」の趣旨の徹底 ・道徳、学級活動の組み込み ・保護者への協力依頼、人材バンクの作成 ・学級発表会で全員に発表の場を確保 ・活動の節目ごとの自己評価と教師のミーティング ・テーマにより論文の枚数に軽重 ・1年生からの段階的指導
評価の観点と評価の仕方	選択教科として位置付けていたため、「WORLD TIME」と同じく、「課題意識、学び方、自己表現、価値化」の4観点から3段階の絶対評価と評定を行った。	平成7年度に同じ。	「生き方」と「学び方」の統合から、次の4観点を設定し、これらの観点から認められる生徒のよさを、教師がメッセージ(所見)に託して返し、指導のための個人内評価を中心とする。 ①「自分の生き方への関心・意欲・態度」 ②「活動や体験における豊かな学び方」 ③「学習成果の豊かな表現」 ④「活動や体験による知識や技能の獲得」

1 1. 鳴門教育大学学校教育学部附属中学校（平成8年度研究）

研究題目 「未来総合科」の構想と実践
 —新しい時代に生きる力を養う新教科の創造—
 カリキュラムの特色

・新教科「未来総合科」の創造
 研究概要 基礎学習、領域別学習、領域総合学習の3つの学習を核とした「未来総合科」
 の創造の研究

<資料抜粋>

未来総合科のカリキュラム 『紀要8p』

(1) 授業時数（週当たり）

区 分	必修教科の授業時数									道徳の授業時数	特別活動の時数	選択教科				総授業時数
	国語	社会	数学	理科	音楽	美術	保健体育	技術・家庭	未来総合科			英語	音楽・美術	音楽体技家	国数社理	
第1学年	4.5	3.5	3	3	2	2	3	2	2	1	1	3				30
第2学年	4	4	4	3	1	1	3	2	2	1	1	3		1		30
第3学年	4	3	4	3	1	1	3	2	1	1	1	4	1		1	30

(2) 年間指導計画

第1学年		
1学期	2学期	3学期
G ₁	C ₁	C ₂
基礎学習	領域別学習	領域別学習

第2学年		
1学期	2学期	3学期
G ₂	C ₃	A ₁
基礎学習	領域別学習	領域総合学習

第3学年		
1学期	2学期	3学期
G ₃	A ₂	A ₃
基礎学習	領域総合学習	領域総合学習

区分	時間	単元名	ねらい	主な活動
基礎学習	G ₁	8	価値観が対立した問題について話し合おう	<ul style="list-style-type: none"> コミュニケーション能力 表現力 情報収集力 身近な生活の中で、価値観が対立した問題について資料を収集し、それをもとに話し合う。
	G ₂	4	ディベートをしよう	<ul style="list-style-type: none"> コミュニケーション能力 情報収集力 ディベートのルールを知り、クラスごとに国際化の問題に関する論題でディベートを行う。
	G ₃	2	アドバンストに向けて	<ul style="list-style-type: none"> 領域総合学習のイメージ 情報収集力 昨年度の領域総合の記録ビデオを視聴し、学習の進め方・方法について知る。

指導計画（例として国際化領域のみ掲載する）

領域	国際化領域		
領域目標	<ul style="list-style-type: none"> 異文化が共存していること、人々が相互に密接な関係をもって生活していることを理解し、互いの存在を認めようとする態度を培う。 国際的諸問題を見つめ、自分のあり方について、自分の考えや意見を積極的かつ論理的に表現しようとする態度を培う。 グローバルな視点に立ち、世界平和を希求し、基本的人権を尊重する地球市民として必要な知識、技能、態度を身につける。 		
学年	第 1 学 年		第 2 学 年
区分	C ₁	C ₂	C ₃
時間	4	8	10
単元	正しく伝えよう 私からのメッセージ	私たちから見た国際化	地球市民としての生き方を求めて
ねらい	<ul style="list-style-type: none"> ステレオタイプからの脱却 主体的な表現 	<ul style="list-style-type: none"> ステレオタイプからの脱却 多面的な見方・考え方 体験と認識の調和 	<ul style="list-style-type: none"> 総合的な見方・考え方 論理的な表現力 地球市民的資質 国際社会の一員としての自己認識
主な学習活動	ゲームを通して自らのステレオタイプに気づく。 ロールプレイを通して自分の考えを主体的な表現で相手に伝える。	写真を見たイメージから発展途上国に抱いているステレオタイプに気づく。 貿易ゲームにより相互依存の関係を理解する。	国際貢献的活動について調査し、「世界に果たす日本の役割」を中学生の視点で議論する。
スキル	<ul style="list-style-type: none"> 状況の分析と判断 主体的な対応の仕方 	<ul style="list-style-type: none"> 情報の分析と処理 シミュレーションを通じた現状認識 	<ul style="list-style-type: none"> 資料・情報の収集と分析・処理 論理的かつ説得力のある表現方法
系統性	C ₁ : 個としての自分 ↓ ステレオタイプからの脱却, 主体的な表現力 C ₂ : 日本人あるいはアジアの一員として ↓ 多面的な見方・考え方, 相互依存の関係 C ₃ : 地球市民として 総合的な見方・考え方, 論理的, 主体的表現力		
	出典 鳴門教育大学学校教育学部附属中学校 平成 8 年度「未来総合科」の構想と実践 平成 8 年度「未来総合科」の学習と指導の手引き		

1 2. 千葉県館山市立館山第二中学校 (平成8年度研究)

研究題目 生涯学習社会における「開かれた学校」を具現する教育課程の開発
 - 社会人交流学習・生き方学習・選択方式学習の実践的研究 -

カリキュラムの特色

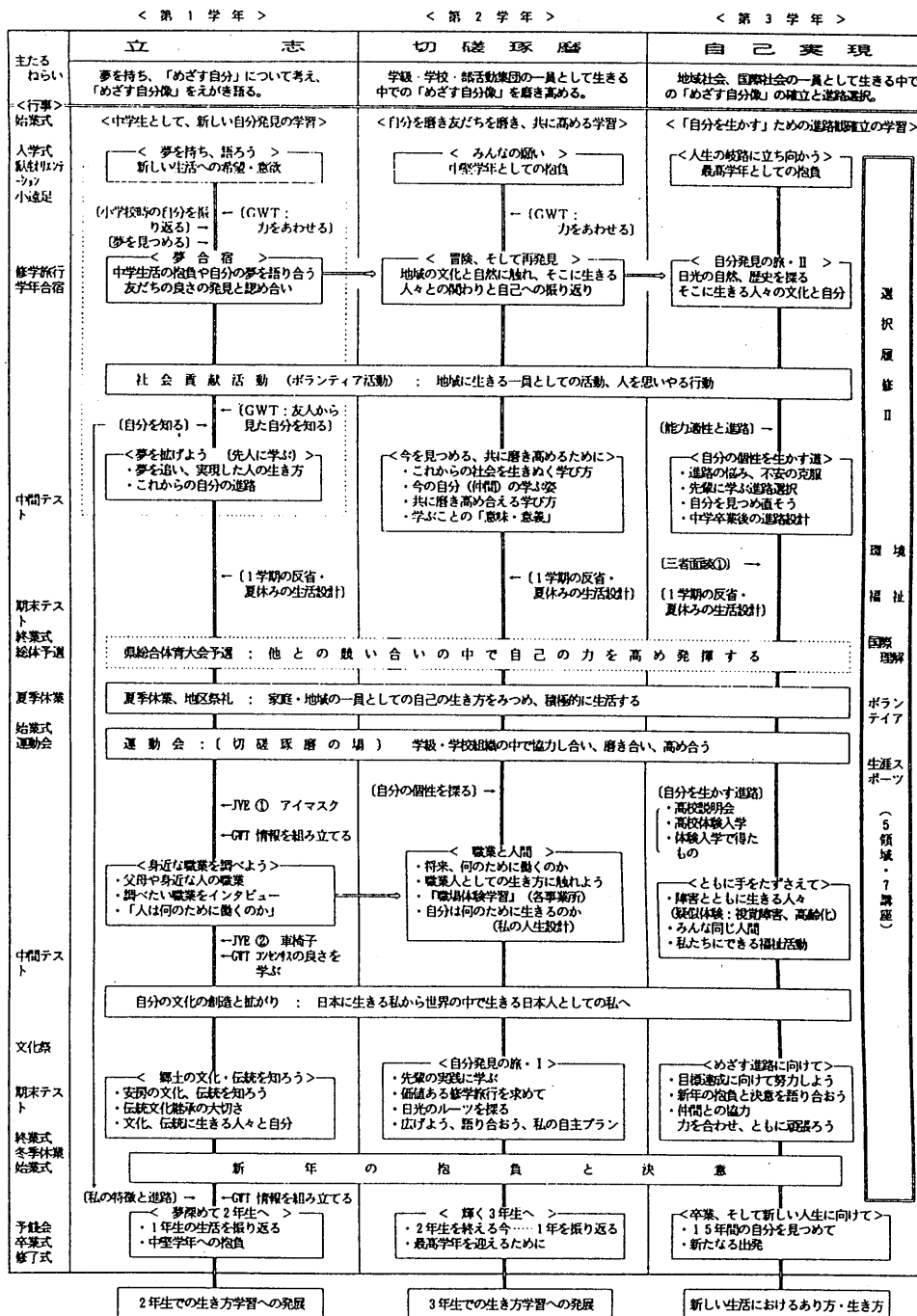
・総合的な学習の時間の立ち上げ

研究概要 社会人交流学習・生き方学習・選択方式学習を軸に総合的な学習の時間を立ち上げ、地域との積極的交流や柔軟な教育課程編成を通しての「開かれた学校」の創造を目指す研究

<資料抜粋>

生き方構想図

『報告書55p』



出典 千葉県館山市立館山第二中学校 研究開発学校二年度報告書

13. 岩手大学教育学部附属中学校（平成10年度研究）

研究題目 新しい学びの構想

—次代の可能性を拓く総合的な学びの創造—

カリキュラムの特色

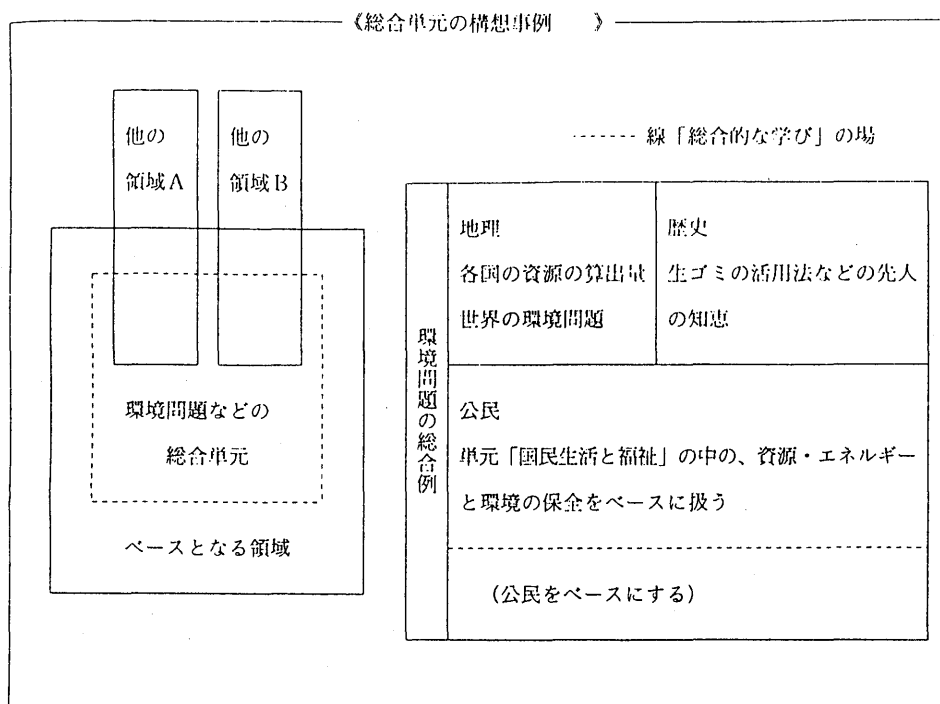
- ・既存教科の枠組みにおける総合的学習の創造

研究概要 現行の教科の枠組みの中で、生徒を中心とした総合的な「学び」を重視する授業創造の研究

特に社会科においては、問題解決のための解決方法を合理的な判断で選択できるの力としての、社会的判断力の育成を目指し、「社会的葛藤場面」を取り上げた学習を組織する。また、3分野の総合も視野に入れた研究を行っている。

<資料抜粋>

『紀要79p』



社会科全体学習計画表

『年間学習計画 35 p』

		月	4	5	6	7	8	9	10	11	12	1	2	3			
一 年 地 理	単元	世界の国々		世界に栄えた文明				さまざまな地域			さまざまな地域			世界から見た日本			
	学習項目	国の名前 主な国々		「これが文化だ！」 ～総合的な学びの場～				アメリカ合衆国 東南アジア			中国 EU			国土のなりたちと 自然			
	時間	6		18				12			18			10			
	学習活動	・国名しりとり ・面積や形 ・日本とのつながりの深い国		・学習の概要 ・調査計画をグループで作成 ・調査活動 ・資料をグループで作成 ・発表、質疑応答、評価 ・まとめ				・拳銃所持をめぐる討論 ・日本の経済進出をめぐる討論			・「中国が経済的に成長するためには」で討論 ・「EUはうまくいくか」で討論			・日本の位置 ・気候 ・国土 ・河川と地形 ・自然災害			
年 史	単元		文明		古代日本と東アジア			中世社会			世界の動き			近世日本の動き			
	学習項目		文明の おこり		国の成り立ち 律令国家 貴族の政治			鎌倉幕府 室町幕府			世界の動き 武士の全国統一			江戸幕府の成立 政治の動揺 町人文化			
	時間		2		13			23			9			16			
	学習活動		・人類のはじまり		・日本の古代国家 ・聖徳太子と飛鳥時代 ・奈良と平安の都 ・武士のおこり ・院政と平氏			・鎌倉幕府 ・武士と殿様 ・元寇 ・室町幕府 ・足利の成長 ・戦国大名			・ヨーロッパの封建社会 ・ルネサンス ・信長と秀吉 ・桃山文化			・「幕府の鎖国政策は正しかったか」で討論 ・産業の発達 ・幕府の改革			
二 年 地 理	単元		身近な地域	北東部		日本の南西部			日本の中央部	日本の中央部			日本と国際社会				
	学習項目		「21世紀の盛岡プラン」	東北地方 北海道		中国地方 九州地方			関東地方 中部地方 近畿地方				貿易とエネルギー 日本と国際社会				
	時間		18	10		12			19			10					
	学習活動		～総合的な学びの場～ ・共通学習 ・調査計画をグループで立案 ・アボとり ・調査活動 ・発表資料づくり ・発表と質疑応答 ・評価 ・まとめ	・寒冷な気候 ・米作り ・工夫と酪農		・温暖な気候 ・様々な農業 ・新しい産業 ・輸送園芸農業 ・沖縄と基地			・中央部の自然 ・近畿地方の産業 ・古都の伝統と文化 ・中部地方の産業 ・関東地方の産業 ・東京大都市圏			・貿易の現状 ・エネルギー ・韓国、ブラジル、オーストラリアとの関係					
年 史	単元	世界の変化		近代日本のあゆみ			二度の世界大戦			二度の世界大戦			現代の日本と社会				
	学習項目	ヨーロッパ 近代の成立 日本の開国		明治政府 憲法の制定			日清・日露戦争と アジアの情勢			第1次世界大戦 大正デモクラシーと文化			第2次世界大戦 大戦後の世界 世界の多極化				
	時間	12		10			10			8			12				
	学習活動	・市民革命 ・産業革命 ・天保の改革 ・開国と幕府の滅亡		歴史討論 ・会 明治の政 策に対する討論			・帝国主義 ・日清戦争 ・日本の産業革命 ・日露戦争 ・韓国併合 ・明治の文化			第1次世界大戦 アジアの民族 運動 社会運動と普 通選挙 大正文化			・世界恐慌 ・ファシズム ・中国との全面 戦争 ・太平洋戦争 ・歴史討論会			・日本国憲法 ・A A諸国の独立 ・東西冷戦 ・日本の経済成長 ・多極化する世界	
三 年 公 民	単元	オリ：現代の社会生活	わたしたちの生活と政治						わたしたちの生活と経済						平和と相互協調		
	学習項目	現代の社会生活	人間の尊厳と日本国憲法	「総合的な学びの場」 「基本的な人権って何？」 ～解く！人権と国際社会を探る～			民主政治と三権分立			経済の仕組みと生活			変わりゆく 国際社会と 世界経済	国際社会の 発展と現状	国際平和と安 全保障		
	時間	1	8	3	19			20			18			10	5	5	5
	学習活動	・文化と情報 ・家族と社会 生活	・人権尊重 と憲法 ・日本国憲 法と基本 的人権	・共通学習 ・テーマ設定 ・相談活動とテーマ選定 ・調査学習 ・プレゼンテーション ・まとめ			・民主主義と国会 ・選挙、政党、世論 ・行政のはたらき ・人権を守る裁判所 (裁判所見学)			・家計と消費 ・貨幣と流通 ・企業と生産 ・政府と財政 「租税教室」 ～税務署の方のお話～			・共通学習 ・追求課題の設定 ・グループ結成 ・リサーチ ・ディベート ・学習のまとめ			・世界の中 の日本経 済 ・国際政治 のゆくえ	・国際社会 の成立と 発展 ・国際社会 の動き

出典 岩手大学教育学部附属中学校 研究紀要 第八巻第一集

同

平成10年度 年間学習計画

月日	中学1年	中学2年	中学3年	高校1年	高校2年	高校3年
	オリエンテーションの目的と内容					
第1回 4月15日	アンケート 生活意識の 現状調査	方法説明 (食物調べ) 意識調査 (学校生活と学習)	方法説明 (7種類の新教材について)	附属中学卒業論文 報告会 (研究の動機・ 過程・感想) 生徒代表7人	学年担任団から 問題提起	アンケート (進路と授業に ついて)
第2回 5月6日	憲法勉強会 について 興味を持った人 物・事件について 調査	4/16~22 食物調べを実施 ↓ 1週間の食物調査 結果のまとめ 疑問点の整理 グループごとに 発表	映画鑑賞 「二十四の瞳」 感証文	林高等学校における 総合人間科にむけ での準備 ・研究発表演出 ・クラス対決の テーマ検討 アンケート実施 (宗教・学習観)	教官チームによる 講義(2人1組) ①国際理解・文化 ②平和・環境 ③人権・歴史 3クラスを ローテーション で実施	担任団による 進路別説明会 (6グループ)
第3回 5月20日	担任団より 問題提起 発表・討議 (4回実施) 戦争中の中学生 木を植えた男 映画「学校」	食物調査から 各自疑問点興味 ↓ 追求テーマ決定 テーマ発表と 意見交換 ↓ グループ分け	広島 71~49号 グループづくり 旅行中に「ヘイ! 」	自己PR原稿作成 (社会的興味関心 と理想とする人生) *5/30~6/1 林高等学校にて ・クラス対決 ・担任団6人より 問題提起発表	同上	先輩による講義 (3人) ・職業選択動機 ・職業観 ・仕事の内容 ・生きがい
第4回 6月3日	同上	指導教官別 学習計画作成 (見字練習・実 験方法・調査活 動・聞き取り調 査など) 新聞切り抜きの 開始	パソコン学習 キーボード リチラシー 完全習得学習	個人研究テーマ の検討 ↓ クラスでの発表 (テーマ・動機・ 研究方法・フュー ルドワーク候補地 など) 研究テーマ提出	同上	大学・短大・ 専門学校・職場 訪問
第5回 6月17日	同上	算数学習 参考文献・ 資料を集約	現代史学習 岩波書店 「昭和史」 世界恐慌と 農村の惨状	個人研究テーマ別 指導教官決定 ↓ グループ別討議 (7グループ) ↓ テーマと研究方法 の再検討	教育学部講義 (堀田先生) 学ぶことを学ぶ	訪問の発表会 (1分野5分 6グループ)
第6回 7月1日	同上	夏休みの 活動計画	読書と作文 暮らしの手帳社 「戦争中の 暮らしの記録」	指導教官別 個人研究 夏休み計画書作成 (発表回書のリス トアップ、フイー ルドワーク実施計 画表など)	研究テーマ検討 グループテーマ 個人テーマ 教官グループから の指導・助言	卒業研究 テーマ内容につ いての説明検討
第7回 7月15日	一学期のまとめ と夏休みの宿題	夏休みの 活動計画 中間発表	インターネット 活動計画づくり 課題設定	教育学部講義 (新井先生) フィールドワーク にむけて	同上	卒業研究 作成開始 (自分史作成)

14. 名古屋大学教育学部附属中・高等学校 (平成7年度研究)
 研究題目 自分の人生を自覚的に選択していく力を育てる教育課程の開発
 ー「総合人間科」設置の試みー
 カリキュラムの特色
 ・新教科「総合人間科」の創出
 研究概要 「総合人間科」の創出を通して、中学・高等学校教育の在り方を捉え直す研究

『報告書7p』

総合人間科と教育課程
 たとえどのような生き方をしようと、人間は社会や自然の問題から逃れることはできない。生命、
 環境、平和、民族、開発など21世紀に向けた課題は、世界的、地球的規模の問題である。こうした
 課題を解決していく力量を一人ひとりの未来の主権者につけることこそ今の教育に求められている。

国際理解、平和、環境、開発、人権、生命・性、共生、進路、生き方など

これらは、人類の課題であり、このような課題を正面から取り上げる教科はなかった。この課題を
 学ぶことは、学習本来の意味(なぜ学ぶのか)を生徒自身が理解する糸口になる。

『報告書32p』

(2) 2学期指導過程

月日	中学1年	中学2年	中学3年	高校1年	高校2年	高校3年
第8回 9月16日	夏休み自由課題 発表会① (クラス別)	夏休み調査活動 (7-147-1) ↓ 中間報告書提出 教官への報告 ↓ 中間発表会準備 ①	二学期に向けて 調査・討論の リレーション インターネット ホームページ の解説文作成	夏休み活動報告 (指導教官別) フィールドワーク 実施報告 報告書作成・提出	沖縄研究旅行 研究テーマ検討 ① グループテーマ 個人テーマ 教官グループから 指導・助言	卒業研究 自分史まとめ① 進路選択の動機 自己の性格能力 当面の目標計画 スピーチ原稿
第9回 9月30日	夏休み自由課題 発表会② (クラス別)	中間発表会準備 ② 提示資料・実物 の準備 発表方法検討	広島研究旅行 フィールド ワークについて 班別にテーマと 役割分担の決定	野外学習実施計画 ① ・メンバー ・訪問先候補選定 ↓ 次回までに 電話で依頼	沖縄学習について ディベート準備 ・役割分担と 内容、留意点 ・討論の流れ 時間配分	卒業研究 自分史まとめ② スピーチ原稿 の検討
第10回 10月7日	野外学習の 事前学習① 各クラス 4グループ (テーマ別)	中間発表会準備 ③ 方法について 指導教官との 個別相談	フィールド ワーク事前学習 インターネット による資料検索	野外学習実施計画 ② 実施計画書作成 (調査目的・内容) 12日提出締切	第1回 ディベート授業 (沖縄の米軍基地 は撤廃すべきか)	卒業研究 [自分史と進路] スピーチ① 生徒間の相互評 価(批評)
	10/7~ 適宜 学活・道徳で 事前準備	10/11.18.24 中間発表会準備 ④⑤⑥ (授業後・道徳)	インターネット を使う調査のた めのアンケート の作成	10/21 (中間試験最終日) 野外学習実施計画 ③ 質問状作成・送付	ディベート準備	
第11回 10月26日	野外学習の 事前学習② 各クラス 4グループ (テーマ別)	中間発表会① A組・B組 各3組の発表	10/26~28 広島研究旅行 フィールドワーク と現地での発表 会	野外学習 実施計画報告会 指導教官別 (7グループ) 訪問先と調査内容 生徒間での助言	第2回 ディベート授業 [沖縄の米軍基地 は撤廃すべきか]	卒業研究 [自分史と進路] スピーチ② 生徒間の相互評 価(批評)
第12回 11月2日	野外学習の 事前学習 発表会① (クラス別)	中間発表会② A組・B組 各3組の発表	中間発表会 広島の班別調査 およびインター ネットの利用状 況	個人研究 中間発表会 ・テーマとねらい ・研究研究 ・野外学習計画	第3回 ディベート授業 3クラス合同 決勝大会 [沖縄の米軍基地 は撤廃すべきか]	卒業研究 [自分史と進路] スピーチ③
第13回 11月18日	野外学習の 事前学習 発表会② (クラス別) 野外学習 12月6日 実施	中間発表会③ A組・B組 各3組の発表	聞き取り調査 名古屋千種区 老人クラブ 戦争中の暮らし について	11/9 事前指導 11/16 野外学習 実施当日 事後指導 ・訪問先への礼状 ・実施報告書作成	11/15~11/18 沖縄研究旅行	卒業研究 [自分史と進路] スピーチ④

月日	中学1年	中学2年	中学3年	高校1年	高校2年	高校3年
第14回 12月7日	野外学習の 事後指導 (クラス別)	中間発表会④ A組・B組 各3組の発表	電子メールによ る文通(12/2) インターネット と電子メール	野外学習報告会 (指導教官別) 生徒間の相互評価	沖縄研究旅行 グループワーク 発表会	卒業研究 [自分史と進路] スピーチ⑤
第15回 12月16日	野外学習の 事後指導 (クラス別)	中間発表会⑤ A組 6組 B組 5組 の発表	広島 フィールド ワーク 研究集録の 原稿作成	野外学習報告会② (指導教官別) 個人研究のまとめ にむけて (研究論文の構想) 冬休みの計画	沖縄研究旅行 個人研究 発表準備	卒業研究 [自分史と進路] スピーチ⑥

(3) 3学期指導過程

月日	中学1年	中学2年	中学3年	高校1年	高校2年	高校3年
第16回 1月20日	野外学習の 事後指導 発表会準備	個人研究の まとめ ガイダンス	班別 フィールド ワーク 研究集録結果 パソコンで 文章作成①	個人研究論文作成 ① 論文の書き方指導 (作成、留意事項 原稿の体裁)	沖縄研究旅行 個人研究発表会① 各クラスごと 自己評価 相互評価 指導教官からの コメント	総合人間科の 授業の感想
第17回 2月3日	野外学習 発表会 研究結果の グループ別発表	個人研究 論文の作成①	班別 フィールド ワーク 研究集録結果 パソコンで 文章作成②	個人研究論文作成 ② 指導教官からの アドバイス (論文締め切り 2月13日)	同上 ②	
第18回 2月17日	野外学習 個人レポート の仕上げ 一年間の反省 とアンケート	個人研究 論文の作成②	広島学習の 研究発表準備 (2年生への 報告会)	個人研究論文 最終チェック (指導教官) グループ内 相互批評・評価	同上 ③	
第19回 3月16日	<晴天> 東山動物植物園 (出会いを 求めて) <雨天> 体育館で球技	学年の 研究集録作成	広島学習 研究発表会	3月7日~ 発表会準備 (原稿・資料) 個人研究発表会 (学年全体)	総合人間科の まとめ 作文 アンケート 討論会	

※ 総合人間科の授業は中学1年から高校3年まで6学年すべてで土曜日の3・4限で展開した。
※ 学校行事と関連させて実施したので、この時間以外(おもに放課後)にも指導が行われた。